

---

# 桜舞う星

サマエル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桜舞う星

### 【Nコード】

N9891X

### 【作者名】

サマエル

### 【あらすじ】

昨年フォレストに投稿した作品を、そのまま持つてきました。楽しんでいただけたら幸いです。

大正帝都に魔が迫る時、宇宙の果てから光の勇者が帰って来た。帝国華撃団とウルトラマンジャックの共闘と、その影で繰り広げられるロマンスを御堪能下さい。

この小説を読み終えた暁には、あなたにも見える、ウルトラの星。

プロローグ（出会いは桜の下で）（前書き）

まずは主人公が地球にやってくる経緯から。

うまくページ変更できないのが悔しい……………。

## プロローグ 出会いは桜の下で

〈M78星雲：光の国〉

宇宙の星達の平穏と安定を保つ彼らの故郷、光の国。

その中心に位置する宇宙警備隊本部にて、警備隊長のゾフィーは目の前の弟に感慨深げに声をかけた。

「……………、よく来てくれたなジャック」

「挨拶は無しにしましょう。それで、一体何の用ですか？」

若くして全宇宙の防衛の一任される兄に敬意を示すかの如く敬語で、しかも余計な前置きを省いて本題に入った。

それもそのはず。なぜならジャックは、目の前の兄に至急の連絡を受けて駆け付けたからだ。

ゾフィーも同じ考えだったらしく、ジャックの言葉に頷き本題に入った。

「お前を読んだのは他でもない。ある惑星の防衛任務について貰いたいのだ」

やはり…、とジャックは思った。

ジャックも現在7000歳…人間なら18歳とかなり若いが、宇宙警備隊の端くれ。

そろそろ自分にも訓練ではなく実際に惑星とそこに住まう生命を守護する役目を担うだろうと、呼ばれた段階である程度の察しはできていた。

これまで磨いてきた己の腕を披露できる興奮と、ひとつの星を守る

という重圧が緊張という形で現れる。  
年若い人間特有の様子にゾフィーはわずかに微笑むと続けた。

「ジャック、お前に守ってもらおう星……。それは……。……  
地球だ」

「え……？　ち、地球って………！」

ジャックはあからさまに驚きの表情を見せた。

無理もない。なぜなら地球は、わずか数年前に外ならぬゾフィーが  
防衛していた星だからである。

その功績が、ゾフィーが若くして隊長となった一番の理由である。

「しかし兄さん、何故僕が………？」

地球はゾフィーにとって大切な星である事は、ジャックもよく知っ  
ている。

それなら、新米の自分より優秀で信頼できる部下がたくさんいるは  
ずである。

すると、ゾフィーはこう返した。

「行ってみれば分かる。ジャック、お前でなければならぬ理由が  
な」

勿体振る兄の言動にもどかしく思いつつも、聡明な兄の事、何か考  
えがあるのだらうと、ジャックは納得する事にした。

「分かりました。とりあえずは地球に向かいます」

「ああ、済まない……。ジャック、気をつけてな」

「はい！」

いずれにせよ、待ちに待った初任務に変わりはない。

活気溢れる返事とともに、ジャックは兄の思い出の星「地球」へ出発した。〜帝都：上野公園〜

春一番に乗って桜の花びらが舞う春らしい景色の中、ジャックは上野公園に来ていた。

地球人の姿に変身し、自分が光の国の宇宙人とばれないように準備は万全である。

御剣 秀介…、それがジャックが地球人として、ゾフィーに与えられた名前だった。

秀介は初めに、この地球の守るべき場所である、日本の帝都・東京に足を運んだ。

これもゾフィーに言われた事なのだが……………。

「綺麗な桜だなあ……………」

周囲は見る限り平和だ。

初めての桜に少なからずの感動を覚えた秀介は、兄に言われた大帝国劇場に向かう前にこの上野公園に任務を忘れて入り浸っていたのだ。

任務中に他に興味が移るのも、新米にはよくある事である。

だが次の瞬間、秀介は今まで見とれていた桜の花びらさえ、目に映らなくなる。

「！」

それは、ほんの一瞬だった。

桜の木々の間にチラツと見えた、秀介と同じくらいの女の人…。

初めて地球の女性を見たからだろうか？

秀介は、そのたった一瞬という短い時間の中で、されどその女の人に完全に目を奪われていた。

「（綺麗な人だなあ……………）」

桜に似合う袴姿に、艶やかそうな黒髪。

秀介の脳裏には、彼女の姿がくつきりと写っていた。

もう一度会いたい…。

秀介は、高鳴る自分の心臓の音を、鎮める事ができなかった。

だが、その思いは信じられない形で叶えられる事になる。

「キャーーーーー！！」

「な、何だ!？」

悲鳴の聞こえた方向に駆け付けると、そこには刀を持った山吹色の機械が屋台を壊す姿があった。

「（何だあいつは！？生き物じゃない！）」

これが今この星を脅かす存在なのか。

秀介は左手首のブレスレットに目をやった。

ゾフィーに渡された、光の国の万能兵器。

そして、秀介が光の巨人に戻るための力ギでもある。

その時、逃げ惑う人々の中、赤ん坊を抱えた母親が足を躓かせて倒れてしまった。

「…、危ないっ！！」

母親に気付いた機械を止めようとする秀介。

だが、その前に何かが機械に当たり、注意を逸らした。「！？あれは……………！？」

秀介は驚きを隠せなかった。

なぜなら、今機械に攻撃を加えたのはついさっき見た、あの女の人だったからである。

「さあ、今の内に早く逃げてください！」

先程と違って凜々しい表情で、女の方は凜とした声を放った。

「は、はい！」

母親はなんとか立ち上がり、一目散に駆け出す。

「さあ、貴方も早く！」

同じように秀介に言う女の人。



だが、秀介は「はい、そうですか」と逃げる訳にはいかなかった。

「何を言ってるんですか！貴女こそ逃げてください！」

秀介がそう叫ぶと、機械はその声に反応し、秀介に襲い掛かってきた。

「キーツ！」

「くっ！（仕方ない…！）」

秀介は左腕を曲げ、顔の右側に向ける。

「危ないっ！」

女の人が叫んだ時だった。

秀介の左手首のブレスレットが発光し、ちょうど腕一本分くらいの光の刃・スパークソードを出現させたのだ。

「ええっ!?!」

今度は女の人が驚く番だった。

見た目自分と同じ年の何の変哲のない青年が、こんな人間離れした技を見せたのだから、当然である。

秀介も女の人に注目されて気を良くし、機械に対峙した。

「行きますよ！」

振り下ろされた刀を切り上げで跳ね退け、そのまま右側へ真横に一閃する。

すると、機械の装甲に浅いながらも傷が入った。

「（くそっ、やっぱりエネルギーが弱いか……。）」

いくら秀介に力があると言っても、人間体ではどうしても力を充分に発揮できないし、秀介はまだ新米である以上、未熟な面もある。事実、スパークソードを出せたはいいが、それを維持する事も今の秀介には難しい事だった。

「キーツ！」

やはり致命傷ではなかったらしく、機械は再び##NAME1##に切り掛かってきた。

「くっ！」

迎え撃とうとスパークソードを構えた時、女の人が持っていた刀を抜いて、機械の刀を受けた。

「大丈夫！？」

「は、はい！」

機械が後ろに飛ぶと、女の方は刀を青眼に構え、秀介に尋ねた。

「その剣…、まだ振れますか？」

「ええ、あと一回」

「じゃあ、あの脇侍の一撃を私が受け止めます。そこを両断して下

さっ

「合点です!」

気を抜けば見とれてしまいそうな顔立ちの彼女に答える秀介。すると、脇侍と呼ばれた機械がこちらへ切り掛かってきた。

「ハッ!」

気合いの声とともに刀を受け止め、女の方は叫んだ。

「今よっ!」

その声に弾かれたように、秀介は脇侍目掛けて走り込んだ。

「てやあああっ!」

エネルギーを最大限に集中させたスパークソードは先程の軌道に沿って、脇侍の体を上下真つ二つに切り裂いていた。

「ハア…………ハア…………」

「ふう…………、助かりました。ありがとうございます」

「あ、いえ…………こちらこそ…………」

刀を鞘に納めた女の人に礼を述べられ、##NAME1##は慌てて返事をする。

「それにしても、さっきの凄かったですね。腕輪から光の剣が出て

くるなんて!」

マズイ…、秀介は思った。

今のスパークソードはどう考えても普通ではありえない技。怪しまれても無理はない。

しかし、これで自分が光の国の宇宙人と呼ばれる訳にはいかない。この星の防衛は、あくまでも秘密に行わなければならないのだ。

「いや、そんな……………」

なんとかごまかそうとする秀介。

だが、女の人からの言葉は意外なものだった。

「あの……………、もしかして貴方も霊力が使えるんですか?」

「え……………?え、ええ!そうです、そいつです」

何の事かは知らないが、とりあえず違う解釈をしてくれたみたいなので、それに話を合わせようとする秀介。

すると、女の人はあっさり信じてくれたらしい。

「あ、そうだ。まだお名前聞いていませんでしたよね?あたし、真宮寺さくらと申します。貴方は?」

「えっ?あ……………、御剣 秀介です……………」

ひそかに胸を撫で下ろしつつ、秀介が応える。

「あ、もうこんな時間。すみません、あたし行かなきゃいけないので……………」

「え…………、あ……………そうなんですか……………」

「それじゃあ秀介さん、また会いましょうね！」

そう言い残して、さくらは人混みに消えた。

「……………」

秀介はさくらが歩いていった道を、しばらくの間見つめていた。

「真宮寺……………さくらさん……………」

時は大正一四年四月。

仙台から上京した真宮寺さくらと、M78星雲からやって来た# #  
NAME2# # #NAME1# #…。

蒸気機関によつて発展した帝都におけるこの出会いが、後の帝都で  
巻き起こる事件の中で運命を左右する事になると、二人は知る由も  
なかった。

《続く》

次回予告

## プロローグ（出会いは桜の下で）（後書き）

### 《次回予告》

上野公園で運命的な出会いを果たした僕とさくらさん。

でも、さくらさんは新しくやって来た海軍の少尉が気になるみたい  
…。

そして、兄さんの言っていた内容が少しずつ紐解かれ始める……。

次回、サクラ大戦！

### 《出撃！花の華撃団！》

大正さくらにロマンの嵐！

僕は、何のためにここにいるんですか!？

**出撃！華の華撃団！（前書き）**

いよいよゲーム本編に突入です。

改めて見ると、描写が少ないような……………。

## 出撃！華の華撃団！

さくらと別れてすぐ、秀介は目的地の大帝国劇場に向かった。兄の話によれば、ここがこの星の侵略者に対抗する機関らしい。劇場が防衛組織というのも変な話だが、兄曰く

「行ってみれば分かる」

という事なので、とりあえずは行ってからという事になる。

「（凄い人ばかりだ……。上野公園と変わらないや……。）」

ちょうど芝居が終わった頃らしく、玄関口から続くロビーは観客でごった返していた。

「えっと……。支配人室だったよね……。」

このまま突っ立っていても邪魔になるので、秀介はさっさと目的の場所に急いだ。

「ここか……。」

目の前の扉には縦に支配人室と読む札があるため、ここに間違いないだろう。

そして扉越しに伝わってくる威圧感。

少しでも変な真似をしようものなら即刻叩き斬られるような、そんな気さえした。

「（間違いない……。この奥に兄さんの言っていた人がいる。）」



秀介は、緊張とともに扉をノックした。

「失礼します」

すると…、

「おう、遅かったじゃねえか」

「……………」

秀介は一瞬、目の前の光景に固まってしまった。

たしか兄の話では、この大帝国劇場の支配人にして、帝国華撃団の総司令の米田一基中将が、自分の上司となる人物である。

当然、それなりの風格と威厳を漂わせる人物を想像する。

しかし目の前の人物は、秀介の想像と掛け離れた人物だった。

昼間から酒をあまり、既にかなり呑んでいるらしく顔が赤い。

だが、秀介が不思議に思ったのはそんな事ではなかった。

「（この人……………、酔っ払ってない。）」

「何だ、豆鉄砲喰らったみてえな顔してよ」

いかにも酔っ払いの口調で言ってくるが、その割には滑舌がよく噛んでない。

視線も、しっかりと秀介を捉えている。

秀介は、目の前の米田中将であろう人物に話し掛けた。

「何故、酔われている振りをなさるのですか？」

「…………、なんだ気付いたのか。ちえ、つまんねえなあ」

すると、米田は悪戯が失敗したように残念な顔をした。

「だが、この俺の演技を見破ったって事あてめえか。奴の弟はよ」

「奴とは…………、ゾフィー兄さんの事ですか？」

「おうよ。俺とあいつは、昔ながらの戦友だったからな」「戦友………。そういえば兄さんも話していました。かつて地球で、ともに戦った者がいると…………。」

「ああ、まさしくそれだ。…………で、おめえの名前は？」

米田に聞かれ、秀介は周囲の気配を確認して答えた。

「ジャック…………、この星では御剣 秀介と名乗る事にしています」

「御剣 秀介…………。けつ、奴と同じでいいセンス持ってやがるぜ」

「その事ですが司令…………。」

秀介がそう言いかけた時、米田が右手でそれを制した。

「わかっている。この事は、他言無用だ」

その言葉に秀介は、安心の表情を浮かべた。

「で、おめえの仕事なんだが…………。」

米田は机の中の分厚い資料を取り出すと、パラパラとめくりはじめた。

「そうだな……………、裏方全般を手伝ってくれや」

「……………へ？舞台のですか？」

「ああ。ちょうど人手が欲しくてな。大道具とかその辺りを頼むぜ」

「はあ……………」

しっくり来ないが、こういうのは余計な口出しをしないのが定石。秀介は無理矢理そう納得して、支配人室を後にした。

「まさか裏方とは……………、ここも人手不足なのかなあ……………」

そうばやきつつ廊下を歩いていると、秀介はちょうど曲がり角のところで誰かとぶつかった。

「アタツ！」

「キャツ！」

声からして女性と判断し、秀介は慌てて謝罪を述べる。

「す、すみません！よそ見していたもので……………！」

「いえ、こちらこそごめんなさい！」

その聞き覚えのある声にハツとした秀介は、女性を改めてよく見た。艶やかな黒髪と赤い袴姿は確か……………。

「あ、貴女は……………、さくらさん！？」

「え……………？……………！！秀介さん！何でここに！？」

「僕の台詞ですよ！」

なんとぶつかった女性は、ついさつき上野公園で脇侍なる機械を倒した、真宮寺さくらだった。

思いがけない再会に、二人はしばらく立ち尽くしたままだった。一通り裏方の仕事をこなしたのち、秀介とさくらは紹介のために、ほかの関係者が集まるといいう大帝国劇場2階のサロンに呼ばれた。

「（なんだか女の人ばかりだなあ……………。）」

軽く周囲を見渡し、秀介は心の中で居づらさを感じていた。自分と米田中将以外は全員が、いわゆる年頃の女性なのだ。疎外感を感じるのは当然である。

「さて、見ての通り我が帝国華撃団・花組に二人の新人が加わった。自己紹介を頼むぜ」

先程の支配人室と違い、いかにも軍人らしいたたずまいで言う米田に言われ、先に秀介が名乗った。

「本日より、帝国華撃団・花組に配属されました、御剣 秀介と申します。どうかお見知り置きを……………」

すると、それに反応するようにさくらが緊張混じりに口を開いた。

「あ、お、同じく花組に配属されました、し、真宮寺さくらですよ、よろしく願います！」

「……………いたしませんわ」

さくらの自己紹介が最後まで終わらない内に、二人に視線すら向けずに紅茶を飲んでいた女性が遮るように言った。

紫色の着物をギリギリの辺りまではだけさせ、肩の辺りで短く切り揃えられた茶色の髪と左目の泣きぼくろが印象的な女性は、ティーカップを戻すとさくらに横からの冷やかな視線を向けた。

「高々この程度の人数で、何をあがっていらっしゃるの？そんな事でこの帝劇の舞台に立てるとお思い？」

「すみれ、出会い頭に失礼を言うものではないわ」

「マリアさん、私は真実を申してよ」

マリアと呼ばれた女性の制止を無視して、すみれと呼ばれた女性はさらに上からの物言い続けた。

「だいたい貴方、この帝国華撃団一のトップスター神崎すみれ様と同じ舞台上立つ事が、どれほど素晴らしい事かお分かり？」

「すみれ、自己紹介が終わったなら黙ってて頂戴」

「……………もう、仕方ありませんわね」

マリアと呼ばれた女性に咎められ、ようやくすみれは高飛車な物言いをやめる。

それを確認すると、マリアと呼ばれた女性が自己紹介をはじめた。

「私はマリア・タチバナ。この帝国華撃団の隊長よ。二人とも、よろしくね」

マリアはすみれと違って外国人らしく、短い金髪と黒いコートが印象的な、冷静な人物だった。

「さあ、アイリス。貴女の番よ」

マリアに促されて出て来たのは、まだ10歳にもならないような小さな少女だった。マリアと同じ金髪にピンクのリボンが愛らしい少女は、にこやかな表情で二人に笑いかけた。

「アイリスです。この子はジャンポールっていうの。よろしくね！」

そう言ってアイリスは手に持った熊のぬいぐるみの手を動かした。

「クスッ、よろしくね、アイリス」

「それに、ジャンポールも」

「以上が花組のメンバーだ。普段は帝国劇場の役者として、舞台上に立ってもらっている」

米田がそう言うと、さくらは初耳だったのか驚いた。

「ええっ!?!……………って事は、あたしも舞台上に立つんですか!?!」

「おう、言っただけだったか?」

「聞いてないですよ!え?という事は……………」

「早速、次の芝居に新人として出てもらおうわ」

「ええ!?!じ、じゃあもしかして秀介さんも……………?」

マリアの一言にさらに驚き、さくらは秀介に視線を向ける。

「いや、秀介は裏方全般をやってもらおう。なあ秀介?」

「ええ、いつの間にか……………」

本人にはれないように非難の視線を米田に向けて呟く。

すると、すみれが突然口を挟んだ。

「お待ちになって。私聞いてませんわよ?」

すみれはさくらを指差すと続けた。

「今度のお芝居で、私は脇役。にも関わらず、こんな新人の大根役者を主役に上げるだなんて、納得いきませんわ！」

「む……………」

さすがに目の前で悪く言われたからか、さくらは言い返しはしなかったがジト目ですみれを見ていた。

「あら、新人のくせに文句でもおあり？」

「……………ありません」

ジト目のままさくらが答える。

すると、見かねたマリアが仲裁に入った。

「すみれ、今後はさくらも私達の一員なんだから、仲たがいは止めなさい」

「……………まあ、初対面ですし、今回はマリアさんの顔を立てて差し上げますわ」

さすがに多勢に無勢と思ったのか、すみれはそう言って足早にサロンを離れた。

「……………まあ、こんな感じだが、頑張ってくれや」

「は、はい……………」

「努力します……………」



つまりはチームワークが乏しい。

帝国華撃団の現状に先が思いやられる秀介とさくらであった。数日後、秀介はロビーの清掃中にさくらを見かけた。

「あれ、さくらさん？」

「……………秀介さん。清掃ご苦労様です」

「あ、いや……………。えっと、どこかお出かけですか？」

相変わらずにこやかに微笑むさくらに見とれつつ尋ねると、さくらはほんのり頬を赤く染めて応えた。

「はい。今日こちらにあたし達の新隊長がいらっしやるんです。それで、あたしが案内する事になって……………」

「……………隊長？」

「はい。大神一郎さんと言って、海軍士官学校を首席で卒業された方なんです」

そう言つて、さくらは秀介に一枚の写真を見せた。

真っ黒な髪がツンツンと逆立った、いかにも軍人らしい好青年。

もしや……………、秀介の脳裏に一抹の不安が過ぎる。

「あの、さくらさん？……………もしかしてその人と何か関係がおりなんですか？」

必死に笑顔を作つて尋ねる秀介。

すると、さくらは秀介の様子に気付いていないのか、真顔で応えた。

「いいえ、初対面です」

「あ、そうですか……………」

安心して胸を撫で下ろす秀介。

しかし、次の一言でその安心は一気にひっくり返る事になる。

「むしろ……………これからそんな関係を作って行きたいって……………、  
そう思ってるんです」

「……………、はい？」

秀介は耳を疑った。さくらはそれに気付かず、頬を赤く染めて写真  
を見ている。

いわゆる恋する女の子。

その光景に、秀介は早くもこの世の終わりが来たような感覚に陥っ  
た。

それから少しして、さくらがハツとした様子で叫んだ。

「あ、もうこんな時間！それじゃあ秀介さん、行ってきますね！」

秀介の返事も待たず、まるでデートに向かうかのような上機嫌で走  
っていくさくら。

しかし、秀介には死刑宣告以外の何者でもなかった。

「……………」

「あ、秀介。何してるの？」

「……………」

「秀介？」

それから15分、秀介はロビーで固まっていたという。

「ここがあたし達の大帝国劇場です」

「これは……………、初めて見ましたが立派な建物ですね……………！」

さくらの案内で帝劇にやって来た海軍少尉、大神一郎は、初めて見る帝劇の大きさに驚きの声を上げた。

士官学校を首席で卒業するという優秀な成績に加え、実直かつ真面目で帝都を守るといふ熱い志を掲げる熱血漢。

正に希代の軍人。

それが大神一郎という人間だった。

「ここはロビーですか。人がいないせいか、静かですね……………」

「今日は夜の部だけですから……………」

中に入るや、辺りを見渡す大神に微笑みつつさくらが答える。  
すると、大神の足下から声が聞こえた。

「きゃは。お兄ちゃん、さくらの彼氏？」

「いいつ！？な、なんだこの子は！」

それはアイリスだった。

その後ろには、やけに口元が引き攣っている秀介の姿もある。

「駄目よアイリス、大人をからかっちゃ。この方は大神一郎少尉。  
あだし達の隊長よ」

「あだし達って、まさか……………」

大神が驚いた様子でアイリスを見ると、アイリスはえっへんと胸を  
張って答えた。

「帝国華撃団・花組、アイリスです。この子は熊のジャンポール。  
よろしくね」

「同じく帝国華撃団花組、御剣 秀介と申します。はじめまして、  
大神隊長」

「ああ。よろしく、秀介。それにアイリスちゃんか……………。俺も友  
達にしてくれるかい？」

大神は秀介と握手を交わし、アイリスに笑いかけた。  
すると、アイリスも負けじと大神に笑い返す。

「うん、もちろんだよ。仲良くしてね、お兄ちゃん」

「うふふ、よかったわねアイリス」

すると、アイリスがさくらと秀介に小声で話しかけた。

「ねえ、さくら……………秀介……………」

「何？」

「このお兄ちゃんにも霊力がある……………。お兄ちゃんもアイリス達と戦うの?」

「そうですね。」

「……………アイリス、戦争キライだよ……………」

「大丈夫ですよアイリス。」

「秀介さんの言う通り、心配はいらないわ。」

「でも……………アイリス怖い……………」

「さ、部屋に戻りましょ。本を読んであげるから。秀介さん。」

「分かりました。」

「あの……………」

突然ヒソヒソ話を始めた三人に声をかける大神。  
すると、さくらが何事もなかったかのように対応した。

「あ、すみません大神さん。あたし達これで失礼するので……………」

「あ、ちよつとさくらくん……………」

大神の声を無視して、さくらはアイリスを連れて行ってしまった。

「それでは大神隊長。自分をご案内致します。どちらへ？」

「あ、ああ……………。まずは支配人室に案内を頼む。着任報告をするんだ」

「分かりました。こちらです」

「ああ。よろしく頼むよ、秀介」「ちよつと！誰か手を貸して下さいな」

支配人室へ向かう道中、食堂から声が聞こえた。

「ん？何だろうっ？」

「これはもしか……………」

聞き覚えのある悪魔の囁きに、秀介は身を固くする。

対して善人の大神は、あろう事が声のした方向に顔を向けてしまった。

それがいかに命知らずな行為か、大神は身を以って知る事になる。

「あ、その貴方」

「じ、自分でありますか!？」

そこにいたのはすみれだった。

やたら露出の多い服装に、純情な大神はたじたじになる。

「ほかに誰がいるの? バカ面してないで、こちらにいらっしやい!」

「は、はあ……………」

それこそ蛇に睨まれた蛙の如く、大神はすみれに歩み寄る。すると、すみれは自分の足元を指差して言った。

「床に落ちてしまったフォークを、新しいものと取り替えて下さらない?」

「誰が……………」

食堂の影に隠れた秀介がぼそつと呟いた。しかし、大神隊長は信じられない応対をした。

「いいですよ。……………はい、どうぞ」

「(……………嘘でしょ……………?)」

秀介は信じられないものを見た。

何と大神は、すみれの我が儘に嫌な顔一つせず、フォークを取り替えたのである。

今の帝劇にいる人間には誰ひとりとして今のような応対はできない

だろう。

秀介は改めて、大神一郎が油断できない人物と認識した。

「……………一体何なんですかあの人は？」

支配人室の前で、秀介はため息をついた。  
先程のすみれの時は、

「いいですよ」

気前良くフォークを取り替えて、米田司令に酒を勧められた時は、

「昼間から酒とは何事ですか！！」

と一喝し、さくらとアイリスが案内で揉めれば、

「二人で案内してくれよ」

と丸くおさめてしまう。

そして、つい先程すごい剣幕で支配人室に乗り込んだ所だ。

「そんなに気に入らないんですかね、モギリって……………」



翌日、秀介は日課にしているロビーの掃除をしていた。  
この日は休演日で客も来ないが、どうせ朝は特にやる事もないので  
という事だが、良い習慣ではある。

「さて、こんなものかな………?」

あらかた掃除を終え、いつものように綺麗になったロビーを見渡す  
秀介。

すると、彼の視界に昨日来たばかりの新米隊長の姿が写った。

「やあ秀介、掃除お疲れ様」

恐らくは昨日モギリの仕事を抗議に行つたせいだろう。  
昨日に比べて笑顔に陰りがあつた。  
秀介は、敢えてそれには触れなかつた。

「大神隊長ほどではありません。貴方こそ、昨日は見回りで大変だ  
つたそうじゃないですか」

「ハハ…、ありがとう」

さくらに聞いた話だが、あの抗議の後落ち込んでいた大神はさくら  
と二人で帝劇内の見回りをしていたらしい。  
アイリスのジャンポールを探したり、売り子の椿に言いくるめられ  
てさくらのプロマイドを買わされたり、踏んだり蹴つたりだったそ

うだ。

「仕事内容、納得して戴けましたか？」

箒を片付けつつ尋ねる。

大神は、僅かに間を置いて答えた。

「……………やってやるさ。これが俺の仕事だって言うならやってやる。だが、この帝都を守るといふ決意だけは揺るがない！……………決して！」

「……………それでこそ、僕らの隊長ですよ」

「秀介……………」

「これから舞台上で稽古があります。よかったらいかがですか？」

意外そうな表情をよそに言うと、秀介はロビーを立ち去った。  
大神はしばらく目で秀介の背中を追っていたが、その背中が見えなくなると、笑みをこぼしてその背中を追いかけた。「……………えっと、ここで右足を上げて……………」

「さくらさん、足の運びが違いますわよ！」

「お……………やってるやってる」

舞台では、さくらのデビュー作でもある『愛ゆえに』の稽古の真っ最中だった。

すみれに何とかついて行こうと必死なさくら。  
しかし、その必死さが裏目に出る事となった。

さくらの足が、すみれの着物の裾に、引っ掛かってしまったのだ。

「ひええええ……………!!」

奇声をあげ、すみれは顔面から床にダイブする。

「う、ごめんなさい!」

その余りに派手な倒れ方に、さくらは思わず頭を下げる。  
起き上がったすみれは、鼻を真っ赤に腫らしていた。

「さくらさん!人の裾を踏み付けるなんて失礼じゃありませんこと  
!??」

「す、すみません……………」

反論の余地なく再び謝罪するさくら。

すると、前々からさくらのデビューに不満を持っていたすみれはこ  
ごぞとばかりに厭味を並べた。

「全く、これだから田舎臭い娘は嫌ですわ。粗野で、乱暴で、お下  
品で……………」

さくらの口元が一瞬ピクツと吊り上がるのに気付かず、すみれは勝  
ち誇った表情で背を向けた。

「さ、もう一度始めから行くわよ」

しかし次の瞬間、今度はわざとさくらに裾を踏まれ、すみれは再び  
正面に倒れた。

「でえ……ぶふっ！」

「あーら、ごめんあそばせ」

あからさまにすみれの口調を真似て言つと、さくらは舌を出した。

「こんのガキヤ……。さくらさん！口で言つてわからない人はこっよー！」

最早堪忍袋の緒が切れたすみれは、さくらを打つと平手を出した。さくらも負けじと平手を返す。その時、

「二人とも、やめるんだ！！」

突然影が二人の間に割つて入り、それぞれの手首を掴んだ。

「秀介さん！」

「少尉まで何故ここに……？」

そこには、さくらとすみれの間立つ秀介と、袖の方から舞台に走ってくる大神の姿があつた。

「ありがとう秀介。おかげで間に合つたよ」

最初に止めてくれた秀介に礼を述べると、大神は二人に声をかけた。

「二人とも、喧嘩はやめるんだ」

大神は穏やかにだが、はつきりと言った。

「俺は芝居に関しては素人だし、偉そうな口を叩く気はないけど、せつかくみんなで一つの芝居を作るんだ。喧嘩はやめようよ」

それは、大神が示した精一杯の正義だった。

帝都を守るはずの自分の仕事かモギリだった事に、大神が落胆しないはずはない。落ち込んでいたのはそのためだ。

しかし、彼の心に眠る意思は消えなかった。

帝国華撃団花組隊長の資質……。

大神には、間違いなくそれが備わっていた。

「大神さん………」

「少尉………」

「………」

「お兄ちゃん………」

一触即発のこの状態を丸くおさめられたのが、何よりの証拠である。

「それじゃ………」

さすがに出過ぎた真似をしたと思ったのか、大神は気まずそうに舞台を後にした。

「………、大神さん！」

思わずさくらが後を追う。

残された四人はしばらく無言で立ち尽くしていたが、やがて秀介が口を開いた。

「……………どうやら、司令の理想通りの人物のようですね」

「そのようね。でも、まだ完璧とは言えないわ。なぜなら……………」

マリアがそう答えかけた時、警報が帝劇内部に響いた。

帝国華撃団花組の、本来の任務が始まったのである。

「よし、全員揃ったな」

「米田支配人！それにみんな！これは……………？」

いつもと違う戦闘服姿の一同に驚く大神。

すると、米田が普段とは別人のような本来の顔で、大神に真実を告げた。

「大神、歌劇団はお休みだ。帝国華撃団は、本来の任務に戻ったのだ」

「本来の任務？ま、まさか……………！」

「そつだ。昨日お前に專業モギリと言ったのは嘘だ。お前が真に隊員の生命を尊重し、帝都のために戦える器か……………。それを確かめるためのな」

「米田司令！帝国華撃団花組は……………、本当にあつたんですね！」

大神は嬉しさに身を震わせた。

それもそのはず。

帝都の平和をこの手で守るといふ士官学校からの夢が、遂に実現できたからだ。

「それで米田司令、我々の敵は一体何者なんですか？」

このような秘密組織が存在するという事は、帝都を脅かす何かがあるはず。

はやる気持ちを抑えて、大神は米田に尋ねた。

「うむ、お前も噂は聞いた事があるだろう。我々帝国華撃団の敵は、怪しげな魔の力で政府転覆を狙う謎の組織。その名を『黒之巢会』という」

「『黒之巢会』……………」

米田の言う通り、大神はその名に聞き覚えがあった。

巷の新聞にしばしば取り上げられる怪奇な事件。

謎の侍姿の機械が現れ、放火や傷害といった破壊活動を行っているという。

相手にとって不足はなかった。

「改めて紹介しよう。この五人が、お前とともに戦う帝国華撃団花組の隊員達だ」

米田の指差す先には、普段と違う勇ましい姿の隊員達がいた。

「よろしくお願いします、大神さん」

同じ新人だけに初々しさを感じさせるさくら。

「お兄ちゃん、一緒に頑張ろうね」

幼いながら、天使のような笑顔で場を和ませるアイリス。

「お手並み拝見ですわね」

自信があるのか、普段と同様に余裕を見せるすみれ。

「隊長足るもの、時として非情な決断を迫られる事もあります。少尉がそれに耐えられるだけの方が、見極めさせていただきます」

いつも以上に視線に鋭さを伺わせるマリア。

「我々帝国華撃団、存分に活躍して見せましょう」

優しく、されど熱く決意を述べる秀介。

「よし！みんな、よろしく頼むぞ！」

頼もしい隊員達に頷き、大神も言葉を返す。



すると、再び米田が口を開いた。

「それだけじゃないぞ大神。我々には『黒之巢会』に対抗するための秘密兵器がある」

「秘密兵器……………?」

「そつだ、これを見てくれ」

そう言うと、米田は作戦司令室のパネルを操作し、モニターにその秘密兵器の姿を写した。

「これは霊子甲冑『光武』。神崎重工が開発した、霊力を持つ人間にのみ動かせるスグレモノだ。秀介とアイリスの分はまだ未完成なんだけどな」

「『光武』……………」

それは、文字通り蒸気と霊力で動く鎧だった。

緑と赤のリーダーに、足元の蒸気タービン。

そして、各々の獲物を手にした四機の光武。

大神は二刀流の使い手なので、二刀の白い光武の担当という事になる。

「それだけじゃねえ。お前達も目的地に運ぶ設備もある」

米田がそう言った時、作戦司令室に売り子の椿が入って来た。椿もまた、花組とは違う戦闘服を着ている。

「長官、『轟雷号』の発進準備、完了しました！」

「椿ちゃん！じゃあまさか、かすみくんと由里くんも……………」

「そつだ。彼女達三人は帝国華撃団風組。お前達花組を目的地に運ぶ、言わばサポート役だ」

そう言つて、米田は大神に命令を出した。

「さあ大神、出撃だ！敵は待つてくれねえぞ？」

「はい！帝国華撃団花組、出撃！」

大神の号令で、隊員達は一斉に動き出した。

「……………どういふ事ですか？」

秀介が、ふと米田に尋ねた。

「アイリスがまだ子供だから戦えないという理由は分かります。しかし、僕も出撃できないというのは……………？」

「秀介……………。お前のその力は、あいつ譲りで凄まじい。お前が行けば、瞬きの間に戦いは終わる。だが……………」

僅かに躊躇い、米田は続けた。

「これは帝国華撃団花組の初陣。その最初の戦いでお前の力を借りれば、あいつらは次もお前を当てにする……。冷たいかも知れねえが、帝都の平和はできる限り人間の手で守るものだ。現にあいつは、一度しか力を使った事はない」

「……………」

秀介は答えなかったが、心の中で叫んだ。

「（平和を人間の手で守れるのなら……………、僕は何のためにここにいるんですか！？）」

確かに米田の言う事には納得できる。

しかし、それでは自分の存在意義は一体どこにあるのか。

秀介は、新米ゆえに答えを見つけない事が出来ずにいた。

昼前の上野公園。

侍姿の魔装機兵『脇侍』が現れて火の手が上がったのは、実に突然の事だった。

人々が逃げ惑う中、公園の鳥居に四つの影が並ぶ。

「アハハハハ……………、破壊、動乱、政府転覆、楽しいねえ」

「帝都は我等黒之巢会が貰い受ける……………」

「屍の山を築き、我等が力を見せてくれましょう！のう、又丹殿？」

「フッ……………」

又丹と呼ばれた銀髪の男が含み笑いを漏らす。  
その時、力強い声が響き渡った。

「そこまでよ！！！」

刹那、湖から巨大な列車が出現し、中から四機の光武が姿を現した。

「帝国華撃団、参上！」

「帝国華撃団とな？……………」ぞかしい！

「  
着物姿の女が吐き捨てるように言うと、銀髪の男、又丹が前に進み  
出た。」

「面白い。ここは私が……………」

「ふん、任せたぞ」

「言うや、三つの影は又丹を残して消え失せてしまった。  
同時に、屋台を壊していた脇侍達が一斉に花組の方を見る。」

「お前達の実力、見せて貰おう！」

「敵の数は7か……。よし、まずは魔装機兵を全滅させる！」

「了解！」

威勢のいい返事に、自らの士気が高まる大神。

「（よし、これなら行けるぞ！）」

隊員達とは昨日あったばかりだが、これまでのコミュニケーションで悪い印象は与えていない。

恐らくチームワークもバツチりだろう。

そう考えた大神は、素早く指示を出した。

「マリア、後方から援護を頼む！」

しかしマリアから返って来た言葉は、大神の予想だにしないものだった。

「……………、何を言っているんです？この程度の相手に援護が必要なのですか？」

「いつ…!?」

「私はまだ少尉を隊長とは認めてはいません。では、通信を終了します」

一方的にそう言うと、マリアは通信を切ってしまった。仕方なく大神は、今度はすみれに通信を繋いだ。

「すみれくん、あの……………、援護を……………」

「おーっほっほっほ……………！中々面白い冗談です事。」

しかし、やはり反応は冷たかった。

「こんな雑魚も一人で倒せないなんて、とんだ足手まといですわ。精々頑張ってくださいまし」

「そ、そんな……………」

見ればマリアもすみれも、初陣とは思えない程の余裕で脇侍を屠っている。

「……………俺の隊長の立場って一体……………」

戦場の中、大神のむなしい呟きが響いた。

「ほーお。あいつらバラバラと思ってたら、意外にやるじゃねえか」

作戦司令室で戦況を確認していた米田は、感心したように呟いた。実際に大神の指示を聞いているのはさくらだけなのだが、二人の動きはマリアとすみれの行動を綺麗にフォローしており、一つのチームとしてまとまっていた。

それが出来たのも、偏に大神の指揮能力の高さである。

部下を単なる戦力ではなく、大切な仲間として扱う。

そんな人情溢れた性格も、大神の魅力だった。

特に花組の少女達を娘同然に考えている米田には、大神がとても好印象だった。

「これで、全部か？」

公園内の脇侍をあらかじめ片付け、大神は辺りを見渡した。すると、鳥居の奥から又丹が姿を現した。

「ほう、見事な腕前。私自ら相手をさせて頂こう」

又丹が刀を抜く。

すると、又丹を中心に地面に紋章が出現し、周辺の妖気が瞬く間に濃くなった。

「あれは……………？」

二刀を構えたまま、大神はその場に立ち尽くした。

又丹の描いた魔法陣から、光武の倍近い大きさの巨大な魔装機兵が

現れたのだ。

「よし…、敵魔装機兵を撃破する。みんな行くぞっ！」

又丹と対峙する四機の光武。

その中で最初に動いたのは、すみれの紫の光武だった。

「この私に掛かれば、楽勝ですわ！」

「待つんだ、すみれくん！」

大神の静止を無視し、又丹に突進するすみれ。

又丹はニヤリと怪しげな笑みを浮かべ、太刀を抜いた。

「おどきなさいっ！」

霊力を纏わせた薙刀で又丹に切り掛かる。

しかし、又丹は脇侍を尽く屠ったその一撃をいとも簡単にいなして見せた。

「この私を見くびるな」

「くっ………！」

後方に押し返され、すみれは屈辱に顔を歪ませる。



そこへ、大神の通信が入った。

「すみれくん、いくら君でも単機では厳しい。俺が指示を出すから、それに合わせて動いてくれ」

「……………仕方ありませんわね。よろしくてよ」

この時、さくらとマリアは僅かに驚いていた。

すみれは人に従う事を極端に嫌い、周囲とのいさかいは絶えなかった。

そんな彼女が戦いで指示を聞くなど今まではあるはずがない。

大神の統率力に、マリアは改めて感心した

「よし、まずは俺が注意を引く。その隙にすみれくんは奴の視界を制限。マリアは奴の身動きを封じ、さくらくんがトドメをさす。いいいな?」

「了解!」

隊員達の返事に頷き、大神とすみれが同時に動いた。

「行くぞっ!」

大神の白い光武が稲妻の如く又丹の懐を切り付ける。

「むっ!」

又丹も今の攻撃には反応出来ず、すみれへの注意が途切れた。

「今だ、すみれくん!」

「お任せを！」

先程の仕返しを含め、薙刀に霊力を集中させる。

「神崎風塵流、胡蝶の舞！！」

炎の纏わせた薙刀を気合いとともに地面に突き刺す。  
すると、又丹を囲むように火柱が上がった。

「くっ……………！」

「そこっ！！」

間髪入れずにマリアのライフルが火を吹き、又丹の動きを牽制させる。  
る。

そこに、さくらの必殺技が炸裂した。

「破邪剣聖、桜花放心！」

真っ直ぐ振り下ろされた刀の軌道に沿って霊力の鎌鼬が発生し、又丹の魔装機兵に深々と傷をつけた。

「なるほど……………、ここまでとは」

刹那、再び魔法陣が出現した。

「……………退け、又丹」

「蝸か……………」

そこに現れたのは、黒装束の忍者だった。目を残して顔全体を布で覆っているため表情は何えないが、又丹を名前で呼んでいる所から彼の仲間である可能性が高い。

「華撃団よ、いずれ決着をつけよう！」

そう言い残し、又丹は魔法陣の中に消えてしまった。

「貴様、黒之巢会の仲間か！？」

二刀を構えて大神が叫ぶ。

しかし、蝸と呼ばれた忍者は表情一つ変える事なく言った。

「答える必要はない」

「何！？」

「ほんの挨拶がわりだ。精々足掻くがいい」

そう言って札を取り出す蝸。

すると、札は閃光とともに巨大な怪物へと変身した。

人間の体に蝉の顔を合体させたような姿で、両手は蟹のようにハサミになっている。

「こ、これは……………！？」

さくらが驚きの声を上げると、怪物は奇怪な声を出して笑った。

「フォッフオッフオッフ……………！」

「長官、上野公園に巨大な妖力反応が出現しました！」

「何!？」

モニターを見るや、米田は絶句した。

八年前の予言が、遂に現実となったのだ。

「……………まさか、一発目に来るとは思わなかったがな」

しかし、あの怪物が今の花組の手に負える相手でない事は明白となれば、選択の余地はない。

「秀介、お前の初舞台だぜ。派手に暴れて来い！」

「了解です!」

待つてましたと言わんばかりに答え、秀介は駆け出した。

「……………やっぱりお前の弟だな、豊」

「皆さん、今参ります!」

人気のない路地裏に入り込み、秀介は左手のブレスレットに目をやった。  
最初の使命の時を告げるかのように、ブレスレットは淡い光を放っている。

「ジャー……ック！」

ブレスレットを空に掲げ叫ぶ。  
すると、ブレスレットはまばゆい閃光を放ち、秀介を包み込んだ。

それは何の前触れもなく現れた。  
怪物に一撃を与え、大地に足をつけたその姿は正しく光。  
手首に黄金のブレスレットを、胸に空色のタイマーをつけ、銀と赤の体で怪物と対峙するそれは、仁王のような守護神を想起させた。

「あれは、一体………」

大神はそう呟くしかなかった。  
ウルトラマンジャック。

八年の時を経て、光のメシアはこの帝都に帰ってきた。

「シュワッ！」

ジャックは、目の前の怪物に殴り掛かった。

怪物はハサミで受け止めようとするが間に合わず、仰向けに倒れる。

「へッ！」

ジャックは馬乗りになって、さらに追い撃ちを掛ける。

「フォッ！」

しかし、今度は怪物を身構えており、ハサミでジャックの手首を掴んで攻撃を食い止め、さらにもう一方のハサミから白色の光弾を放ってきた。

「アアッ!？」

ダメージこそ少ないものの、至近距離で攻撃を受けたジャックは後方へ吹き飛ばされる。

そこへ、今度は怪物が馬乗りになってきた。

しかし、そう簡単にやられるジャックではなかった。

「へアアッ！」

飛び掛かってきた怪物の勢いを逆手にとって巴投げをキメる。

「シュワッ!!」

起き上がりざま、ジャックは怪物の方に振り向くと両手を十字に組み、スペシウム光線を放った。

スペシウムは怪物の顔面を直撃し、大爆発を起こした。

「……………シュワッ」

それを確認すると、ジャックの足元から声がした。

「君は一体……………?」

それは大神だった。

見ると、ほかの隊員達も光武を降りてジャックを見上げている。

「……………私は、ウルトラマン」「ウルトラマン……………?」

大神が繰り返すと、ジャックは頷いて続けた。

「そつだ。私はM78星雲からやって来た宇宙人。八年前に私の兄がこの星を救ったように、私もまた、この星を守る事になった」

「君の兄が……………?」

「貴方達の勇氣に感動した。勝手ながら、今回のような敵が出て来た時は、また助太刀させてもらう」

そう言うと、ジャックは空へと飛び立っていった。

「……………何だったんでしょつか?」

四人はしばらく無言だったが、ややあつてさくらが口を開いた。

「私達の味方とは、言い切れないわね」

「何だって良いではありませんの。敵でないのですしたら」

「そうだな。ウルトラマン……………。もしかしたら本当にもに帝都を守ってくれる仲間かも知れない」

彼の正体は何であれ、ピンチだった自分達を救ってくれた事に代わりはない。

大神は、不思議とあの光の巨人に親近感が湧いた。

「そうだ！事件も解決したし、アレやりませんか？」

「アレ……………？」

「ほらほら、大神さんも行きますよ！せーの……………」

何の事か分からず困惑する大神をよそに、三人は同時に叫んだ。

「勝利のポーズ……………、決めっ！」

「いっつ！？」



その夜、大神達は米田の誘いで夜の花見に繰り出した。花組初陣の勝利祝いも兼ねてだったため、皆大いに盛り上がった。た。

そんな中、さくらが大神に声をかけた。

「大神さん、お疲れ様でした」

「ああさくらくん、お疲れ様」

「大神さんのおかげで、あたし頑張れました。これからも、よろしくお願いします！」

「俺だけじゃないさ。あの光の巨人が来てくれなかったら、俺達はあの怪物にやられていた」

すると、そこへ話中の秀介が話に割り込んできた。

「……………で、その光の巨人が助けてくれたと」

「秀介さん!？」

「ああ、ウルトラマンと名乗っていた。まだ仲間とは言いきれないが、俺は仲間と信じている」

「あたしもです。何だかあの人とは初めて会った気がしなくって……」

大神の言葉に同意するさくら。

すると、今度はアイリスが大神の所にやって来た。

「アイリスねえ……………、お兄ちゃんの事気に入ったわ」

「え？」

「アイリスの恋人にしてあげるから、浮気しちゃダメよ？」

「あ、ああ……………」

ちなみにこの時、さくらがジト目になり、秀介がガッツポーズをしたのは余談である。

「さあ飲め大神。明日からモギリが待ってるぞ」

《続く》

## 出撃！華の華撃団！（後書き）

### 《次回予告》

モギリに仕事に大忙しの大神さん。

そんな大神さんの前に現れる謎の美女達……………。

あれ……………、秀介さん、何で怒ってるんですか？

次回、サクラ大戦！

「運命の出会い」

大正さくらにロマンの嵐！

いいな、恋人みたいで。

## 運命の出会い（前書き）

サブタイ通りです。

たぶん勘のいい方なら先が見えたかも……。

## 運命の出会い

「……………いでよ……………死天王」

暗がりの中に声が飛んだ。

すると、暗がりの中から四つの影が現れた。

ある者は魔法陣から、ある者は地面から、各々の力を見せんとばかりの方法で、声の下に集まった。

「また、わらわが一番乗りかえ？」

江戸時代の女性の服装でカンに障る笑い声を上げる、死天王の紅一点、紅のミロク。

「お生憎様、僕の方が早かったよ」

色の爪をちらつかせる蒼き刹那。

「ハッハッハ……………！また俺が最後か！」

刹那の弟にして、怪力の持ち主の白銀の羅刹。

「少し静まれ。天海様の御前だぞ」

そして、上野公園で花組と戦った黒い叉丹。

彼らこそ、この帝都の平和を脅かす花組の敵、黒之巢会死天王であり、彼らの前の王座に座る声の主こそ、黒之巢会首領、天海なのである。

「よく集まった。死天王よ」

四人の部下を見渡す天海。

「して天海様。我等に何用でございますか？」

「決まっておろう、前回の負け戦じゃ」

刹那が尋ねると、天海は俄かに眉をひそめた。

「申し訳ありません、天海様」

「だが、奴らは侮れません」

「黙れ、又丹、羅刹！」

謝罪と弁明を述べる二人を一喝すると、天海は続けた。

「我等は常に無敵。一刻も早く六亡星降魔陣を完成させ、偉大な徳川幕府を再建させねばならぬのだ」

「はっ！」

四人が同時に臣下の礼をとるなか、又丹がニヤリと一瞬笑った事に気づいた者は、誰もいなかった。

「（ふっ……………、死に損ないの老いばれめ……………。）」

大神が花組の新隊長となつて早1ヶ月。  
すっかりモギリとして定着した大神は、今日も慣れた手つきで仕事をこなしていた。  
そこへ、アイリスがやって来た。

「お兄ちゃん、お仕事お疲れ様」

「やあ、アイリス。来てくれたのか」

「うん。だってアイリスは、お兄ちゃんの恋人だもん」

9歳にしてはかなりませた発言だが、悪気はないので大神も苦笑いを浮かべるしかなかった。

「あ、そうそう！さっきマリアから聞いたんだけど、今日紅蘭が来るんだって」

「紅蘭？一体どんな人なんだい？」

初めて聞く名前に疑問符を浮かべる大神。

「紅蘭はねえ、ちょっと前に花やしきに行った、花組の隊員なんだよ！アイリスとっても楽しみなんだ」

「へえ〜…………、アイリスは紅蘭と仲がいいんだね」

「うん！だって紅蘭、いつもドツカーンってやるんだもん」

「ドツカーン？なんだか面白そうな人だね」

「うん！お兄ちゃんもきつと紅蘭を好きになるよ！」

余程紅蘭に会うのが楽しみなのか、アイリスはいつも以上ににこやかだ。

それにつられて、大神にも笑顔がこぼれる。

「それじゃあお兄ちゃん、紅蘭が来たら教えてね」

そう言うと、アイリスはスキップしながらロビーを後にした。

「あんなにはしゃいで、余程会いたいんだな……………」

そう呟いて、大神は仕事の準備を急いだ。

その時、突然玄関から凄まじい爆発音が轟いた。

「な、なんだ!?!」

アイリスの言葉を借りるならドツカーンという爆発音に、大神は慌てて外に飛び出した。

「これは……………、自動車事故か？」



見ると、一台の蒸気バイクが大破して煙を上げている。すると、大神の足元で声がした。

「ゲホツゲホツ……………、すんまへん。大帝国劇場って、ここでおますよな？」

「だ、大丈夫ですか？大帝国劇場はここですが……………」

恐らくはバイクの運転手だろう。

足元にいたのは紫色の髪を三つ編みにした、眼鏡とそばかすが特徴的な女性だった。

「ウチ、今日からこの配属になった李紅蘭います。よろしゅう」

「……………支配人」

「おう、入れ」

そう言われ、秀介は支配人室の扉を開けた。

「あん時やご苦労だったな。さすがはあいつの弟だ」

相変わらずの飲兵衛口調だが、やはり視線はしっかり秀介に向いている。

「兄さんに比べればまだまだです。ところで、お話というのは？」

「ああ、お前もわかってる事だが、あの怪物についてだ」

話が本題に入るや、米田は司令の顔に戻った。

「奴がお前のいう宇宙からの侵略者なら、次も新たな怪物を呼び出す可能性は高い」

「はい……………」

「そこで、お前にも新たに新兵器を用意し、花組とともに戦線に立つてもらいたい」

「了解しました。しかし、」

承諾した上で、秀介は疑問を述べた。

「戦闘中に変身して、気付かれないでしょうか？」

戦闘では常に隊員全員が繋がった状態、則ちチームワークを維持する事が、戦闘において勝利を掴む秘訣である。

しかし秀介が光の巨人、ウルトラマンジャックである事は誰にも知られてはならない。

米田の言う通り、この帝都はあくまで人間が守るべきものであって、

必要以上に秀介が介入する訳には行かないからだ。もちろん、それは花組にも同じ事が言えた。

「大丈夫だ。詳しい事はまだ言えねえんだが、そいつは俺に任せてくれ」

「……………わかりました」

いずれにせよ、通常の戦いに御剣 秀介として花組に貢献できるのは嬉しい限り。

秀介は米田に一任する事を決めた。

その時、支配人室の扉が再びノックされた。

「米田支配人。大神ですが、よろしいですか？」

「おう、入れ」

「失礼します。新隊員の紅蘭を連れて来ました」

扉を開けると、大神と紅蘭が入ってきた。

「米田はん、久しぶりやな。相変わらず飲んどるみたいやけど」

「ははは、まあな。お前こそ、花やしきには未練があつたらう」

「構わんで。ウチは機械がいじればそれでええんや」

さすが顔見知りだけあって、会話が弾む二人。

そこへ、紅蘭とは初対面の秀介が大神に紹介を求めた。

「隊長、こちらの方は？」

「今日から花組に加わる新隊員の李紅蘭だよ。紅蘭、隊員仲間の御剣 秀介だ」

「新入りさんかいな？ウチ李紅蘭いいます。よろしゅうな」

「御剣 秀介と申します。以後お見知り置きを」

軽く挨拶を済ませると、米田が口を開いた。

「知ってるか大神？紅蘭は華撃団の中でも機械に詳しくてな。光武を設計にも携わったんだぜ？」

「光武の設計！？凄いんだな紅蘭は」

「そんな事あらへんで。大神はんこそ、前の初戦は大勝利やったらしいしな」

素直に驚く大神に謙遜する紅蘭。  
すると、大神も謙遜で返した。

「そんな事ないよ。花組のみんながいてくれたから、俺達は勝てたんだ」

「ええ事言っなあ大神はん。それでこそ花組の隊長や」

「確かに、僕もそう思います」

軍人というのは、何かについて手柄を自分のものにしたがる。

なぜなら、手柄の数はそのまま自分の評価に繋がるからだ。故に中間職の軍人になると、部下の手柄も独り占めする人間は腐るほどいる。

しかし、大神にはそれが全く感じられない。

帝都の平和を第一に考え、隊員一人一人を大切に作る人間味に溢れた人物だ。

本当の意味で彼は軍人なのだと、秀介は思った。

その日の夜、秀介は大道具部屋で明日の公演の準備をしていた。

舞台袖に置くパネルや噴水のセットの清掃だけなので、たいして時間はかからないのだが、真面目な秀介はついでに部屋全体を綺麗にしようと考えたのである。

「こんな所でしょうか……………」

見違えるほど綺麗になった部屋に頷き、道具を片付け始める秀介。そこへ、さくらがやって来た。

「あ、秀介さん……………」

「さくらさんじゃないですか。どうしたんです？こんな時間に」

思いがけずさくらと二人きりになれたからか、普段より少し上機嫌になる秀介。

一方、さくらはいつもより表情に元気がなかった。

「今日のあたし達の舞台、見て頂けました？」

「ええ、もちろん。紅蘭さんは初舞台だったんですね」

その後、紅蘭は米田に頼んでこの日から舞台に立たせて貰う事になった。

当然ワンシーン限りの脇役だが、あのコミカルさが客に強いインパクトを与え、主役のさくらが霞むほどであった。

ちなみにその時、秀介はさくらしか見ていなかったのは余談だが、いずれにせよ、今日の舞台で李紅蘭という花形スターが誕生したのは事実だ。

「びっくりしました。紅蘭って、初めて舞台に立つのに全然緊張してなくて……。あたしなんか、主役になっただけで震えが止まらなかったのに……」

それは、劣等感だった。

さくらが不安に思えてならなかった事を、紅蘭は塵にも感じておらず、さくらが一ヶ月かかったスターへの階段を、紅蘭はたった一回の、それも初舞台の公演で登ってしまったのだ。

「それで？」

「時々、迷う時があるんです。明らかに紅蘭の方があたしより上手なのに、あたしが主役をやってていいのかなって……」

「気にする事ではありませんよ」

「……………え？」

あまりにあっさりと言う秀介に驚いたのか、さくらは目を丸くした。

「何もかも同じ人間というのは存在しません。早く才能を開花させる人もいれば、反対に時間のかかる人もいます」

「……………」

「でも、結局誰も自分の演技しかできないんです。紅蘭さんは笑わせる演技がピカイチのように、さくらさんも感動させる演技は誰にも負けないと、僕は思うんですが……………」

「秀介さん……………、ありがとうございます。あたし、そう言って貰えたの初めて……………」

余程秀介の言葉が嬉しかったのか、さくらは頬に手を当てて恥じらいを見せた。

「あ、い、いや、まあ……………はい……………」

それを見た秀介も、顔を真っ赤にして目を逸らす。すると、さくらが何か閃いたように言った。

「あ、そうだ。秀介さん今から時間ありますか？」

「えー!? ………………ええ、暇ですが……………何か？」

目的が分からず尋ねると、さくらは秀介の手をとって言った。

「だったら、あたしのお芝居の練習に付き合ってください!」

「へっ!? 僕がですか?」

突然のさくらからの申し出に、秀介は思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

「いや、でも……僕は芝居は素人ですし……」

「そんな事ないですよ。前に大神さんに付き合ってもらった時も、ためになりましたし」

刹那、秀介の眉がピクツと上がった。

「(なんですと? 隊長を部屋に入れた?)」

油断した、と秀介は思った。

まさかこんな早くから部屋に入れる程の仲になっていたとは……。

「……………あ、あの、秀介さん?」

突然俯いて拳を震わせ始めた秀介に驚いて手を離すさくら。すると、今度は秀介の方からさくらの手を握ってきた。

「さくらさんっ!…!」



「は、はい!？」

凄まじい気迫の秀介に気圧されつつ返事するさくら。

「その話、喜んで引き受けます！是非、お手伝いさせて下さい！」

そう言ってさらに力を込めてさくらの手を握る秀介。  
さくらは首を縦に振る事しか出来なかった。

「……………それじゃあ、始めますね」

念願叶ってさくらの部屋に来た秀介は、さくらに来月公演予定の『シンデレラ』の台本を渡された。

花組の芝居のスタンスは、芝居を途切れさせない事にある。

公演と公演の間に期間が空くと、ライバルの活動写真に客を奪われる可能性があるからだ。

しかし、役者も人間である以上稽古は必要不可欠であるため、一つの舞台を演じる傍ら、次の舞台に備えなくてはならないのだ。

そのため、花組の役者は基本的に二人一組で主演を担当し、個人の演技力に合わせて調整するようにしている。

そうする事で、少しでも役者の負担を減らそうというのだ。

さくらは現在公演中の『愛ゆえに』ではヒロインのクレモンティーヌを、さらに次回公演予定の『シンデレラ』でも主役を勤める事になっている。

同じく主役を勤めるマリアと比べても、演じる時間や台詞の数は群を抜いて多い。

そのため、今の内から立ち稽古を始めないと、間に合わないのだ。

「今日は……………、第三場面の魔法使いがシンデレラに魔法をかける所です」

「は、はあ……………」

必死に台本を見て該当部分を探す秀介。

一方のさくらはもう台詞を暗記しているのか、台本を置いてスタンバイしている。

「それじゃあ秀介さん、行きますよ？」

「は、はい……………！」

「よーい……………、スタート！」

「ああ……………、お姉様もお母様も酷いわ。私も舞踏会に行きたいのに……………クスン……………」

「おお、可哀相なシンデレラ……………。私が貴女を助けてあげましょう。」

「まあ、貴方は一体……………？」

「名乗る程ではない魔法使いです。さあ、貴方の願いを言ってご覧なさい。」

「はい、ドレスを着て馬車に乗って、舞踏会に行きたいんです。」

「わかりました。では……………、アブダラカブダラ……………以下省略。」

「わあ、凄い！ドレスと馬車だ。」

「シンデレラ、この魔法は12時までしかもたないからね。それまでに帰るんですよ。」

「はい！ありがとうございます！」

「凄いじゃないですか秀介さん！ 本当に初めてなんですか？」

「いや……………、何だか気持ちが出ちゃって……………」

恥ずかしそうに頭を掻く秀介。

実際に芝居の立ち稽古したのは初めてなのだが、シンデレラを（と言うよりさくらを）助けたいという気持ちが伝わっており、充分客に見せられるレベルだった。

秀介としては、さくらに褒めて貰えた事が一番嬉しいのだが。

「秀介さん。よかったら、これからもあたしの稽古に付き合ってくださいませんか？」

「はい、僕でよければ喜んで」

秀介は、心の中でガッツポーズをキメていた。

翌日、仕事を一通り終えた大神は、秀介と揃って「愛ゆえに」の舞台を見るために舞台袖に来ていた。

「これは……、ちょうど盛り上がりのシーンだな」

「あ、秀介。お兄ちゃんも」

二人に気づいたアイリスが小声で反応した。

袖には出番を終えた紅蘭とすみれの姿もある。

「二人とも、ええ所に来たな。いよいよ山場やで」

「オンドレ様、どうか私と一緒に逃げ下さい！」

「……………使命も部下も捨てて貴女と逃げ出す私など、最早私ではな

い。クレモンティーン、貴女はそんな私を愛せるのか？」

「オンドレ様！」

「……………全く、田舎臭いつたらありゃしない。よくあんな演技で泣けますわね」

すみれが呆れた表情でため息をつく。

すると、二人のシーンに若干涙ぐんでいたアイリスが言い返した。

「すみれ、うるさい！」

「それにしてもさくらはん、何や輝いてるな。マリアはんもはまりすぎや。女の子が失神するで」

「フフツ……………」

紅蘭の一言に、秀介は一人笑みを浮かべた。

しかし、この後舞台は予想だにしない事態に見舞われる事になる。

「オンドレ様！！」

そう叫んでマリアの下へ駆けるさくら。

しかし、あまりに役になりすぎたためか、足を滑らせて倒れそうになる。

「あらっ！？……………っと……………っと……………！」

さくらはそのままリアを通過。

終いにはすみれ達のいる舞台袖の挿んで倒れてしまった。

因みに帝劇の舞台は袖がセットと同じレベルから下がっており、スツパーの役目をしている。

つまり……………」

「うわぁっ、セットが！」

大神は思わず叫んだが、それすら掻き消す轟音が舞台を襲った。

天井からはスポットライトが雨霰のように降り注ぎ、セットは噴水から何から全部大破し、後ろの背景幕すら破れる始末。

最早芝居どころではなかった。

「あちゃー、えらいこっちゃ……………」

変わり果てた舞台に啞然とする紅蘭。

すると、すみれが憤怒の形相で立ち上がった。

「もう堪忍袋の緒が切れましたわ！ちよっとさくらさん！！」

「あ、すみれく駄目だよ！」

アイリスの静止も聞かず、すみれは舞台上上がってさくらを怒鳴りつけた。

「舞台をこんなに壊してどうするおつもり！？冗談じゃありませんわ！」

「……………すみません」

「貴女つて人は本当にト口臭い、どん臭い、おまけに田舎臭い……  
…！臭い臭いの三拍子ですわ！」

半ばキレているためか、大袈裟に鼻を摘んで見せるすみれ。  
すると、さくらもカチンときたらしく、すみれを睨み返した。

「NGの回数はすみれさんに負けますけどね」

「まあ、さくらさん！セットを壊してその態度、許しません事よ！」

「二人とも本番中よ！やめなさい！」

必死に二人を説得するマリアだが、状況が状況だけに効果がない。

「アカンで大神はん。二人を止めんと……………」

「お兄ちゃん、何とかして〜！」

袖であたふたする二人。

そんな中、袖で一人どす黒い殺気を放つ者がいた。

そう、秀介である。

「あの高飛車女……………、叩っ斬る！！！」

「いいっ!?!」

怒りの余りブレスレットからパークソードを召喚する秀介。

パークソードを初めて見る大神は、仰天しつつ秀介を止めようと試みた。

「待て秀介、落ち着くんだ！」

「離して下さい隊長！さくらさんを侮辱する奴は僕が許しません！」

「今は本番中だぞ！！君が行けばますます騒ぎが大きくなる。」

「くっ……………！」

何とか秀介を羽交い締めにする大神。

しかしその時、舞台の天井から何かが軋む音が聞こえた。

「……………？……………、大神はん！照明のバーが崩れかかっとなる！このままやとライトが全部落っこちるで！！！」

「何っ！」

紅蘭に言われて天井を見ると、さっきの衝撃で傾いた照明のバーが折れかかっていた。

舞台の三人は気づいていない。

大神は大声で叫んだ。

「みんな逃げろ！舞台が崩れるぞっ！！！」

「お、大神さん！」

大神の声に気づいた三人が上を見る。

と同時に照明のバーが音を立てて折れた。

「きゃあああああっ！！！」

「うわああああ……………！！！」



「あれえええええっ!？」

「ぬおおおおお……………!!！」

役者達の悲鳴とともに、舞台は完全に崩壊した。

「舞台が……………、何て事なの……………」

マリアはただ、そう呟くしかなかった。

「……………にしても、隊長も随分無茶な要求を呑みましたね」

「仕方ないさ。仲間の失敗は俺の失敗でもある」

秀介の言葉ににこやかに返す大神。

あの後、セットの壊した責任で責められたさくらを不憫に思った大神は、代わりにセットの修理を言い出したのだ。

しかし、帝劇のセットは専門のプロが作ったもので、本物に瓜二つの完成度でなければならぬ。

さらにセットだけでなく、照明や舞台の床も修理しなくてはならぬのだ。

舞台については素人同然の大神に一人で出来るはずもないのだが、それでも彼は引き受けてしまった。お人よしなのか、どこまでも隊長の義務に忠実なのか……。秀介には、イマイチそれがわからなかった。

「それに秀介、君こそ何で俺を手伝ってくれるんだ？」

「え？」

急に聞き返され、秀介は思わずバーをどかす手を止めた。

「俺は隊長の義務としてやっているが、秀介は何でわざわざ俺を手伝ってくれるんだ？」

「……………」

秀介は押し黙った。そして、しばらく黙ったのち、こう言った。

「仲間を助けるのに、理由がいるんですか？」

「秀介……………」

大神は意外そうな目で秀介を見た。

しかし、秀介はそれ以上口にする事なく作業を再開した。

大神は何やら秀介の言葉に感動したようだが、実際の理由はそれだけではない。

大神がさくらを庇った時に、さくらがまたしても顔を真っ赤にしていたからである。

つまり、かなりカッコイイ事を言ったように見えて、実際は単なる対抗意識だったりする。

すると、そこへ話題の人物が現れた。

「大神さん……………」

「やあ、さくらくん。まだ休んでなかったのかい？」

大神が尋ねると、さくらは暗い表情で答えた。

「……………ごめんなさい。あたしのせいで二人には迷惑をかけて……………」

「大丈夫さ。心配ないよ」

「それに、自分を責める事はありません」

落ち込んだ様子のさくらを気遣かって、笑顔を見せる二人。  
さくらは、そのおかげか少し笑顔になった。

「あの、あたしにもお手伝いさせて下さい。壊しちゃったの、あたしだし……………」

「そうだな、じゃあお願いするよ」

もしかしたら修理を手伝う事で、さくらの心も軽くなるかもしれない。

そう思った大神は、さくらの申し出を受ける事にした。  
その時、舞台にアナウンスが流れた。

「御剣 秀介さん、支配人室までお越し下さい」

「よう秀介、悪いな仕事によ」

支配人室に入った秀介をいつもの様子で迎える米田。

しかし、秀介はその隣に立つ女性に目がいった。

歳はさくら達より一世代程上だろうか。

赤みがかった長い茶髪を後ろで綺麗にまとめ、さくらとはまた違って大人の魅力を持った女性だった。

「紹介するぜ。帝国陸軍中尉にして帝国華撃団副司令、藤枝あやめくんだ」

「貴方が御剣 秀介くんね？はじめまして、藤枝あやめです」

「あ、はじめまして。御剣 秀介です」

あやめに一瞬目を奪われていたため、秀介はやや慌てて返事を返す。すると、米田が意地悪に笑った。

「何だ秀介、あやめくんに惚れちまったか？さくらがヤキモチ焼くぜ？」

「なっ、そんなんじゃないですよ！」

慌てて弁明する秀介。

すると、あやめは上品な仕草で笑って言った。

「そうやって真面目な所、あの人にそっくりなのね」

「あの人……………？ゾフィー兄さんの事ですか？」

驚いた表情で秀介が尋ねると、あやめは当然のように返した。

「もちろん、知ってるわ。彼は私達の戦友だったもの」

その表情には、どこか懐かしむように見える。

あやめもまた、米田と同様にゾフィーの仲間だったのだ。

「ところで長官？新隊長の大神少尉にも会っておきたいんですが。」

「隊長なら、舞台の修理をしています。呼んで来ましょうか？」

「それには及ばないわ。長官、行ってきますね」

そう言っつて、あやめは支配人室を後にした。

「……………司令、あやめさんも兄さんと知り合いだったんですね」

「ああ、もう八年も前だがな……………」

「……………」

秀介が尋ねると、米田は悲しげに返した。

秀介は、まだ黙っている事しかできなかった。

翌日、花組の姿は舞台ではなく作戦司令室にあった。

上野公園に引き続き、黒之巢会が芝公園を襲撃したからである。

「芝公園言ったら、先週帝都タワーが建ったばっかやで」

「そんな大事な建物を壊される訳には行きませんね！」

紅蘭の言葉に意気込むさくら。

一方、秀介は対照的に疑問符を浮かべた。

「帝都タワーってなんですか？」

「帝都全体の電波を管理する、巨大なアンテナのような建物よ」

「もしタワーが破壊されたら、帝都全体の電波システムがマヒしてまうで」

「よし、帝国華撃団花組は直ちに現場に出動。帝都タワーを防衛しつつ、敵を全滅させる。いいな！」

米田が力強い言葉で花組を激励する。

それに答えるように、大神が出撃命令を出した。

「帝国華撃団花組、出撃！！目標地点、芝公園！」

「了解！」

「……………で、僕らはまた留守番ですか？」

「アイリスつまんない！」

花組が飛行船、翔鯨丸で出撃する様子を窓から眺めつつ、秀介とアイリスは不満を口にした。

「いや、お前の分まで轟雷号に入らなくてよ。まあ、勘弁な」

「前に何とかするとおっしゃったじゃないですか」

「仕方ねえだろ！まさか先に向こうが仕掛けてくるとは思わなかったんだからよ！」

司令室での言い争いが続く中、アイリスはやれやれといった表情で呟いた。

「早く大人になりたいな……………」

突如として襲撃された芝公園。

脇侍が縦横無尽に暴れ回り、あちこちから煙が上がっている。

その中央で一際強い妖気を漂わせる者がいた。

黒之巢会首領、天海である。

「オンキリキリバサラウンバツタ、オンキリキリバサラウンバツタ、オンキリキリバサラウンバツタ………」

天海が何やら怪しげな呪文を唱えた。

すると、上空からドリル状の巨大な物体が現れ、芝公園の地中深くに沈んでいく。

それを満足そうに見届け、天海は叫んだ。

「魔都の門は見えたり!!」

「そこまでや!!」

刹那、上空から五つの光武が派手に現れた。

「帝国華撃団、参上!!」

「むっ………」

叉丹をして侮れないと言わせた帝国華撃団。

天海は自分の存在に気付かれる前に、転移魔術で帝都タワーの真上に移った。



「帝国華撃団……………、うめらの戦い振りを見せて貰おう。」

「少尉、敵はやはり帝都タワーを狙っているようです」

開口一番、マリアが言った。

「帝都タワーを守る……………、重大な任務だな」

改めて今回の戦いの厳しさを痛感し、大神は脳内で素早く戦術を組み立てる。

刹那、紅蘭が何かに気づいて叫んだ。

「みんな、散るんやつ!!」

その声に反応して五人が一斉にその場を離れる。その瞬間、大神達のいた場所に火球が炸裂した。その火球の飛んできた方向を見ると、固定式の砲台が設置されていた。

「あれは……………、砲台か？」

初めて見る兵器に驚く大神。すると、紅蘭がそれを破壊しつつ答えた。

「あれは『蒸気火栓』。つちゅうドイツで開発された破壊兵器や。今みたいな火球で攻撃するんやけど、正面しか狙えんちゅう弱点のた

めにお蔵入りになったんや」

見れば、芝公園の至る所に蒸気火栓が設置されている。しかし、帝都タワーを守るためには迅速に脇侍を全滅させなくてはならない。

大神は脳内の戦術を再構築し、命令を出した。

「よし、帝都タワー防衛のために魔装機兵を全滅させる。行くぞっ  
！」

「了解！」

蒸気火栓と言う新しい兵器の出現によって危ぶまれた芝公園の戦いだが、大神の戦略の前には敵ではなかった。

遠距離攻撃に優れたマリアと紅蘭が砲台を狙い撃ち、さくらとすみれが大神とともに二人を援護する。

この作戦が功を成し、火栓は花組にさしたる打撃を与えられぬまま沈黙した。

こうなれば、大神達の障害は何もなかった。

「これで終わりか……………」

最後の思われる脇侍を切り倒し、大神が呟く。  
しかし、まだ終わりではなかった。

「いいえ少尉、あれを見て下さい！」

マリアが帝都タワーの真上を指差す。

そこには、如何にも悪者らしい威厳を妖気とともに漂わせる者が、大神達を見下ろしていた。

「そうか、こ奴らが又丹の言う……………」

天海が小声で呟くと、白い光武が刀を突き付けた。

「貴様、一体何者だ!？」

大神の鋭い声が飛ぶ。

しかし、天海は大神の間に嘲笑を以って返した。

「我は天海!この汚れきつた帝都を破壊し、真の日本を蘇らせる者なり!」

刹那、天海の妖力が上昇する。

「何ですの、この妖気……………!脇侍とは桁違いですわ!」

「みんな、気をつける。何を仕掛けてくるかわからないぞ?」

隊員達にそう言った時、大神は自身の後ろに凄まじい妖気を感じとった。

「何っ!？」

反射的に跳んで間合いを開くと、一体の大きな脇侍が刀を構えて立っていた。

漆黒の体から溢れる妖気は、脇侍とは明らかに違う。

「精々こやつと戯れているがよい」

そう言つて、天海は転移魔術で消え失せてしまった。

「少尉、気をつけて下さい!今までの敵とは違います」

「わかった。みんな、充分注意して戦うんだ!」

「了解!」

「長官、芝公園に出現した巨大魔装機兵の妖力が増大しています!」

「何!？」

椿の報告に、米田は驚きを見せた。

ただでさえ強い妖力がこれ以上高まっては手に負えない。  
案の定、花組は今の時点で苦戦を強いられている。

米田は一瞬考えた後、決断した。

「秀介、お前の出番だ!」

「待ってました！」

言うや、秀介は作戦司令室を飛び出した。

「……………皆さん、今助けに参ります！」

秀介は人気のない所に移動し、ブレスレットを高々と空に掲げて叫んだ。

「ジャーーーーーーック!!!」

天海の生み出した巨大魔装機兵。  
大神達は懸命に立ち向かうが、圧倒的な戦力差の前に苦戦を余儀な

くされていた。

「アカンで大神はん、こいつ計算以上の動きをしよる！」

「こちらの攻撃も通じませんわ！？」

「くそっ……………何と言う強さだ！」

その剛腕から繰り出される一撃は地を砕き、その漆黒の鎧は大神達の攻撃を一切受け付けない。

まさに手も足も出ないとは、この事だった。

「……………大神さん、さっきから気になってたんですが……………」

ふと、さくらが口を開いた。

「この脇侍……………、さっきより大きくなってませんか？」

「何……………？」

言われて見ると、確かにそうだ。

最初は大神達の光武より一回り大きい程度だったのに対し、今の脇侍は帝都タワーの半分に匹敵する高さになっている。

「一体……………、どういう事なんだ？」

大神がそう呟いた時、突如脇侍が仰向けに倒れた。  
いや、倒されたのだ。

大神達を庇うように現れた救世主……………、

「あれは……、ウルトラマン!?!」

ウルトラマンジャックによって。

「シュワッ!」

ジャックは起き上がった脇侍にすかさず掴み掛かった。

脇侍を負けじとぶつかり合うが、大きさをジャックが勝っている分不利である。

「へッ!」

両手で高々と脇侍を持ち上げ、ジャックは勢い良くぶん投げた。

「シュワッ!」

倒れた所にスペシウム光線を打ち込む。

しかし、次の瞬間信じられない事が起きた。

何と、脇侍はスペシウム光線を吸収して立ち上がったのだ。

それだけではない。

脇侍の体は、ジャックと変わらぬ大きさに肥大化したのである。

「へッ!?!」

これにはジャックも驚きを隠せなかった。

その間にも、脇侍はジャックに襲い掛かる。

「へアッ!」

再びぶつかり合う二人。

しかし今度は背丈も同じ分互角になる。  
その時、大神がハツと気づいた。

「そうか…………、奴は俺達の攻撃を吸収していたんだ！」

さつきジャックのスペシウム光線を吸収したのが何よりの証拠だ。  
大神達の攻撃も吸収されていたとするならば、攻撃が通じない事も  
説明がつく。

「しかし、それではどう攻めれば良いのか…………」

マリアがそう呟いた時、誰かから通信が入った。「こちら翔鯨丸、  
敵の本体を特定しました。これより本体を直接砲撃します」

刹那、上空の翔鯨丸から主砲が発射され、さくらの光武の近くに着  
弾した。  
立ちのぼる煙。

その奥に、ジャックと戦う黒い脇侍とは別の白い脇侍が姿を現した。

「あれが本体ね。大神隊長、ウルトラマンが黒い脇侍を食い止めて  
いる間に本体を撃破して！」

見ると、ジャックは黒い脇侍を羽交い締めに行っている。

「少尉、向こうもこちらに気づいたようです」

マリアの言う通り、白い脇侍はこちらに構わず、一目散に帝都タワ  
ーに向かっていった。

「ここまで来て逃がすものか！全員、本体に総攻撃せよ！」



「了解！」

五機の光武は、一斉に本体に攻撃を仕掛けた。

「そこっ！」

マリアの光武が本体の足を打ち抜いた。

しかし、本体はそれにも構わず走り続ける。

「さくらさん！」

「分かっています！」

今度はさくらとすみれが同時に左右から切り込むが、ギリギリで避けられてしまった。

だが、本体の逃亡をこれ以上許さない者がいた。  
紅蘭の光武である。

「逃がさへんで！チビロボ軍団、発進！」

頭と両腕の大砲から、コイルのようなロボットが次々に発射され、  
本体を取り囲む。

「今がチャンスや！大神はん、一発かましたれ！！」

「分かった！」

チビロボ軍団が本体を捕らえている間に、大神は二刀を交差させ、  
精神を集中した。

「狼虎滅却……、快刀乱麻!!」

振り下ろされた二刀から緑色の電撃がほとばしり、白い脇侍を一撃で黒焦げにしてしまった。

それと同時に黒い脇侍も全身から煙を出す。

「シュワッ!」

ジャックが再びスペシウム光線を撃つと、今度は吸収する事なく爆発した。

「ご苦労様」

戦いを終えた大神達を待っていたのは、あやめだった。先程の砲撃による援護は、彼女だったのである。

「あ、貴女は……」

「帝国華撃団副司令、藤枝あやめです。よろしくね、大神君」

正式な挨拶はまだだったのか、改めて自己紹介するあやめ。すると、大神の顔が俄かに赤くなる。

「隊長には、瞬間の判断力が必要よ。これからもしっかりね、大神君」

「は、はい！頑張りまひゅ、が、がんば……！」

緊張したのか噛みまくりの大神に、隊員達は思わず吹き出した。

「……………帝国華撃団、あくまでも我等の邪魔をするつもりか」

黒之巢会のアジトにて今の戦いを見ていた天海は、憤怒の形相で唸った。

「更にはあの巨人……………。何人たりとも我が野望に仇なす輩は、闇に葬ってくれるわ！」

すると、それに答えるようにミロクが叫んだ。

「帝都殲滅！抹殺、帝国華撃団！」

運命の出会い（後書き）

《次回予告》

さよなら、私の青春…、

さよなら、私の恋…、

私の時間は、あの戦争で止まっている……………。

次回、サクラ大戦！

《隊長として…………》

大正さくらにロマンの嵐！

貴方は、隊長失格です！

隊長として……………（前書き）

ようやく主人公も参戦。

世界観は壊してない……………はず。

隊長として……………

「帝国華撃団め……………、今に地獄を見せてくれるわ！」

アジトにて天海は、怒りを露に吐き捨てた。

これまで順調に進んでいた徳川幕府再興の計画を邪魔する存在が現れたからである。

すると、それに答えるように死天王の一角から名乗りが上がった。

黒之巢会死天王の一人、蒼き刹那である。

「天海様。帝国華撃団の始末、この蒼き刹那にお任せ頂きたく思います」

「ほう、勝算はあるのか？」

興味深そうに天海が尋ねると、刹那にニヤリと笑って見せた。

「帝国華撃団の強さは、大神一郎とタチバナ、マリアの統率力にあります。この二人を始末すれば、帝国華撃団など烏合の衆に過ぎません」

たしかに花組の強さは大神の指揮によるチームワークにある。

各々が互いに弱点を補い合い、本来の何倍もの力を生み出しているのだ。

しかしその分、チームワークが強い程指揮官のいない場合の戦闘力は激減する。

刹那は、そこを巧妙に突こうと考えたのである。

「しかし兄者、上手く行くのか？」

心配する羅刹に、刹那は笑って答えた。

「案ずるな。タチバナ」マリアに関する面白い情報を手に入れた」

「良かろう、刹那。見事帝国華撃団の首を挙げてみせよ」

「はっ、お任せ下さい！」

そう返事を返し、刹那は血色の爪をちらつかせた。

「（人には誰しも、触れられたくない忌まわしい過去がある……。さて、タチバナ」マリアよ。どう出るかな？）」

「マリアさんの様子がおかしい？」

そう聞き返すと、さくらは不安げな表情で頷いた。

衣裳部屋に小道具を持って来た秀介は、たまたまそこにいたさくらに鉢合わせし、相談に乗ったのだ。

「はい。今日の公演でも、あのマリアさんが台詞を間違えたんです」

そう言われ、秀介は頭の中の記憶を舞台に戻す。

すると、たしかに一度だけ、マリアの口からやや不自然な台詞が聞

こえた。

「珍しいですね、マリアさんが失敗するとは……………」

マリアは花組の中でも最古参のメンバーであるため、一番舞台慣れしている。

新人のさくらと一緒に主役を演じるのも、自分の役を完璧にこなした上で、さくらのフォローができると米田が判断したからである。事実、さくらはこれまで何度もマリアに助けられてきた。

「それに、最近マリアさんはよくため息をつくようになったんです。何か悩み事があるのかも……………」

「マリアさんは頼りがある分、人に弱みを見せませんから……………」

秀介がそう返した時、不意に衣裳部屋の扉が開かれた。

「あらお二人さんお揃いで、ちょうどよかったわ」

「紅蘭さん。如何しましたか？」

秀介が尋ねると、紅蘭は親指で舞台を指差して答えた。

「ほら、今日で愛ゆえにも千秋楽やる？一度セットをまとめて掃除しよう思っつてな。手伝ってんか？」

「ええ、もちろんよ」

「分かりました」



現時点ではマリアの異変を解決する方法は見つからないだろう。とりあえず二人は問題を保留にして、紅蘭の後を追いかけた。

「これで全員ですわね」

到着したさくらと秀介の顔を見てすみれが言った。すると、二人の後ろから声が聞こえてきた。

「おゝい、遅くなって済まない」

それは大神だった。

ついさっきまでモギリの仕事に追われていたので、仕方ないと言えば仕方ないのだが。

「……………で、今からみんなで何をするんだい？」

椿からの又聞きで舞台に来たため、何も知らない大神が尋ねると、すみれがやれやれと言った口調で答えた。

「以前どこかの誰かさんがひっくり返して汚れた舞台のセットを、千秋楽に向けて綺麗にいたしますの」

「まあまあすみれはん。あれは事故なんやし、そうさくらはんを責めんと。なあ、マリアはん」

以前の喧嘩で懲りた紅蘭が、すみれを宥めつつマリアに同意を求め  
る。

しかし、マリアの返事は予想に反してワントンポ遅いものだった。

「えっ？……ええ、そうね」

「……………マリア、何かあったの？」

心配そうに尋ねるアイリス。

しかし、マリアはあくまで平静を装った。

「ありがとう。私は大丈夫よ」

「よっしゃ、ほんなら始めよか」

マリアが不自然なのは明らかだが、話したくないのなら無理に聞く  
事もない。

大神達はそう判断し、掃除を開始した。

ところが、その最中に思わぬ事態が発生した。

先日修理したはずのストッパーがまたしても壊れ、背景の書き割りが  
倒れて来たのだ。

「あ、危ない！！」

最初に気づいた大神が急いで支えるが、一人で止められるはずがな  
い。

「（踏ん張れ、踏ん張るんだ大神一郎！）」「大神さん頑張っ  
て！今上からロープで引っ張ります」

「た、頼むぞさくらくん……………！」

本当なら今にも倒れそうなのだが、何とか耐えようとする大神。しかし、さくらが引つ張り上げる前にストッパーが完全に外れてしまった。

「アカン、大神はん！」

「うわあああつ！」

大神を巻き込んで倒れる書き割り。大神の脳裏に一瞬走馬灯が浮かぶ。

……………が、

「これくらい片手で充分だろ？だらしねえな」

「……………へ？」

聞き慣れない声に目を開くと、一人の女性が書き割りを言葉通り片手で軽く支えていた。

背丈は大神より高く、鉢巻きと赤い髪、日焼けした肌が特徴的な、健康的な魅力を持つ女性だった。

「ほれ、早くロープで上げてやりな」

「は、はい……………」

いつの間にか現れた謎の女性に驚きつつ、さくらはロープで書き割りを引つ張り上げる。

「全く、何を騒いでるかと思えば！」

「だ、誰や知り合いかいな？」

紅蘭も初対面らしく目を丸くしている。

すると、アイリスとすみれは対称的に笑顔で女性に近づいた。

「カンナ、お土産は？」

「済まねえな、アイリス。荷物がみんな流されちまってな」

「カンナ、無事でしたのね！」

「いやあ、沖縄からの帰りの船が沈没してね。泳いで来たんだよ」

よくよく考えれば危険極まりない話しを笑顔で語る女性。

すると、マリアも笑顔で応えた。

「相変わらずね、貴女って人は」

すると、カンナと呼ばれた女性は舞台にいる人間をざっと見渡した。

「どうやら新入りが……、四人か。賑やかになったもんだ」

そして、カンナは大神を見て尋ねた。

「……………で、さつきからギャーギャー喚いてたのがアンタかい？名前前は？」

「大神一郎だ。海軍少尉だが、今は花組の隊長をしている」

先程の彼女の言葉から、カンナは間違いなく花組の元メンバー。大神は包み隠す事なく答えた。

「あたいは桐島カンナ。これでも、帝国華撃団花組最古参の一人なんだぜ」

カンナがそう言った時、舞台袖から米田が現れた。

「カンナ、よく帰ってきた」

「支配人！彼女は……………？」

「桐島カンナ、沖縄桐島流空手の二十八代目継承者だ」

すると多少怖ず怖ずとだが、さくらが声をかけた。

「あの、新入りの真宮寺さくらです」

「はじめまして。御剣 秀介と申します」

「ウチ、李紅蘭います。よろしゅうな」

「おう！これからよろしくな！」

胸を張って笑顔で答えるカンナは、豪快そのものだった。

「……………って訳で、何とかアジトをぶつつぶしたんだが、凱旋に乗った船に残党がいてよ。そいつが自爆して船沈めやがった訳よ」

舞台の掃除を終え、大神達はサロンでカンナの一大冒険談を聞いていた。

カンナは亡くなった父の仇討ちに沖縄へ赴き、見事仇討ちを成し遂げたのである。

「まあ、カンナさんは殺しても死なない人でしたから、当たり前ですわね」

「でも、一番心配してたのすみれだよね」

優雅に紅茶を飲むすみれだったが、アイリスの一言で紅茶を吹き出した。

「ブーーーーッ！！何をおっしゃるの、このガキヤ……………！！」

「……………そういえば、マリアさんの姿を見ませんか？」

すみれがアイリスを追いかけ回す中、秀介が不意に尋ねた。

「せやな。何や浮かない顔で部屋に戻つとるけど」

すると、カンナは残念そうな表情で言った。

「何だよ、つれねえな。……………、そーいや、隊長は海軍出身なんだよな？」

「あ、ああ。そうだけど？」

不意に尋ねられて驚きつつ頷くと、カンナは獲物を見つけたような表情で言った。

「なら、体術はできるのかい？」

「まあ、それなりに」

一応大神が得意とするのは拳ではなく剣だが、多少の心得はある。しかし、カンナの問いに頷いたのが、大神の失敗だった。

「よし、決まりだ！隊長、ちょっとあたいに付き合ってくれよ！」

言うや、カンナは大神の腕を掴んで立ち上がった。

「え？付き合っつて何処へ？」

「久しぶりで体が鈍ってた。ちょいと組み手に付き合ってもらおうぜ？」

「く、組み手って……………！」

ようやく状況を理解した大神は周囲に助けを求めるが、応えられる

者はいなかった。

「少尉、お大事に……………」

すみれが呟く中、大神はカンナに引きずられて地下に消えた。

「……………ほら、出来たぜ。カンナ特製の晩飯だ！」

そう言つて、大神の前に置かれたのは、ドデカイ丼だった。淵いっぱいにご飯が敷き詰められ、上にはミミガーとゴーヤの唐辛子炒めがこれでもかと言わんばかりに乗っている。あれから地下に連行された大神は、5時間に及ぶ組み手に付き合わされ、カンナに晩飯を作ってもらったのだ。

「いただきます！……………、うん、こりゃ旨い！」

「へへ、そうかい。ありがとよ」

照れたように頬を掻くカンナ。

すると、大神はミミガー丼を頬張りつつ尋ねた。

「そういえば、カンナがここに来たきつかけは何だい？」



「きっかけ？ そうだな……………」

そう言つてカンナはしばらく黙つていたが、やがて話し始めた。

「あたいは、小さい頃から空手一筋でさ。親父みたく空手を継いで子孫に残す。それが人生つて思つてた。そんなあたいにほかの世界を見せてくれたのが、あやめさんだった」

「あやめさんが……………」

「ああ。あの頃のあたいは考えもしなかった、舞台女優。空手一筋のあたいが、大勢の人を笑わせて、幸せにできる……………。嬉しかったよ」

天井を見つめながら、思い出を懐かしむカンナ。

それを見ていた大神も、自然に笑顔になった。

「久しぶりの帝劇はどうだい？」

「そりゃ、断然賑やかだな。新入りが四人も入ったんだから。……………、なあ隊長」

ふと、カンナが真顔に戻った。

「さくらと紅蘭、それに秀介……………。どいつも素直でいい奴だ。あたいは気に入ったよ。それから……………」

「？」

「隊長、アンタの事も気に入った」

「……………ありがとう、カンナ」

やや恥ずかしそうな表情のカンナだったが、大神が笑顔で返すと、元の笑顔に戻った。

「隊長、これからよろしくな。桐島カンナ、隊長の部下としてお役に立って見せるぜ!!」

食堂でカンナと別れた大神は、カンナとの組み手で疲れた事もあり、部屋で休む事にした。

「カンナ……………、頼りがいがありそうだな」

腕っ節が強く、女性らしからぬ力強さで、ほかの隊員達より一歩抜きん出ているカンナ。

花組の心強い助っ人として、期待できるだろう。

そんな事を考えていた大神は、無意識に廊下で何かを蹴飛ばした。

「ん……………?」

気づいて拾って見ると、それは金色のロケットだった。

「少尉、ここで何をしているのですか？」

「……………マリアか」

背後からの声に振り向くと、そこにはマリアの姿があった。

昼間と同じくどこかそわそわとしている。

しかし、大神の手に握られているものを見るや、マリアの表情は一変した。

「少尉！そのロケット……………！」

「ん？これ、マリアのかい？」

言いつつ渡すと、余程大切なものなのか、マリアは両手で大事そうに包み込んだ。

「お守りかい？」

「お守り……………。そうかも知れません」

意味深な言葉を返すと、マリアは部屋に戻って行った。

それは一発の銃声から始まった。

一斉に駆け出す仲間達。

途端に聞こえる銃撃の音。

一人、また一人と倒れ伏す兵士。  
真っ白な雪原は、瞬く間に血の色に染まった。  
その戦場の中に、一人の少女がいた。

「ハア……………ハア……………」

まだあどけなさの残る、戦場には明らかに不釣り合いな少女。  
ライフルを杖代わりに、ただ戦いの様子を見守っていた。  
だが、一発の銃声でその表情は一変した。

「……………、隊長！」

少女は叫んだ。

倒れる一人の青年。

その顔が雪に沈んだ時、少女の時は止まった。

「隊長……………!!」

「……………ハッ！」

気づくと、マリアは自室のベッドにいた。

「……………夢……………?」

あの銃声も、血に塗れた雪原も、凶弾に倒れた隊長も、全ては夢。荒い呼吸の中、マリアがそう認識するまで、30秒が経っていた。マリアはふと、胸に下げたロケットを開く。そこには夢に出て来たあの青年が、にこやかな表情を浮かべる写真が入っていた。

「隊長……………」

普段のマリアからは考えられないか細い声で呟く。その時、帝劇内にけたたましい警報が鳴り響いた。

「敵襲!?!」

一瞬驚きの表情を見せるも、マリアはすぐに普段の表情に戻った。

「……………嫌な事は重なるものね」

「全員揃ったか?」

作戦司令室に到着した米田が大神に尋ねる。

「いえ、マリアがまだです」

「マリアがか？珍しいな……………」

大声こそ出さなかったが、大神の返事に米田は驚きを見せた。すると、マリアがようやく司令室に現れた。

「遅くなって申し訳ありません」

「大丈夫だよ、マリア。それで副司令、敵は？」

大神の言葉に頷き、あやめは説明を開始した。

「今回敵が現れたのは築地。港の倉庫だから人的被害はないけれど、早めに鎮圧してちょうだい」

「なるほどな。隊長、あたかも一緒に戦うぜ。遠慮なく使ってくれよな」

そう言って、カンナが指を鳴らす。すると、今度は米田が口を開いた。

「カンナだけじゃねえ。今回から秀介も、光武とは別の兵器で参戦する……………」

米田がモニターを操作すると、一機の戦闘機が写った。

銀と赤でコーティングされた小型の戦闘機。

その姿に、大神は驚きを見せた。

「こ、これは……………!？」

「こいつは紅蘭と秀介の協力で完成させた光武と対を成す戦闘機、『流星』だ。靈力砲で脇侍と戦う他、前回及び前々回の戦いに現れた怪獣に対抗するためのものだ」

「流星……………。これが僕の相棒ですか！」

満足そうな笑みを浮かべ、秀介は言った。

「隊長、出撃命令を！」

「よし、帝国華撃団花組、出撃！カナ、秀介、君達の力を見せてくれ!！」

「おう!！」

「承知しました!！」

無数の倉庫と港で、外国船の出入りも多い帝都の海の玄関、築地。黒之巢会死天王、蒼き刹那の姿はそこにあった。

「オンキリキリバサラウンバッタ、オンキリキリバサラウンバッタ、

オンキリキリバサウンバツタ……」

芝公園で天海が唱えていたものと同じ呪文を口にする刹那。すると、やはり上空から巨大なドリルが現れ、地面へと沈んで行った。

「そこまでだ、黒之巢会!!」

鋭い声とともに、翔鯨丸から7つの機体が颯爽と飛び降りた。

「帝国華撃団、参上!」

「ふん、現れおつたな? 帝都の犬共!」

刹那は爪をギリリと光らせた。

「だが、遅かったな。既にこの地の封印は、この蒼き刹那が解き放つたわ!」

一人意気込む刹那をよそに、大神は隊員達に指示を出した。

「よし、魔装機兵を全滅させつつ、奴を追い詰めるぞ!」

「了解!」

戦いは終始安定して進んだ。



中でも活躍したのがカンナと秀介の二人で、秀介が脇侍の大半を上空から狙い撃ちにし、カンナが橋を下ろして短縮ルートを作るなど、初戦ながら大健闘した。そのおかげで、花組は10分足らずと言う異例の早さで脇侍を全滅させた。

「追い詰めたぞ！刹那とやら！」

先頭に立つ大神が叫ぶ。

しかし、刹那は圧倒的不利なこの状況のなか、笑って見せた。

「フハハハハ！それで追い詰めたつもりか！？」

その瞬間、刹那の前に魔法陣が描かれ、中から巨大な緑色の魔装機兵が現れた。

「この刹那に挑もうなど、片腹痛い！」

言っつや、刹那の魔装機兵は鋭利な爪で目の前にあるドラム缶を殴り飛ばした。

その時、さくらが叫んだ。

「大神さん！倉庫から子供が！」

「何っ！？」

恐らく混乱の中、この倉庫に逃げ込んだのだろう。

一人の少年が、倉庫の入口で腰を抜かしていた。

しかし大神に見えたのは、その子供を血祭りにあげんと爪を高々と振り上げる刹那の姿だった。

「やめろおっ!!」

次の瞬間、大神はほぼ無意識に飛び込み、刹那の攻撃から子供を守っていた。

その間に、子供もその場を離れる。

しかし、それは刹那にとっても都合だった。

「馬鹿め、左がから空きだ！」

「し、しまっ……………!!」

大神が気づいて身構えるより早く、刹那の一撃が大神機を襲った。

「ぐあああ……………っ!!」

大神機は勢い余って右の電柱に激突し、そのまま動かなくなった。

「大神さん!!」

「ふん!戦いの最中にほかに気を取られるとは!!」

大神機に駆け寄る花組を尻目に、刹那は悠々と戦線離脱した。

「うっ………、ここは………?」

眩しい天井の明かりに、大神は目を開いた。

円形のライトに薄暗い部屋。

少なくとも、いつも自分が暮らしている部屋とは掛け離れた世界だった。

「………気がついたかね?」

しわがれた声とともに現れた人物に、大神は絶句しそうになった。

「て、天海!?!」

「帝都は我が黒之巢会の手に堕ちた。お前は我々の捕虜となったのだ」

「なっ………!」

信じられない言葉に、大神は今度こそ声を失った。

自分が意識を取り戻す前に、帝都は魔の手中だったと言っただから無理はない。

しかし、天海は大神にとって更に衝撃的な言葉を口にした。

「ついでには大神一郎。お前にはこれから黒之巢会の尖兵にするための改造手術を行う」

「何っ!?!」

「手術に当たり、私の優秀な助手を紹介しよう」

次の瞬間、大神はこの世の終わりが来たような衝撃を受けた。  
なぜなら……………」

「ヤッホー大神はん。何やええザマやないか」

「こ……………」、紅蘭！！」

手術台に横たわる自分を覗き込んでいたのは、紛れもなく紅蘭だった。

「いや〜嬉しいわ。ウチ、いっぺん人体改造やってみたかったんや」

「紅蘭、君は天海に操られているんだ！目を覚ませ！」

「大丈夫や。ウチ、生物の改造に失敗した事はないんやからな」

眼鏡の奥の瞳は科学に狂ったマッドサイエンティストそのもの。  
もはや説得も不可能だった。  
そして、悪魔の宣告が下された。

「さあ紅蘭、大神一郎の改造手術を始めろ」

「よっしゃ任しとき。さあ大神はん、痛いのは最初だけやからな……………」

言つや、紅蘭が無数の機械を取り出して大神に迫る。

「う……………」、うわああああ……………」！！」

「……………ハッ！」

気がつくと、大神は自分の部屋にいた。  
周りには、心配そうに見つめる隊員達の姿がある。

「大神さん、大丈夫ですか？」

さくらの声に、大神はようやく先程の出来事が夢だと認識した。

「……………そうだ、あの子はどうなったんだ？」

刹那の攻撃から庇ったあの少年。  
正義感の強い大神は、自分よりその子の安否が気になった。

「ご安心下さい。あの子は怪我一つなく助かりました」

「……………そうか、よかった」

秀介の言葉に安堵の表情を浮かべる大神。  
すると、ほかの隊員達も安心した様子で声をかけた。

「大神さんも無事で何よりです。医療ポッドで3日も寝たきりだったから、心配したんですよ？」

「3日?そんなに意識がなかったのか」

「はい。でも大神さんのおかげで子供が助かってよかったです」

「私も、少尉の事を見直しましたわ」

「覚悟があっても、中々できる事じゃないぜ」

「ホンマや、大神はんかつこよかったで」

「お兄ちゃん、偉い!」

隊員達の称賛に笑顔を返しつつ、大神はマリアの姿がない事に気づいた。

「あれ、マリアは……………?」

「そういえば、いませんわね」

辺りを見ても、マリアの姿だけはない。

そんなに冷たい人ではないのだがと不思議に思いつつも、秀介が言った。

「今は身体を休めて下さい。次こそ刹那を倒すために」

「……………ああ、そうだな」

すると、紅蘭が待ってましたと言わんばかりに何かを取り出した。

「そうや大神はん、ウチがさつきこしらえた漢方薬や。騙された思  
うて飲んでみて」

「あ、ああ……………」

さっきの夢で改造されかけた事もあり、僅かに敬遠する大神。  
しかし、紅蘭の気持ちを無駄にはしたくないので、大神は覚悟を決  
めて漢方薬を飲み込んだ。

「……………に、苦い……………!!」

「紅蘭……………、本当に大丈夫ですか？」

「平気や平気。あっちゅう間に傷が治るで。ただ……………」

紅蘭が答える間に、大神は急な倦怠感に襲われた。

「副作用でめっちゃ眠気が来るんやけどな」

紅蘭が言い終わらぬ内に、大神の意識は消えた。

「……………もう夜か……………」

多少まどろみつつ、大神が目を覚ました。

「あ、大神はん。身体の具合はどうかいな？」

見ると、そこには紅蘭の姿があった。

自分が作った薬に自信はあったが、やはり大神の事が不安なのだ。

「大丈夫、傷もよくなったよ。紅蘭の漢方薬のおかげだね」

「ホンマに！？それならよかったわ。効くかどうか分からなかったからな」

その発言に、大神の顔は一瞬固まった。

「こ、紅蘭、俺はモルモットじゃないぞ！」

「アハハ、冗談や冗談！そんな危険なもん飲まず訳ないやん」

ひとしきり笑って、紅蘭は大神に尋ねた。

「大神はん、気分はどうかいな？今の様子なら大丈夫そうやけど……」

「……………紅蘭の夢を見たよ」

「ウチの？一体どんな夢なん？」

珍しく顔を紅く染めて尋ねる紅蘭。

何かロマンチックな夢を期待しているのだろうか。



「紅蘭が俺に改造手術をする夢だよ」

「何や、ウチそんな役でしかででけへんの？」

少しがっかりした表情で紅蘭は肩を落とした。

「いや、だって紅蘭いつも何かの発明をしてるから………」

「まあ確かに。せやけど大神はん、ウチは人体改造やらヤバい事はせえへん」

いつになく真面目な顔で、紅蘭は続けた。

「ウチが機械を作るんは、機械に命を吹き込むためや。一個一個やとうごかへんけど、命を吹き込むと、人の役にたつてくれる。生き物はそんな事せんでも命があるんやから、改造なんて余計な事はしたらアカンねん」

それは、紅蘭だからこそ言える理論だった。

大神は、紅蘭の言葉に我を忘れて聴き入っていた。

機械を通じて人の役に立ちたい。

そんな紅蘭の思いが、ひしひしと感じとれた。

部屋に戻った秀介は、もはや日課になっているさくらの稽古に付き合っていた。

今日のシーンは、王子がシンデレラと踊った後、別れる場面。秀介が担当するのは、当然ながら王子様だ。

「おお、何と美しい方。どうか私と一緒に踊っていただけませんか？」

「はい王子様、私でよければ喜んで。」

「美しい方……………、心の全てが貴女に奪われてしまっただけのようだ。」

「王子様……………。……………ハッ、十二時！」

「いかなされました？」

「ごめんなさい、私もう行かなきゃ……………。」

「……………！お待ち下さい！」

「さようなら王子様。幸せな夢をありがとう……………。」

「凄い演技でしたね、秀介さん」

さくらがやや興奮気味に言った。

これまで台本を読んで台詞を声に出すだけだった秀介が、初めて動きを含めた稽古に参加したのだ。

「まさか躊躇いなくあたしの手を握って来るなんて……………。普通は

みんな恥ずかしがってできないんですよ？」

「そうでしょうか？僕も、ほとんど感覚で動いたようなものですから……………」

「本当ですか！？だったら尚の事凄いですよ。秀介さん役者の才能あるんじゃないですか？」

「そ、そうですか……………」

さくらに褒めて貰えた事もあって、思わず顔を赤くする秀介。すると、さくらはふとため息をついた。

「それにしても、シンデレラはいいですね」

「何故、そう思っんです？」

秀介が聞き返すと、さくらは俯いたまま応えた。

「だって、王子様のような素敵な人と、これからずっと一緒にいられるんですから」

「……………」

「あたし、羨ましいです。この王子様のような素敵な人が側にいてくれたら……………」

そこまで言っつて、さくらは顔を上げておどけて見せた。

「なぐんで、あたしっいたら何言っつて……………」

「…………駄目ですか？」

しかし、秀介の言葉がそれを遮った。

「え…………？」

「僕じゃ…………駄目ですか？」

「秀介…………さん？」

一瞬、さくらは秀介の真剣な眼差しに動けなくなった。

最初はほんの悪戯心だった。秀介が自分をどう思っているか興味がわき、試しに言ってみただ。

当然真面目な##NAME1##の事、花組のみんながいると思うと思っていた。

だが、秀介は予想に反して真剣にさくらを気遣かって応えた。

「(ど、どうしよう…………秀介さんの事なんて、今まで考えた事なかったし…………)。」

秀介は瞬きすらせず、さくらを見つめたままだ。

「あ、あの…………」

「さくらさん…………」

「その…………ごめんなさい、あたし…………」

突然の答えに戸惑い、試した事を謝るさくら。

すると、#秀介の目が僅かに見開かれた。

「……………そうですか……………」 「あ、あの、あたし……………」

「いいんです、今の言葉は忘れて下さい」

平静を装っているつもりだろうが、早口になっている辺りから動揺が見て取れる。

「もう遅いですから、今日の稽古はこれまでにしましょう」

「秀介さん、待って……………！」

「……………失礼します」

そう言い残し、秀介はやや乱暴に扉を閉めた。

「秀介さん……………」

部屋に一人残されたさくらは、そっと秀介の名を呟いた。そして、今になって自分のした事に後悔した。馬鹿な事をした。

秀介ならこのくらい、すぐに見破ってしまうのに。

秀介を傷つけた、秀介を怒らせた……………

そう思うと、胸の奥がチクチクと痛んだ。

「……………ごめんなさい」

誰もいない空間に、さくらのか細い声が響いた。だが秀介の本心を、さくらはまだ知らない。

「……………ん……………?」

紅蘭が部屋に戻ってから再びまどろんでいた大神は、部屋の物音に気づいて目を覚ました。

「あ、少尉。起こしてしまいましたか?」

そこにいたのは、マリアだった。

「マリア……………、俺の部屋に用かい?」

「いえ、たまたま近くを通り掛かったものですから……………」

「そうか。済まない、みんなには心配をかけて」

いつになく歯切れの悪い返事を不思議に思いつつ、大神が言った。  
すると、マリアはキツと大神を睨んだ。

「何故、あんな事を?」

「え?」

「何故あの時、飛び出したのかとお聞きしているんです!!」

大神が聞き返すと、マリアは怒鳴り返した。

「それは、子供を守るためだ」

「少尉、これだけは言わせていただきます!!」

珍しく感情的なマリアに驚きつつも答える大神。

しかし、マリアは大神の答えに聞く耳を持たなかった。

「今回の少尉の負傷は、少尉自身の責任です。ましてやあの戦闘で、敵をみすみす逃がしてしまった。その事が後により多くの市民を危険に晒す事がわかりませんか!？」

「それは違う!!」

マリアの言葉に、大神は怪我を忘れて怒鳴り返した。

「俺達花組の使命は帝都の平和を守る事にあるはずだ。その帝都の市民、子供一人助けられないで何が花組だ!何が帝国華撃団だ!!」

「少尉!わからないんですか!?!そんな短絡的思考で、子供一人のために命を懸けるなどナンセンスです!」

「マリア、口が過ぎるぞ!それなら君は、あの時子供を見捨てるべきだったと言っのか!」

「では仮に子供を助けて、少尉が命を落としたとしましょう。それで貴方は隊長としての責任を果たしたと言えますか?」

マリアの理論が的外れとは決して言えない。  
今の考えも正しいだろう。

しかし、そのためにほかの命を犠牲にしているはずがない。  
大神はそれが許せなかった。

「マリア、君の考えは軍人として正しいかもしれない。だが、市民の命を踏み台にして掴む勝利を、俺は絶対に認めない！」

すると、マリアは一瞬悲しげな表情で呟いた。

「……………少尉が死んだら、あの時と同じなんです……………」

「……………？」

マリアの言うあの時を知らない大神は疑問符を浮かべる。  
すると、マリアは元の表情に戻った。

「……………よく分かりました。そのような短絡的思考の人間に、部隊をまとめる力はありません。大神少尉、

あなたは隊長失格です！！」

「……………」

「言いたかった事は以上です。それでは失礼します！」

そう吐き捨てると、マリアは足早に部屋を後にした。

「……………俺は、間違っていたのか……………？」



大神は一人自問したが、すぐに頭を振った。

「いや、もしあの時子供を見捨てていたら、俺は一生後悔し続けただろう」

たとえマリアの言う通りにして子供を見捨てたとしても、それで子供が命を落としたら、帝都を守ったとは言えない。

「ともかく、マリアともう一度話をしよう」

取り逃がした刹那がいつ襲って来るかわからない。戦闘前に隊員同士のいざござは解消しておきたかった。

「マリア、待ってくれ！俺の話を聞いてくれ！」

「構わないで下さい！」

ロビーでマリアを見つけた大神は、話を聞いて貰おうと声をかけた。しかし、マリアはそれを拒んで聞こうとしない。大神がマリアを追いかけて、玄関を出た時だった。

「フハハハハハハハ！」

耳障りな笑い声が聞こえ、二人は空を見上げる。そこには、空に写った刹那の姿があった。

「帝国華撃団マリア」タチバナ。あるいは、『クワツサリー』と呼ぶべきかな？」刹那の口から出た『クワツサリー』と言う言葉に、僅かだがマリアは反応した。

「貴様の正体、この蒼き刹那が見破ったり。平和を守る使者とは仮の姿。その正体は醜い鬼畜よ！素性をばらされたくなければ、一人で来るがいい！」

言いたい放題そう言って、刹那は消えた。

よくはわからないが、明らかにマリアに対する挑発だった。

二人はしばらく黙っていたが、ややあつて大神が声をかけた。

「マリア…、行くなら俺もついて行くぞ？」

「大丈夫です。少尉は私があんな挑発に乗ると思いますか？」

そう言って、マリアは帝劇内に戻って行った。

「マリア……………」

マリア自身は大丈夫と言っていたが、大神にはあの『クワツサリー』と言う言葉がどうも気になった。

加えてマリアは、いつになく冷静さを失っている。

大神の脳裏に一抹の不安が過ぎる。

そして、その不安は部屋に戻った時に現実となった。

「隊長！隊長、大変だ！」

「カナナ！一体どうしたんだ！？」

乱暴にノックされた扉を開くと、そこには戦闘服姿のカナナが焦った様子で立っていた。

「大変なんだ隊長！マリアが……、マリアの奴が光武で出て行っちゃった！！！」

「何だつて！？本当か！」

「ああ、詳しい説明は後だ！作戦司令室に急ごうぜ！」

「分かった！」

あの時止めていればと後悔しつつ、大神はカナナの背中を追いかけた。

「……………これで全員か。」

既に作戦司令室には残りの隊員が勢揃いしていた。

「マリアが光武で出たのは！？？」

逸る気持ちを抑えて大神が尋ねると、紅蘭が答えた。

「ついさっきや。ウチが光武の整備しとる時に、止めるのもきかんと……………」

「司令、マリアは今何処に？」

「既に発見している。場所は前回と同じ築地だ」

その言葉に、大神は自分の予想が当たった事を察した。

マリアは、やはり刹那の要求通りに一人で築地に向かったのだ。すると、大神の表情から何かを読み取ったあやめが尋ねた。

「大神君、何か知ってるの？」

「はい、先程刹那がマリアに『クワツサリー』と挑発していた所に遭遇しまして……………」

「クワツサリー……………って何？」

やはり初耳らしく、アイリスをはじめ隊員達は首を傾げる。すると、あやめが話し始めた。

「言っておく必要がありそうね。話はロシア革命に遡るわ」

「ロシアと言うと、マリアさんの出身ですわね？」

「ええ、その革命の中に一人の少女がいたの。コードネームはクワツサリー」

「クワツサリーって、まさか……………!」

「そう、マリアの事よ」

大神の言葉に頷き、あやめは続けた。

「彼女は当時、兄同然に親しかつた部隊長がいたのだけど、彼は革命の戦いで命を落としてしまったの。味方の援護が遅れて」

「……………それで、マリアさんは戦闘の判断ミスに厳しくなっただんですね？」

秀介の言葉が、全てを語っていた。

「マリアはいつもそうだった。あたい達には、絶対に自分の弱みを見せなかった」

「知らなかったわ、マリアはんにそんなヘビーな過去があるやなんて……………」

紅蘭が力無く呟く。

すると、おもむろにカンナが立ち上がった。

「全く、マリアの奴格好付けすぎだぜ」

そして、その言葉に隊員達は次々と立ち上がる。

「私、人の過去には干渉しない主義ですけど、聞いたからには放っておけませんわ！」

「行きましよう、大神さん！」

「マリアさんは嫌がるかも知れませんが……………」

「構う事あらへん。無理にでも連れ帰って来ればええんや！」

「お兄ちゃん、マリアの事お願いね！」

大神もまた立ち上がると、出撃命令を出した。

「よし、帝国華撃団花組、出撃！マリアを助け出すぞ！」

「了解！」

いつのまにか、雨が降り出していた。

まるで、自分の代わりに空が泣いているように……………。  
時折現れる脇侍を打ち倒しつつ、マリアは思った。

脳裏に蘇る凄惨な過去、思い出したくもない忌まわしい過去。  
それを忘れられたのは、偏に仲間がいるからだった。

誰かが側にいる事で、自分が孤独でないと認識できる、ほんの些細な幸せ。

それを奪われるのが、マリアは怖かった。

「黒之巢会、何処に逃げた！」

雨の中、マリアが叫んだ。

敵を威嚇するためではなく、心の奥底に潜む恐怖を掻き消すために。

「刹那、出て来い!!」

しかし、これが失敗だった。

「そんなに怖いか？過去を知られるのが」

刹那の声が聞こえた時だった。

マリアの周囲から、脇侍が現れたのだ。

四方八方を包囲され、マリアは逃げ場を失っていた。

「し、しまった……!!」

光武の銃口が、力無く下ろされた。

港の敵を蹴散らした花組が目にしたのは、ハッチが開かれて無人となったマリアの黒い光武だった。

「大神さん、あれは!？」

さくらが光武の真下にある何かに気づいた。

大神が拾ってみると、それはマリアのロケットだった。

「マリア……………」

刹那に捕らえられたか、もしくは……………。

大神はロケットから脳裏に過ぎった暗い予想を打ち消した。

マリアは花組の中でも戦闘のプロだ。

こういう時の対処はいくらでも知っている。

そう考えてマリアを探す指示を出そうと立ち上がった時、目の前に一つの影が現れた。

「……………来たか」

闇に溶け込む黒装束の忍。

その姿に、大神は見覚えがあった。

「お前は、確か上野公園の……………！」

「蝸だ。思ったより早かったな」

花組を前にして余裕の態度を見せる蝸。

すると、カンナが張り合うように進み出た。

「てめえも奴らの仲間か！マリアをどうした！？」

「先程刹那が捕らえたばかりだ。この近くにいるはずだが、それ以上は知らん。刹那の伝言だが隊長が一人で来いと的事だ」

そこまで言うと、蝸は煙りのように消えてしまった。



「なんて卑怯な……………、黒之巢会、気に入らないぜ！」

カナナがそう言うと、一隻のモーターボートが花組の前に現れた。

「これに乗れ……………、という事かしら？」

おもむろにすみれが言った。

たしかに大きさから考えて、ちょうど光武一機しか乗れそうにない。

「大神さん、これは罠です！」

「そうだぜ！危険だ」

「連れていってくれるかも怪しいですね」

口々に言う隊員達。

大神はしばし考えたのち、決断した。

「……………、自分の仲間も助けられなくて、何が隊長だ！」

言うや、大神はボートに飛び乗った。

「し、少尉！？」

「いいか、もしマリアだけでも帰って来られたなら、彼女を隊長に花組を再編しろ！」

「大神さん！」

それは、大神の決死とも言える覚悟だった。

自分の命を犠牲にしてもマリアを助ける。  
大神はそう誓ったのである。

「無茶や大神はん!」

いち早く気づいた紅蘭が叫ぶが、ボートは大神を乗せて行ってしまった。

「……………来たか、大神一郎」

「少尉!」

築地の奥に建設された廃工場。  
その地下にある刹那のアジトに、マリアはいた。

「マリア、大丈夫か!??」

大神が声をかけると、マリアより先に刹那が答えた。

「安心しろ。捕らえただけで危害は加えていない」

刹那の言う通り、マリアは張り付けにされて身動きこそとれないが、目立った外傷は見られなかった。

「少尉、どうして来たのですか!??」

ここで大神を待っている間、マリアは刹那の企みを知らされていた。当然、大神が隊員達の静止を振り切ってきたのもである。しかし、大神はマリアに笑顔を返した。

「俺は君の隊長だ。隊員を助けるのは当たり前さ！」

「これは罠です！逃げて！！」

マリアは必死に叫んだ。

刹那の狙いが自分と大神の命である事は知っている。恐らくは狡猾な刹那の事、自分を人質に大神を殺そうとも言うのだろう。

大神もそのくらいは分かっていた。しかし、たとえそうだと分かっているても、隊員を見殺しにしない。それが大神の正義だった。

「たしかに俺が来たのは判断ミスかもしれない。だが、君を見殺しにしての勝利など、これっぽっちも欲しくはない！」

「私なんかのために……、本当に……」

マリアの瞳から、枯れたはずの涙がこぼれ落ちた。

「臭い芝居もそこまでだ。続きは冥土でして貰おう」

刹那の血色の爪が振り上げられた。

「やあっ！……」

そして、大神目掛けて振り下ろされた。

「ぐっつ！！」

「少尉！！」

前回負傷した左の脇腹を切り付けられ、大神はその場に倒れ込む。すると、嘲笑うように刹那の声が飛んだ。

「立て、大神！簡単にくたばられても面白くない」

「ぐああっ！！」

爪がまた踊った。

切られた脇腹からは血が滲んでいる。

「フハハハハ！どうした帝撃の隊長。だらし無いなあ」

「うう……………マ、マリア……………」

倒れた大神の頭を踏み付けにし、刹那が笑った。最早刀を握る事もできない。

「さあ、トドメだ！！」

大神の首を撥ねんと爪を高々と振り上げる刹那。マリアはあらん限りの声で叫んだ。

「少尉……………！！」

その時、上から凄まじい爆音と振動が起こった。

「な、何事だ……!?」

予期せぬ突然の事態に驚く刹那。

すると、天井に穴が空き、上から四機の光武が現れた。

「助けに来たで、二人とも！」

「み、みんな!」「ば、馬鹿な!何故ここが!？」

自分達の居所を捕まれぬよう、様々な用意をしたはず。

それにも関わらず、どうしてここが分かったのか。

それに答えたのは、紅蘭だった。

「残念やったな。こんな時のために、各隊員の制服の襟に発信機がつけてあるんや!」

「くっ……、貴様らごときが何人来ようと、知れた事よ!」

「おうおう、意気がつてくれるじゃねえの!さあて……、」

指を鳴らしながら、カンナがドスの効いた声で刹那を睨みつけた。

「マリアをいたぶってくれた落日前、たっぷりとつけさせて貰おうか!」

「少尉、ここは私達に任せて!」

「マリアはんの光武も使えるよって、二人とも、早う合流しいや!」

「さあ、早く！」

刹那との間に割って入り、すみれ達が叫ぶ。

「……………、バカね、あなたたち」

「それでもいいじゃないか。さあマリア、次は俺達の番だ！」

「……………はい！！」

笑顔で答えると、マリアは大神の背中を追いかけた。

「隊長、マリアさん、御無事で何よりです！」

外で待っていた秀介が、二人に声をかけた。

「秀介、君が廃工場を砲撃してくれたのか」

「はい。おかげで間に合っただけでしょう？」

「ええ、助かったわ」

軽口を叩きつつ光武に乗り込む二人。

すると、そこに刹那の魔装機兵が現れた。

「こうなれば、貴様ら全員この『蒼角』で始末してくれるわ!!」

緑色の機体から刹那の叫び声が聞こえる。  
すると、刹那のさらに背後から声が聞こえた。

「……………随分と見苦しい事だな、刹那」

「くっ、蝸か。何の用だ？」

「冷たい奴だ。せつかく援軍を呼んでやったと言っのに」

「え、援軍だと……………？」

刹那がそう言った時、突然目の前の海が盛り上がった。

「なっ……………!?!」

「あ、あれは一体……………!?!」

刹那だけではなく、その場にいる花組も驚きの表情を見せる。  
やがて海の中から現れたのは、吸盤に手足がついた巨大なタコの怪  
獣だった。

「な、なんだあれは!!」

「解らぬか？貴様の代わりに花組を始末してやるのだ」

「しかし、これではこちらまで……………!!」

「ほう、作戦を失敗して尚生き残ると？滑稽な事だ」

それはつまり、刹那への死刑宣告であった。

「そういう事だ。精々足掻くがいい」

「ま、待て、蝸……………！」

刹那の声も虚しく、蝸は消えてしまった。

刹那はしばらく呆然としていたが、やがて狂ったように叫んだ。

「おのれえ……………！こうなれば、貴様らを道連れに死んでくれるわ  
！！」

向かって来る蒼角に身構えつつ、大神は指示を出した。

「行くぞ！巨大魔装機兵を撃破する！」

「了解！」

大神達が戦う中、秀介は一人、米田に言われた操作を行っていた。

「このスイッチを押して……………、よし！」

操縦桿から手を離し、自動操縦を確認する。



米田が考えたアイデア、それはこの自動操縦機能だった。

秀介が変身しても、流星そのものは飛行しているため、正体がバレにくいのだ。

怪獣に立ち向かうべく、秀介はブレスレットを掲げて叫んだ。

「ジャーーーーーーックー!!」

「シュワッ!!」

ジャックは変身するや否や、怪獣に強烈な飛び蹴りをかました。

「コアーツ!!」

怪獣は大きく後ろに飛び、大きな波を立たせる。

「あれは、ウルトラマン!!」

最初に気づいた大神が叫んだ。

すると、刹那を含め、全員がその姿に釘付けになる。

「ここに来て光の巨人だと!馬鹿な!!」

又丹の言っていた光の巨人……。

まさかこの最悪のタイミングで現れるとは……。

刹那は自分の計画が、音を立てて崩れるのを感じた。そこに隙が生まれたのを、カンナは見逃さなかった。

「今だっ、一百林稗!!」

ナツクルによる強烈な一撃が、蒼角に炸裂した。

「何っ……………!!」

不意をついた一撃を諸に受け、蒼角は全身の回路にショートを起こし始めた。

「今だ!全機、集中攻撃をかけよ!」

「了解!!」

光武達は一斉に攻撃を仕掛けた。

「へっ!」

一方、ジャックもまた怪獣相手に善戦していた。

「コアー!」

怪獣が口から火炎を吹き出して對抗するが、ジャックは怪獣の頭上を宙返りで飛び越え、背後に回り込んだ。

「シュワッ！」

そのまま尻尾を掴むと、ジャックは怪獣をジャイアントスイングで投げ飛ばした。

「へアアッ！！！」

すかさず両手を十字に組んでスペシウム光線を放つ。すると、怪獣は炎を上げて大爆発した。

「シュワッ！」

ジャックはそれを確認し、空へと飛び立って行った。

そして花組と蒼角の戦いも、終わりを迎えようとしていた。

「これで終わりよ……………、スネグーラチカ！！！」

マリアの光武から放たれた凍てつく一撃が、蒼角の身体に風穴を開けた。

「黒之巢会に……………、栄光あれええええ……………！！！」

その言葉を最後に、蒼角は爆炎に包まれた。

その炎を一瞥し、マリアは凜とした声で言った。

「私は、もう過去を振り返りはしない！なぜなら、こんなに素敵な仲間達がいるのだから！」

そして、マリアはその仲間達を振り返った。

「みんな、本当にありがとう！」

「勝利のポーズ……………、決めっ！！！」

「あ、そうだ。マリア、君のロケットだよ」

ポーズを決めた後、大神はマリアにロケットを手渡した。すると、マリアは驚きとともにそれを受け取った。

「やだ、いつの間に……………隊長」

「ん？」

「中を開けて……………、いませんよね？」

躊躇いがちに尋ねるマリア。

大神は笑って答えた。

「ああ、開けてないよ」

「そうですか……。ありがとうございます」

そう言って、胸の前でロケットを掴むマリア。  
その様子に、花組からはブーイングが飛んだ。

「な、なんですか!? このラブラブチックな雰囲気は!」

「お兄ちゃんは、アイリスの恋人だよ!？」

「せめて、場所を考えてはどうですか」

「ふーん、大神さんって、結構浮気者なんですわね」

「へえー、大神はんも隅に置けんなあ」

「や、止めてくれよみんな!」

顔を赤くして反論する大神。

すると、その状況に微笑みつつ、マリアが言った。

「大神少尉。あなたは私達、帝国華撃団花組の隊長です」

「これからも頑張ろうぜ、みんな!」

「「おー!」」

カンナの言葉に、隊員達は拳を上げて応えた。

その中黒之巢会のアジトでも、拳を上げる者がいた。  
刹那の訃報を聞いた、弟の白銀の羅刹である。

「うおおおつ！！帝国華撃団、よくも兄者を……………！！兄者の仇、  
この白銀の羅刹が取って見せる！！」

隊長として……………（後書き）

《次回予告》

ヤッホー、アイリスです。

明日はアイリスの誕生日！

だ・か・らあゝ、お兄ちゃん、アイリスとデートして！

次回、サクラ大戦！

《浅草珍道中！》

大正さくらにロマンの嵐いゝ！

アイリス、子供じゃないもん

浅草珍道中！（前書き）

ゲームで言う第4話。

君あるがためでも成長してないアイリスに驚いた。

もう15歳なのになあ……………。



浅草珍道中！

「ふう、疲れた……………」

事務局で伝票整理に終わっていた大神は、廊下に出るや、大きく伸びをした。

すると、そこにさくらが通りかかった。

「あ、大神さん。アイリスを見かけませんでしたか？」

「アイリス？いや、見てないけど……………」

昼からずっと伝票整理で事務局に籠っていた大神が知るはずもない。すると、さくらは急に話題を変えた。

「そうですね。ところで大神さん、明日は何か予定はありますか？」

「予定？いや、今のところはヒマだなあ」

そう答えると、さくらは意気込んだ様子でさらに尋ねた。

「そ、それじゃあ明日、あたしと舞台の掃除を手伝ってくれませんか？」

「掃除か……………。分かった、付き合おうよ。二人でやれば、早く終わるしね」

「本当ですか！？ありがとうございます、大神さん」

大神の了承に満面の笑みを浮かべるさくら。  
すると、そこに待ったの聲がかかった。

「お兄ちゃん」

帝劇の妖精の異名を持つ、アイリスである。

「あ、アイリス」

いつになくませた声のアイリスを不思議に思いつつ返事を返す。  
すると、アイリスの口からとんでもない言葉が飛び出した。

「ねえお兄ちゃん、明日はアイリスとデートしようね」

「いいつ!?!」

「デ、デート!?!」

「ねえ、いいでしょ?」

あまりに唐突かつ早過ぎる申し出に驚く二人だったが、ややあって  
大神が申し訳なさそうに言った。

「ごめんな、アイリス。実は、明日はさくらくんの手伝いがあるん  
だ」

すると、さくらは無言で勝ち誇ったように頷いた。

一方、アイリスは口を尖らせて粘った。

「ヤダッ!明日はアイリスの誕生日だもん!デートしてくれなきゃ

「ヤダッ！」

「えっ！明日はアイリスの誕生日なのかい！？」

今度は別の意味で大神は驚いた。

さすがに年に一度の誕生日でデートを断るのは後ろめたい。

誕生日プレゼントとしてなら、と大神はアイリスの申し出を受ける事にした。

「分かったよ。明日はデートだな、アイリス」

「うん！お兄ちゃん、ありがとう！」

溢れんばかりの笑顔を見せるアイリス。

「済まない、さくらくん。そういう事だから……………」

一度約束をしているだけにがっかりさせたと思い、大神はさくらに謝罪を述べた。

すると、さくらは意外にも笑って許してくれた。

「仕方ないですよ。明日はアイリスにとって、特別な日ですもの。そうよね、アイリス」

「うん。さくら、ありがとう」

「でも、いいのかい？一人で掃除は大変だろう？」

「大丈夫ですよ。そのかわり、いつか埋め合わせして下さいね」

そう言つて、さくらはその場を後にした。

「それじゃあお兄ちゃん、明日着て行く服を決めるから、一緒に来て」

「ああ、分かったよ」

アイリスに引つ張られ、大神は衣裳部屋に向かった。

「……………」

秀介は一人、屋根裏部屋の窓から空を見上げてため息をついた。

夜空に浮かぶ満点の星達……………。

その中に一つ、柔らかくて、どこか懐かしい光を放つ星があった。

M78、ウルトラの星。

秀介にとって、帰るべき故郷だ。

「（そつだ……………、今の僕の使命は、この星を守る事。それ以外には、何も……………。）」

心の中で、秀介は自分に言い聞かせるように言った。

自分はこの星を侵略者から守るためにいる。

余計な感情を持って、戦いで心を乱してはならない。

秀介は、そう考えた。

いや、考えるしかなかった。

そうしなければ、今の自分の心を鎮められなかったからだ。

「こんな所でどうしたの、秀介君」

あやめが現れたのは、その時だった。

「星を……………、見ていました」

「星？……………あら、綺麗ね……………」

秀介の隣に立つあやめが、星空を見上げて呟いた。

「あれね、貴方の故郷は」

そう言って、あやめがウルトラの星を指差した。

「懐かしいわ。彼といた頃から、もう八年になるのね……………」

「兄と、ですか？」

秀介が尋ねると、あやめはウルトラの星を眺めたまま頷いた。

「ええ、そうよ。初々しさに溢れて、謙虚な人だったわ。今の貴方のようにね」

「はい。僕の自慢の兄です。地球での功績で、今では宇宙警備隊の隊長です」

「まあ、彼らしいわね。……………でも秀介君。何故彼が地球を守り抜けたか、貴方は分かる？」

唐突な質問に、秀介は意外な表情を浮かべた。

「さあ……………、ただ強いだけではないと思いますが……………」

「そうよ、秀介君。彼は強い訳ではない。……………愛したのよ、この地球に住まう生命の全てを」「愛する……………」

「そうよ。彼は私達を愛し、護ろうとしたわ。それこそ命懸けで」

ゾフィーの強さは、秀介も良く知っていた。

幾多の凶暴な怪獣相手でも一歩も退く事なく、簡単に勝利を掴む、正に無敵の戦士。

それが、ウルトラマンゾフィーだった。

「だから秀介君。貴方も彼のように、この星を愛して欲しいの。それが貴方にマイナスになる事は、決してないわ」

「……………！気づいてらしたんですか！？」

「もちろんよ。貴方って、結構顔に出る性格なもの。驚く所とか、彼にそっくりよ」

そう言って笑うあやめに、秀介は心が全て見透かされたような気がした。

「それに、積極的な女の子は積極的でないと落とせないわよ。頑張りなさい」

「は、はい……………」

あやめの言葉に秀介は、少しだけ心の雲が晴れた気がした。

「……………こ、これは一体……………!？」

翌朝、舞台の上でさくらは棒立ちになっていた。  
舞台の床はホコリ一つなく、袖幕や照明に到るまで、舞台そのものが完璧にされていた。

「い、一体誰が……………?」

休日に早く起きるとしたら、自分を含めて大神とカンナの二人だ。しかし、大神はアイリスとデートだし、カンナは起きてすぐにジョギングに出掛けたのをさくら自身が見かけている。  
ほかのメンバーが早起きしたとしても、すみれがやるとは思えないし、紅蘭は昨日遅くまで光武の整備をしていたので体力的に無理がある。

椿はかすみと由里の三人で出掛けているし、米田やあやめも考えにくい。  
となると……………。

「まさか……………、秀介さん？」

「呼びましたか？」

声が聞こえたのは、隣の大道具部屋だった。  
そこではいつものように秀介が片付けをしていたが、今朝は少し違  
った。

「おはようございます、さくらさん」

努めていつも通りに振る舞う秀介。

しかし、さくらはその違いで全てを理解した。

「秀介さん……………」

「はい？」

気づいていないのか、普通に返事をする秀介。  
本人は至って普通に振る舞っているつもりなのだろうが、さくらに  
はバレていた。

「……………舞台を綺麗にしてくれたの、秀介さんだったんですね」

「……………何の事ですか？」

「いえ、でも……………」

さくらは秀介の頭上を指差して言った。

「あの……………頭に蜘蛛の巣が……………」

「……………はい!？」

慌てて頭を手で払ってみると、ヒラヒラと白い糸のようなものが落



ちた。

「……………」

「……………」

完全に失敗したという表情で沈黙する秀介に、さくらは頭を下げた。

「ありがとうございます、秀介さん。でも、なんであたしに隠そうとしたんですか？」

「いえ、それは貴女が……………」

そこまで口にして、秀介は止めた。

隠そうしたのは、さくらが大神に対し特別な感情を持っている事を、秀介が知っているからだ。

あやめはああ言っていたが、自分がさくらに想いを伝えても、かえってさくらを困惑させてしまう。

そう考えた秀介は、さくらに気づかれないように配慮する事にしたのである。

ただ、さくらを困らせたくないがための考えだった。

「……………」

「秀介さん……………？」

突然黙り込んだ秀介を不思議に思い声をかけるさくら。

しかし、秀介は俯いたまま応えない。

何か理由があるのか。

考えてみても、さくらの頭に納得のいく答えは出て来なかった。

すると、さくらは笑顔で秀介に言った。

「あ、そうだ。もし良かったら、あたしにも大道具部屋の掃除を手伝わせて下さい！」

「えっ？しかし……………」

「構いません。秀介への恩返しです」

そう言って、さくらはモップを手に掃除を始めてしまった。

「……………」

秀介はしばらく立ったままさくらを見ていたが、小さく微笑んで雑巾を握んだ。

言いたくない事は聞かない。

さくらの気遣いに、秀介は胸が暖かくなるのを感じた。

その日の夜、秀介は支配人室の前で聞き耳を立てているすみれ、紅蘭、カンナを見かけた。

「あれ？一体何をされているんですか？」

秀介が尋ねたその時、支配人室から珍しく米田の怒鳴り声が聞こえて来た。

「バカヤロー！大神、お前がついてながらこのザマは一体何だ！」

「あちゃー、大神はんエライ絞られとるな」

「な、何があつたんですか？」

秀介が尋ねると、カンナがそつと耳打ちした。

「実はアイリスがデート先の浅草で、活動写真館を一つぶっ壊しちゃったんだ」

「え……………？アイリスがですか？」

「お二人ともお静かになつて。聞こえませんわ」

「一歩間違えれば、大惨事になっていた所よ？よく考えなさい！」

「ふんっ！アイリス悪くないもん」

ジャンポールを抱えたまま、アイリスはそっぽを向いた。

「貴女の力はむやみに使うと、大変な事になるのよ」

「まあマリアもそうキツくならねえで……………」

「そうは行きません！アイリスにはそれなりの処分を下すべきです  
！」

アイリスに睨んだまま、マリアが厳しい声で言う。  
すると、大神がアイリスを庇うように言った。

「待ってくれマリア。今回の事態は俺の責任なんだ」

「隊長！アイリスを甘やかすのもいい加減にして下さい！」

「しかし、アイリスはまだ子供じゃないか！」

大神の子供と言う言葉に、アイリスは肩を震わせた。

「アイリス、子供じゃないもん！」

そう叫ぶと、アイリスは支配人室を飛び出した。

「アイリスッ！……………つて君達！」

続いて飛び出した大神は、立ち聞きしていた四人と鉢合わせした。  
アイリスが突然扉を開けたせいで、揃ってノックアウトしている。  
そこへ、さくらが走って来た。

「大神さん！アイリスが部屋の方へ！」

「分かった。ありがとう、さくらくん」

さくらに礼を言うと、大神はアイリスの部屋へ急いだ。

「アイリス！話を聞いてくれ！」

扉をノックして必死に呼びかける大神。  
しかし、アイリスは冷たく一蹴した。

「ヤダッ！……………アイリス悪くないもん」

「困ったな……………」

アイリスを怒らせたのは、間違いなく自分の発言だ。  
しかし、このまま放っておく訳には行かない。  
大神が悩んでいると、すみれ達がやって来た。

「少尉、ここは私達にお任せになって」

「アイリスはあたいらで説得してやるよ」

「ウチらに掛かれば万事解決や」

「しかし、どうすれば……………」

大神が不安そうに呟くと、カナナが胸を叩いた。

「大丈夫だって。女心は女の方が分かるんだからよ」

「まあ、カナナさんのようなガサツに女心が分かるとは思えませんわ」

「何だとお!?!?」

すみれの言葉に噛み付くカナナ。

その様子を見て、紅蘭が呆れたように言った。

「こんな時にモメとる場合ちゃうやろ。大神はん、ここはウチに任したってや」

「ああ。紅蘭、頼んだぞ!」

「アイリス、紅蘭や。ちよつとええかいな?」

「……………」

「なあアイリス、大人になりたいんやって?ほんならウチ、特製の成長薬持ってんねんけど……………」

すると、鍵の開く音が聞こえた。

紅蘭はしめしめと言った表情でドアノブに手をかける。

「よっしゃ、お邪魔するで」

「……………早く薬置いて出てってよ」

やはり怒りが収まってないのか、アイリスは紅蘭を睨んで言った。すると、紅蘭はチツチと人差し指を動かした。

「アカンで、アイリス。この薬はな、楽しい気分の人に飲まんと効果がないんや。ほら、笑ってみ？」

少々無理のある説明だが、まだ子供のアイリスは真に受けて笑顔を作った。

「（よっしゃ、作戦成功や。笑う角には福来たる。笑わかすんが一番や。）」

しかし、アイリスは突然キツと紅蘭を睨みつけた。

「ど、どないしたん？アイリス、さ、笑うて……………」

「……………紅蘭、嘘ついた……………」

「な、何言うてんねん。嘘な訳ないやろ？」

「アイリス、紅蘭の心の声が聞こえたもん！」

その言葉に、紅蘭はハツと思い出した。

アイリスには、相手の心を読む能力がある事を。

「ち、ちよつと待ち、アイリス。暴力反対やで……………！」

今までと迫力の違うアイリスに、何を言っても無駄だった。

「紅蘭の嘘つき！大っ嫌い！！」

刹那、部屋に轟音と紅蘭の悲鳴が轟いた。

「だ、大丈夫か、紅蘭！？」

ボロボロの姿で部屋から出て来た紅蘭を支えて、大神が尋ねる。

「アカン……………。アイリス、人の心が読めるで」

「何！？それじゃあ説得のしようがねえな！」

「たしかに、私も手こずりそうですわね……………」

予想外の事態に、すみれとカンナも勢いを失う。

「大神はん。今のアイリスに上辺だけの説得は逆効果や。ここは機嫌が直るまで、そつとしいた方がええんちゃうかいな」



そう言つて、三人はさすがごと退散してしまつた。  
すると、入れ違いにあやめがやつて来た。

「どう？大神くん」

「あやめさん。……………駄目でした」

「そう……………、難しい問題ね」

あやめは顎に手を当てて考える仕種を見せた。

「紅蘭達は子供として、マリアは逆に大人として見ているわ。大神はどう考えるの？」

「俺は、どちらも間違つていると思います」

あやめの問いに、大神は即答した。

アイリスは成長期に入ったばかりで、精神的には大人になろうとしているが、身体が追いついていない。

言わば、心だけが先に大人になつて、そのジレンマに、アイリスは苛立つているのだ。

大人として接するにはまだ早いが、子供と見なすのも正しいとは言えない。

大神はそう考えたのだ。

「そこまで分かっているなら、心配はないわ。アイリスをよろしくね」

「はい！」

辺りは暗い闇に包まれていた。

その中にたった一つの明かりがあった。

それは、小さな街灯だった。

周りの街灯は皆闇の中に消えていたが、この街灯だけはぽつんと明かりを燈していた。

その下に、少女はいた。

少女は待っていた。

大好きな青年が、大きくなった自分の所に来るのを、ただひたすらに待っていた。

そして……………、

「あ……………!!」

青年はやって来た。

少女は溢れんばかりの笑顔で、青年の胸に飛び込んだ。

「お兄ちゃん……………。」

「アイリス……………。」

「あ……………、夢?」

目を覚ますと、アイリスの前には大神ではなくジャンポールがいた。

「お兄ちゃん、アイリス……………早く大人になりたいよ」

長年ともにいたジャンポールも、今のアイリスの心の傷を癒す事はできなかった。

翌朝、秀介は警報の音で飛び起きた。

「て、敵襲ですか!？」

慌てて戦闘服に着替えて作戦司令室に飛び込むと、そこには一同にジト目で睨まれる大神の姿があった。

「こ、これは一体……………?」

恐る恐るカンナに尋ねると、カンナがぶっきらぼうに答えた。

「どうもごうもねえよ。アイリスが光武で出て行っちまったんだ!」

「少尉が余計な口出しをするからですわ!」

「どうするつもりや、大神はん!？」

すみれと紅蘭に責められ、小さくなる大神。

すると、かすみから連絡があった。

「長官、アイリスの居場所を発見しました」

「よし、モニターに写せ」

すると、アイリスの黄色い光武が浅草の街を破壊しながら爆進する光景が写った。

「なんちゆう靈力や！あんな簡単に光武を動かすやなんて………！」

改めて、アイリスの靈力に驚かされる花組。

その時、再び警報が鳴った。

「こ、今度は何だ!？」

「黒之巢会です。浅草雷門に黒之巢会が出現しました！」

椿の報告に、米田は齒噛みした。

「くそ、こんな時に………！」

「こうなったら、アイリスが浅草に向かっている事が唯一の救いね」

あやめの言う通りだった。

一刻も早くアイリスを救出し、黒之巢会を撃退しなければならぬ。大神は出撃命令を出した。

「帝国華撃団花組、出撃せよ！目標地点、浅草！絶対にアイリスを助けるんだ！」

「了解！」

浅草雷門。

多くの出店で賑わう帝都の名所は、脇侍の出撃で瞬く間に炎に包まれた。

その様子を、雷門の奥から眺める人物がいた。  
黒之巢会死天王の一人、白銀の羅刹である。

「ハハハハハ！燃える燃える！灰にしてしまえ！」

楽しそうに笑うと、羅刹は怪しげな呪文を唱え始めた。

「オンキリキリバサラウンバツタ、オンキリキリバサラウンバツタ、オンキリキリバサラウンバツタ……」

すると、やはり上空から巨大ドリルが現れ、雷門に沈んで行った。  
その時、羅刹の目の前に一瞬、黄色い光武が現れた。

「な、何奴！？どこから現れたのだ？」

目を擦って見ても、黄色い光武は見えなかった。

なぜなら、それは空間から空間へテレポートしているからだった。

「アイリスく何もせんけん、こっち来てや〜」

「アイリスちゃん、出てらっしゃ〜い」

「いい子だから、こっちにおいで〜」

すみれ達三人が猫撫で声でアイリスを呼ぶ。

どう考えてもわざとらしいが、やはり子供のアイリスはあっさり引っ掛かった。

「さあ、捕まえたで！」

「逃げられません事よ！」

「ほら、いい子にするんだ！」

現れたアイリスを一斉に捕まえる三人。

しかし、これで観念するアイリスではなかった。

「みんな……………、みんな……………、嘘つきだっ！」

アイリスは怒りに任せて念力を発動させ、すみれ達三人を簡単に吹っ飛ばした。

「わ、私の美しい機体が………！」

すみれがショックを受けている隙に、アイリスは再びテレポートで逃げ出す。

「よし、みんなは脇侍を食い止めてくれ！俺がアイリスを説得する！」

「せやかて、ウチらも攻撃してくるんやで!？」

「危険過ぎます！」

大神の指示にすぐさま反対するマリアと紅蘭。  
しかし、大神は聞かなかつた。

「このままではアイリスも街の人も危ない。やるしかないんだ！」

その時、名乗りを上げる人物がいた。  
さくらである。

「大神さん、あたしも行きます！」

「さくらさんっ!？」

「よし、さくらくん。アイリスを救出するぞっ！」

秀介が思わず叫ぶが、さくらは気合い十分な返事を返した。

「（そうか………、さくらさん………隊長の方が………）。」

今更ながら、秀介はさくらと大神の間に割って入れない事を痛感した。

さくらが大神を信頼すると同じく、大神もまたさくらを信頼する。他の一切が入り込む事を許さない絆。

それが、秀介には二人の間に見えてしまった。

「……………」

走って行く二機の光武の姿を、秀介はただ悲しく見つめる事しかできなかつた。

「アイリス、待ってくれ！」

レポートで逃げるアイリスを必死に追いかける二人。しかし、アイリスは建物を突っ切って行ってしまった。

「大神さん、チャンスです」

「よし、挟み撃ちにするぞ！」

このまま奥に行けば、アイリスは先に来た方に気を取られる。

その際にもう片方が背後からアイリスを捕まえようと考えたのだ。

「アイリスッ！」

先に現れたのは大神だった。



「あ、もう来た！」

予想通りアイリスは、大神に気を取られている。そこへ、背後からさくらが駆け付けた。

「捕まえたわよ、アイリス！おとなしくしなさい！」

「離してよ〜！もうみんな嫌いだ〜！！」

尚も騒いで抵抗するアイリス。大神は、何とか説得を試みた。

「アイリス、聞いてくれ！俺はたしかに、今の君を一人の女性として見る事はできない」

「やっぱり……。アイリスが子供だから……」

「でもデートの時、俺は本当に楽しかった！アイリスといて幸せだった。それは本当だ」

「え……………？」

「だから、今は子供でいいじゃないか。将来はまだわからないけど今は……………これでいいんじゃないかな？」

アイリスの良さは、自分に素直になれる子供らしさにある。だから、無理に背伸びをする必要はない。それが、嘘のない大神の本心だった。

「お兄ちゃん……………、嘘ついてない……………」

「さあ、ハッチを開けて……………」

大神が言い終わらぬ内に、アイリスは光武を飛び出し、大神の胸に飛び込んだ。

「お兄ちゃん！」

「アイリス……………」

大神の胸は、昨日の夢の時と同じように暖かくアイリスを迎え入れた。

「さあ、行くぞ！アイリス」

「うん！」

アイリスが力強い返事で答える。  
その様子に、花組は高揚感に包まれた。

「アイリス……、本当に良かった」

「私を吹っ飛ばした時は、どうしようかと思いましたがどね」

「初陣だな。頑張れよ、アイリス」

「よっしゃ！これで花組勢揃いや！」

「八人揃った我等の団結力、見せてやりましょう！」

その様子に頷き、大神は二刀を抜いた。

「改めて、行くぞっ！」

「帝国華撃団、参上！」

どんな時でも決めポーズを忘れない花組。すると、雷門にいる羅刹は大声で笑った。

「ハハハハ！やっと戦えるな、帝国華撃団！我が兄、刹那の無念、この白銀の羅刹が晴らしてくれる！」

余程自分の力に自信があるのか、羅刹は花組を前に余裕の表情を見せた。

「時に大神一郎、貴様に問う」

「何だ、言ってみろ！」

油断なく構えつつ答える大神。

すると、羅刹は一瞬ニヤリと笑って尋ねた。

「その中で、最も大切な隊員は誰だ？」

「……………いいっ!？」

あまりにぶっ飛んだ質問に、大神は驚愕した。

最も大切な隊員……………、正義に生きて来た大神にとって、それは考えた事もなかった。

ただ、実際大神は各隊員とそれらしいやり取りはある。

それゆえに隊員達は、もしかしてという淡い期待を持って大神の答えを待った。

「最も大切な隊員は……………」

しかし、彼女達の期待はあっさり裏切られた。

「秀介だ」

「……………はい？」

刹那、六つの光武は音を立ててひっくり返った。

一方、指名された秀介も、何故自分なのかわからないという表情だった。

「秀介か。承知した」

羅刹が不気味に笑った時だった。

さくらの隣にいたはずの流星が、羅刹の目の前にテレポートさせら

れたのである。

「こ、これは……………！」

「ハハハハハ！見たか、我が召喚術の力。仲間が殺される所を見て  
いるがいい。いでよ、シルバゴン！！」

すると、花組の前に巨大な白銀の大怪獣が現れた。

「怪獣……………！？なんて事です！」

秀介は悔しげに唸ってブレスレットを掲げた。  
しかし、そこに羅刹の声が飛んだ。

「無駄だ。この門一帯には結界を張っている。巨人に変身する事は  
出来ん」

「何！？」

秀介は驚いた。

まさか羅刹が自分の正体を知っていたとは。

「仲間が怪獣と遊んでいる間、この羅刹が相手してやる。いでよ、  
『銀角』！！」

すると、今度は秀介の前に蒼角に似た色違いの魔装機兵が現れた。  
腕には鉄球をつけ、如何にも力強い印象を持たせている。

「さあどうする！仲間を助けるには俺を倒すしかないぞ？」

「……………やっつてやりますよ！」

そう返すと、秀介は流星の操縦桿を握り直した。

「くっ、ここに来て怪獣だと……………！？」

羅刹が召喚したシルバゴンに、大神達は圧倒された。

身長は雷門と同じ位で前回のタツコング程ではないが、それでも大神達の倍はある。

加えてシルバゴンの皮膚は、脇侍以上に強靱な硬さを誇っていた。

「破邪剣聖、桜花放心！」

「一百林稗！」

「神崎風塵流奥義、胡蝶の舞！」

無数の脇侍を屠ってきた必殺技でも、それは同じだった。

「チツ、何て硬い奴なんだ！」

「隊長！このままでは……………！」

「くっ……………！」

とうに秀介からの緊急通信は届いている。  
しかし、自分達ですらこの怪獣に手も足もでない状況である。  
助けに行けるはずもなかった。

「こんな時、ウルトラマンがいれば……………!!」

「ハハハハハ！帝国華撃団と言えど、分散させれば大した事はない」  
鉄球を振るい、羅刹が笑った。  
外界から隔離された結界という空間の中、秀介は苦戦を強いられていた。

「（何て力だ……………、表の怪獣と遜色ない!!）」

見た目通り怪力を売りにしている銀角の攻撃は、激しいの一言に尽きた。

一撃喰らえば負ける。

己の破壊本能のままに攻撃を繰り返す姿は、さながら暴風雨だ。

「そろそろ終わりにしてやる。轟・爆裂岩破!!」  
羅刹が妖気を集中させた。

すると、銀角の周りの地面が揺れたと思うと、槍状になって真上に突き出した。

「なっ……………!!」

予期せぬ攻撃に秀介は反応が遅れ、流星の左翼を損傷してしまった。

「ハハハハ！どうだ、これで動けまい」

鉄球を頭上で振り回しながら羅刹が勝ち誇ったように叫んだ。

たしかに流星は両翼の蒸気噴射が正常に機能して初めて飛行できる。その片方がやられてしまうと、身動きが取れなくなってしまふのだ。

「くたばれ！御剣 秀介！！」

羅刹の鉄球が流星に襲い掛かった。

しかし、鉄球が当たる寸前、流星の姿が掻き消えた。

「何っ！？何処へ消えた！」

驚いて辺りを見渡す羅刹。

すると、どこからともなく少女の声が聞こえて来た。

「ねえおじさん。あの怪獣の弱点って何処？」

「何っ！」

見ると、流星を庇うように黄色い光武が銀角の前に仁王立ちになっていた。

「秀介、大丈夫？」

「アイリス！」

「馬鹿な！何故結界を破って来られた!？」



今度は羅刹が驚く番だった。  
自身の魔術の中でも絶対の自信を持つ結界術が、こんな少女に破られたのだから当然である。

しかし、アイリスは更に羅刹が驚く事を口にした。

「みんな〜！あの怪獣の弱点は角なんだって〜！！！」

「何いつ！？何故分かった！」

自分は一言も、シルバゴンの角が弱点とは言っていない。

さらに、アイリスは今現れたのだ。

こちらの考えを読む隙はなかったはずだ。

すると、アイリスは羅刹の心の声を読み取って答えた。

「それはね、アイリスがおじさんの心を読めるからだよ〜！」

「グツ……………！このガキ！！！」

怒りが頂点に達し、銀角がアイリス目掛けて鉄球を振り下ろす。

しかし、アイリスに当たる寸前で、鉄球はピタリと止まった。

念力である。

「え〜い！！！」

アイリスは捉えた鉄球を念力で操作し、銀角にぶつつけた。

たちまちボディがひしゃげて、銀角の機体は全身から火花を上げる。

アイリスは、更に銀角を念力で生み出したボールに包んで浮かべ上げた。

「みんなをいじめる悪い奴は、遠くに飛んでっちやえ!!」

「おわああああ〜!!」

みつともない悲鳴とともに、羅刹は空の彼方へ消えてしまった。

「どう秀介？アイリス凄いでしょ!!」

えっへんと胸を張るアイリス。

その様子に秀介は思わず微笑んだ。

「ええ、今回はアイリスのお手柄ですね」

一方、大神達もアイリスのアドバイスのおかげで反撃に移っていた。

「マリア、紅蘭、奴の動きを制限してくれ!!」

弱点は角。

ならば動きを封じ込め、一気にそれを叩き斬る。

そう考え、大神は指示を出した。

「スネグーラチカ!!」

マリアが放った氷の一撃が、シルバゴンの足を固める。

そこに、紅蘭が続いた。

「チビロボ軍団、発進！」

チビロボ達がシルバゴンの体にしがみつき、動きを止めた。

「今やで、大神はん！」

「分かった！」

勝負はこの一撃にかかっている。

大神はシルバゴンの角を一点に見据えると、霊力を二刀に集中した。

「狼虎滅却……………、千変万化！！！」

シルバゴンの角目掛けて、赤い稲妻が大神の二刀から放たれた。稲妻は一直線に角を直撃し、木っ端みじんに吹き飛ばした。

「ゲアアアアツ！」

シルバゴンは悲鳴ともとれる叫び声を上げ、仰向けに倒れた。しばしの沈黙が辺りを支配する。

「……………か、勝った……………」

かなりの霊力を使い荒い息の中、大神は信じられないような表情で呟いた。

一度は駄目かと思った相手を、ウルトラマンの力を借りる事なく、自分達で打ち破ったのだ。

「やりましたね、隊長！」

マリアが言うと、他の隊員達も続いて賞賛の言葉を口にした。

「凄いです大神さん！」

「少尉、お見事でしたわ！」

「さすがはあたい達の隊長だぜ。」

「決まっつつたで、大神はん！」

すると、大神は二刀を鞘に納めて言った。

「いや、アイリスの助言がなければ勝てなかった。お礼はアイリスに言うべきだ」

「呼んだ？」

その声に振り返ると、雷門から凱旋したアイリスと秀介の姿があった。

「アイリス！秀介さんも無事でしたのね？」

「はい。アイリスのおかげで助かりました」

「すっげえなアイリス！お前羅刹まで倒しちまったのか！」

「えへへ……………」

カンナに褒められ、アイリスは恥ずかしげに笑った。

「でもアイリス、もう勝手な事はしないでね」

「はあい、ごめんなさい……………」

「ふふっ、分かればいいの。それじゃあ、いつものはアイリスがやる?。」

マリアの提案に、アイリスは満面の笑顔で答えた。

「うん!-!」

「勝利のポーズ……………、決めっ!-!」

「あ、秀介。おはよう！」

数日後、ロビーを掃除していた秀介に、アイリスが声をかけた。何だかいつもより笑顔に溢れている気がする。

「アイリス、おはようございます。随分嬉しそうですね？」

「うん！これからお兄ちゃんとデートなんだ〜！」

結局あの日は、アイリスにとって散々な一日になってしまった。大神は助けてくれた礼も含めて、アイリスにデートのやり直しを提案したのである。

「良かったですね。楽しんで来て下さいね」

「うん、アイリス頑張る！それじゃ、行ってきま〜す！」

ジャンポールを手に駆け出すアイリス。しかし、急に立ち止まると、秀介に振り返って言った。

「秀介も頑張つてさくらを捕まえてね〜！」

刹那、秀介は派手にすっ転んだ。

「な……………何故それを……………？」

秀介が尋ねる前に、アイリスは走って行ってしまった。

浅草珍道中！（後書き）

《次回予告》

おゝほっほっほっ！！

何だあ、テメエは！？

あゝらカンナさん、相変わらずのゴリラ女です事ね？

何だどこの腐れババア！ちゃんと予告をやりやがれ！！

次回、サクラ大戦！

《見えない友情》

大正さくらにロマンの嵐！！

邪魔なさらないで！

テメエこそ引ッ込んでろ！

## 見えない友情（前書き）

ゲームで言つと第5話。

頭を使うすみれ編と違って、カナナはとにかく脇侍を殴ればOKと  
いう……………。



## 見えない友情

「刹那に続いて羅刹も破れたか……。死天王も不甲斐ない」

露骨に失望の色を顔に浮かべ、天海が言った。

たしかにこれまで帝国華撃団には負け続けである。

このままでは、予定していた計画が大きく狂う恐れがあった。

「事を急いだ方が良く。行け、ミロク、又丹！」

「ハッ！」

「……………」

「やいやいやいやい！古今東西の悪党ども！この三蔵法師の一番弟子、孫悟空に逆らうたあ、いい度胸だ！まとめて地獄に送ってやるから、覚悟しろい！」

舞台の上でカンナが棒を振り回しつつ叫ぶ。

これは花組の芝居、「西遊記」の山場で、カンナ扮する孫悟空が、すみれ扮する妖怪の首領の楊貴婦人に挑む場面だ。

「ハッ！ごさかしい。この楊貴婦人が振り返ちにしてくれるわ！」

客の視線を存分に感じながら演技をするすみれ。しかし、ここで思わぬ事態が発生した。

すみれが練習と違う方向に踏み出し、カナナがすみれの裾を踏み付けてしまったのだ。

「あつ……………！」

気づいた時には遅かった。

「ひえええ……………！」

すみれは顔面から舞台にダイブしてしまう。

途端に舞台の空気は壊れ、客の意識は現実に戻されてしまった。

「……………何なさるの！ちゃんとお芝居して下さいさらない事！？」

「何だと！？お前こそちゃんとやれよ！この腐れババア！！！」

自分の失敗を棚に上げて怒鳴るすみれに、カナナが言い返す。すると、すみれの中で何かがキレた。

「なんですって！この馬鹿猿！マヌケ！許しませんわ！！！」

「おーおー上等だ！掛かって来い！！！」

息を呑む山場は、一瞬にして爆笑に包まれる修羅場と化した。

「やれやれ、とんだ公演になってしまったな……………」

話を聞いて楽屋に来た大神は、ため息をつくしかなかった。

余程激しくやり合ったのか、衣裳は破れ、どちらの顔にも引っ掻き傷や青タンが痛々しく残っている。

「これだけやって舞台が無事だったんですから、まだいいですよ」

秀介がそう言うと、さくらが大神に頼み込んだ。

「何とかして下さい、大神さん。一触即発って感じなんです」

「し、しかし簡単には収まらないぞ……………」

すみれとカンナは、犬猿の仲と言われる程ケンカが絶えなかった。顔を合わせる度にすみれが憎まれ口を叩いてカンナが突っ掛かり、最後はいつもこうなるのだ。

「あ、あの……………二人とも仲直りを……………」

「少尉には関係ございませんわ!」

「気が立ってるんだ!話し掛けないでくれ」

「は、はい……………」

仲直りさせようと話し掛ける大神だったが、軽く一蹴されてしまう。それどころか、再び二人は言い合いを始めてしまった。

「全く、このゴリラ女のせいで大恥をかいてしまいましたわ！」

「何だと！元はと言えばお前が立ち位置しくじるからだろうが！」

「なんですって！人の裾を踏んでおいて何をおっしゃるの！」

「お前こそ、裾踏まれてコケるの何回目だ？よっぽど顔面着地が好きみてえだな！？」

「言いましたわねゴリラ女！」

「やるかサボテン女！」

「いい加減にしないで！」

すると、そこへようやくマリアが止めに入った。

「こんな所で騒いで何になるの！？隊長からも言ってお下さい」

そう言うマリアだが、大神はさっきの二人のトラウマが残り、ろくすっぽ言える状態ではなかった。

「あ、あの二人とも……、ケンカは止めような」

「何やそれ、そんなんアイリスかて言えるわ」

紅蘭が呆れ顔で言った。

「ところでマリアさん、何かあったんですか？」

秀介が尋ねると、マリアはため息をついて答えた。

「実は、米田支配人から伝言があったの。至急作戦司令室に来るよ  
うことの事よ」

「よし。あやめくん、始めてくれ」

全員が揃った事を確認し、米田があやめに言った。

「実は、今回深川の廃墟の近辺で魔装機兵らしき影の目撃情報が入  
ったの」

「深川に？」

大神が聞き返すと、米田が口を開いた。

「そうだ。そこで深川の廃墟を調査し、黒之巢会について有益な情  
報がないか、確かめるんだ」

「あわよくば、黒之巢会の行動目的を突き止められるかも………で  
すね？」

「その通りだ。さすがは秀介だな」

そう笑うと、米田は話を戻した。

「そこで調査なんだが、情報の前に敵に見つかるのは避けたい。そのため、四人の小隊を結成し、任務に当たって貰いたい」

「で、そのメンバーは？」

マリアが尋ねると、米田は一瞬目を閉じ考える様子を見せる。そして、目を開くと同時に答えた。

「今回調査に向かうのは大神、秀介、すみれ、カンナだ」

刹那、作戦司令室の二カ所から同時に声が上がった。

「何ですって？」

「あたいと、すみれ!？」

「了解しました!大神一郎、御剣秀介、神崎すみれ、桐島カンナ、以上四名、深川調査に向かいます」

作戦司令室でまで揉め事は勘弁してほしい。

大神は先立って復唱する事で、二人の反対を不可能にした。

「よし、いい返事だ。それじゃあ調査は明日だ。準備を整えておい  
てくれ」

大神の適切な判断を褒めつつ、米田は幾分穏やかに言った。  
反面、強引に決められたメンバーに、すみれはあからさまに不満を  
見せた。

「……………仕方ありませんわね。よろしくてよ」

「……………」

「カナナ……………！」

終始カナナに冷たい視線を送っている事から、明らかにカナナに対  
しての不満である事は間違いない。

カナナもそれに気づいて無言ですみれを睨み返すが、先にマリアが  
小声でたしなめた。

「……………わかってるさ。さすがに司令室でまで、見苦しい事はしね  
えよ」

カナナもマリアの気持ちを察し、我慢する。  
すると、米田がその場を締めくくった。

「よし、それじゃあ解散だ。四人とも、しっかりな」

「秀介さん、いますか？」

その夜、部屋に突然さくらが訪ねて来た。

「は、はい。どうぞ」

突然の訪問に驚きつつ、さくらを中に入れる秀介。すると、さくらは部屋を見渡して言った。

「わあ、綺麗な部屋ですね」

「え、ええ、まあ……………」

「いつも掃除してるんですか？」

「はい、それなりに……………」

やや緊張してはいるが、何とか返事を返す秀介。そんな秀介の事は露知らず、さくらは秀介とテーブルを挟んで座り、話し始めた。

「実は、すみれさんとカンナさんの事なんですけど……………」

「……………さくらさんも、心配ですか？」

やっぱりという表情で尋ねる秀介にさくらは力なく頷いた。

「今回の深川調査、何で支配人は二人を一緒にしたんでしょう？」

たしかに、それは謎だった。



すみれとカンナが犬猿の仲である事は、帝撃の人間なら誰でも知っている。

当然、米田もあやめもよくわかっているはずだ。

「あの二人、気乗りしてないみたいだし……、もしケンカにでもなったら、敵に見つかるかも知れないのに……」

さくらの言う事は最もだった。

今回の任務は調査である。従って戦闘状態に入らない限り、光武は使えない。

そんな状態で脇侍に出くわせばどうなるか……。

「たしかに、司令は敢えて二人を小隊に含めたと考えるべきですね」

「でも、どうして？」

「仲良くさせるため……ですか？」

やや考えにくいのが、思い当たる節はそれしかない。

それは、さくらも同じだった。

「あたしも同じ事を考えてました。やっぱり支配人も、二人が気掛かりなんですな」

「そりゃ気になりますよ。毎日ケンカですから」

その言葉に、二人は思わず笑った。

「にしてもさくらさん、今夜はどうして僕の部屋に？」

実際のところハッキリしないため尋ねてみると、さくらは一瞬ハツとしたのち、モジモジし始めた。

「……………」

「あの……………さくらさん？」

急に黙り込んださくらに戸惑いつつ尋ねる秀介。  
すると、さくらは予期せぬ行動にでた。

「う、ごめんなさい！」

勢いよく立ち上がって頭を下げると、さくらは部屋を飛び出して行ってしまった。

「な……………、何だったんですか？」

秀介は、ただそう呟くしかなかった。

「……………ハア……………ハア……………」

逃げるようにして部屋に戻って来たさくらは、胸を押さえてその高

鳴りを確かめた。

「秀介さん……………」

理由はなかった。

ただ、秀介と二人で話したい。

純粹に、そう思った。

「（何で……………？あたしが好きなのは大神さんなのに……………。）」

あの写真を見た時から、自分は大神が好きと、さくらは信じて疑わなかった。

だが、いつからだろう。

秀介の事を考えると、違う意味で胸がときめいた。

どこか苦しくて、切なかった。

「秀介さん……………」

もう一度名前を声に出してみる。

しかし、胸の切なさは変わらなかった。

翌朝、深川調査隊はロビーに勢揃いしていた。

「よし、それじゃあ出発だ。二人とも派手なケンカはなしにしてくれよ?」

「ああ、分かってるよ」

「あゝ、気が乗りませんわ」

「本当に大丈夫なんですかね……………」

最悪の状態で。

いがみ合う二人の後ろで、大神は胃の心配をしていた。

深川の廃墟。

それは、フランスをモデルにした古い洋館だった。既に家主はなく、数年前に幽霊騒ぎがあつて以来、人が寄り付かなくなつたらしい。

「なるほど、悪巧みにはもってこいの場所ですね」

大神の言葉に秀介が頷く。

すると、カンナがふと大神に尋ねた。

「へっ、面白れえ。隊長、まさか怖いたあ言わねえよな?」

「もちろんさ。幽霊に負けていたら帝国華撃団の隊長は勤まらない

よ

「さすがはあたい達の隊長だぜ。……………で、そこのお嬢さんは大丈夫なのか？」

「何ですって！？私に苦手なものなどありませんわ！そういうカンナさんこそ、帰るなら今の内ですわよ？」

「あたいだって平気だ！余計な心配するな！」

いつものように言い合つが、よく聞けば互いに心配しているように聞こえなくもない。

大神と秀介は、顔を見合わせて微笑んだ。

「とにかく隊長、あたいに任しときな！幽霊だろうが脇侍だろうが、このあたいがぶっ飛ばして……………！」

そう言つてカンナが一步踏み出した時、突然カンナの姿が掻き消えた。

「なっ……………！？」

「カ、カンナさん！？」

異口同音の驚きの声上がる。

すると、下からカンナの声が聞こえて来た。

「痛てて……………、床踏み抜いちゃったぜ」

「カンナ、大丈夫か？」

心配しながらカンナを引つ張り上げる大神。  
すると、秀介がふと思い出したようにすみれを見た。

「しかし、今のはすみれさんも心配だったんですね」

「えっ!? あ……………こ、これは……………、その……………」

秀介に痛い所を突かれ、珍しく慌てるすみれ。  
しかし、すぐにいつもの調子に戻って笑いはじめた。

「おっっほっほっほ! 秀介さんたら何をおっしゃるやら」

「違うんですか?」

秀介が尋ねると、すみれは甲高い笑い声を上げた。

「私は今の衝撃で屋敷が壊れないか、心配したのですわ。カンナさんのバカ力は人間じゃございませんものね」

すると、今の一言でついにカンナがキレた。

「何だとお!? くそっ、もう我慢ならねえ……………」

「お、おいカンナ! 何処へ行くんだ!?!」

「もうお前の顔なんか見たくねえ! 幽霊の方がまだマシだ!」

一人で奥に進もうとするカンナを大神が止める。  
しかし、カンナは聞かなかった。

「あたいはこっちの左の扉から行くからな！絶対について来るなよ！」

言うや、カンナは左の扉を開いて行ってしまった。すると、すみれを鼻を鳴らす。

「それなら私は右ですわ。これでスッキリ解決ですわ！」

そう言つてすみれも、右の扉に消えてしまった。

残された大神と秀介だったが、ややあつて秀介が尋ねた。

「どうします、隊長？」

「そうだな……、とりあえず二手に別れよう」

恐らく今の二人に幾ら説得しても無駄だろうが、さすがにこんな場所を一人で歩かせるのは危険だ。

それに二人一組なら、有事の際に対処がしやすい。

士官学校首席の名は、伊達ではなかった。

「俺はすみれくんの方に行く。秀介はカンナを頼んだぞ」

「了解です！」

早速左右の扉から奥に消える二人。

しかし、その一部始終を見ていた影の存在に気づいた者は、誰もいなかった。

「くそっ！あのサボテン女、冗談じゃねえ！」

秀介がカンナを見つけたのは、左の扉からさほど遠くない食堂だった。

かつては毎日家庭を賑わせたであろうテーブルは脚がボロボロになり、テーブルクロスは埃を被っている。

「カンナさん、こちらでしたか？」

秀介が声をかけると、カンナは壁を殴るのをやめて、振り返った。

「秀介。あれ、隊長は一緒じゃねえのか？」

「実はあの後、すみれさんも右の扉から行ってしまつて。隊長が説得している間に二人で調査を進めるように言われて来たんです」

秀介は敢えて、すみれが悪いような言い方をした。

最初に怒ってチームワークを乱したのはカンナだが、今それを指摘するべきではない。

今は、少しでもカンナにやる気を取り戻して貰う事が先決だった。

「そうか……………、あいつ隊長にまで迷惑かけてんのか」



カンナはやれやれといった表情を浮かべた。

「カンナさん、そういう訳ですから……………」

「分かってるって。隊長はすみれで手一杯だろうし、あたい達が頑張らないとな！」

どうやら秀介の狙い通りやる気になってくれたらしい。

握り拳で応えるカンナに笑顔を返しつつ、秀介は心の中ですみれに両手を合わせた。

「全くあのゴリラ女、考える事も動物並なんですから……………」

一方、すみれは右の扉から続く居間で、ブツブツとカンナに対する愚痴をこぼしていた。

「すみれくん……………」

「あら少尉、ちょうど良かったですわ」

大神に気づくと、すみれは今度は大神に愚痴をぶちまけた。

「少尉、先程のカンナさんどう思います？人騒がせも甚だしいですわ！」

「…………たしかに、ヘソを曲げて勝手な行動を取るのとは良くないな」  
「ええ、その通りですわ！さすがは少尉。普段は冴えなくとも、きちんと状況を判断しているのですわね」

「ハハハ……………」

褒められたのか馬鹿にされたのかよく分からない言葉に、とりあえず苦笑いで返す大神。  
すると、すみれがある事に気づいた。

「ところで少尉、秀介さんの姿が見えませんが……………」

「ああ、秀介ならカンナの説得に行っているよ」

大神が応えると、すみれはやれやれとため息をついた。

「全くカンナさんは……………。秀介さんもいい迷惑ですわ」

「仕方ないさ。あのまま一人にするのは危険だし」

「たしかに、あの怒り様ではウサ晴らしに脇侍を襲ってしまいかねませんわね」

「ああ。だから、すみれくん。とりあえず俺達は先に……………」

「そうですね。さっさと調査を済ませてカンナさんを回収しますわ  
んと、秀介さんが大変ですわ」

打ち合わせ通りにすみれをやる気にさせ、大神は心の中で一息つい

た。

調査隊は見事に真つ二つになってしまったが、空中分解という最悪の事態は避けられた。

とりあえずは調査続行が可能になったと言えるだろう。

そんな事を思った時、ふとすみれが何かに気づいたように表情を厳しくした。

「すみれくん、どうしたんだい？」

大神が尋ねると、すみれは視線を奥の廊下に向けたまま答えた。

「少尉、あの廊下の奥から脇侍とは違う霊力を感じますわ」

「本当かい？」

霊力を持つ人間は、その高さに応じて様々な能力が付与されている。アイリスが念力やレポートが出来るのもそのためだ。

すみれもまた、アイリス程ではないが霊力による追加能力があった。それが、ほかの霊力や妖気を感じ取る探知能力である。

これもアイリスの方が優れているのだが、10歳ではそれを上手く表現出来ないため、事実上すみれが最も優れた探知能力を持つ事になる。

大神は気づいていないが、米田が調査隊にすみれを加えた本当の理由はそれである。

「もしかすると幽霊騒ぎの真相の手がかりかも知れませんわ。少尉、参りますわよ！」

「す、すみれくん！………んっ！？」

慌ててすみれを追いかけてしようとした時、大神はふと背後からの視線を感じ、振り返った。

しかし、そこには暖炉とその上の小さな小物入れしかなかった。

「気のせいかな……………？おゝい、すみれくゝん！」

気味が悪くなった大神は、すみれを追いかけて居間を後にした。

「それにしても、本当に不気味な所だな。いかにも何かいるって感じだぜ……………」

食堂から続く廊下を進みつつ、カンナが呟くように言った。

たしかに夏だというのに、廃墟の中は時折身を切るような冷たさを感じさせる。

まるで、夏の暑い空気すら入る事を恐れるような何かがあるんじゃないか。

そう感じさせる何かが、この廃墟にはあった。

「……………！」

その時、秀介は先程の食堂からただならぬ妖気を感じ取った。

「どうした、秀介？」

「何やら妖気を感じます……………」

尋ねるカンナにそう答えると、カンナも食堂から殺気にも似た気配を感じたらしく、食堂に目を向けた。

黒之巢会か……………」

または廃墟の霊力の主か……………」。

相手に気づかれないように慎重にもと来た道を戻る二人。

「……………目撃情報は正しかったようですね」

先に口を開いたのは秀介だった。

「いきなりかよ。こっちはまだ何も調査できてねえってのに……………」

嫌なものに出くわしたという表情でカンナが答えた。

食堂は、無数の脇侍で溢れかえっていた。

建物内部のためか、普段戦って来た脇侍とは少しサイズが小さいが、それでも生身の人間には十分過ぎる程脅威である。

「どうする？隊長を待つか、それとも……………」

そう秀介に問い掛けつつ、カンナは拳を握り締めた。

カンナは花組の中でも、マリアの次に戦いに慣れた人物で、その腕前は父の仇を組織ごと潰した程である。

肉弾戦においては、カンナは花組最強の存在だった。

故にもし黒之巢会と相対した場合、その場を凌げる可能性が最も高い。

米田がカンナを調査隊に選んだ本当の理由は、それである。

その事は、秀介も十分承知していた。

「相手は多いですが……………、二人でかかればやれます」

「よし！そこなくちな！」

拳をパキポキと鳴らすカンナ。

その表情を一瞥し、秀介はブレスレットからスパークソードを召喚した。

「お、何だいそりゃ？」

初めてスパークソードを見るカンナが尋ねると、秀介はニヤリと笑って答えた。

「貴女の拳のようなものです。……………行きますよ！」

「おう！」

そして、二人は一気に食堂へなだれ込んだ。

「少尉、感じませんか？何やら誰かがこちらを見つめるような視線を……………」

居間から続く廊下を中程まで進んだ所で、すみれが大神に問い掛け

た。

「俺も感じた。やはり俺達のほかに誰かいるのだろうか？」

大神も先程居間で感じた視線を思い出して答える。

すみれは目を閉じ、意識を集中させた。

「……………、見つけましたわ！一番奥の部屋から、強い霊力を感じますわ！」

「一番奥だね？よし、行って見よう！」

二人は一番奥の部屋に乗り込んだ。

「あれ……………？」

「誰も……………いませんわね……………」

そこは大きな鏡が向かい合って二つ置いてあるだけの、質素な部屋だった。

人影は無く、隠れる場所もない。

すると、すみれがハッと何かに気づいた。

「少尉、先程の霊力……………今度は左の方から感じますわよ！」

「左は手前の部屋だ。という事は……………、俺達に気づいて移動したのか？」

「とにかく少尉！私達も手前の部屋に参りますわよ！」

言いが早いか、すみれは鏡の部屋を飛び出した。

「す、すみれくん！」

大神は慌ててすみれを追いかけた。

しかし……………」

「…………… いませんわね」

「……………」

手前の部屋は鏡の代わりに二つの柱時計を向かい合わせた部屋だった。

しかし、やはり霊力の正体と言えるものはない。

「どう思われます、少尉？たしかに近くには感じるんですが……………」

いつになく真剣な様子のすみれが、嘘を言うとは思えない。  
となれば……………」

「もしかして、部屋の間何かあるんじゃないか？」

大神が考えを述べると、すみれはピンと閃くものを感じた。

「なるほど、これで謎は解けましたわ！」

「本当かい、すみれくん！」

驚きの表情を見せる大神に、すみれは勝ち誇った様子で答えた。



「ついてらっしゃいませ少尉。この神崎すみれが、華麗なる名推理を披露いたしますわ!!」

廃墟の食堂は、沈黙から一転して激しい乱闘の騒音に包まれた。無数の脇侍に、秀介とカンナは生身で挑み掛かったのだ。

それに気づいた脇侍達も、獲物を見つけて一斉に襲い掛かって来た。

「てええっ!!」

秀介のスパークソードが一閃し、目の前の脇侍を真っ二つに切り裂いた。

「おらあっ!!」

カンナも自慢の拳を叩き込み、脇侍の頭部を吹き飛ばす。しかし、脇侍は次から次へと現れ、キリがなかった。

「畜生っ、何て数だ!!」

悪態をつくカンナ。

その時、秀介が叫んだ。

「カンナさん、伏せて下さい！」

言われるままにテーブルの下に屈むカンナ。  
すると、秀介はテーブルに片手で逆立ちした。

「喰らええっ！」

秀介は逆立ちした片手を軸に身体をコマのように回転させ、スパークソードで脇侍を一気に切り付けた。  
ほとんどが一瞬で真っ二つにされ、床に崩れ落ちる。

「おおっ、やるじゃねえか秀介！」

一部始終を見ていたカンナが称賛を送るが、秀介は厳しい表情のまま答えた。

「いえ、まだです！」

見ると、奥の方からぞろぞろと脇侍が現れはじめた。

「このままでは危険です。奥の部屋に立て籠もりましょう！」

「たしかに、それしかねえよな………！」

このままでは数に押し切られてやられる。

そう考えた二人は、ひとまず奥の部屋に逃げ込む事にした。  
ところが廊下に出た途端、二人の足が止まった。

いや、止まらざるを得なかった。

なぜなら、廊下は別の脇侍で埋め尽くされていたからである。

「嘘だろ…………、挟み撃ちかよ」

「迷っている暇はありません。一気に奥の部屋に突っ切りましょう」

「よし、行くぜ！秀介！！」

廊下の脇侍達が二人に迫る中、二人は奥の部屋を目指して脇侍の群れに飛び込んだ。

「少尉、よくご覧になって。この廊下に位置する二つの扉……………。何か変だと思いませんか？」

すみれに言われて、大神は改めて二つの扉を見た。扉そのものに仕掛けはない。しかし、大神も気づく事があった。

「そういえば……………、扉の間隔がかなり開いているな」

先程入った鏡の部屋も時計の部屋も、どちらも比較的小さな部屋だった。

それにしても、二つの扉はかなり離れている。まるで、一つ部屋を飛ばしているかのようだ。

「ま、まさか……………」

「そうですね！不自然な程開いた扉。恐らくこの二つの部屋の間には、もうひとつ部屋が存在するのですわ！」

すみれの感じた霊力の主。

それが中央の隠し部屋にいたと考えれば、遭遇できないのも納得がいく。

「さて、ここで隠し部屋の入口ですけど……」

「鏡の部屋じゃないかな？あの鏡の奥が気になるんだ」

「なるほど。では参りましょうか」

大神の提案で、二人は鏡の部屋に向かった。

「さっきは鏡に気を取られて気づかなかったが……ほら」

大神が片方の鏡をどかすと、奥の壁に区切りが見えた。

ちょうど大人一人が通れる程の大きさで、いかにも隠し扉である。しかし、それだけで通してくれる程、相手も甘くはなかった。

「少尉、この穴、ひょっとして鍵穴ではございませんか？」

すみれが隠し扉の一箇所を指差して尋ねた。

ちょうど大神の手の高さに、指一本分の小さな穴が空いている。

「そうか。やはり隠し部屋に入るには鍵が必要なのか」

顎に手を当て考え込む大神。

すると、大神はピンと閃くものを感じた。

「待てよ？確か時計の部屋の時計も向かい合わせだったな」

「たしかに……、普通は同じ部屋に二つも時計を置いたりしませんものね」

向かい合った鏡と時計……。偶然にしてはあまりに規則的だ。

「もしかすると、時計の部屋に鍵の手がかりがあるかも知れない。行って見よう、すみれくん」

「たしかに、隠し部屋なら別の場所に鍵を隠すでしょうからね。では、参りましょうか」

「……ハア……ハア……」

無数の脇侍の攻撃を逃れ、カンナと秀介はどうにか奥の部屋に逃げ込む事が出来た。

これで少しの間は時間を稼ぐ事が出来るだろう。

「大丈夫か、秀介？」

「このくらい……平気ですよ……」

心配そうなカナナに、秀介はあくまで平静を装ったが、状態は決して良くなかった。

スパークソードはブレスレットを媒体に光の剣を召喚する技だ。故に見た目以上にエネルギーを消費する。

ウルトラマンの状態ならば大した事はないのだが、人間体ではエネルギーに大きな制限がかかるため、スパークソードでもかなり厳しいのだ。

しかし、それをカナナに打ち明ける訳にもいかず、秀介はごまかすしか方法がなかった。

「……………」

「……………カナナさん？」

急に黙り込んだカナナを不思議に思い、秀介が声をかける。

その時、秀介は前の方から視線を感じた。

「!?!」

見るとうつすらではあるが、一人の少女が淋しげな表情で何かを語りかけてきた。

「ああ、そうか。悪かったな、騒がせちゃまって……………」

カナナには少女の声が聞こえたらしく、返事を返す。すると、少女は消え、視線も感じなくなった。

「カンナさん、あの娘は……………」

秀介が尋ねると、カンナは静かな口調で言った。

「……………あの娘な、ずっと前から父親が帰ってくるのを待ってるらしいんだ」

「父親を……………」

「ああ、何でもお化けを封印してるんだとよ。……………かわいそうだよな」

カンナの口から語られる言葉に、秀介は応える事が出来なかった。

二つの柱時計が向かい合わせに立っている時計の部屋。

隠し部屋の扉を開く鍵を探して、大神とすみれは再びこの部屋に来た。

「もう誰も、ゼンマイを巻いたりしませんのね……………」

悲しげに呟くすみれをよそに、柱時計の片方を調べる大神。すると、意外な事がわかった。

「あれ？この時計……………、針が固定している」

「ハア？それでは意味がないではありませんの」

大神の言う通り、左側の柱時計は針が4時に固定されていた。

「……………待てよ？」

ふと何かに気づいた大神は、今度は右の時計を調べはじめた。

「やはりそうか。右側の時計は針が動く。きっとこの針を調節すれば、何かが起こる仕掛けだ」

「確かに。で、何時に合わせますの？」

「……………、8時に合わせて見よう」

「なるほど、合わせ鏡ですわね！」

二つの柱時計は、まるで鏡に写したようにそっくりだ。  
ならば、4時を鏡に写した8時に針を合わせれば何かが起こるんじゃないか。

大神のこの予想は、見事に的中した。

「少尉、鍵が出てきましたわ」

恐らくかなり好条件で保管されていたのだろう。  
鍵は未だに銀色の輝きを放っていた。  
……………が、

「……………上手くはまらない？」



意気揚々と鏡の部屋に戻った二人だったが、どういつ訳か鍵が合  
わないのだ。

状況からみて、鍵はこれで正しいはずなのに。

「少尉……………、もしかするともうひとつ、鍵を開けるのに必要な何  
かがあるのかも知れませんわ」

「たしかに……………」

鍵は鍵穴より小さいだけで、入らない訳ではない。

という事は、すみれの言う通りもうひとつ、鍵と合わせて使う何か  
があると言う事になる。

しかし、鏡の部屋も時計の部屋も十分に調べた。

ほかに調べる場所などあるだろうか……………。

そう考えた時、大神の耳に何処からか音楽が聞こえて来た。

「この音……………、オルゴールか？」

「少尉、居間の方からですわ」

「よし、行って見よう」

「なるほど……、シリンダーが鍵になっていたのか」

大神が聞いた音楽の正体は、居間の暖炉の上にあったオルゴールだった。

外見は小物入れだが、中はきちんとシリンダーが入っていて、何らかの拍子に音が鳴り出したのである。

さらに、シリンダーには鍵がはまる穴があり、ちょうど指一本分の鍵になったのだ。

「……………、よし、開いたぞ」

扉を開けて、二人はようやく霊力の主がいるであろう空間、隠し部屋の中に入った。

「……は……………書斎か？」

左右は巨大な本棚で、中には無数の書物がぎっしりと詰まっている。と、その時、すみれが背後を振り返って叫んだ。

「少尉、後ろをご覧になって！」

「え？……………あ、あれは！」

言われるままに背後を振り返った大神は驚きの声を上げた。

なぜなら、そこには一人の少女が淋しげな表情でこちらを見ているからだ。

「……………そう、そうだったの。もう大丈夫だから、みんなの所へお行きなさい」

すみれには少女の言葉が理解できたらしく、元気づけるように優しく語りかけた。

すると、少女は一瞬微笑んで、消えてしまった。

「すみれくん、あの娘は………?」

大神が尋ねると、すみれは悲しげな表情のまま答えた。

「あの子、自分が死んだ事も分からずに父親の帰りをずっと待っていたそうですわ………」

「父親を?………、何かあるぞ?」

大神は少女のいた場所の奥にある机の上に一冊の本を見つけ、手に取った。

それは、少女の父親が遺したと思われる日誌だった。

「……… 賢人機関から再び要請が………」

……… 娘の持つ霊力を殺戮になど………」

さらに我が一族は、代々この地に眠る二鞭の怪獣を封印し………」

……… よって我が命を以って屋敷全体に結界を………」

日誌は損傷が激しくほとんど読めなかったが、大体の真実は掴めた。この屋敷は代々ある怪獣を霊力で封印する事を使命としてきたが、賢人機関からあの少女を軍事目的に利用しようとしたため、主人は命を犠牲に屋敷を結界に包み、娘を守ったのだろう。

「……… 馬鹿な親ですわ。守ったとしても側にいてあげなければ、娘は嬉しくもないでしょうに………」

「それだけ、あの子を愛していたんだよ。それは、分かってくれないか？」

「分かるから、馬鹿と言うのですわ……………」

そこまで言つて、すみれは普段通りの口調に戻った。

「さて、幽霊騒ぎの謎もハッキリしましたし、体力バカのカンナさんを回収致しましょう。いつまでも秀介さんに任せていては、かわいそうですわ」

「ハハハ、そうだね」

「……………どうやら、終わったみたいですね」

「ああ、全く……………しぶとい連中だったぜ」

荒い息で呟く秀介に、同じく荒い息でカンナが応えた。

あれから二人は、扉を破つて侵入してきた脇侍の軍勢を相手に、凄まじい死闘を繰り広げていた。

部屋の至る所には戦いの激しさを物語る傷が無数に残っており、周りは脇侍の残骸で足の踏み場所もないほどだった。

「隊長とすみれさんが心配です。僕らも合流しましょう」

そう言つて脇侍の残骸を退けながら進み始める秀介に、カンナが応えた。

「悪い秀介、先に行つててくれねえか？あたいは……………、あの娘に飴玉やつて、部屋掃除してやりたいからよ……………」

「……………分かりました。でも、なるべく早く合流して下さいね」

そう言つて、秀介はカンナを残して部屋を後にした。

「……………御剣 秀介。いや……………、ウルトラマンジャックと呼んだ方がいいかな？」

「お前は！」

食堂を通りかかった秀介は、突然の声に振り返つた。

そこには、暗闇の奥から顔を覗かせる、漆黒の忍者の姿があつた。

「蝸……………!!」

「さすがに覚えてもらえたようだな。我が配下のタツコングを倒すとは、中々の腕と言える」

秀介を前にして悠々と言葉を並べる蝸。

秀介は身構えつつ、蝸に尋ねた。

「お前達、この深川で何を企んでいる！？目的は何だ！」

「いずれ分かる事だ。それよりも、君は仲間の心配をするべきではないかな？」

蝸がそう微かに笑った時だった。

「きゃあああああっ！！！」

「この声は………、すみれさん！？」

秀介は驚いて居間の方を見た。

刹那、秀介は正面から凄まじい殺気を感じ振り返ると、眼前に白い何かが目撃された。

「すみれくんっ！大丈夫か！？」

大神がすみれのいる居間に飛び込んだのは、すみれの悲鳴が聞こえてすぐだった。

あの後カンナと秀介に合流しようとした大神に、すみれはオルゴールを返して来ると言っ、一人居間に戻ったのだ。

「し、少尉！助けて下さいまし！蜘蛛が……蜘蛛が……！」

「……………蜘蛛……………？」

見ると、手の平サイズの小さな蜘蛛が、すみれの手の上にちょこんと乗っていた。

「きゃっ！く、蜘蛛が私を噛みましたわ！」

「何！？えい、この蜘蛛あっち行け！」

大神は蜘蛛を捕まえると、外に向かってぶん投げた。

「すみれくん、蜘蛛は外に放り投げたよ。もう大丈夫だ」

大神はすみれを元気づけるように言った。

しかし、すみれはぐったりした様子で呟いた。

「ああ……………あれはきつと毒蜘蛛……………。私、もう駄目ですわ……………」

ちなみに今の蜘蛛はアシダカクモと言って、人畜無害だったりする。それはともかく、大神は弱ったすみれをそつと抱き起こした。

「すみれくん、しっかりしろ！」

「少尉……聞いて下さいまし……」

弱々しい声で、すみれは続けた。

「カンナさんはああ見えて、無鉄砲な方ですわ……誰かが側で歯止めをかけないと、危険過ぎますわ」

「すみれくん……」

「ですから少尉……もし私が力尽きた時には、代わりにカンナさんを……」

「弱気な事を言っんじゃない、すみれくん。君がそんな事でどうするんだ」

すみれの後の言葉を遮るように、大神が言った。

「少尉……」

「そんな事を聞けばカンナだって怒るぞ。今毒を吸い出してやるからな」

「え……？し、少尉!？」

すみれは途端に顔を真っ赤に染めた。

自分の手の甲に大神が口づけたのだから、当たり前と言えば当たり前である。

「……よし、こんな所だろう。一応布で縛っておこうね」



べつにしなくても良いのだが、蜘蛛に噛まれた左の手首を布で縛る。すると、不意にすみれが大神に話し掛けた。

「……………少尉には、話しておかなければなりませんわね」

あれは、八年ほど前の事だったかしら……………

父は神崎重工の社長、母はブロードウェイのトップスター……………二人とも、娘の誕生日にすら家にいられないほど、忙しい毎日でした……………

豪華なプレゼントなんて、欲しいとも思わなかった。ただ、家族で過ごせたら……………悔しくて悲しくて……………庭に飛び出したんです……………

その時、蜘蛛の巣が引っ掛かって……………

泣いても、叫んでも、誰も来てはくれませんでした……………

「……………それで、蜘蛛だけは苦手だったんだね」

大神が言うと、すみれは自嘲気味に笑って見せた。

「ふふ、滑稽な話ですわ。帝劇のトップスターともあるう者が、蜘

蛛なんかを怖がるなんて……………」

「誰にでも怖いものはあるさ。でも、今すみれくんは一人じゃないだろう?」

「……………ええ、そうでしたわね」

大神の言葉で何かがつっ切れたのか、すみれはようやく本当の笑顔を見せた。

「参りましょう、少尉。蜘蛛ごときでへこたれていては、カンナさんに笑われてしまいますわ」

「その意気だぞ、すみれくん」

完全に立ち直った様子のすみれに大神が安心した時、今度は食堂の方から悲鳴が聞こえて来た。

「ぎゃあああああ!」

「い、今の声はカンナさんでは……………!?」

「まずい、二人に何かあったのか!」

秀介とカンナの無事を祈りながら、大神とすみれは食堂に急いだ。

「秀介っ！！」

食堂に飛び込んだ大神とすみれが見たのは、無数に散らばる脇侍の残骸と、その奥に倒れている秀介の姿だった。

「た、隊長……………すみれさん……………」

「秀介さん、しっかりなさって！」

すみれが秀介の上半身を、そっと抱き起こす。

秀介の身体は目立った外傷はなかったが、霊力を使いきったのかボロボロだった。

「隊長……………カ、カンナさんが、奥の部屋に……………」

「……………分かった。すみれくん、秀介を頼む」

秀介をすみれに任せ、大神はカンナのもとへ急いだ。

「カンナっ！大丈夫か！？」

大神がカンナのいる部屋に飛び込んだ。

そこには、天井のシャンデリアにしがみついたカンナの姿があった。

「た、隊長！助けてくれ！蛇が……蛇が……！」

「……………蛇……………？」

見ると、手の平サイズの小さな蛇が、カンナの真下のテーブルにちよこんと乗っていた。

「え〜い、この蛇あっち行け！」

大神は蛇を捕まえると、外に向かってぶん投げた。

「カンナ、蛇は外に放り投げたよ。もう大丈夫だ」

大神はカンナを元気づけるように言った。

しかし、カンナはシャンデリアにしがみついたまま動かなかった。

「す、済まねえ隊長……腰が抜けちゃって……動けねえんだ……」

ちなみに今の蛇はアオダイショウと言って、人畜無害だったりする。

「カンナ、俺が抱き降ろしてやるから」

「あ、ああ……………、頼むよ、隊長」

大神は、カンナを優しく抱えた。

すると、カンナが顔を赤くして言った。

「ごめんな、隊長……。あたい、重いだろ？」

「大丈夫さ。無理に降りてカンナがケガする方が心配だ」

「隊長、アンタには……。話してもいいかな」

大神の腕から降りて、カンナは躊躇いがちに語りはじめた。

小さい頃から、修業、修業、とにかく修業……

物心ついた時から、親父は空手以外を口にした事はなかった。

修業は嫌いじゃなかった。

でも、ほかの子供が親と楽しそうにしているのは、どうしても羨ましかった。

親父が出かけたあの日……

あたいはいつものように修業をしてた。

その時に蛇に噛まれちまったのさ。

泣いても叫んでも、誰も来やしない……

自分が一人だって、その時分かったよ。

「そうか、それで蛇が……」

「へっ、情けねえよ……。蛇なんか恐がって、桐島流が泣くぜ」

「そんな事はない。誰にだって苦手はあるさ。でも少なくとも、カンナは今一人じゃないだろう?」

悔しげに呟くカンナに大神は優しく言った。

すると、カンナは少しだけ笑顔を取り戻した。

「ありがとな、隊長。……………うっ!」

「カンナ!？」

急に脇腹を押さえて膝をつくカンナに、大神は慌てて駆け寄った。

「どうした!何処か痛むのか?」

「ああ……………さっき脇侍どもとやり合った時にちょっとな……………。  
隊長……………」

ふと、カンナが真剣な表情で言った。

「すみれは、ああ見えて淋しがり屋だよ。あたいがかまってやらねえと、すぐ傷付いちまうんだ。だから……………」

「カンナ……………君もすみれくんが、心配なんだね」

大神が意外そうに言うと、カンナはビックリしたのか目を丸くした。

「そ、そんなんじゃないやねえよ!あ、あたいはただ……………あんな高飛車女が誰かに迷惑かけないか心配で……………」

「分かってるさ。カンナ、立てるかい？」

「ああ、もちろんだ。早いところあのサボテン女の所に行くとするか  
！」

先程のダメージは何処へやら、カンナは勢い良く立ち上がった。

「カンナさん、無事でしたのね！」

「当たり前さ。さっきは隊長に助けられたけどな」

元気そうなカンナの姿に、安堵の表情を見せるすみね。

その様子を微笑ましく思いつつ、大神はカンナと秀介に尋ねた。

「ところで二人とも。この脇侍達は一体………？」

「ああ、こっちに来てすぐに出くわしちまってね」

「二人掛かりで、どうにか片付けたんです」

秀介が立ち上がって応える。

どうやら蝸に受けた攻撃のダメージも回復したらしい。

「そして、先程蝸に遭遇しまして、向こうの地下に逃げられてしま  
いました」

そう言つて、秀介は食堂の奥の扉を指差した。

が逃走に使つた地下への入り口。  
そこには、蝸ではなく一体の脇侍が、何やらコソコソと作業している姿があつた。

「あれは、脇侍……………」

「何をしてるんでしょうか……………?」

「何やらお札を張り付けてるようですわね」

「関係ねえよ。こっちは四人だ、一気にやっちまおうぜ」

しかし、正に脇侍を取り押さえようとした瞬間、四人の前を一瞬何が過ぎつた。

それは、今一番会いたくないもの達だつた。

「……………こ、この気配は……………」

「も、もしかして……………」

「まずい！二人とも伏せろっ！」



案の定慌てはじめた二人を止めるべく、大神は懐から銃を出し、蜘蛛と蛇を先に始末しようとした。

が、これが失敗だった。カンナとすみれに銃口を向けたために、余計二人の恐怖心を煽ってしまったのだ。

「お、おい隊長何やってんだ！」

「銃口がこちらを向いてますわよ！」

「二人ともじつとして！危ないぞ！」大神が慌てて叫ぶが、二人は聞く耳を持たない。

「う、撃つな〜！」

「お助けえ〜！」

「……………あら？」

「生きてる……………」

散々あわてふためいた二人が正気に戻ったのは、蜘蛛と蛇がその場を離れてから、ややあつての事だった。

「へへ、何か分かんねえけど……………」

「無事で何よりですわ……………」

「カンナ、すみれくん、聞いてくれ」

その場にへたりこんで笑う二人に、大神が話し掛けた。

「二人はそれぞれ別の幸せを求めていた。カンナはお父上から惜しまない愛情を受けたし、すみれくんはご両親から何不自由なく育てもらった……………」

二人は、全く違う愛情を受け、互いにそれを無い物ねだりしていた。二人の過去の話を聞いて、大神はそう考えたのだ。

「でも、いつまでも誰かに甘えていてはいけない。いつかは自分の足で立つて行かなきゃならないんだ」

それは、二人の心に重く響いた。

厳しくとも、側にいなくても、娘に対する愛情に違いはない。

大神のその言葉が、心に訴え掛けたのである。

「……………仕方ねえな、すみれ。一時休戦にすつか」

「……………異存はありませんわ」

以前の二人が交わすとは思えない言葉。

大神は真に人の心を知る人物だと、##NAME1##は改めて実感した。

「さて、そろそろ奴らを追い詰めるとしましょつか」

「そうですね！」

「腕が鳴るぜ！」

秀介の言葉に、気合い十分の返事を返す二人。  
その様子に頷き、大神は指示を出した。

「よし、敵を追いかけるぞ！」

「了解！」

「……………ここが出口か」

蝸を追って地下に突入した深川調査隊は、無数の札が貼られた地下通路を進んでいた。

「よつと……………」

カナナがマンホールの蓋を持ち上げる。  
すると、光が差し込んできた。

「ま、眩しい……………！」

「……………！！隊長、あれを！」

秀介がハツとした様子である地点を指差した。

そこには、無数の脇侍とともに何かの作業をしている蝸ともう一人、黒之巢会死天王紅一点の姿があった。

「なるほど、作業がやりやすい。屋敷に結界が張ってあったとは、さすがは蝸殿よ」

「お褒めに預かり、光栄ですな」

「……………黒之巢会ですわ！」

「畜生、よりによってこんな時に……………！」

カンナが悔しげに呟いた時、

「!?!」

マンホールの前に突如、クナイが突き立てられた。

「出て来なさい、そのネズミども！」

同時にミロクの鋭い声が飛ぶ。

どうやら敵に感づかれたようだ。

「くっ、仕方がない……………！」

恐らくは脇侍出現に伴い、帝劇でも出現準備が整えられているはず。

そう考えた大神は、時間稼ぎをする事をした。

「お前達、ここで何をしていた！」

「ふっ、まあ良い……。退屈しのぎに教えてやるっ」

意外にも、大神の策略に蝸が乗った。

「我々はこの深川である事を行おうとしたのだが、この屋敷の霊力が邪魔をしてな……………」

「それで、地下に札を張り付け、霊力を消したという事ですか……………」

主助が結論を口にする、ミロクが満足そうに笑った。

「ほう、そちらにもまともな頭を持つ者がいたのかえ？」

「失礼な！私だって分かりましたわ！」

「すみれくん、待つんだ」

ミロクに噛み付くすみれを静止し、大神は更に尋ねた。

「屋敷の霊力を消して何をするつもりだ！」

しかし、同じ手は二度も通用しなかった。

「悪いが、これ以上付き合う訳には行かん」

「何っ!？」

「お前達にはここで死んでもらう。行け、脇侍ども！」

ミロクの命令で、脇侍達がジワジワと大神達ににじり寄ってきた。光武もなく体力も尽き、正に絶体絶命だった。

「くっ……………！」

秀介は一瞬ブレスレットに目をやった。

が、蝸の視線に気づいてやめた。

もし今自分がウルトラマンに変身すれば、多少は戦況を覆す事が可能だ。

しかし、ウルトラマンの正体をばらす訳にはいかないし、怪獣以外の花組が倒すべき敵との戦いにウルトラマンの力を介入させるべきではない。

それに何より、蝸の不気味な笑いが気になったのだ。

しかし、そこに鋭い声が飛んだ。

「そこまでよ!」「この声は……………、さくらさん!」

上を見ると、そこには仲間達を乗せた翔鯨丸が見えた。

「さあ、貴方達も出撃よ!」

あやめの声と同時に、光武と流星が投下された。

「よっしゃあ、やったるぜ!」

「これで役者が揃いましたわ」

「隊長、命令を！」

気合い十分の隊員達に頷き、大神は叫んだ。

「帝国華撃団花組、出撃！これまでの借り、倍にして返してやる！」

「……………ちっ、逃げられたか……………！」

光武と流星に距離を取られ、ミロクは悔しげに言った。

「これから始末すればいい。先にこちらを済ませてはどうか？」

「ふむ、確かに……………」

蝸の言葉に納得し、ミロクは刹那や羅刹も口にしていた呪文を唱えはじめた。

「オンキリキリバサラウンバッタ、オンキリキリバサラウンバッタ、オンキリキリバサラウンバッタ……………」

すると、やはり空から巨大なドリルが現れ、廃墟の前に沈んでいった。

「よし、天海様の野望も、もうすぐ……」

満足げに呟いたその時、別の声が遮った。

「それはどうかしら？」

それは、翔鯨丸から廢墟の前を流れる川の対岸に降り立った、四機の光武のものであった。

「帝国華撃団、参上！」

戦いは小一時間とかからず集結した。中でもすみれとカンナの活躍はめざましく、あの娘の眠る地でもある深川を踏み荒らした黒之巢会への正義の怒りが十二分に感じられた。

「ミロク！ 蝸！ もう逃げ場はないぞ！」

脇侍を全滅させ、残った二人に刀を突き付ける大神。すると、蝸はニヤリと笑って見せた。

「随分と勇ましい事だな、帝国華撃団。……が、何か忘れてはいないかな？」

「何っ！？」



大神が聞き返した時、突然地面が揺れはじめた。

「な、何や地震かいな？」

「ハッ……し、少尉、これはもしか……！」

「どうした、すみれくん？」

すみれは青ざめた表情で口をつぐんだ。

まるで、その先が言えないとでも言うつように。  
すると、今度はカンナが口を開いた。

「隊長、もしかしてこりゃあ、あの娘の親父が封印したっていう怪獣じゃないのか!？」

「何だって!？」

そのままかだった。

揺れが一際激しくなった次の瞬間、川から水しぶきを上げ、巨大な怪獣が現れた。

巨大なブーツのように身体が直角に曲がり、上部の二鞭を振りかざし、顔と胴体が逆になった、奇怪な怪獣。

それは、大神が隠し部屋の書齋で読んだ日誌の怪獣と一致していた。

「アハハ……！古代怪獣ツインテール……。シルバゴンのように倒せるかえ？」

「これ以上の手出しは不要……。精々足掻くがいい」

古代怪獣の復活に驚く花組を尻目に、ミロクと蝸は転移魔術で消え去ってしまった。

「クワーツ!」

ツインテールは咆哮を上げながら、鞭を振るって暴れ出した。翔鯨丸で光武を回収しようにも、これでは近付けない。

「……………出番のようですね」

秀介は静かにそう呟くと、流星を自動操縦に切り替え、ブレスレットを掲げ叫んだ。

「ジャーーーーーック!!!」

「シュワツ!」

ジャックは、暴れるツインテールの前に降り立った。

「クワーツ！」

ツインテールもジャックの存在に気づき、襲い掛かる。ジャックも負けじと飛び掛かり、取っ組み合いになった。

「へッ！」

尻尾の鞭の根元にチョップを入れ、怯んだ所につかみ掛かる。しかしその時、ツインテールはジャックの足に噛み付いた。

「アアツ!?!」

不意を突かれたジャックは思わず手を離してしまふ。その首に、ツインテールの鞭が巻き付けられた。

「やべえ、ウルトラマンが……………!!」

苦しそうにもがくジャックを見て、思わずカンナが叫んだ。

「よし、マリアー!紅蘭!!」

「ほい来た!」

「了解!」

大神の指示を受け、二人はツインテールの背中に攻撃を仕掛けた。

「スネグーラチカ!」

「チビロボ軍団、発進！」

致命傷とまではいかないものの、ツインテールの注意が後ろに引いた。

「クワーツ！」

ツインテールはジャックの首から鞭を離して、真後ろに鞭を振るった。

「おっと危ない！」

あわやマリアと紅蘭に当たるかと思われた攻撃は、二人が先に後ろに下がったために地面を削るに留まった。

ここで攻撃に転じる者がいた。ジャックである。

「シュワツ！」

助走をつけたジャンプでツインテールを飛び越え背後に回る。

「ヘアアツ！！！」

すかさず背中を蹴りを入れ、今度は背中からツインテールを捕まえた。

「クワーツ、クワーツ！」

背中を捕まえられ、これでもかと抵抗するツインテール。

その時、すみれが不意に口を開いた。

「……………少尉、先程から気になっていたんですけど、あの怪獣は本当に封印されていた怪獣だけなんでしょうか？」

「どういう事だい？すみれくん。」

大神が尋ねると、すみれは悩ましげに答えた。

「私だけかも知れませんが、何やらこの辺り一带に、別の気配が迫って来ていますの。まるでこちらに向かっているようですわ」

「何だつて？ツインテールの他に、封印された怪獣がいると……………」

大神がそう言いかけた時だった。

深川一帯を、再び震動が襲ったのだ。

「こ、今度は何だっ!？」

「間違いありませんわ！本当に封印されていたのは、こちらの方だったんですわ……………！」

すみれがそう言った瞬間、ツインテールの前方の地面から、別の怪獣が現れた。

「グオオオオン!!」

両腕の鞭と凶悪な面構え。

深川に封印されたもう一体の怪獣。

それは、地底怪獣グドンだった。

「そうか……、二鞭の怪獣とは、この事だったんだ……」

二つの鞭を持つ怪獣ではなく、鞭を持つ二匹の怪獣……。大神はここにいたって、ようやく日誌の意味を理解した。

「クワーツ！」

グドンを目にしたツインテールは、一層抵抗を激しくした。そして、ジャックを前に投げ飛ばしたのである。

「へッ……！」

起き上がったジャックはハッとした。

なぜなら、ジャックはグドンとツインテールに挟み撃ちにされていたからだ。

「（くそっ、二匹同時に戦うとは……！」）

ジャックは迷いながらも、最初の狙いをグドンに定めて飛び掛かった。

グドンはツインテールほど奇怪な姿ではないので、戦いやすいと考えたのである。

しかし、その考えは一瞬で消えた。

「グオオオオン！」

何とグドンは、ジャックの身体をいとも容易く跳ね飛ばしたのだ。

「クワーツ！」

さらに倒れたジャックの背後に回ったツインテールが、ジャックの首を再び鞭で締め上げた。

「アアッ！」

満足に動けないジャック。

するとグドンは、ジャック目掛けて両腕の鞭をたたき付けてきた。

「へッ………！」

何とか鞭をほどこうともがくが、ツインテールは離さない。

そんな中、アイリスがある事に気づいた。

「ねえ、ウルトラマンの胸の所、何か光ってるよ？」

「え？」

言われて見ると、ジャックの胸のカラータイマーが赤く点滅を始めていた。

グドンの激しい攻撃で、ジャックは体力が底を尽きかけているのだ。しかし、ここでやられるジャックではなかった。

「シュワッ！」

一瞬の間をついてグドンの腹に蹴り込み、大きく後方に吹っ飛ばす。さらに、ツインテールを背負い投げの要領で前に投げ飛ばした。

「へアアッ！」

「クワッ！」

ツインテールはグドンの上に落とされ、フラフラになりながらも立ち上がった。

その時、背後からツインテールを捕まえるものがいた。グドンである。

「クワーツ、クワーツ！」

必死で逃げようとするツインテールを押さえ付け、鞭の根元に食らい付いた。

ツインテールは、グドンの餌だったのだ。

「クワーツ、クワーツ！」

ツインテールの声がちまちま悲鳴に変わり、次第に動きが鈍くなっていく。

「グオオオオン！」

グドンはツインテールを地面にたたき付けると、先程のジャックと同じように、激しい鞭の嵐を浴びた。

「ク、クワーツ………！」

弱ってまともに動けないツインテールをいたぶるかのごとく鞭を振るうグドンの姿は、拷問を想起させるほど残酷さに満ちており、カクナすら声もでなかったほどだ。

「グオオオオン」



ツインテールの息の根をとめ餌にありつこうとした時、グドンは顔面にジャックの飛び蹴りを喰らった。

「グオオオオン！」

「シュワッ！」

ツインテールの骸の前で取っ組み合いになる。

しかし、グドン1対1ではジャックには敵わなかった。

「ヘアアッ！」

ジャックはグドンを抱え上げると、脳天から地面にたたき付けた。

「グオオオオン！」

ショックで起き上がれずにその場をはいずり回るグドン。

ジャックはすかさず、スペシウム光線を打ち込んだ。

「シュワッ！」

グドンは木っ端みじんに吹き飛び、ジャックは空に飛び立って行った。

長い間封印されてきた二匹の怪獣、グドンとツインテール。

それはウルトラマンジャックによって、完全に葬られたのだった。

「……………すみれ、その……………お前も中々やるじゃねえか」

戦いが終わり、カンナがすみれに話し掛けた。

その表情は、どこと無く恥ずかしそうに見える。

「あたいだけじゃ、あの鍵は見つけられなかっただろうし、その…  
……………見直したぜ」

「そ、そういう事でしたらカンナさんこそ、あの数の脇侍をやつつけたではありませんか。わ、私だって、カンナさんを見直しましたわ」

今までの二人からは考えられない会話。

大神は、微笑ましく頷いた。

「力のカンナと知恵のすみれくん。二人が揃えば、怖いものなしだな」

「ま、まあそうですね。カンナさんのバカ力と私の天才的頭脳を以ってすれば……………」

大神の言葉に照れながら返事をするすみれ。

しかし、それを良しとしないものがいた。

カンナである。

「何だと！？人が褒めてやりや図に乗りやがって！お前のは悪知恵

だろうか！」

「なんですって！？バカにバカと言って何の問題がありますの！」

「ふ、二人ともやめてくれよ……。ああ、胃痛が……」

せつかくの苦勞が水の泡になり、大神がその場に倒れる。すると、さくらがすかさず救急箱を持って駆け寄った。

「大神さん大丈夫ですか？今手当てしますから……」

すると、喧嘩していたすみれとカンナがそのままの勢いで割り込んで来た。

「少尉は私が手当て致しますわ！さくらさんは引っ込んでなさい！」

「お前じゃ治るもんも治らねえよ！えい、さくらは邪魔だ！」

「え……。きゃああああ……。！」

何と、カンナはさくらの首ねっこを掴むと、遠くに放り投げてしまった。

「さ、さ……。さくらさん……！」

血相をかえてさくらを追いかける秀介。それを尻目にカンナは大神に尋ねた。

「隊長、何処が痛いんだ？あたいが診てやるよ」

「あ、あの……さくらくんが……」

「秀介さんに任せておけばいいですわ。さ、少尉。私が……」

「邪魔するなすみれ！お前がやったらケガが増えちまうだろうが！」

「あーら、カンナさんのような乱暴者に任せる方が危険ですわ！」

「何だとお！この腐れババア！」

「何ですって！このゴリラ女！」

大神を放つての二人の口喧嘩は、さくらを救出した秀介が戻って来ても、まだ続いていた。

「あゝあ、いつものすみれとカンナに戻っちゃった」

「そうね。でもあの二人は……」

「ああ見えて、実は結構気が合うんかも知れへんな」

「黒之巢会も撃退したし、めでたしめでたしですね」

「はい……さくらさん……」

さくらが足をくじいたため、救出した時からずっとさくらをお姫様抱っこしている秀介がやけにニヤつきながら応えると、ただ一人めでたくない男の声が聞こえて来た。

「い、胃が……。だ、誰か……。俺を助けてくれえ……」

見えない友情（後書き）

《次回予告》

これからは科学の時代や！

ウチの発明でドカンと一発、笑いと笑顔を取つたるでえ〜！！

次回、サクラ大戦！

《光武の願い》

大正さくらにロマンの嵐！

この子らは、ウチを必要としてくれるんや！！

## 光武の願い（前書き）

「熱き血潮に」で賛否を巻き起こしたという追加シナリオから。  
個人的にはアリなんですが……。

## 光武の願い

「お〜いみんな、お疲れ様〜……………つて、あれ？」

今日の公演が終了し、袖にやって来た大神。

しかし、既に花組の姿はなく、紅蘭が返事を返した。

「あ、大神はん。みんなは楽屋におるで」

「そうか…、じゃあすれ違ったな。……………紅蘭は行かないのかい？」

みんなが楽屋に集まる中、紅蘭だけが舞台に残るのも変な話だ。すると紅蘭は手元の工具を見せて言った。

「ウチはこれから壊れたセットの修理や。すみれはん、また無茶やつてセット壊したやろ？」

その言葉に、大神は思わず苦笑いを浮かべた。

すみれはトップスターの自負のためか客に煽られてのアドリブが多く、そのために舞台のセットがしょっちゅう壊れているのだ。まあ、今までで一番の被害は愛ゆえにの時のさくらなのだが。

「で、でもお客さんは喜んでくれたから……………」

「そつやな、お客さんが喜んでくれるなら、しゃあないわな」

お客さんが喜んでくれる事が、舞台をやる人間にとって一番すみれのやり方は、間違いでは決してない。

幸い紅蘭も分かってくれたらしく、大神の言葉を肯定した。

「それじゃあ俺、みんなの所に行って来るよ」

そう言つて、大神は舞台を後にする。

紅蘭は笑顔で見送つたが、大神の姿が見えなくなると、ため息をついた。

「しゃあない訳ないやろ……。この子らの事、何やと思つとるんや……………」

紅蘭は工具を手に、舞台へ歩いて行つた。

「やっと来てくれましたね、隊長」

楽屋に来た大神を、秀介が出迎えた。

既に楽屋には、紅蘭を除く花組メンバーが集まっている。

「今、明日の西遊記の千秋楽について会議をしていたんです」

「千秋楽の？」

「はい、殺陣を盛り上げるか、ストーリーをより高いものにするかで別れてまして……………」



舞台の最後の公演を、千秋楽という。

見納めにと客が詰め込む訳なので、こちらとしては一番の稼ぎ時だ。しかし、千秋楽には一度見た客が再び見に来るケースが少なくない。そのため、何度も足を運んでくれた客への感謝として、千秋楽の舞台は最高の仕上がりを見せるのが、舞台を作る側の礼儀というものだ。

当然その舞台の見所を中心にグレードアップすれば良いのだが、この西遊記の千秋楽は見所が二つ存在する。

一つが全編通しての殺陣。

悪者オーラ満点の妖貴婦人を正義のヒーロー孫悟空がやつつけるシーンとは、間違いなく見所と言えるだろう。

これは妖貴婦人を演じるすみれの考えであった。

「西遊記のハイライトは、何と言ってもこの立ち回りですわ。演じていて、客の注目がわかりますもの」

一方、西遊記におけるもう一つの見所。

それは、深いテーマを持ったストーリーである。

話の流れは、三蔵法師と旅をする孫悟空が、瀦八戒や挫五浄と共にとある町を苦しめる妖怪の首領、妖貴婦人を倒すという、いわゆる勧善懲悪なのだが、これに変化を加えて深い内容にしようというのだ。

これは、今回裏方として舞台を見る立場だったマリアの考えだった。

「殺陣のみでは、子供達は喜びますがストーリーが希薄になります。寧ろ高年齢層をターゲットに、練ったストーリーを見せるべきかと」

妖貴婦人は一見町から食べ物奪う悪者だが、その背景には沢山の子分を空腹から救いたいという思いがあったという裏設定がある。

その事から、ただ妖貴婦人を倒せばいいのかという自問を、客にし

て貰おうというのだ。

結局協議の結果、殺陣中心派がすみれ、カナナ、アイリス、ストーリー中心派がマリア、さくら、秀介となった。

大神は最後まで迷っていたが、結局は客は殺陣を期待するからという事で、殺陣中心に決定した。

「おっっほっほっほ！明日の千秋楽が楽しみですわね！」

自分の思った通りの結果に満足のすみれ。

そこへ、セットの修理を終えた紅蘭がやって来た。

「お疲れさん。千秋楽の方針は決まったかいな？」

「紅蘭、いい所に来ましたわ！」

紅蘭の姿を見るや、すみれが真っ先に飛んで来た。

「紅蘭、実は明日の千秋楽の事です。お願いがありますの」

「お願い？まあウチに出来る事やったらええけど………」

「実は千秋楽は殺陣中心にグレードアップする事に決まりましたの。そこで、千秋楽用のセットを準備してほしいのですわ」

あれだけセットを壊してよく言うと思いつつ、大神は黙って話を聞いた。

「でも、そのセット千秋楽しか使わんのやろ？」

「いいではありませんの、一回だろうと。ほら、少尉も頼んで下さ

いまし」

「いいっ……………!?!」

余程セットの追加がほしいのか、すみれは近くの大神に同意を求めた。

大神は躊躇ったが、双方の気持ちを考えて遠慮がちに言った。「…紅蘭、嫌ならいいんだ。でも、舞台を良くしたいすみれくんの気持ちには、分かってほしい……………」

すると紅蘭は、ため息混じりに了承した。

「……………ええよ。みんなで決めたんやろ？」

「さすがは紅蘭!話が早いですわ。では、千秋楽のセットお願いいたしますわね」

「うん。それじゃ、ウチ光武の整備があるから」

上機嫌のすみれにそう答えると、紅蘭は楽屋を後にした。

「……………大神さん」

会議が解散になった後、さくらが大神を呼び止めた。

「さっきの紅蘭、なんだか元気がないと思いませんか？」

「さくらくんもそう思うか。俺もずっと気になっていた」

すみれとのやり取りの以前に袖幕で見た時から、どこと無く紅蘭の様子がいつもと違った。

今日の紅蘭は、笑顔に明らかに陰りがあった。

「もしかしたら、何かに悩んでいるのかも……。その時は大神さん」

「分かってる。支えてあげるんだよね」

「はい、お願いします。紅蘭はあたしにも悩みを言わない人だから……」

紅蘭は明るい反面、悩みを誰かに打ち明けようとしない人物だった。ムードメーカーである以上、暗い雰囲気の花組の中に持ち込みたくないのだろう。

「それじゃあ大神さん、紅蘭の事お願いしますね」

そう言って、さくらは部屋に戻って行った。

大神は簡単に帝劇内の見回りを済ませ、地下の格納庫に向かった。

中では大神達と共に戦う戦友、光武が横一列に並んでいる。  
紅蘭は、そこにいた。

「ああ大神はん、どないしたん？」

大神の姿に、紅蘭は意外そうな顔で言った。

確かに、出撃でもないのに格納庫に人が来るのは珍しい。

他に用事があつて来るような場所ではないし、整備は専門のプロに任せている。

大神も紅蘭に用事があつたのであつて、光武に用事があつた訳ではなかった。

「紅蘭の様子が気になってね。さっき、元気がなかつただらう？」

「そうか、おおきにな大神はん。……………せやけど、ウチの事は放つとつてくれて構わんのやで？」

申し訳なさそうに背中を向けると、紅蘭は続けた。

「それに、この子らはウチがきちんと整備してやらんと。この子らにはウチが必要なんや」

「本当に、光武が好きなんだね。……………でも、無理は良くないぞ？」

「……………ウチの事は心配しても、この子らの心配はせんやね」

「どつという意味だ？俺は紅蘭を心配して言っているんだぞ」

紅蘭にしては珍しく棘のある言葉に、大神は眉をひそめた。  
すると、紅蘭は更に大神を睨みつけて来た。

「ほな、機械には代わりがあるんや。壊れても直せばええって言うんや！」

「紅蘭……………」

大神は困惑した。

ここまで他人に攻撃的な紅蘭を見るのは初めてだったからだ。

「みんなで決めたか知らんけど、一回しか使われへんやなんて可哀相過ぎるやないか……………」

その言葉に、大神は直感した。

紅蘭は楽屋でこそ言わなかったが、本当はすみれの考えに反対していたのだ。

しかしその時、格納庫内に警報が鳴り響いた。

「くつ、敵襲か!？」

ある意味最悪のタイミングだった。

「紅蘭、作戦司令室に急ぐぞ！」

「せ、せやけど光武の微調整がまだ……………」

「今は動けばいい!事態は一刻を争うんだ!」

紅蘭の言葉を遮るように、大神が言った。

こんな夜間の襲撃では、住民の避難が完了していないはず。すぐにでも出撃して、被害を抑えなければならなかった。

「……………了解や」

その事に気を取られてか、大神は紅蘭の心情に気づかなかった。

既に作戦司令室には、大神と紅蘭を除くメンバー全員が集まっていた。

「大神一郎、李紅蘭、ただいま到着しました」

「よし、状況を」

米田の指示で、あやめが状況の説明をはじめた。

「襲撃地点は上野公園。夜間という事もあって、避難が完全ではないわ」

「急いで向かわないと、被害が拡大しますね！」

さくらの言葉が、今回の事態の緊急性を明確に表していた。

しかし、今正に出撃の命令が出されようという時に、待ったの聲が上がった。

紅蘭である。

「そんなん言うても、まだ光武の整備は終わってへんのやで？」

「いいではありませんの。壊れても修理すれば良いだけの事ですわ」  
「それ、どういう意味や……………!」

あしらうようなすみれの言葉に、珍しく紅蘭が噛み付いた。

「ど、どうなさいましたの紅蘭!？」

「光武かてウチらの大事な仲間や。そんな冷たい事言わんといて!」  
いつもと迫力の違う紅蘭に驚くすみれに、紅蘭は毅然と言い放った。  
しかし、いつまでも悶着して出撃が遅れる訳にはいかない。  
大神は一瞬考え、そして決断した。「帝国華撃団花組、出撃!いい  
かみんな、光武の微調整が終わってない以上無理は出来ない。大事  
に扱うんだ!」

「大神はん……………おおきにな」

残念ながら微調整が終わるまで待つてはられない。  
光武が壊れないように気をつけて扱う。  
これが紅蘭に対して大神が出来る最善の処置だった。

「このままでは被害が広がる一方だわ……………」



あちこちで火の手が上がる上野公園を見て、マリアが呟いた。近くの屋台は破壊され、脇侍の機関銃による銃撃で負傷した人もいる。

早期の脇侍全滅が望まれた。

そんな中、紅蘭だけは不安げな表情で立っていた。

「（機械が、悪者やないのに……………。）」

すると、紅蘭の様子に気づき、さくらが声をかけた。

「紅蘭、どうしたの？」

「いや……………、何でもない……………」

「……………よし、魔装機兵を撃破して、被害を食い止めるぞ！」

紅蘭の様子は気になったが、これ以上上野を荒らされる訳にはいかない。

紅蘭の様子が戦いに影響ないと判断し、大神は命令を出した。

光武の微調整がないにも関わらず、花組は圧倒的な攻撃力で脇侍を撃破した。

しかし、紅蘭だけは戦ってこそいるものの、大神はどこか躊躇いがあるように見えた。

最も、今は脇侍を全滅させる事が重要なので、気にはしなかったが。

「ふう……やっと片付きましたわね」

最後の脇侍に薙刀を突き立て、すみれが言った。  
暗くて視界が悪いため、周囲の状況がわかりにくいのが、大体終わつたと見ていいだろう。

「ふわあ〜……。アイリス……。もう寝る……。お休みなさい」

「ア、アイリス!？」

「仕方ないですよ、12時回ってますし……」

「ハハハ、それじゃあ戻ろうか」

既にまどろんでいるアイリスに微笑みつつそう言った時、大神は紅蘭の姿がない事に気づいた。

「あれ、紅蘭……。？」

見ると、紅蘭は倒れた脇侍の側でじっと脇侍を見つめていた。

「何してんだ紅蘭？脇侍の残骸なんて何もねえだろ」

カンナの言葉に、紅蘭は答えなかった。

その時、紅蘭の前の脇侍の目が光り、起き上がった。

「紅蘭、危ない！」

動こうとしない紅蘭を見た大神は、咄嗟に脇侍の攻撃から紅蘭を庇

った。

刹那、大神の光武から火花が飛び散る。急に出力を上げ、脇侍の攻撃を受けたために、蒸気エンジンが不具合を起こしたのだ。

「お、大神はん！」

紅蘭が現実に戻ったのは、マリアが脇侍を射撃した時だった。

「隊長、トドメを！」

視界の悪いこの状況での遠距離攻撃は当てにくい。

そう判断したマリアは、トドメを大神に任せた。

大神もそれを理解し、光武を起こして二刀を構える。

その時、紅蘭が叫んだ。

「アカンで大神はん！今光武に無理をさせたら、壊れてまう！」

「何っ……………！」

その言葉に大神は一瞬躊躇い、二刀を下ろした。

「……………分かった」

「そつや。あの脇侍はもう……………」

紅蘭がいい終わらぬ内に、脇侍は倒れて今度こそ動かなくなった。先程のマリアの狙撃で、活動限界が来たのだ。

「大神さん、大丈夫でしたか？」

花組の面々が大神の側に寄る。

火花こそ散っているが、幸い歩行にまで支障はないようだ。

「しかし紅蘭さん、何故隊長にやめてと？」

##NAME1##が怪訝な表情で尋ねると、紅蘭はばつが悪そうに答えた。

「そ、それは……あれ以上無理したら光武が壊れたから………」

「何をおっしゃるの。マリアさんが助けなければ、少尉が危なかったのですわよ？」

大神が危険に晒されたためか、非難じみた口調ですみれが言った。

「紅蘭、黒之巢会が敵である以上、倒すのは当然でしょう？」

マリアの言葉に、紅蘭は答えなかった。

「（そうや……みんなにとって、脇侍を倒すんは当たり前なんや………。」

ただ、悔しそうに歯噛みして、倒れた脇侍にこう言った。

「ゴメンやで………」

戦闘を終え、格納庫に戻った大神は、さくらの言葉に驚きを見せた。

「そうなんです。光武の中から出て来なくて………」

見ると、ほかの隊員達が紅蘭の光武の前に集まって、何やら騒いでいた。

「ほらほら紅蘭、肉まんどうぞ、美味しいぞ、出てこいよ」

「……………」

「紅蘭が肉まんごときで出て来る訳ないでしょう？カンナさんじゃあるまいし」

「何だとお〜？じゃあお前ならどうするんだよー！」

「ほほほ、簡単ですわ」

そう言って、すみれは懐から真新しい工具を取り出した。

「ほら紅蘭、貴女の欲しがってた本場アメリカ製の工具ですわよ？」

「アイリスもお人形持って来たんだよ。とっても可愛いよー！」

「……………で、みんなで説得しているらしいんですけど……………」

さくらの言葉に、大神は呆れた表情を浮かべて三人を咎めた。

「みんな説得ならもう少し真面目にやれ！これじゃただのお祭り騒ぎじゃないか！」

「隊長の言う通りよ。こんな事で紅蘭が出て来ると思ってるの？」

「そんなものに釣られる位なら、閉じこもったりしませんよ!」  
マリアや秀介も厳しい口調で注意する。  
すると、すみれが秀介に反論した。

「何をおっしゃる秀介さん!お祭り好きの紅蘭の事、こつすれば出て来るはず……。名付けて、『天岩戸作戦』ですわ!」

「何言ってるの!そんなの上手くいく訳ないでしょう!」

すみれの意見をバツサリ切り捨て、マリアは紅蘭に説得を試みた。

「紅蘭もいい加減になさい。今回のミスは、貴女の責任じゃないのよ?」

自分の失敗で大神を危険に晒した責任感から、みんなに合わせる顔がない。

そう考えたマリアだったが、紅蘭が閉じこもったのはそんな理由ではなかった。

「……………もうええやろ……………。放つといてんか……………」

光武の中から聞こえて来たのは、実に無気力な返事だった。

「みんなはこの子らの事……………、光武の事、分かりとないんやろ?」

「紅蘭、出て来ないならハッチをこじ開けるわよ?」

痺れを切らしたマリアがそう言うと、紅蘭は一転して怒鳴り返した。

「そんな考えやから、千秋楽でしか使わんセットを作れなんて言えるんや！機械が壊れても直せばいいやなんて言えるんや！！」

「……………ま、まさかあの時の……………」

「すみれはんだけやない！みんな同じ事言つた！大っ嫌いや！！」

いつもの明るい紅蘭はそこにはいなかった。

恐らく今まで我慢していたものが爆発したのだらう。

紅蘭の怒りは、尋常ではなかった。

「人間なんかより、機械の方がええ！！この子らはウチを必要としてくれる……………必要としてくれるんや！！」

言葉の最後には、啜り泣く声が混じっていた。

大神も、マリアも、秀介も、誰も声をかけられなかった。

「……………行きましょう。ここにいつまでもいても仕方ないわ」

マリアの言葉に、全員が頷いた。

こういう時は下手に口出しせずに、本人が落ち着くのを待つしかないからだ。

隊員達はみんな、それを理解していた。

「紅蘭……………」

大神は一人、格納庫に残った。

そっとしておくべきとはいえ、ひとりきりにするのは心細いだらうと考えたからだ。

「俺達は今まで、機械を紅蘭ほど大切にしなかったと思う。でも紅蘭の言う機械の事を、知りたくない訳じゃないんだ」

「……………」

「教えてくれないか？機械の事を……………」

「……………」

「俺は、いつまでも待つてるから……………」

「……………」

「紅蘭……………」

大神は一つだけハッチの閉じた光武と向かい合って座り、紅蘭からの返事を待った。

しかし、返ってくるのは啜り泣く声だけだった。

大神には、それが実際に光武が泣いているようにも見えた。

一夜明け、未だ沈黙を保ったままの格納庫にあやめがやって来た。

「大神君、紅蘭の様子はどう？」



「はい、まだ何も……………」

大神の報告に、あやめは残念そうな表情を見せたが、すぐにそれを打ち消した。

「それじゃあ大神君、これから支配人室に来て貰える？紅蘭の事で、見て貰いたいものがあるの」

「紅蘭の事で……………？了解しました」

紅蘭を一人にするのは忍びないが、大神は上官であるあやめの指示を優先させ、格納庫を出た。

「光武……………。ウチ、もう疲れた……………」

自分以外誰もいなくなった格納庫内で、紅蘭は力無く呟いた。

「誰もお前らの事……………、分かってくれんのやな……………。誰も……………」

「よし。あやめくん、始めてくれ」

大神が支配人室に到着すると、米田があやめに指示を出した。

「大神、お前にはこれから、欧州星組の映像を見てもらう」

「欧州星組？」

初めて聞く部隊の名前に、大神は疑問符を浮かべた。

「欧州星組は、いまから4年程前に結成された帝国華撃団の実験部隊だ」

米田が簡単に説明した所で、映写機の設置が完了した。

「支配人」

「……………始めてくれ」

カーテンがかけられ、暗闇に包まれた支配人室。

映写機は、フィルムを再生させはじめた。

ヨーロッパのとある国。

欧州大戦の舞台となったそこに、五つの霊子甲冑が現れた。

名前はアイゼンクライト。

ドイツ語で、鉄のドレスという意味だ。

五つのアイゼンクライトを身に纏ったのは、全員アイリス程の年齢の少女達だった。

銃弾が飛び交い、あちこちが燃える町の中に五つのアイゼンクライトは飛び込んだ。

大砲の直撃をもともせず、戦車を軽く叩き潰すその様は、正しく

機械同士の殺し合いだった。

「……………これは以前、花やしきで紅蘭が見た映像だ。今思えば、悪い事をしちまった」

米田の表情には、後悔の色が濃く出ていた。

この欧州星組の映像は、光武を設計する参考資料ではあるが、同時に機械同士の殺し合いを指摘するものでもあった。

「大神君、これを見た時の紅蘭の気持ち……………。分かるわよね？」

「はい……………。今の俺以上に、辛かったと思います」

紅蘭は機械が人を喜ばせる事を夢見ている。

しかし、このアイゼンクライトが齎しているのは、夢ではなく殺戮だった。

機械が人を殺すために使われる……………。

紅蘭にとってこれ程辛く、悲しい事はなかった。

「俺…、紅蘭ともう一度話し合って見ます」

そう言うと、大神は支配人室を後にし、格納庫へ急いだ。

「なるほど……………。あいつを選んだ俺達の目は正しかったな、あやめくん」

「ええ、私達の出る幕はありませんね」

「こ、これは……………！」

格納庫に来た大神は、驚きの声を上げた。

先程までであった紅蘭の緑色の光武が、忽然と姿を消していたのだ。大神の脳裏を悪い予感が過ぎる。

「……………あつちか！早まるな、紅蘭！！」

光武が歩行する時の金属音を追いかけて、大神は紅蘭機の前に立った。

「待ってくれ紅蘭！早まるんじゃない！」

大神が必死に叫ぶと、無気力な声が返ってきた。

「大神はん……………、昨日はおおきにな。ウチ、大神はんが側におると安心したわ……………」

「紅蘭！俺の話聞いてくれ！」

「それでな、ウチ考えたんや……………。ここにいてええんかなって……………」

そうは言っているが、本心では離れたくない事が見え見えだった。本当に出ていくつもりなら、大神を突き飛ばして行くはずだ。

しかし、紅蘭は大神の前で立ち止まっている。  
本当は今の一言を、大神に否定してほしいのだ。  
それは、大神もよく分かっていた。

「紅蘭、俺は帝都の平和を守ろうとするあまり、光武の真の意義に気づかなかつた。機械が武器でなく、希望である事を理解していなかつた」

「大神はん……………」

「だから、教えてくれないか？光武の真の意味を……………」

すると、大神のその言葉を待ちわびたように、光武のハッチが開かれた。

「大神はん……………。すんまへん……………ウチ……………」

「紅蘭……………」

両目一杯に涙を溜めた紅蘭に、大神は優しく笑いかける。  
そして、紅蘭は大神の胸に飛び込んだ。

「わああああ……………！！！」

「……………へへ。思い切り泣いたら、なんかスッキリしたわ」

大神と並んで座ると、紅蘭はポツリポツリと話しはじめた。

「あんな、大神はん。ウチ、昔から友達おらんかってん。いっつも誰とも遊ばんと、一人で機械をいじくつとった」

そして、紅蘭はポケットから一つの懐中時計を取り出した。

「強いて友達と呼べるんは、父様の形見の懐中時計位やった……………」

「形見の……………？……………差し支えなければ、聞かせてくれるかい？」

辛い記憶である事を察し、大神は遠慮がちに尋ねた。  
すると、紅蘭は意外にも笑って話してくれた。

「父様が死ぬ前に、ウチにくれたんや。日本に行つて、平和に暮らせ言うてな。ほいで父様の知り合いの、ドイツ人のパーシーはんちゆう機械技師の人の所で世話になつたんや」

懐中時計は既に壊れているのか、針が動いていない。

「夢みたいな毎日やった。……………あんな事言われるまでは」

「あんな事……………？」

「ウチはパーシーはんと、自動庭仕事ロボットを作つたんや。けど、それをパーシーはんのおばはんに見せたら、急に怯えて人殺しって叫んだんや」

その言葉に、大神は欧州大戦の映像を思い出した。

「それから、ウチ花やしきで見てしもうたんや。欧州大戦と星組を

……………」

「俺も見た。さっき米田司令が見せてくれた」

「確かにあれやったら、機械が人殺しに見えるかもしれへん。けど、違うんや！」

紅蘭は膝を抱える手に力を込めた。

「人が人を殺すんや！機械を使うてる人間が、悪い事してるんや！」

紅蘭の言葉は正しかった。

機械はただ使う者に従うだけで、悪意をもって事に及んでいる訳ではないのだ。

それは、あの脇侍にも同じ事が言えた。

「……………なあ大神はん。ええ機械って、どついう機械やと思つ？」

「……………人を幸せにする機械じゃないか？」

「そついう考え、ウチ大好きやねんけど……………残念、ハズレや」

大神と話してる内に、紅蘭は少しずつではあるが、笑顔を取り戻しつつあった。

「ええ機械つちゆうんは、作られた目的をきちんと達成する機械なんや。『設計思想』つちゆうんやけどな、機械を作る時、作る人間は機械にこつ動いてほしいと考えるもんなんよ」

紅蘭は光武を見上げて続けた。

「この光武を設計した山崎はんっちゅう人はな、設計図の裏にこう書いとった。この霊子甲冑が、人々の希望になりますようにって……」

「希望……」

「そうや。その願いは光武も同じやねん。人間と機械は、設計思想を通じて分かり合えるんや」

機械は単に使われるためではなく、人と分かり合うために存在する……。

紅蘭の考えは大神の中の機械に対する認識を、大きく変えた。

「それやのにみんな、壊れたら直せばええとか、一回使えればええとか、機械を本当に理解したら、そんなん言えんはずや」

「紅蘭、それを花組のみんな……いや、世界中の人達に伝えよう。みんなはまだ、機械との付き合い方を知らないだけなんだ」

大神がそう言った時、後ろから別の声が聞こえて来た。

「そうですね。ちゃんと言って下されば、私達だってそれなりの努力をいたしますわ」

「す、すみれはん！それにみんなも……」

見ると、花組のメンバーが笑顔で佇んでいた。

みんな紅蘭が気になって、大神を追って来たのだ。



「紅蘭っていつも我慢して、本音を飲み込んでしまつてしょう？一言言つて下されば、私達だってちゃんと機械を考えますわ」

「すみれはん…、ウチ謝らな……………酷い事言つて」

「お互い様ですわ。これからは沢山話しましょう。機械の事も、私達の事も……………」

「すみれはん……………」

嬉しさのあまり目を潤ませる紅蘭。  
すると、さくらと秀介がすみれに尋ねた。

「ねえすみれさん、アレは渡さないんですか？」

「僕を一晚質問責めにしたんですからね」

「分かってますわよ。それで紅蘭、昨晚かけて、千秋楽のセットを考えましたの。西遊記だけでなく、ほかの舞台に応用出来るように」

そう言つて、すみれは紅蘭にセットの設計図を見せた。

昨日の一件で責任を感じたすみれは、大道具に詳しい秀介の部屋に押しかけて、一晚中かけてセットの設計図を作ったのである。

これからの舞台にずっと役立ってほしいという、すみれの設計思想を持つて。

「……………凄いで、すみれはん！これなら外見の形を変えて、色んな舞台に応用出来る！」

「よっしゃあ！これで今日の芝居もすげえ舞台になりそうだな！」

カナナがそう笑った時、格納庫内にけたたましい警報の音が鳴り響いた。

「緊急警報！緊急警報！黒之巣会が出現。帝国華撃団花組は、大至急作戦司令室に集合してください！」

大神はすぐさま指示を出した。

「みんな、行くぞっ！」

「了解！」

「今回は全員揃ってるな。みんな、いい顔だ」

集合した隊員達を見渡して、米田が言った。

「敵の出現地点は？」

「芝公園よ。今回は黒之巣会の首領、天海自らが指揮をとっているわ」

あやめの言葉に、紅蘭が反応した。

「天海………！機械に悪い事をさせとる張本人やな！」

その目には、怒りの炎が燃えたぎっている。

機械を悪に利用する天海を、紅蘭が許すはずがなかった。

「ウチはこういう奴が一番許せへんのや！大神はん、出撃命令を！」

「よし、帝国華撃団花組、出撃！天海をぶっ飛ばすぞ……！」

「了解……！」

今や帝都の観光名所ともなった帝都タワーのある芝公園。

そこに、脇侍達は再び現れた。

「脇侍ども！この汚れきった帝都を破壊するのだ！さあ、行けい！」

天海の命令を受け、脇侍達はいつものように破壊活動を開始する。  
しかし、それを許さない者達がいた。

「そこまでや!!」

力強い声と同時に、空から八つの機体が舞い降りた。

「帝国華撃団、参上！」

「来おつたか！帝国華撃団！」

薄ら笑いを浮かべる天海と、芝公園を荒らし回る脇侍の姿。紅蘭はそれを見て、怒りを露にした。

「天海……………許さへん！機械達に、こんな悪い事させてからに！」

それは機械と分かり合った、機械を愛する者の怒りだった。

「みんなお願いや！この子らには、もう悪ささせとうないんや！ホンマは壊しとうないけど……………、この子らを救うにはこれしかないから」

「分かっているさ。みんな行くぞっ！天海を倒すんだ！」

「了解！」

脇侍の数は昨夜の上野公園の倍近くだったが、到底花組に及ぶものではなかった。

最初は数にものをいわせていた脇侍は瞬く間に数を減らし、10分もしない内に天海を守る数体を残して全滅していた。

「……………なあ、大神はん」

その時、紅蘭が通信で大神に話しかけた。

「分かってるんや。脇侍達を救うには倒すしかない……………。頭では分かってるのに……………」

脇侍は確かに帝都の平和を脅かす存在だ。

しかし、自分から黒之巢会に忠誠を誓っているのではない。天海の命令で動いているのだ。

言うなれば、脇侍もまた黒之巢会の犠牲者だった。

「心が痛いんや。もう、でけへん……………ウチには……………」

紅蘭の胸に去来するであろう虚しさを感じ、誰もが紅蘭に言葉を返せない。

しかし一人、それを笑う者がいた。

黒之巢会首領、天海である。

「あの緑色の霊子甲冑を狙え！動きを止めた今が好機じゃ！」

すると、命令を受けた脇侍達が四方から紅蘭に迫って来た。

「紅蘭、戦うんだ！そのままではやられてしまうっ！」

「ウチ……………ウチ……………」

大神が叫ぶが、紅蘭は完全に戦意を失っていた。

「同じ機械同士やのに、どうして壊し合わんとアカンのや！アంతラ脇侍かて、壊されるために作られたんとちゃうんやろ!？」

聞こえるはずもない相手に、心の叫びをぶつける紅蘭。

希望のために生まれて来た機械が壊し合う事が、辛く悲しかった。

「もう……………、嫌なんや……………」

「紅蘭、戦うんだ!」

大神が叫ぶ間にも、脇侍は紅蘭に迫る。

そして、一体の脇侍が紅蘭目掛けて太刀を突き出した。

「紅蘭っ!!」

大神が叫んだ瞬間、突然紅蘭の光武が輝きを放った。

その光に驚き、脇侍達は攻撃をやめる。

「な、なんや……………?光武、ウチに何か言いたいんか……………?」

紅蘭も一瞬何があつたか分からず呆然とする。

そんな紅蘭の心に、何か語りかけて来た。

「光武……………、ウチの事守ってくれるんか……………?」

紅蘭が尋ねると、光はそれを肯定するように輝きを増した。

「紅蘭、大丈夫か!？」

「大神はん……、光武が……光武が話し掛けて来たんや。人の役に立ちたいで、設計者の気持ちに応えたいで言うて……。ウチを守りたいで、言うてくれたんや！」

紅蘭は瞳を輝かせて言った。

それは、機械と真に心を通わせた紅蘭だからこそ聞こえる光武の声だった。

「それが、光武の願いなんだよ。紅蘭も言うてたじゃないか。光武が人々の希望になるって……」

「そうやったな……。！機械達の願いを、ウチが叶えたらなアカンもんな！」

機械と人間は分かり合える。

それが紅蘭の願いであり、機械の願いであった。

「行くで、光武！ウチと一緒に、平和のために戦うんや！」

紅蘭と光武が一体化したかのように、光武の輝きが照射となって放たれた。

すると、信じられない事が起こった。

その照射を受けた脇侍達が攻撃をやめたのだ。

まるで、光武の声に同意するかのように。

これに一番驚いたのは、外ならぬ天海だった。

「馬鹿な！脇侍が活動停止するとは……！！」

照射で内部の蒸気演算機が破壊されたか、または別の理由か。

いくら命令しても、脇侍達が動く気配はなかった。

「役立たずめ……………！自爆しろ！我に逆らう者は全て死ね！」

すると、紅蘭の周囲に立ち尽くしていた脇侍達が一斉に爆発した。

「天海……………！何ちゆう事するんや！」

信じられないという表情で紅蘭が叫ぶ。

すると、天海は当然の如く言った。

「クズは潰す。当然であろう。お前達もすぐに始末してやるわ！」

その言葉で、紅蘭の中の何かがキレた。

「お前はもう喋るな！！天海！ウチは許さへんで！！」

「だったらどうする？我を殺すか？やれるものならやってみろ！！」

怒りに身を震わせる紅蘭に嘲笑を返すと、天海は目の前に巨大な魔法陣を出現させ、配下の魔装機兵を召喚した。

その姿に、大神は見覚えがあった。

「あれは……………、刹那と羅刹！？」

自分達を大いに苦しめた死天王兄弟。

緑の蒼角と銀の銀角だった。

「この程度は序の口に過ぎん！いでよ、超力怪獣ゴルドラス！！」

すると、今度は蒼角と銀角の後ろに金色の皮膚と巨大な角を持つ大



怪獣が現れた。

「……………なるほど、シルバゴンを改造した訳ですか！」

そう吐き捨てながら、# # NAME 1 # # は流星を自動操縦に切り替え、ブレスレットを掲げ叫んだ。

「ジャー………ック……！」

「シュワッ……！」

変身したジャックは、ゴルドラスと対峙するように降り立った。

「こやつらが相手になってくれるわ！来い！帝国華撃団！ウルトラマンジャック……！」

あくまで自分の手を汚さない考えなのか、天海は転移魔術で消え失せた。

「隊長！怪獣はウルトラマンに任せましょう」

「そうだな、敵は二体いる。こちらも二手に分かれて戦うぞ！」

「了解……！」

「へへっ！てめえみたいな力自慢とは、一度派手にやり合っただけ見たかったぜ！」

目の前の銀角に対峙し、カンナは拳を鳴らした。すると、その隣にいるすみれがため息をついた。

「全くカンナさん、少しは緊張感を持つては如何？」

「何だと！お前には言われたくねえよ！」

すみれに喰ってかかるカンナ。

その時、アイリスが叫んだ。

「カンナ、来たよ！」

見ると、銀角が無言のままカンナ機に襲い掛かって来た。

「おっと！」

凄まじい勢いの鉄球を左手の爪で防ぐ。

そして、そこを支点に体を時計回りに回転させた。

「喰らえ、一百林碑！！！」

遠心力を加えた右手の一撃が、銀角の体をわずかに押し出す。そこへ、すみれ機が颯爽と躍りかかった。

「神崎風塵流奥義、胡蝶の舞!!」

零距离からの火柱を受け、銀角は瞬く間に炎に包まれた。

「おーっほっほっほ！私に掛ければこの位朝飯前ですわ！」

トドメが華麗に決まり、大見栄をきるすみれ。  
すると、背後からカンナの野次が飛んだ。

「てめえ……。せつかく繋いでやってそれかよ……………」

見ると、カンナ機はあちらこちらが火にまかれて煤こけていた。  
すみれの胡蝶の舞が、カンナ機を巻き込んでしまったからだ。

「あーら、カンナさんは元々黒いですから関係ありませんわ〜！」

「カンナ、アイリスが治してあげるね。イリス・マリオネー……  
ト！」

「ちえ、覚えてろよへび女……………」

アイリスに治療してもらいながら、カンナはすみれへの仕返しを誓  
うのだった。

カンナ、すみれ、アイリスの三人に銀角を任せた大神達は、帝都夕ワーの前で蒼角と戦っていた。

「何てスピード……！以前の比ではないわ」

以前に増して素早い蒼角に、四人は苦戦を強いられていた。

「（このままではマズイ。考えるんだ大神一郎！）」

残像すら見える程の速さを目で追う事は不可能。

その時、大神はピンと閃いた。

「そうだ！これなら……！」

「お、大神さん！？」

さくらは思わず驚きの声を上げた。

何と大神は、蒼角が動き回ると真ん中に飛び込んだのである。

「何してんねん大神はん！」

「隊長、危険です！」

紅蘭やマリアが叫ぶより早く、蒼角が大神機に襲い掛かった。だが、これこそ大神の狙っていた瞬間だった。

「狼虎滅却、国土無双！！」

二刀に黄色い稲妻を宿らせ、それを自分中心に四方八方に炸裂させた。

捕まらないなら近くにおびき寄せればいい。

大神の大胆かつ巧妙な作戦だった。

蒼角は思わぬカウンターで、一瞬動きが止まる。

「マリア、今だ!!」

大神が叫んだ。

マリアも大神の考えを察して必殺技を放った。

「スネグーラチカ!!」

凍てつく一撃が蒼角を地面にたたき付ける。

そこへ、さくらが追い討ちをかけた。

「破邪剣聖……、桜花放心!!」

太刀に沿った霊力の鎌鼬が蒼角を切り付ける。

そこへ、紅蘭がトドメを放った。

「チビロボ軍団、突進!!」

紅蘭機の大砲から沢山のチビロボが飛び出し、蒼角に飛び込んで大爆発させた。

「グアアアア！」

ゴルドラスが角を突き立て突進して来た。

「へッ！」

ジャックは角を掴んで押し止めようとするが、いかんせんゴルドラスは力が強く、ジャックはジリジリと追い詰められていた。

「シユワッ！」

何とか押し返してスペシウム光線を放つ。

しかし、ゴルドラスは角からバリアを出現させ、スペシウムをいなしてしまった。

「へッ！？」

驚くジャックに、ゴルドラスは今度は角から光線を浴びせてきた。

「アアッ！」

光線をもろに受けて跳ね飛ばされるジャック。

そこへ、追い討ちとばかりにゴルドラスがのしかかって来た。

「グアアアア！」

「へッ……………！」

必死に押し返そうとするジャックだが、6万トンの巨体はそう簡単に動かない。

「（何か…、何か弱点はないのか……………！？）」

ゴルドラスを押し返ししながら、ジャックは考えた。  
シルバゴンの進化体ならば、弱点は共通のはず。  
シルバゴンの弱点と言えば……………。

「（……………そうだ！）」

何かに閃いたジャックは、ゴルドラスの腹を蹴飛ばした。

「シュワッ！」

そしてゴルドラスが起き上がる前に、両手をカラータイマーに沿え、  
右手にスペシウムを集中した。

ウルトラスラッシュ……………スペシウムを円形鋸にして相手を斬る切  
断技である。

「トアッ！」

外回りの後突き出された右手の軌道に添ってスラッシュが出現し、  
ゴルドラスの角に殺到する。

シルバゴンの時と同様、角が弱点と判断したのである。

……………だが。

「グアッ！」

何とゴルドラスは、再びバリアを張ってウルトラスラッシュを弾い  
たのである。

「へッ！？」

せつかくのチャンスを潰され、ジャックは焦った。  
あの角を破壊しない限り、必殺技は届かない。

「（それなら………！）」

ジャックは一か八か、ゴルドラスに突進した。

「ゲアアアア！」

すかさず角から光線が発射される。

その瞬間、ジャックは空高く跳び上がった。

「ゲアツ！？」

突然消えたジャックに驚き左右をキョロキョロと見渡すゴルドラス。  
ジャックはゴルドラスの頭上から、キックの体勢で急降下した。

流星キック………敵の真ん前でジャンプして意表を突き、真上から  
キックを叩き込む荒業だ。

「へアアツ！！！」

落下のスピードを加えたキックはゴルドラスの角を直撃。  
文字通り粉碎した。

「シュワッ！」

さらにトドメを刺すべく、ジャックはスペシウム光線を放った。  
しかし、又してもスペシウムは通じなかった。



「へッ!？」

何とゴルドラスの強固な皮膚は、スペシウムを寄せ付けなかったのだ。

ゴルドラス自体は角を破壊された事で弱っているが、それはジャックも同じだった。

今のスペシウムで、カラータイマーが点滅を開始していたのだ。

「(……………仕方ない。)」

ジャックは構えを解いて一度深呼吸すると、両腕を十字ではなくL字に組んだ。

シネラマシヨット……………スペシウム以上の絶大な威力で敵を爆殺する、ジャック最強の光線技だ。

しかしエネルギー消費がスペシウムの比ではなく、ここぞという時にしか使えない大技だった。

「シユワアアツ!！」

気合いの声とともに金色の破壊光線が発射され、ゴルドラスをたちまち大爆発させた。

「シユワツ。」

それを確認すると、ジャックは空へと飛び立って行った。

「くっそ、あのハゲ親父！今度会ったらギタギタやで！」

「まあまあ、勝ったんだからいいじゃないか」

天海を取り逃がし、怒りの煮え切らない紅蘭を大神が宥める。すると、徐にすみれが呟いた。

「機械も中々やりますのね。流石は私達の仲間です事」

「中々人の事を褒めないすみれさんが、機械を褒めるなんて……！」

「明日大地震でも来るんじゃないですか？」

「な、何をおっしゃるやら。機械なんて所詮、使われるためにあるのですわ！」

あからさまに驚くさくらと##NAME1##に慌てて弁解するすみれ。

すると、カンナが先程の仕返しとばかりに噛み付いた。

「お前は人間も使いまくるだろ！……まあ、人間と機械を平等に見てるって事だよな」

「それじゃあすみれの光武も、すみれの事高飛車って思ってるのかな？」

「アハハ、そんな事あらへん。きっとすみれはんの光武も、そんなすみれはんが好きなんやろ」

アイリスの疑問に、紅蘭が笑って応えた。

「まあ、我が儘が過ぎたら愛想尽かされるんは、機械も人間も一緒やけどな」

「も、もう……………知りません！好きに言えばいいですわ！」

好き勝手に言われ、すみれがそっぽを向く。  
その様子に微笑みながら、マリアが言った。

「それじゃあ、いつものやりましようか。紅蘭、お願いね」

「よっしゃ、任しときー！」

「勝利のポーズ……………、決めっ！！！」

「……………あれがすみれくんの設計したセットかい？」

舞台袖で芝居を見守りつつ、大神が紅蘭に尋ねた。

「そつや。筋斗雲型ロボット、その名も『キントくん』や」

カンナの役である孫悟空の操る筋斗雲を摸した形の、役者を宙に浮かせるセット。

それがキントくんだった。

確かに宙に浮くシーンなら、外の飾りを変えるだけで沢山使える。しかし、何やらキントくんからモクモクと煙が立ち始めた。

「あ、あれ……………」

ちなみにアイリスはかつてこう言っていた。

「紅蘭、いつもドツカーンってやるんだもん。」

正に今がそれだった。

「あゝれ〜!？」

「お、おわわわわわっ!!！」

これから活躍するはずのキントくんは、初舞台であっさり故障してしまった。

カンナとすみれは重なるように倒れている。

「こ、これは……………アレヤ!設計思想つちゅう奴や!」

慌てて弁解を始める紅蘭だが、冷や汗をかいている辺りから、単なる故障なのは見え見えである。

「きつとすみれはんが、カンナはんに一泡吹かそう思ってたから、キントくんが気を効かして……………」

「……………紅蘭」

「アハハ…、こんなはずやなかったのに……………。二人とも、無事か  
〜!？」

大神に非難の目を向けられ、紅蘭は慌てて二人の救助に向かった。

「……………でも、お客さんは喜んでくれたし、紅蘭の発明も、案外役に立っているのかもな」

大神がそう言った矢先、煙を上げていたキントくんが再び爆発した。

「トホホ……………、人間と機械が分かり合える日って、まだまだ先な  
んかなあ……………」

「……………ここか、奴らの隠れ家は」

同時刻、蝸の姿は帝劇の地下格納庫にあった。

「帝国華撃団……………、ウルトラマンジャック……………、この次は覚悟  
しておくがいいー!」

光武の願い（後書き）

《次回予告》

秀介さん大変です。黒之巢会が帝都に魔術を！  
このままじゃ、あたし達の帝都が……………！

次回、サクラ大戦！

《帝都最期の日！？》

大正さくらにロマンの嵐！

僕じゃ…………、駄目ですか？

**帝都最期の日!?(前書き)**

ある意味第1部のターニングポイント。

日比谷に行けてたら、歴史は変わったかもしれない。

帝都最期の日！？

「……………抜かりはないであろうな、ミロクよ」

「ご安心下さい天海様。必ずや、帝国華撃団を仕留めて見せます」

「天照の最終調整も済みました故……………」

又丹の言葉に、天海にニヤリと笑った。

「よし、全て手筈通りだな。一時の勝利に浮かれておれ、帝国華撃団！ウルトラマンジャック！」

「椿さん、お疲れ様です」

「あ、秀介さん。お疲れ様です」

西遊記の公演が終了し、秀介は椿の所に来た。

「実は今日の千秋楽の後、みんなで打ち上げを予定しているんですが、椿さんも如何ですか？」

キントくんの故障で千秋楽が大失敗したため、公演期間が一週間延



長になったのだ。

そして今日、夜の部を以って西遊記はめでたく千秋楽を終える事になった。

そこで紅蘭が、千秋楽が終わってからみんなで打ち上げをやるつと言い出したのである。

「ごめんなさい、実はかすみさんと由里さんの三人で食事に行く事になってるんです」

「そうですか、残念です。それじゃあ、お食事楽しんで下さい」

「はい！秀介さんも、打ち上げでさくらさんをモノにして下さいね」

刹那、秀介は派手にひっくり返った。

「な！な！何でご存知なんですか!?!」

「はい、由里さんから聞いたんです」

「あ、あの、この事は……………!」

あたふたと回りを確認しつつ、秀介は椿に言った。

「分かってます。さくらさんには内緒ですよ。そのかわり……………」

「紅蘭、いるかい？」

大神はその頃、紅蘭の部屋の前に来ていた。すると、いつもなら明るい声と笑顔で迎えてくれる紅蘭が扉を閉めたまま言った。

「大神はん……………今手が離せんのや。ちょっと待つとつて……………」

いつになく真剣な様子から、また何かの発明をしているのだろう。気にならないと言えば嘘になるが、待つように言われた以上勝手に入る訳には行かない。やがて言われた通りに大神が待っていると、紅蘭の声が聞こえて来た。

「……………よつしゃ。大神はん、もうええで〜」

「じゃ、お邪魔するよ」

大神は扉を開け、部屋の中に入った。

紅蘭の部屋は、足の踏み場もない位に散らかっていた。

あちらこちらに用途不明の部品やら、書きかけの設計図やらが散らばる部屋の真ん中に、紅蘭はいた。

「何しているんだい、紅蘭？」

「しっ。話し掛けんといてや大神はん。今大事な作業中なんや」

こちらに背中を向けたまま、紅蘭が言った。

ガチャガチャと音が聞こえる事から、やはり何か発明の真つ最中だったようだ。

「……………、おおきにな大神はん」

言われた通り無言の大神に、紅蘭は作業をしつつ礼を述べた。

「こつという大事な作業は集中が途切れると……………って、ああっ！」

紅蘭が突然叫んだ瞬間、例によって紅蘭の発明が大爆発した。  
途端に部屋には煙が充満する。

「こ、紅蘭！大丈夫かっ！？」

血相を変えて煙を掻き分ける大神。  
すると、煙の中から煤まみれの紅蘭が出て来た。

「ゲホッ、ゲホッ……………お、大神はん……………」

「紅蘭……………良かった、無事みたいだな」

安堵の表情で胸を撫で下ろす大神。  
すると紅蘭は、天を仰いで嘆いた。

「ああっ、なんちゅう事や！あともう少しで『キントくん』に続く  
『宴会くん』の完成やったのに！」

「……………『宴会くん』？」

「今日の打ち上げのために考えた宴会用スーパーメカや！スイッチ  
一つでお酌やら一発芸やら何でもできる優れ物やったのに……………！」

どんなにショックでも機械の説明をはしらない所は流石紅蘭であ

る。

そんな事を思いながら、大神は紅蘭を励ました。

「落ち込むなよ紅蘭。君に怪我がなくて良かったじゃないか」

「……………せやな。でも、大神はんも楽しみやっただやろ……………？」

「え？……………そりゃまあ、確かに……………」

今の説明を聞いて、興味が沸いたのは事実である。

大神がそう応ええると、紅蘭は何かを決心したように言った。

「……………よっしゃ！こうなったら、ウチが中国四千年の技を披露したる！」

「ち、中国四千年の技！？……………凄そうだな」

「そうと決まったら、早速練習や！みんなをあっと言わせたるで！」

そう叫んだ時、宴会くんの残骸が再び爆発した。

花組の面々がサロンに顔を揃えたのは、それから30分後の事だった。

「やあ、みんな集まってるみたいだね。お疲れ様」

昼の公演を終えた面々に、大神が労いの声をかける。今回延長となった西遊記は、キントくんの活躍もあって魅力の殺陣にますます磨きがかかった。

すみれの予想通り客受けは非常に良かったが、その分主役のカンナと悪役のすみれによる立ち回りが増えた。

9月に入ったとはいえ、まだまだ残暑の厳しい季節に、激しいアクションはさぞ辛いだろう。

しかし、すみれは疲れた表情を全く見せずに応えた。

「お〜っほっほっほ！この神崎すみれに掛ければ、カンナさんの下手くそな演技に合わせる位、朝飯前ですわ」

相変わらずの憎まれ口だが、疲れを見せない所は流石トップスターである。

しかし、今の一言に納得しない者がいた。

カンナである。

「何だと！お前こそ客に煽られて台本にない事ばかりしやがって！合わせてやるこっちの身にもなってみろ！」

「何ですって！まるで私が悪いみたいではありませんの！」

「面白え、さっきの続きをやるか!?!」

最早定番となりつつある二人の睨み合い。

その様子に、周りは呆れたり笑ったりした。

「わ〜い！西遊記の番外編だ〜！」

「全く……二人も懲りないですね」

そんな中、マリアが大神に声をかけた。

「隊長、ありがとうございます」

「何がだい？」

「あの二人、深川の一件で随分仲が良くなったんです。隊長のおかげですね」

「俺は何もしちゃいないさ。秀介のおかげだよ。それに、あの二人は元々仲良しみたいたしね」

いつものように謙遜する大神に、マリアは小さく笑った。

「隊長が来る以前とは大違いですよ。謙遜なさる事はありません」  
マリアがそう言った時、カンナと言いつつ合っていたすみれが大神に声をかけた。

「少尉！次回は私が主役の『蛇女火炎地獄』ですよ！私がカンナさんをギタギタにする所、しっかりとご覧になって下さいまし！」  
すると、すみれの口から出た言葉にカンナの表情が一変した。

「へ、蛇！？……お、降りた。あたい、その舞台降りたぞー！」

「おっっほっほっほ！カンナさん、貴女は私の獲物。逃げても無駄

ですわ！」

完全に逃げ腰状態のカンナに、文字通り蛇の如く攻めるすみれ。その様子に微笑む大神の目に、ため息をつく秀介が写った。

「どうしたんだい、秀介？顔が死んでるけど……………」

「いえ、別に……………」

何とも無気力な返事をする秀介。

それもそのはず。あの後、秀介は椿に口止め料として食事代20円を支払う羽目になったのだ。

ブロマイドが一枚五十銭のこの時代においては、かなり高額である。最も、そんな事を話せば自分の秘密がばれ、せつかくの口止め料をどぶに捨てる事になってしまう。

結局秀介は諦めるしかなかった。

「……………それで、打ち上げの話なんだけど……………」

大神が話を戻すとみんな乗り気らしく、あちらこちらから賛同の聲が上がった。

「大神さんも賛成ですか？これで全員一致ですね！」

「わーい、アイリス遅くまで起きてよーっと！」

「よっしゃあ！それじゃあモリモリ食って……………」

「バリバリ飲みますわよー！」

「こら、未成年の飲酒は駄目よ。…………でも、たまにはみんなで騒ぐのもいいわね」

めでたく打ち上げが決まった所で、ふと秀介が口を開いた。

「しかし、何処でやります？みんなでテーブルを囲みたいですし……………」

「そりゃな…………、楽屋なんかどうや？畳もあるし、みんなでくつろげるやろ？」

たしかに大きなテーブルを囲める部屋は楽屋位だし、公演の後に楽屋で打ち上げというのも粋なものだ。

紅蘭の提案は、これまた全員一致で採用された。

「よし、早速みんなで準備しよう！」

大神の言葉に、最初に返事を返したのはカンナだった。

「じゃあ、あたいは地下の倉庫からテーブルを運んで来るよ」

「私は厨房で料理を作るわ。」

続いてマリアを名乗りを上げる。

すると、すみれが二人をチラッと見て立ち上がった。

「私は…………、そうですね。楽屋の飾り付けを致しますわ」

「じゃあアイリスは食器の準備する〜！」



「ウチは部屋で秘密の準備をさせて貰うで」

恐らくは中国四千年の技だろう。

紅蘭の眼鏡がキラリと光った。

「それじゃあ、あたしは買い出しに行つて来ます」

「……………、じ、じゃあ僕も……………」

「さくらくん、俺も付き合うよ。君一人じゃ荷物も重いだろう？」

申し出ようとした秀介を遮り、大神がさくらに言った。

さくらも秀介に気付かず頬を赤く染めた。

「いいんですか大神さん？」

「……………」

何やら甘いムードを漂わせる二人を、無言で見つめる秀介。その様子に残りのメンバーは大体の想像をつけた。

「こりゃアレや。三角関係っちゅう奴や」

「マジかよ！？まさか秀介が……………」

「確かに秀介は、さくら事になると必死だったものね」

「全くあの田舎娘は……！自分になると鈍いんですから……！」

「秀介可哀相……」

「……みんな、隅っこで固まってどうしたんだい？」

五人の様子に気づいた大神が声をかける。  
すると、紅蘭達は慌ててごまかした。

「い、いや！何もあらへんで、ホンマ！」

「そうそう、何でもないよ！」

「そ、その通り！大した事ではございませんわ！」

「き、気にすんなって隊長！」

何でもないという割に、みんな冷や汗が凄い。

何と無く不審に思った大神は、マリアに尋ねた。

「マリア、何の話をしてたんだ？」

「は、はい！その……き、今日の午後から雷を伴う大雨が来ると……！」

咄嗟に出まかせを述べるマリア。  
すると、突然さくらの表情が凍りついた。

「か、雷……………！？す、すみません大神さん。あたし、やっぱり一人で行きます！」

「え？さ、さくらくん！？」

大神の返事を待たずに、さくらは足早にサロンを後にした。  
すると、紅蘭が秀介を急かすように言った。

「ほら秀介はん、早う行ったらな！」

「えっ！？……………あ、はい！！！」

突然の声に秀介は一瞬驚いたが、紅蘭の意図を察してさくらの後を追った。

「秀介の奴、上手くやれるかねえ？」

「大丈夫や。秀介はんはなにかと強い人やさかい」

「うん！アイリスも秀介の事応援する！」

「全く、世話の焼ける方ですわ」

「さあ、私達も準備しましょう」

満足げな様子で隊員達が持ち場につく中、残された大神は一人呟いた。

「……………何だったんだ？」

「さくらさん、待って下さい！」

秀介がさくらに追いついたのは、彼女がロビーから外に出ようとした時だった。

「……………秀介さん！」

さくらは驚いて振り向いた。

あの状況で大神ではなく秀介が追いかけてくるとは、思いもしなかったからだ。

「さくらさん、僕も一緒にさせて下さい」

「秀介さん……………。でも、あたし……………」

何か秀介が一緒だと困る事があるのか、もじもじとするさくら。

秀介は、その様子に不安がりつつも尋ねた。

「……………、僕じゃ……………駄目ですか？」

「……………ち、違います！秀介さんが駄目だなんてそんな……………！」

秀介の言葉を、さくらは慌てて否定した。  
以前同じ質問をされ、秀介を傷付けた事が脳裏を過ぎったからだ。

「……………じゃあ、一緒に来てくれますか？」

「はい、もちろんです！」

怖々と尋ねるさくらを勇気づけるように、秀介は笑顔を見せた。  
その光のようにまばゆい笑顔に、さくらも少しだけ笑顔になった。

秀介とさくらが買い出しに出た頃、大神にカンナの手伝いに地下倉庫へ来ていた。

いくら力持ちのカンナでも、一人でテーブルを運ぶのは大変だろうと思ったからである。

しかし……………、

「よし、行くぜ！せいの！」

「お、重い……………！」

テーブルは大神の予想より遥かに重かった。  
その重量、一階に上がった時点で大神の手が震えるほどである。

「カ、カンナ……………大丈夫か？重くないか？」

「な〜に、こん位軽い軽い」

平然と応えるカンナ。

大神は、改めてカンナと桐島流の強さを感じた。  
すると、そこにアイリスがやって来た。

「わ〜、おっきなテーブル！アイリスも手伝おうか？」

「平気さアイリス。なあ、隊長？」

「あ……………、ああ。俺達なら大丈夫だ……………」

カンナに合わせてそう応えると、大神はテーブルを楽屋まで運んで  
行った。

「……………アイリスには、スツゴク辛そうに見えたけどな」

「……………ところで、何を買っんですか？」

道中、秀介がさくらに尋ねた。

今まで宴会というものの経験がない秀介には、買い出しと言われて

何を置くのかがパツと思いつかなかったからだ。

「そうですね……………、ジュースとかお菓子とか、みんなでワイワイ食べられるものでしょうか？」

「お菓子とかだけですか？」

「はい。マリアさんが料理を作ってくれてるので……………」

「へへ、マリアさんって料理上手なんですか？」

意外そうな表情で秀介が更に尋ねた。

確かにマリアが料理する様子は、中々思いつかない。

「あたしも見た事ないですけど……………、どんな感じでしょうか？」

「……………ハックシユン！！」

「……………大丈夫かい、マリア？」

厨房で盛大なくしゃみをするマリアに、大神が声をかけた。  
すると、マリアは恥ずかしかったのか赤い顔で話をはぐらかした。

「いえ、別に……。それよりジャガイモは切り終わりましたか？」

「ああ。大体こんな所かな？」

「……………ちゃんと均等に切れてますね。じゃあ次は味付けです」

カンナとテーブルを運んだ後、大神はアイリスを手伝う事になった。コップ、ナイフ、マッチと厨房にありそうなものばかりで簡単と思っていたが、厨房にいたマリアに料理の手伝いに来たと勘違いされたのだ。

マリアから指示されて大神が作っているのはボルシチ。

ロシアの一般的な家庭料理だ。

とは言えほぼカンナだが八人分作るため材料は半端ではなく、マリア自身も更にピロシキというパン料理を作っているために指図しかしてもらえない。何とも大変な事になったと、大神は心の中でため息をついた。

「ええと……………、確か調味料は……………」

鍋の上の棚を開けて調味料を探す大神。確かマリア曰く、ケチャップのはずだ。

「ケチャップ、ケチャップ……………あっ！！」

大神は思わず叫んだ。

ケチャップを探していた大神の手が、一番手前の瓶に当たり、弾みで瓶が鍋の中に落ちてしまったのだ。

「し、しまった！これは……………！？」

慌てて瓶を出して確認するが、ラベルがない。



しかし透明な中身と、何やら鼻につく臭いが漂い、嫌でも大神にはその正体が分かってしまった。

「……………お酢……………！」

ケチャップと酢ではエライ違いだ。

大神はマリアに打ち明けようとした。

……………が、

「フンフンフーン、フフフフフーン……………」

楽しそうに鼻唄を歌うマリアの姿に、大神は口をつぐんだ。

せっかく料理を楽しんでいるマリアの気分を損ねたくなかったからだ。

幸いマリアはピロシキに夢中で気づいてない。

大神は何とかボルシチを、強引に別の料理に持って行く事にした。

「ケチャップを入れたら中火にかけて煮込んで下さい」

「ああ……………、わかったよ」

そう返しつつ、大神はコンロのツマミを一気に強火にした。

なんにせよ酢の臭いだけはごまかさなくてはならない。

大神は強火で、一気に酢の臭いを飛ばす事にした。

……………が、

「……………ああっ！スープが……………！！！」

強火のおかげで何とか酢の臭いは分からなくなった。しかし、今度はそのためにスープの量が激減してしまったのだ。残念な事に水を足そうにも、流し台はマリアの隣にある。従って水は継ぎ足せない。

「（諦めるな、考える。考えるんだ、大神一郎！）」

大神は必死に考え、一つのアイデアを思い付いた。

「よし、こうなったら……………！！！」

大神はマリアの目を盗みつつ、何を思ったかピーマンとパイナップルを切って鍋に放り込んだ。

「取り皿を探しますから、仕上げにワインビネガーを入れて下さい。その後じっくり蒸らすのがコツです」

「ああ、任せてくれ！」

寧ろ最後まで見られないのは好都合。

大神はマリアのアドバイスを無視して、すぐさま火を止めた。当然、ワインビネガーは入れるはずがない。そこへ、マリアがやって来た。

「隊長、皿の準備ができました。」

「ああ、ありがとうマリア……………」

「どれどれ、美味しそうなボルシチ……………って……………!？」

刹那、マリアの顔が凍り付いた。

それもそのはず。

なぜなら大神が作ったのは……………。

「酢豚になってるじゃないですか!どうすれば酢豚になるんです!」

怒ったと言うより、寧ろ驚いた様子でマリアが叫んだ。

たしかにボルシチのスープを酢豚の餡に変えるなど、正に神業である。

「あゝ。つまり、これはだな……………」

とりあえず弁解を試みる大神。

すると、そこへ紅蘭が顔を覗かせた。

「あ、お二人さん。料理は順調かいな……………ってこの懐かしい香りは!」

厨房に入るや、紅蘭は大神の鍋から漂う酢豚の臭いに反応した。

「す、す、酢豚!夢にまで見た酢豚が目の前に!ち、ちよいと一

口……………!!」

余程自分の国の料理が恋しかったのか、紅蘭は我慢出来ずに酢豚を一口頬張った。

「……………美味い！餡はからんだのにピーマンはシャキシャキ、肉は強火で身が引き締まっとる！極めつけはパイナップルや！こんなん上海でしか食った事ないで〜!!」

キラキラと瞳を輝かせる紅蘭に、大神とマリアは啞然となった。

「作ったんは誰や！マリアはんか!?!」

「い、いいえ、隊長よ」

未だ興奮の覚めやらぬ紅蘭に気圧されつつマリアが応える。  
すると、紅蘭は大神に思いつきり抱き着いた。

「大神はん!! やっぱり大神はんはウチの事分かってくれとったんやな！おおきにやで!!」

「こ、紅蘭……………!?!」

突然の事に驚きつつ、大神はゆっくりと紅蘭を離した。

「あ、すんまへん。ウチ、中華料理は小さい頃しか食べた事なかったさかい……………」

「そ、そうかい……………? まあ、紅蘭が喜んでくれて良かったよ」

大分落ち着いたらしく、赤い顔で離れる紅蘭。

「ほなウチ準備があるさかい、また後でな」

そう言つて、紅蘭は厨房を後にした。

二人はしばらく黙っていたが、やがてマリアが呟いた。

「紅蘭………あんなに中華料理に飢えてたのね……。気づくべきだったわ………」

「………秀介さん、大丈夫ですか？」

さくらが心配そうに声をかける。

目の前には、大量の荷物を抱えた秀介の姿があった。

「こ、この位平気です。ご心配には及びません」

そうは言つものの、足がやけに震えている辺り、イマイチ説得力がない。

「やっぱりあたしも持ちます。秀介さん一人に押し付けたくありませんし」

「えっ？、さくらさん！」

秀介に構わず、さくらは秀介の荷物を半分取った。

「いいんです！帝劇じゃアイリスだって頑張ってる準備してるんですから。それに……………」

そこまで言って、さくらは恥ずかしそうにそっぽを向いた。

「あたしだって、秀介さんの役に……………」

「え……………?」

小声で呟いた何かに、秀介が反応した。  
すると、さくらはますます顔を赤くする。

「……………も、もういいじゃないですか！行きますよ！」

「あっ！待って下さいよ、さくらさん！」

さっさと歩いて行くさくらを、秀介は慌てて追いかけた。

「あら少尉、随分遅かったですわね？」

料理を済ませた大神は、アイリスに頼まれた品物を持って楽屋に来ていた。

先程はテーブルが中央に置かれたただだったが、周りに綺麗な装飾が施され、楽屋はさながらパーティー会場へと変化していた。

それが出来たのも、偏に社交界のパーティーに詳しいこの人しかいなかった。

「すみれくん、凄じくないか！前の楽屋とは別の部屋みたいだよ」

「おっほっほっほ！この神崎すみれに掛ければ、パーティー会場の一つや二つ、朝飯前ですわ！」

いつものように大見栄を切るすみれ。

すると、横からアイリスがボソツと言った。

「さっきまで大慌てだったのにね。」

「まあ、何をおっしゃるのこのガキヤ……………！」

優雅な仕草を一変させ、般若の如くアイリスを追いかけて回すすみれ。その様子に微笑みつつ、大神はすみれに尋ねた。

「他に仕事はあるかな？」

「そうですね……………。では、こちらの小道具と衣装を片付けて下さらない？」

そう言ってすみれが指差したのは、楽屋の入り口に集められた小道具や衣装の山だった。

その高さ、実に2メートル。カンナより高い。普段整理の及ばない小道具の片付けが、まさか自分に回って来るとは。

「おっっほっほっほ！少尉のためにやり甲斐のある仕事を残しましたのよ。お喜びになって」

「……………ああ、そうだね」

すみれにそう返しつつ、大神は身の丈を超える山を前に、ため息をついた。

「……………ふう、やっと終わったか」

楽屋にあった小道具の山をここまで運ぶまでは大した時間はかからなかった。

しかし肝心の大道具部屋も、秀介が買い出しで不在のためにひっくり返った状態で、結局作業を終えるのに小一時間かかってしまった。

「あ、大神はん。お疲れさん」

楽屋に戻って来た大神を、紅蘭が出迎えた。



「紅蘭じゃないか。みんなは？」

「待ちきれんと、もうおっぱじめとるさかい」

そう言つて、紅蘭は親指を立てて楽屋の奥を指した。たしかに楽屋からは賑やかな笑い声が聞こえてくる。

「……………ありがとう、紅蘭。待つてくれたんだね？」

「当たり前やん。さ、早う行かんと、大神はんの絶品酢豚が無くなつてまうで」

紅蘭の言つ通り、楽屋では四人が先に打ち上げを始めていた。

「隊長、遅かつたじゃねえか……………！ウツ、み、水……………」

相変わらず豪快にピロシキを食べるカンナ。

「やれやれ、これだから食い意地の張つた方は困りますわ」

言いつつも水を飲ませてあげるすみれ。

「みんな、騒ぐのもいいけど、明日に引きずつては駄目よ」

微笑ましげにセーブをかけるマリア。

「は〜い、ほどほどにしま〜す！」

パーティーとあってか、いつもより元気なアイリス。打ち上げが程よい盛り上がり、差し掛かった所で、紅蘭が立ち上がった。

「よっしゃ！大神はんも来た所やし、ウチのとおきを見せたるわ！行くで〜……………、四点皿回し！！！」

それは、中国雑技団に匹敵する超人技だった。やっている事は皿回しだが、紅蘭は両手のみならず、上げた片膝と額の四ヶ所で同時に皿回しを成功させたのだ。

「凄いじゃないか紅蘭！どこでそんな技を覚えたんだ？」

大神も驚きつつ拍手喝采する。

紅蘭はそれが嬉しかったのか、得意げに言った。

「フッフ、甘いで大神はん！中国人は生まれた時から、みんなこの位は出来るんや！まだまだ行くで！  
回る皿回し！！！」

すると、四つの皿が途端にお手玉の如く宙を舞い始めた。

「紅蘭、後で空になった皿も追加して差し上げてよ」

「ねえねえ、コップとか回してよ！！！」

「思い切って鍋とかどうだ？」

花組の隊員達も大いに盛り上がる。  
すると、紅蘭が大神に言った。

「へへ、ウチ大神はんに酢豚の恩返ししたくて、やる気になったんや」

「ありがとう紅蘭。おかげでみんなも盛り上がってるよ」

「おおきに。よっしゃ、鍋でも鉄砲でも回したるでえ〜!!」

買い出しに出たさくらと秀介を雨が襲ったのは、ちょうど帰りがけの頃だった。

「……………さくらさん、いいんですか？」

「いいんです。一つしかないんですから」

不安げに尋ねる秀介に、さくらはそう言って更にくつついた。  
今日雨が降るといふ予報に、さくらはちゃんと傘を持って来たのだが、秀介は慌てて追いかけたためにそこまで気がまわらなかった。  
仕方なくさくらの傘に二人で入る、いわゆる相合い傘の構図になっているのだ。

秀介に見れば願ってもない事だが、いざさくらと密着すると、

心臓がドキドキしてしまう。

「（本当に僕でいいのだろうか……………？）」

いらぬ心配と分かっていても、秀介はそう思わずにいられなかった。自分はさくらが好きだ。

あの上野公園で会った時から、一日たりともさくらの顔を思い描かなかった日はない。

しかし、同時にさくらが自分を好きでいてくれるか不安だった。

さっきのように、本当は大神が良かったんじゃないか。

その事が脳裏を掠め、秀介の表情は自然と暗いものに変わる。

「……………秀介さん？」

さくらの声に、秀介はハッと我に還った。

「どうかしました？」

「いえ……………、大した事ではありません」

一瞬躊躇い、秀介は止めた。

今さくらにそんな話をして、困らせるだけだと判断したからだ。

それに、秀介には気になる事があった。

「さくらさんこそ、先程からどうかされたんですか？辺りを伺ってるみたいですが……………」

さくらはさつきから、やたらと秀介にくつついて来る。

悪い気はしないが、今までなかった分、普段のさくらとは違う違和感があった。

「いえ、何でもありません」

単なる思い過ごしか、それとも秀介に知られたくないのか、さくらは答えなかった。

その答えは、帝劇についてから明かされる事になる。

「……………ふう、やっと着きましたね」

帝劇のロビーに着くや、秀介が言った。

雨に降られた事もあって、当初の予定より大きく遅れてしまった。みんなの事、待ちきれずに打ち上げを始めてしまっているだろう。

「さあ、急ぎましょう。皆さん待ちくたびれているはずですよ」

「そうですね。……………よかった」

「え？」

「いえ、何でもありません」

さくらの様子がいつもと違う事に不安を募らせる秀介「だが、敢え

て触れなかった。

今はみんなと打ち上げを楽しもう。

その後で聞けばいい。

そう考えながら、秀介はさくらの後を追いかけた。

「すみません、さくらです」

そう言ってさくらが楽屋の扉を開こうとした時だった。

帝劇の近くに雷が落ち、凄まじい雷鳴が轟いたのだ。

「……………ああっ！！」

その直後、さくらが悲鳴を上げ、怯えた様子でその場へたり込んだ。

「さくらさん！？さくらさん、どうしたんですか！さくらさん！！」

慌てて秀介が駆け寄り声をかけるが、さくらは怯えたまま反応を示さない。

「さくらくん、どうしたっ！？」

楽屋からもさくらの悲鳴を聞き付け、大神を先頭に花組メンバーが出て来た。

「さくらさん、どうなされたの！？」

心配そうにさくらを見る面々。

すると、さくらが怯えた口調で言った。

「雷様に…………おへそ取られちゃう…………!!」

「……………はい？」

思わずすみれが拍子抜けした表情を見せた。  
たしかに下らないと言ってしまえばそれまでだが、さくらの怖がり方は尋常ではない。

そこへ、あやめからアナウンスが入った。

「大神少尉、大神少尉、大至急作戦司令室まで来てちょうだい。大至急よ」

「何っ！くそっ、こんな時に……………!!」

大神は躊躇ったように言った。

大至急というのだから、余程大事な事に違いない。

しかし、こんな状態の隊員を目の当たりにして放っておけるか。  
おそらく、それに迷っているのだ。

秀介は、さくらの横に座ったまま大神に言った。

「……………行って下さい、隊長」

「秀介……………。しかし、さくらくんを放っては……………」

「早く！大至急なんです!!」

大神の声を遮るように、秀介が声を荒げた。

「……………分かった。さくらくんを頼んだぞ！」

そう言つて、作戦司令室に急ぐ大神。

その背中が見えなくなると、すみれが呆れた様子で言った。

「全く、雷が怖いなんて……………よく帝国華撃団が務まりますわね」

「アイリスだつて、雷怖いもん！」

「……………きつと、さくらは小さい頃に、雷でよっぽど怖い目にあつてるんだ」

さくらの肝っ玉の強さは花組の誰もが知っている。

その彼女が何の理由も無しに雷を怖がるとは思えなかった。

「大神一郎、ただいま到着しました！」

作戦司令室に到着した大神は、すぐにその場の緊張がいつもと違う事に気づいた。

その理由は、直後の米田の言葉で明らかになる。

「大神！蒸気演算機が、遂に黒之巢会の目的を突き止めたぞ！」

「な、なんですって！」



「実は、これまで黒之巢会が出現した5ヶ所全てに、ある奇妙な物が発見されたの」

驚く大神にそう答えると、あやめはモニターを操作し、その奇妙な物を写した。

「これは……………?」

それは、黒之巢会が怪しげな術とともに地中深くに沈めていた、あの巨大なドリルだった。

「これは寛永寺に保管されていた祭具、我々はクサビと呼んでいる」

「寛永寺? 確か、徳川時代の……………」

士官学校時代に読んだ古い文献に同じ名前があった事を、大神は思い出した。

「そう。そして寛永寺の住職は天海大僧正。つまり、黒之巢会首領天海の事よ」

「なるほど。天海の正体は、徳川時代の僧だったんですね」

確かにそれなら、脇侍が時代遅れの武士の格好をしている事にも納得がいく。

しかし、蒸気演算機が割り出した事実はそれだけではなかった。

「それだけじゃねえ。大神、こいつを見てくれ」

そうやって米田は更にモニターを操作し、帝都全体を写した。

「クサビが発見された上野、芝、築地、浅草、深川。これに蒸気演算機の割り出した仮想地点、日比谷公園を加わると……………」

帝都に米田が口にした六ヶ所の地点が赤く表示される。すると、何かの魔法陣が写し出された。

「『六破星降魔陣』……………。奴らの狙いは、帝都全体に魔術をかける事だったんだ」

「魔術!?!」

大神は更なる衝撃的事実に目を見開いた。天海の妖力の強さは大神もよく知っている。

影侍や蒼角・銀角兄弟には苦しめられたし、ゴルドラスにはウルトラマンも苦戦を強いられた。

この魔法陣は、それこそ帝都全体を包んでいる。この範囲で魔術など使われたら、未曾有の被害を受ける事は火を見るより明らかだった。

「大神、直ちに花組を召集し、日比谷公園で待機してくれ! いいな?」

「了解しました!」

力強い返事とともに、大神は作戦司令室を後にした。

大神に驚愕の事実が明かされている頃、秀介はさくらとともに鍛練室の奥の部屋にいた。

あれからさくらに、話があるところに連れて来られたのだ。

「……………さくらさん、話とは？」

周りに人がいない事を確認して、秀介はさくらに尋ねた。

まだ雷のショックが残っているらしく、さくらは辛そうな表情で俯いている。

「秀介さんにだけ、お話しておきたいんです……………。あたしが、雷が苦手な訳を……………」

あたし、小さい頃おてんばで……………

喧嘩友達のたけし君とよく遊んでました。

あの日雷の音がして、おばあちゃんに外へ出ないように言われてました。

でも、あたしはその言い付けを破ったんです……………

「さくら、雷様が怒ってるぞ！」

「平気だよ。さくら、雷様なんて怖くないもん。」

強がってそう言うあたしを、たけし君は家の中に連れ戻そうとしました。

その時……………

「…………… たけし君は、雷様におへそを取られたんです」

「……………」

それはつまり、雷に打たれて死んだという事だった。

確かに雷の直後に友達の変わり果てた姿を見れば、悍ましい記憶となつて残るのも無理はない。

秀介は敢えて口には出さなかった。

さくらがこうして「おへそを取られた」と表現を変えるのは、死んだという事を直接言葉にしたくないからと、秀介は判断したからだ。

「…………… だから、あの時一人で買い出しに行こうとしたんですね？」

主助の問いに、さくらは無言で頷いた。

雷に怯える姿をみんなに、特に秀介には見せたくなかったのだ。

それを示すように、さくらは恥ずかしそうにそっぽを向いた。

「あたし…………… 恥ずかしくて死んじゃいそう。秀介さんに…………… あんなはしたない姿見られて……………」

「やくらちゃん……………」

どう声をかけていいか分からず、言葉を詰まらせる秀介。  
その時、部屋を凄まじい轟音と振動が襲った。

「きゃあああ………!!」

「くっ………っ、これは一体!？」

立ってられない程の揺れに、二人はその場にうずくまる。  
それは外からではなく、地下からのものだった。

それは大神の指示で花組が出撃しようとした矢先に突然起こった。  
黒之巢会死天王、紅のミロク率いる脇侍の精鋭軍団が、格納庫に奇襲を仕掛けてきたのだ。

「チッ、不意打ちとは卑怯だぜ黒之巢会!」

「せっかくの打ち上げもパーにしようって、許さへんで!!」

いきり立つ隊員達を前に、ミロクは薄ら笑みを見せた。

「ふん、ごさかしい。自分達の隠れ家で死ぬる事を喜ぶがいい、帝  
国華撃団!」

「みんな、さくらちゃんと秀介が合流するまで俺達で食い止めるんだ

！」

「了解！」

力強い返事で花組が答える。

しかし、数の差は歴然としていた。

「（この数相手で長くはもたない……。さくらくん、秀介、早く来てくれ！）」

二人の到着を願いつつ、大神は先陣をきって飛び込んだ。

「まさか……。黒之巢会！？」

地下から断続的に伝わる振動と剣戟の音。

おそらく日比谷公園に行かせないために奇襲を仕掛けてきたのだろう。

直ちに地下に下りて、大神達と合流しなければならない。

しかし、秀介には出来なかった。

今の衝撃で鍛練室の入り口が崩壊し、閉じ込められてしまったからだ。

更にもう一つ問題があった。

さくらが今の衝撃と轟音を雷と錯覚し、パニックになってしまったのだ。

「あ……ああ……か、雷様が……怒ってる……。」

その場に座り込み、怯えた声で恐怖に震えるさくら。

「さくらさん、しっかりして下さい！さくらさん……！」

秀介はさくらの両肩に手を置いて呼び掛けるが、さくらは全く反応しない。

「許して……、さくらを……許して……。」

「さくらさんっ……！……くそっ、このままじゃ……！」

こうしている間にも、地下から伝わる振動や轟音は段々と激しいものになっていく。

最早、一刻の猶予もなかった。

「（……仕方ない！こうするしか……！）」

一瞬目を閉じて思案したが、秀介はカツと目を見開いて決断した。

「さくらさん……すみません……！」

秀介はそう叫んでさくらを強引に立たせ、そして……

力強く抱きしめた。

「……………え……………?」

さくらは一瞬、時間が止まったような感覚を覚えた。先程まで聞こえていた轟音も、激しい振動も、脳裏について離れない雷の恐怖の記憶も、嘘のように無くなっていた。その中で唯一感じるのは、誰かの温もりが羽のように自分を包み込む、心地好い感触だった。

「……………し……………秀介さん?」

消え入るような細かい声で、さくらが秀介の名前を呼ぶ。すると、囁くような優しく甘い声が、さくらの耳元から聞こえてきた。

「さくらさん……………。怖い事は何もありません」

「ど、どうして……………?」

「僕が……………、僕が貴女を守るからです……………」

躊躇いがちに紡がれるその言葉に、さくらは自分が秀介の胸の中にいる事を自覚した。



そして、自身の胸の鼓動が高鳴っている事に気づいた。

「……………だから、笑顔を見せて下さい」

「え……………?」

「貴女の笑顔があれば……………それだけで、僕はいくらでも強くなれるんです」

「……………秀介さん……………!」

さくらは驚きで目を見張った。

自分の笑顔がみたい。

自分の事を守りたい。

それはつまり……………、

「……………あ……………」

さくらの脳裏に浮かんだ答えを肯定するように、秀介がさくらを抱く腕に力を込める。

そして、秀介はそれを、遂に明かした。

「さくらさん……………。僕は……………、僕は……………」

それは、あの桜の木の下で一人の青年が抱いた想い。

「貴女の事が……………、好きなんです」

「……………!!」

さくらは胸の高鳴りに合わせて、自分の身体が熱くなるのを感じた。まるでその言葉を待ちわびたように、鼓動は強く、切ないものへと変わっていった。

「秀介さん……………!!」

それを言葉に出来ず、さくらはそっと秀介の背中に手を回した。しばらくの間、二人は無言で抱き合っていた。

「……………すみません、破廉恥な事をして……………」

名残惜しげにさくらから離れ、秀介はさくらに詫びた。

いくら落ち着かせるためとはいえ、突然異性を抱きしめるのは破廉恥以外の何物でもない。

すると、さくらは火照った顔のまま微笑んだ。

「……………いいえ、嬉しかったです」

「さくらさん……………」

その微笑みに思わず見とれる秀介だが、ハツとして我に還った。

「そうだ！早くここを脱出して、みなさんを助けなくては！」

「でも、どうやって脱出します？」

さくらの言う通り、鍛練室の入り口は崩壊している。

みんなを助ける以前に、ここを脱出しない事にはどうにもならなかった。

すると、秀介は左手首のブレスレットを見せた。

「大丈夫です。ブレスレットを瓦礫の根元に打ち込めば、破壊は可能です」

「秀介さんのブレスレットって、凄いですね……………」

上野公園でのスパークソードとあわせて、改めてブレスレットの力に驚くさくら。

しかし、ブレスレットを以ってしてもリスクは存在した。

「……………ですが、ブレスレットは威力があり過ぎます。もし失敗すれば、生き埋めは確実……………」

ただでさえ部屋全体が不安定状態に置かれている。

もし必要以上の力をかけてしまえば、衝撃が部屋全体に伝わり、たちまち崩壊してしまうだろう。

「さくらさん、僕を信じてくれますか？」

念を押すように尋ねる秀介。  
すると、ハッキリとした返事が返ってきた。

「はい！」

その言葉に、秀介は覚悟を決め、瓦礫を見据えた。  
そして……………、

「行けえええ！！！」

ブレスレットは光の刃となり、瓦礫を直撃するや、閃光とともに大爆発を起こした。

刹那、爆発の衝撃が二人を襲う。

「秀介さんっ！！！」

秀介の身を案じたさくらが、秀介にしがみつく。  
その時、不思議な事が起こった。

「（こ、この力は……………！！）」

秀介は目の前で起きた現象に驚きを隠せなかった。  
さくらの全身から霊力のバリアが出現し、二人を爆風から守ったのである。

「さ、さくらさん……………、今のは一体……………？」

驚きを隠せぬまま、秀介が尋ねる。

すると、さくらもまた驚いた様子で答えた。

「…………あたしにも良く分かりません。ただ……………」

「ただ？」

「秀介さんを守りたいって思ったら……………」

おそらくはさくらに秘められた何かの力だろう。その正体は分からないが、秀介はそう判断した。ともかく、これで外に出られる。

考えるより、大神達を助ける方が先決だった。

「さくらさん、話は後です！急いで地下のみなさんと合流しましょう！」

「はい！！！」

「隊長、右側から新手です！」

「くっ、カンナっ！」

「よっしやあ、任せろ！！！」

マリアの方向を受けた大神は、素早く指示を飛ばした。指示を受けたカンナは一気に敵へ突っ込んで行く。

しかし、倒しても倒しても敵は次々と現れ、キリがない。加えてさくらと秀介がいないというハンデが重くのしかかり、花組はかつてない苦戦を強いられていた。

「も……………、もうアカン……………」

「紅蘭、諦めるな!!」

弱音を漏らす紅蘭を励ましつつ、大神は脇侍を切り捨てる。

しかし実際は紅蘭の言う通り、花組はいずれも満身創痍の状態だった。

大神を含む隊員全員に疲労の色が見えはじめ、最早敗北の二文字が目の前に迫っていた。

「アハハハハ！帝国華撃団、この劇場とともにくたばるがいい！」

勝利を確信し、ミロクが笑い声を上げる。

しかし、それを掻き消す凜とした鋭い声が飛んだ。

「そこまでよ!!」

「何っ!?!」

突然の声に、ミロクの顔から笑みが消える。

そこには、桜色の光武と一人の青年の姿があつた。

「遅くなつてすみません！みんな、大丈夫ですか！？」

「紅のミロク！僕らを忘れて勝つた気にならないでいただきたいです  
すね！」

「さくら！秀介！」

「遅いで、二人とも！」

「全くですわ！」

口々に言うものの、その表情は笑っている。

チームワークが売りの花組は、全員揃えば無敵となるのだ。

それを知らないミロクは、二人を小馬鹿にして大笑いした。

「アハハハハ！馬鹿め、たった二人で何が出来る！者ども行け！！」

「笑つてられるのも今の内だ。みんな、行くぞっ！！」

「了解！！！！」

さくらと秀介の到着で花組は今までの勢いを取り戻し、瞬く間に形  
成は逆転した。

特に秀介は狭い室内の戦闘で流星が使えないために生身で挑む事  
になったが、スパークソードを駆使した持ち前の立ち回りで次々と脇  
侍を倒して行く。

そして、花組は先程の劣勢が嘘のように脇侍を全滅させ、ミロクを  
追い詰めた。

「ミロク！もう逃げ場はないぞ！」

ミロクを前に大神が叫んだ。

しかし、ミロクは尚も余裕の笑みを崩さない。

「ふん！お前達ごときにわらわが倒せるものか！」

大神の声を一蹴し、ミロクは己の魔装機兵を召喚させた。

十二単とまでは行かないが、昔の女中を連想させる妖艶な機体。

「刹那と羅刹の仇、この孔雀で取らせてもらうよ！いでよ我がしも  
べ、『紅蜂隊』！」

そう叫び、ミロクは孔雀の袖から人型の手裏剣を放ち、床に突き刺  
す。

すると、手裏剣はたちまち赤い双剣の脇侍に変身した。

ミロク直属の親衛隊、その名も『紅蜂隊』である。

「この脇侍、他の者と何か違う。みんな、まずは赤い脇侍を倒すん  
だ」

赤い脇侍には何かあると睨んだ大神は隊員達にそう指示した。



先にザコを片付けて敵を孤立させるのが、戦いの定石だったからだ。結果それは上手く行き、紅蜂隊は瞬く間に全滅した。しかし、大神は気づかなかった。それがミロクの狙いである事に……………。

「どうだミロク！何体援軍を呼ぼうと無駄だぞ！」

「くくく……………果たしてそうかえ？」

追い詰められたはずのミロクが不適に笑う。

その様子に何かあると感じ、大神は油断なく身構える。すると、ミロクが叫んだ。

「喰らうがいい！妖・雷破！！」

「……………しまった！みんな、散れっ！！」

大神が叫んだ時には遅かった。

光武達が動く前に、孔雀の両袖から稲妻が走る。それは、全ての光武を瞬時に包み込んだ。

「アハハハハ！畏にかかったな、帝国華撃団」

「くっ……………」

嘲笑うミロクに、大神は悔しげに歯噛みした。何の事はない。

『紅蜂隊』は、自分達を孔雀の妖・雷破に巻き込むための罠だったのだ。

一撃で倒れる程の威力ではないが、これまで無数の脇侍と戦って体力を消耗した花組には決して軽いダメージではなかった。

「アカンで、大神はん！今の攻撃で光武の霊子エンジンの動きが鈍くなっとる！」

「何っ！？」

大神はハツとした。

今の電撃で、光武の動きが鈍くなる。

更に、大神達は皆揃ってミロクの正面にいる。

これでは敵の恰好の的だった。

「そうか……………、電撃で俺達を動けなくして、纏めてトドメをさすつもりだな！？」

「アハハハハ！そういう事さ、覚悟するんだね！」

孔雀が再び妖・雷破を放とうと袖を振り上げる。

その時、孔雀の腹部から光の刃が突き出た。

「言っただはずです。僕らを忘れるなとね」

それは、秀介のスパークソードだった。

一瞬の早さで妖・雷破を避けた秀介は、気配を消して孔雀の背後を取ったのである。

「グッ！こ、小癩な……………！」

秀介を振り払おうと、妖・雷破を乱発するミロク。

たちまちミロクの周囲は、縦横無尽に雷が飛び交う結界となった。

「し、秀介さん……………!!」

結界の中で一人ミロクと戦う秀介の様子に、さくらは心配そうな声を漏らす。

行こうと思えば、助けに行く事は出来た。

まだ到着して間もないさくらの光武だけは、ダメージも軽微だったからだ。

しかし、絶え間無い雷の連打に恐怖が蘇り、さくらは秀介に近付く事すら出来ないでいた。

「(だ、駄目……………。あたし、やっぱり……………。)」

長い間付き纏って来た恐怖が、そう簡単に払える訳がない。その時……………、

「ぐぐっ……………!!」

突然の秀介の声に、さくらは閉じていた瞳を開いた。

「秀介さん!!」

さくらは思わず叫んだ。

なぜなら秀介の身体には、ミロクの放った手裏剣が無数に突き刺さっていたからだ。

「(どうしよう……………、このままじゃ秀介さんが……………!!)」

暗い予想が脳裏を過ぎる。

その時、その光景があの日々の雷の記憶と重なった。

「……………!!」

大事な人が消える……………。

その思いに、さくらはハツとした。

「……………嫌……………」

そして実感した。

秀介を失いたくないという自身の想いを。

「秀介さん!」

さくらはキツと孔雀を見据え、太刀を握って駆け出した。

「何っ!? まだ動けたというのかえ!？」

「( 剣よ、応えて! )」

信じられないという面持ちのミロク目掛け、さくらの太刀が煌めいた。

「やあああああっ!?!」

気合いととも横に払われた一閃。

それは、孔雀の胴体を横一文字に寸断していた。

「ば、馬鹿な……！このわらわが負けるなど……！！！」

己の敗北を受け入れられぬまま、ミロクは孔雀諸とも爆死した。

「今回はさくらくと秀介に助けられたな」

戦いが終わり、大神が呟いた。

確かに二人がいなければ、ミロクを倒す事はおろか、脇侍を全滅させる事も出来なかつただろう。

特に秀介は、生身の状態で脇侍を倒し、更にミロクの撃破にも貢献している。

間違いなく、彼はこの戦いの一番の功労者だろう。

その功労者は、身体に刺さった手裏剣を抜きつつ言った。

「すみません。もう少し早く来たかつたんですが……」

「いって事ですわ。終わり良ければ全て良しと言つてしょう？」

遅れた事を詫びる秀介に、すみれは笑って返した。

「さくら、おへそは取られなかつたみたいね」

「え？……はい。秀介さんが、優しく守ってくれましたから……」

珍しく冗談めかしてマリアが尋ねると、さくらは顔を真っ赤にして応えた。

それを見た秀介も、途端に顔を赤くする。

「ほほう？二人して何しとったんや？」

「しとったんや〜」

すかさず二人をからかうアイリスと紅蘭。すると、見兼ねたカンナが止めに入った。

「まあまあ、いいじゃねえか。それよりお約束のアレ、だろ？」

「ははは、そうだな。みんな、行くぞ？」

「勝利のポーズ、決めっ！」

「……ふっ、相変わらず詰め甘い奴らだ」

「お前は……！」

気配もなく目の前に現れた人物に、花組は異口同音の驚きの声を上げた。そこにいたのは、黒之巢会の影で暗躍する謎の忍、蝸だった。

「貴様、いつの間に潜り込んだ!？」

大神が鋭い声を飛ばすと、蝸は鼻で笑った。

「今はそんな事より大事な事があるんじゃないのか？」

「何……………?」

意味深な蝸の発言を訝しむ大神。

すると、上から低く唸るような重低音が響いて来た。

「じ、これは……………?」

「地上から何かが伝わって来ますわね……………」

すみれの言葉に、大神の表情が一変した。

「……………しまった!!」

青ざめた表情で叫ぶ大神。

その顔は、何か重大な事を思い出した時のそれである。

「ふっ、地上に上がって見るがいい。面白い余興が見られるぞ?」

大神の表情に満足そうな笑みを浮かべると、蝸は煙の如く消えてしまった。

「何だったんだ？あいつは」

蝸が何のために現れたのか分からず、首を傾げるカンナ。すると、大神がいつになく慌てた様子で叫んだ。

「みんな、急いで地上に上がるんだ！」

それは、正に一瞬の出来事だった。

帝都の六ヶ所から赤い光が現れたかと思うと、その光は帝都を包む巨大な魔法陣を描いた。

その直後、激しい震動が帝都を揺らし、大地が裂け、建物が崩れ、帝都は瞬く間に炎と悲鳴に包まれた。

その様子に、天海は満面の笑みを浮かべた。

「おお…、何と言う力だ。素晴らしい力だ。私の理想が復活するのだ！」

六破星降魔陣……………。

帝都の全てを破壊するという黒之巢会の理想が、現実となった瞬間であった。



六破星降魔陣は、帝劇内部にもその力をまざまざと見せ付けた。窓ガラスは割れて飛び散り、中庭の噴水はひび割れた。大神の予想通り、何も無い舞台に全員を集めたのは正解だった。しかし次の瞬間、誰もが予想だにしない出来事が起きた。

「……………！！ きゃあああああ……………！！！」

何と、さくらが突然頭をおさえて苦しみ出したのだ。

「さくらさん!?!」

隣にいた秀介が慌ててさくらに駆け寄る。

しかし、さくらは秀介の声に反応すら返せなかった。

「ああ……………う……………し……………秀介……………さ……………」

絞り出すように秀介の名を口にして、さくらは糸の切れた人形のように倒れた。

「……！ さくらさんっ！ どうしたんですか、さくらさん！ さくらさんっ！……！」

素早くさくらの背中に手を回し、秀介が叫んだ。しかし、さくらは目を閉じたまま応えなかった。

帝都最期の日！？（後書き）

《次回予告》

帝都は壊滅した……………

だが、俺達は生きている。

諦めるな、秀介。

まゝだ負けちゃいねえ！

次回、サクラ大戦！

《決戦！愛のために》

大正さくらにロマンの嵐！

未来を掴め！その手でな！

決戦！愛のために（前書き）

ゲームで言うと、第1クールのクライマックスになります。

今回の敵は、ある意味トラウマな奴です。

そういえば新マンの怪獣って、やたらトラウマな怪獣多かったよな…。

## 決戦！愛のために

「……………これが六破星降魔陣か。凄まじい威力だな」

高台から壊滅した帝都を見下ろし、又丹が呟いた。

「さて、帝国華撃団。どう出るかな？」

「……………あやめさん。さくらさんの容態は？」

医務室から出て来たあやめに、秀介は逸る気持ちを抑えて尋ねた。その隣には、大神の姿もある。

あやめは一瞬躊躇ったが、事実を口にした。

「……………芳しくない状態よ。一緒に来てちょうだい」

あやめに連れられて二人が向かったのは、医務室の奥にある医療ポッドだった。

集中治療が必要な時に使用する紅蘭の発明品で、大神も以前、築地で刹那にやられた時に世話になった。

さくらは、その中の一つに眠るようにして横たわっていた。

「さくらさん……………」

呼び掛けても返事は返って来ない。  
死んだような無表情のままだ。

「目を開けて下さい、さくらさん。まだ……………、貴女の答えを聞いていません」

胸に込み上げる熱いものを堪えて、秀介が声をかける。  
その様子にいたたまれなくなり、大神はあやめに尋ねた。

「あやめさん、さくらくんは一体……………？」

「恐らく、六破星降魔陣のショックで『トランス状態』になったと考えるべきね」

「『トランス状態』とは？」

「霊力などの強い人間が、他の力に過敏に反応する、一種の催眠状態の事よ」

トランス状態。

それはあやめの言う通り、霊力の強いものが別の強い力に反応する現象を指す。

そのショックの度合いはその人物の霊力の高さに比例して強くなり、場合によってはショック死する場合もある。

さくらは特に、その身に北辰流の破邪の力を持ったため、霊力の度合いがかなり高い。

そして、ショックの引き金が六破星降魔陣と仮定すれば、納得がいく。

「……………目覚める見込みは……………、あるんですか？」

秀介が尋ねた。

あやめは少しの間黙っていたが、やがて話し始めた。

「こればかりは、私にも何とも言えないわ。さくらは精神が不安定になってる。彼女自身でなければ、目覚める事はないわ」

「そ、そんな……………！」

驚きの声を上げる大神と対照的に、秀介は何も言わなかった。ただ、ガラス越しにさくらを見つめ続けていた。その様子を見て、あやめは大神に目配せした。

「……………大神君」

「はい、失礼します」

「大神はん、さくらはんはどうやった？」

「少尉、さくらさんは大丈夫ですか？」

「お兄ちゃん……………」

医務室から出て来た大神に、隊員達が殺到した。あれだけさくらが苦しむ姿を目の当たりにしたのだから、当然である。

「大丈夫だ。今治療を受けているが頭を打った程度で、酷い怪我じゃない」

大神は、敢えて嘘をついた。

仲間思いの花組の事だ。本当の事を話せば、一も二もなく医務室に飛び込むだろう。

今は、秀介をさくらと二人きりにしてあげたかった。

「そっか、それなら安心だな」

「ほんまやで。倒れた時はウチも肝を冷やしてもうたけど……………」

「さあ、作戦司令室に集まりましょう。今後の対策を立てないと」

マリアの言葉に全員が同意し、作戦司令室に向かう。

「秀介……………さくらくん……………」

扉の前でそう呟くと、大神は隊員達の背中を追った。

「大神はん、どないしたん？」

作戦司令室に向かおうとした大神の前に、紅蘭が戻って来た。

「や、やあ紅蘭。先に行っただんじゃなかったのかい？」

無理に笑顔を作って見せる大神。

しかし、紅蘭はそれのため息を返した。

「……………アカン。大神はん、元気ないんがバルバレやん」

「え……………？それじゃあ……………」

「気づいとるに決まってるやん。秀介はんを一人にさせたかったんやろ？」

凶星を言い当てられ、大神は肩を竦めた。

何の事はない。

紅蘭は分かっているわざと乗ったのだ。

「大丈夫や。うち、さくらはんと秀はんを信じとるさかい。大神はんも、二人を信じたって。な？」

「紅蘭……………ありがとう」

元気づけてくれる紅蘭に、大神は礼を述べた。



医務室に一人残った秀介は、瞬きもせずにはさくらを見つめていた。数ヶ月前に上野で出会ってから、抱き続けた思い。

それが、ようやく実を結んだと思ったのは、つい数分前の事だ。

「さくらさん……………」

もう一度呼び掛ける。

やはり、返事はない。

「僕は……………」

秀介の目が、ブレスレットに移った。

「僕は……………」

「ヒヤハハハハハハハハ！我は黒之巢会首領、天海！この汚れきった帝都を浄化し、偉大な徳川幕府を再興する者なり！」

帝都の夜空に、天海の笑い声がこだました。

「帝都の哀れな市民諸君に継ぐ。お前達の猶予は一時間だ。それまでに日本政府は幕府に全ての権限と保有金百億、そして陸軍中将の命を差し出せ！」

陸軍中将。

それは、帝国華撃団総司令、米田一基に他ならなかった。

「約束が守られぬ時は、帝都に地獄が訪れる。覚えておくがいい！」

「……………俺の命が欲しいだと？面白い！天海、差し違えてやるぜ！」

政府から報告された天海の要求を聞くや、米田は立ち上がった。

その剣幕は、本当に天海の下へ乗り込んでしまいかねない程、激しいものだった。

「長官！」

慌ててマリアが止めようとするが、米田は聞かなかった。

「どけ！せつかく奴が死に場所をくれたんだ！行かなきゃ軍人の恥つてもんだ！」

しかし、そこに頑として止める者がいた。  
大神である。

「いいえ、どきません！米田司令ではなく、俺達が行きます！それに、俺達は死に場所を求めるんじゃない……………」

「な、何！？」

「天海を倒し、未来を掴むために、俺達は戦うんです！」

その言葉に、米田は氷水を浴びたように、自身の頭が冷めるのを感じた。

「そうか……………そうだったな」

米田が落ち着いてくれたところで、すみれが口を開いた。

「警察や軍隊は、市民の避難を完了させましたの？」

黒之巢会の魔装機兵に立ち向かうには、霊力が必須条件となる。従って普通の警察や軍隊では、脇侍には対抗出来ないのだ。最も、それで対抗できれば帝国華撃団など設立するはずもないが。

「ええ、先程報告と一緒に完了の旨が伝えられたわ」

「じゃあ、一般人を巻き込まずに済むな」

あやめの答えに、カンナが拳を握った。

一般人の避難が完了していれば、戦闘になった際に一般人を巻き込む危険が無くなり、結果戦いやすくなるのだ。

しかし、今度ばかりはそうも言ってられなかった。

それを述べたのは紅蘭だった。

「せやけど、流石に今回はキツイで。敵さんは合計七ヶ所から同時に現れとるし、一カ所だけで千体を超えとるんや」

「……………つまり、七千体以上が相手という事ね？」

「クソツ、とても全部を相手にしてらんねえな！」

敵が七千に対し、こちらは八名。

戦わずとも勝負は目に見えている。

それに万に一つ勝機が見えたとしても、また先程のような魔術を使われれば一巻の終わりだ。

「ねえお兄ちゃん。あと一時間したら、みんな死んじやうの？」

不安げな様子で、アイリスが大神に尋ねた。

見ると、周りの隊員達もどこと無く不安の色を見せ始めている。

大神は、みんなを元気づけるように言った。

「みんな、落ち着くんだ。確かに俺達は、今までで最大のピンチを迎えている。だが思い出すんだ、これまでを。時には失敗して大騒ぎする事もあったけど、必ず俺達は勝ってきた。諦めさえしなければ、道は開けるはずだ」

その言葉に、隊員達の中に眠る闘志が再びくすぶり始めた。

「そつやな。ウチらが諦めたら、希望の灯は消えてしまっんや」

「だよな。今回だって大丈夫さ」

「これだから単細胞は困りますわ。いくら花組でも七千の数を相手にできますか」

いつものように突っ掛かるすみれだが、今回はすみれに一理あった。

「残念だけどすみれの言う通りよ。今回はかりは敵の数が多すぎるわ」

あやめの言葉に、大神は目を閉じて考えた。

確かに正面から戦いを挑むのは無謀だ。

しかし一時間すれば、どのみちやられてしまう。

そこまで考えた時、大神は閃いた。

「そうだ、敵の本拠を突くんだ。ザコには構わず、天海を一気に仕留めるんだ！」

それは、言わば逆転の発想だった。

どんなに戦力の差があっても、敵の指揮官を倒せば命令する者がいなくなる。

かつて織田信長が、桶狭間の戦いで今川義元を倒した戦法を、応用したのである。

「この六破星降魔陣も、天海の力で出現したものだ。ならば天海を倒せば……………」

「成る程、魔法陣は消滅しますね」

「急所を狙って一撃か。空手と同じ戦法だな！」

「よっしゃ！早速蒸気演算機で、天海の居所を探して見ようやないか」

作戦の方針が決まり、隊員達は早速行動を開始した。その様子を見て、米田は呟いた。

「何だか俺達の出る幕はねえな、あやめくん」

「そうですね……………」

「すみれくん、この辺りだな？」

「この妖気の高まり……………、間違いありませんわ！」

すみれの言葉に、花組の緊張感が俄かに高まった。

帝都、品川。

あの後、蒸気演算機に一際強い妖気の反応があったここに、花組は天海がいると断定したのだ。

しかし、強い妖気があるだけで天海がそこにいるという保障はない。時間がない以上、ある程度のキメ打ちは覚悟しなければならなかった。

「……………やはり来たか、帝国華撃団」

「お前は!？」

不意に上から聞こえて来た声に、大神が反応した。

そこにいたのは、黒之巢会死天王最後の一人、黒い又丹だった。

「あれは、又丹!」

「……………ちゅう事は、やっぱりこの近くに天海がおんねんな」

紅蘭がそう言うと、又丹は余裕の表情で言った。

「やはり天海様の首を狙ったか。少しは出来るようだな」

「馬鹿にしゃがって……………!てめえこそ自分の心配したらどうなんだ!？」

「上野で私にコテンパンにされた事を、懲りていらっしやらないよ  
うね」

「又丹!天海は何処にいる!？答える!！」

双剣を突き付け、大神が吠えた。

すると、又丹はニヤリと薄気味悪い笑みを浮かべた。

「フフフ……………、貴様らこそ、それで勝ったつもりか？」

その言葉に大神は怪訝な表情を見せる。

刹那、マリアが叫んだ。

「隊長！後ろを！」

「何っ？………こ、これはっ！？」

背後を向いた大神は絶句した。

そこには、何百という数の脇侍の軍勢が花組の退路を埋め尽くさんばかりに押し寄せていたのだ。

「まんまと罠にかかったな。帝国華撃団！」

「しまった………！！！」

先程の又丹の発言から、自分達が高い妖気を持つ天海を狙った事も又丹の計算の内だったと分かる。

又丹は更に大神の裏をかき、周到な罠を仕掛けたのだ。

「みんな死んじゃうよー！」

「こつなったらヤケクソや！！！」

「やれる所までやってやるぜ！！！」

退路を塞がれ、逃げ場がない。

追い詰められた危機感から焦る隊員達に、大神は冷静に説得した。

「みんな、命を無駄にするな！こんな数とまともに戦っても勝ち目はない」

「しかし退路がない以上、このままでは全滅ですわ！？」



すみれの言う通り、自分達は袋小路を背に大群と向かい合っている状況だ。

このままではジワジワと追い詰められるのは確実だった。

しかし、ここで思わぬ助っ人が現れた。

「そうはさせません!!」

その鋭い声とともに霊力弾が雨霰となって降り注ぎ、脇侍の大群を瞬く間に殲滅させた。

それは、赤と銀で塗装された希望の流れ星だった。しかし、大神達が驚いたのはそれだけではなかった。

「……………あたしの大切な仲間を傷つける奴は、決して許さない!」

流星の横に立つ桜色の光武から、凜とした声が発せられた。同時にハッチが開かれ、声の主が姿を見せる。

「遅ればせながら、真宮寺さくら、参上!」

「同じく、御剣秀介、見参!」

「遅いのよ、あなたたちは……………！」

ようやく復活したさくらに、すみれが笑いかける。すると、さくらも一瞬笑顔を見せて大神に告げた。

「大神さん、天海の本拠地が分かりました！ここは退いて下さい！」

「本当か、二人とも！？」

信じられないとも取れる表情で大神が驚く。

すると、秀介がそれを保障するように言った。

「詳しい話は後ほど。今は僕達を信じてついて来て下さい！」

その言葉に、大神は決断した。

「よし……………。みんな、あの二人に続け！」

「了解！！」

大神を先頭に、花組は一斉に走り出した。

どういいういきさつかは知らないが、天海がいないならここには用はない。

流星の攻撃で弱った脇侍達を蹴散らしながら、花組は結界線を突破した。

「天海か華撃団か……………。どちらが勝つも無し……………」

背後の又丹がそう呟くのに気付かずに……………。

「……………間に合って良かったですね、秀介さん」

一足先に翔鯨丸に乗り込んださくらが、隣の秀介に話し掛けた。  
二人きりという事もあってか、やや恥ずかしそうに頬を染めている。

「はい、一時はどうなる事かと思いましたが……………」

答えつつ秀介は、そつとさくらの手を取り、両手で包み込んだ。  
その顔は、やはり赤い。

「さくらさん……………、貴女が無事で……………」

「秀介さん……………」

赤い顔のまま、互いに見つめ合う二人。  
すると、外から騒がしい声が聞こえて来た。

「……………せつかく二人きりだったのに」

「仕方ありませんよ。今は、平和を取り戻しましょう」

「そうですね……………」

名残惜しい気持ちを我慢して、秀介はさくらの手を離した。  
と同時に、大神達がコックピットに入って来た。

「二人とも、さっきはありがとう」

「さくらはん、やっぱ大丈夫やったんやな」

「ごめんなさい、心配をおかけしました」

律儀に謝罪を口にするさくら。  
すると、カンナが笑って返した。

「いって事よ！あたいらの事、助けてくれたしな」

あやめと米田が到着したのは、その時だった。

「みんな、揃ったようね」

所定の椅子に腰掛ける面々を見渡し、あやめが言った。

「ところでさくらくん、何故天海の場所が？」

それは、至極当然の疑問だった。

蒸気演算機でも正確な居場所を特定出来なかったのに、何故さくらには分かったのか。

それは、さくらが持つ力が関係していた。

「……………実は、夢を見たんです」

「……は……？」

さくらは、不思議な空間を漂っていた。

温度も、色も、重力もない空間……。

宙に浮いた感覚で、さくらはぼんやりと前を見ていた。

そこに、何かの気配を感じたからだ。

そして、その気配の正体が、さくらの前に姿を見せた。

「え……？ 貴方は……」

さくらは、その人物に驚きを隠せなかった。

なぜならその人物は、今まで何度も自分達を助けてくれた救世主だったからである。

「ウルトラマン……ジャック……」

その名を口にすると、ジャックは徐に頷いた。

「さくらさん……。貴女にとって、帝都は何です？」

「え……？」

突然のジャックの問いに驚いたさくらだが、やがてハッキリと答えた。

「帝都は……、あたしの大切な街です。命を懸けても守りたい……、そんな街です」

「……………ならば、迷う事はありません。貴女の想いを力に変え、この美しき都を守って下さい」

「え……………?」

戸惑つさくらに、ジャックは告げた。

「敵は、魔を封じた門の上にあります」

「さ、さくら！今何て言った!？」

さくらの言葉に、米田が顔色を変えた。

「は、はい。敵は魔を封じた門の上にいる……………」

「司令、何かご存知なんですか？」

大神が尋ねると、米田は重々しく頷いた。

「いよいよ話さなきゃならんようだな、あやめくん」

「ええ……………大神君、八年前に降魔戦争があった事は知っている

かしら？」

あやめの問いに、大神はかつて士官学校時代に読んだ文献の一部を  
思い出した。

降魔戦争……………。  
帝都を襲った怪物と影で戦った者達の歴史だ。

「はい。前に古い文献で見た事があります。帝都に溢れ出た降魔と  
特殊部隊『帝国陸軍・対降魔部隊』の戦争と聞いています」

「ああ。今思い出すと、懐かしい思い出だぜ」

そう言つて米田は一瞬、遠い過去を思い出すような表情を見せた。

「それが、さくらの夢と関係があるんですか？」

マリアが尋ねると、米田は頷いた。

「もちろんだ。魔を封じた門……………。そいつあ俺達の手で降魔を封  
じた場所を意味するからな」

その言葉に、花組の全員が驚愕の表情を見せた。

天海の居場所が分かる事もそうだが、米田は更に驚くべき事を口に  
していた。

「あれは今から八年前だ。度重なる降魔の存在を知った俺は、当時  
陸軍大佐だった親友の真宮寺一馬とともに対降魔部隊を結成し、同  
士を募つた……………」

帝国陸軍・対降魔部隊……………。

それは、目の前にいる米田だった。

「そして、3名の仲間を加えた。光武の設計者でもある『山崎信ノ介』と、陸軍一の切れ者だった『一之瀬 豊』、そしてここにいる『藤枝あやめ』くん……。俺達は己の剣と身体のみで降魔と戦い、太古の呪法を以ってある場所に封じ込めた。……。取り返しのつかない多くの犠牲を払ってな。」

何か悲しい思い出があるのか、最後を語る米田の表情には哀愁があった。

「大神君、何か聞きたい事があるみたいね？」

「はい。真宮寺一馬さんつてもしかして……………」

「そう、さくらのお父上よ」

「それだけじゃねえ。一之瀬 豊も名字が違うが、秀介の実兄だ」

二人の言葉に、花組はまたも驚きに包まれた。

対降魔部隊の全員が、花組に深い関わりを持っていたのだから、当然である。

「では、太古の呪法とは？」

「ああ。一馬の持つ北辰一刀流の破邪の血が持つ力の事だ。一馬はその破邪の力によって、降魔を封印したんだ。……。命を引き換えにしてな」

その言葉に、大神は米田の表情が暗い理由を悟った。



「きつと真宮寺大佐の破邪の力が、夢という形でさくらに天海の居場所を伝えたのね」

あやめの言葉に、全員が納得した。

一馬の持っていた破邪の力がその血に流れるものならば、当然さくらはその力を受け継いでいるはずだからだ。

「そしてその呪法が成功したのも、当時陸軍一の切れ者だった一之瀬大尉による、綿密な作戦があったからよ」

かつて帝都を脅かす降魔という存在に、命懸けで立ち向かった真宮寺大佐と一之瀬大尉。

そしてまたさくらと秀介も、帝都のために命懸けで戦おうとしている。

何とも不思議な運命の巡り合わせだと、大神は思った。

「では司令、魔を封じた門とは……………？」

「間違いない。俺達対降魔部隊が最後に戦った……………、日本橋だ！」

忘れもしない、降魔戦争の終結地点。

間違いはなかった。

「今度こそ間違いなさそうだな！」

「いよいよ最後の決戦ですわね……………！」

「この戦いが終われば、平和になるんだね？」

「一発派手にかましたらうやないか！」

「この戦いに、帝都の未来がかかっている……………」!

「隊長、今こそ僕らの正義を示す時です」

「大神さん、出撃命令を！」

各々の決意を口に立ち上がる隊員達。

大神もまた立ち上がると、力強く頷いた。

「よし、帝国華撃団花組、出撃！目標地点、日本橋！……………いいかみんな、これが最後の戦いだ。しかし命を捨ててはいけない。みんなでまたここに帰って来るんだ！」

「了解！！」

「待っている、黒之巢会！待っている、天海！俺達は一步たりとも退かない。悪を蹴散らし、正義を示す！それが帝国華撃団だ！！」

帝都の中央に位置する日本橋。

かつて徳川幕府時代に作られたこの地に、徳川を敬愛する天海がアジトを構える事は、よくよく考えれば考えられる話だった。

普段は多くの人が行き交うこの橋も、今は代わりに脇侍達が我が物

顔で練り歩いていた。

そこに、翔鯨丸のライトを浴びて華麗に現れる八機の姿があった。悪を蹴散らし、正義を示す、その名……………。

「帝国華撃団、参上!!」

「やはり黒之巢会の本拠地はここか。敵の数が多い……………!」

周囲を見渡し、大神が言った。

前後左右の何処を向いても脇侍が無数に控えているこの状況。突入した際になだれ込まれては、挟み撃ちにされる危険性があった。大神は冷静に状況を確認し、最善の指示を下した。

「よし、部隊を二つに分ける。紅蘭、カンナ、さくらくんの三人は俺と内部に突入し、残る四人はここで敵を食い止めてくれ!」

「了解!」

確かな返事を聞き、大神は指名した三人とともに日本橋地下へ突入した。

日本橋に残ったマリア、アイリス、すみれ、秀介の四人は、無数の

脇侍を相手に激戦を繰り広げた。

何しろ帝都中の脇侍達が一斉に集まり始めたのだ。乱戦にならないはずがない。

マリアの指示の下、四人は突入地点から動かずに脇侍の軍勢と向かい合った。

こうする事で背中を気にする心配が無くなり、前方の敵にだけ集中できるのだ。

「秀介、今よ！」

「合点です！」

マリアの指示を受けた秀介が、手当たり次第に霊力弾を打ち込んだ。歩行者天国のように轟めいていた脇侍達は避ける間もなく、次々に破壊されていく。

しかし、マリアの狙いはそれだけではなかった。

「そこっ！」

今の霊力弾の掃射を受けて脆くなった柱の根本に、マリアは弾丸を打ち込んだ。

すると、その衝撃で柱が倒れ、数体の脇侍を下敷きにした。

それだけではない。

今の倒れた柱が、脇侍の勢いを抑えるバリケードの役割を果たしたのだ。

「マリア凄〜い！これなら簡単に戦えるね」

「ふふっ、ロシアの市街戦で覚えたテクニックが、役に立ったわ」

尊敬の眼差しを向けるアイリスに、クールにキメるマリア。すると、すみれと秀介がジト目でマリアを見た。

「でも、この倒れた柱は誰が修理致しますの？」

「確かに……………、簡単には直せそうにありませんね……………」

「……………い、いいじゃない！これで戦いやすくなったんだから！」

汗をかきながら弁明するマリア。

その様子に、すみれと秀介は思わず吹き出した。

秀介達が日本橋の入り口で戦っている頃、大神以下花組本隊は、道中の脇侍工場を全滅させて、アジトの中枢に乗り込んでいた。

「間違いない……………。この近くだ」

大神でも分かる程の激しい妖気が、四人を緊張感に包む。その時、奥の祭壇からしわがれた声が聞こえて来た。

「……………よくぞ、ここまで来た。褒めてやろう」

「天海！！」

その正体を見据え、大神が叫んだ。

黒之巢会首領にして、帝都を脅かす全ての元凶。

「黒之巢会首領、天海！正義に代わり、貴様の命を貰い受ける！」

威厳すら漂う強烈な妖気に臆する事なく、大神は幾多の脇侍を切り伏せた二刀の切っ先を突き付けた。

しかし、天海は大神の声を嘲笑で返した。

「ふつ、貴様らごときに我は倒せん。百年早いわ！」

そう叫んだ時、天海と花組の間を割って入るように魔法陣が出現し、中から一体の巨大魔装機兵が姿を現した。

全身が黄金に輝き、左右合わせて四本の手で印を組む姿は、観音を想起させる。

天海の操る魔装機兵。

その名を、『天照』と言う。

「ワシ自らが闇に葬ってくれるわ！来い、帝国華撃団！！」

「今度こそ天海を倒す……………！みんな、行くぞ！！」

「了解！！」

「……………あらかた片付いたようね」

敵が来なくなつた事を確認して、マリアが言った。

周りには足の踏み場もない程、夥しい数の脇侍の残骸が散らばっている。

これまでこの日本橋でどれだけ凄まじい戦いが繰り広げられていたか、容易に窺い知れた。

実に千体に及ぶ脇侍を相手にしたのだが、マリアの作戦が功を成し、幸いまだ大神達と合流して戦えるだけの霊力は温存できていた。

「……………そろそろ、少尉達と合流すべきではなくて？」

すみれの言う通りだった。

天海の妖気の高さは黒之巢会死天王すら遠く及ばない。

実際たつた四人で挑むのはギリギリとはいえ危険だった。

いつまた別の脇侍が来るか分からないが、可能なら直ちに大神達と合流し、フォーローに回るべきだった。

しかし、別動隊は気付かなかった。

内部に向かう自分達の背中を、あの男に見られていた事に……………。

「フフフ……………。勝負の行方、じっくりと見物させて貰おう」

日本橋地下アジトでの天海との決戦。

天海の操る天照に、大神達は案の定苦戦を強いられていた。四本の掌から放たれる波動は高い威力を誇り、霊力を集中して踏み止まるのがやっとだった。

しかし、自分達は何千もの脇侍の大群をわずか四人の別動隊に任せられている。

この戦いに、必要以上の時間をかける事は出来なかった。逆にそれが花組本隊に焦燥感を生み、冷静な判断力を低下させていた。

「ヒヤハハハハ！この程度の力で我は倒れん！」

得意になって妖気の波動を次々と放つ天海。

花組は攻撃の手を止められ、防戦一方になってしまった。

「くそっ……。これじゃ手も足も出ねえ……………！」

カナナが悪態をつく中、大神は必死に状況を分析した。

「破邪剣聖……………、桜花放心！！」

さくらの太刀から鎌鼬が発生し、天照に殺到する。

すると、天照は四本の掌を突き出して妖気の壁を作り、鎌鼬を掻き消してしまった。

「そ、そんな……………桜花放心も効かないなんて……………！」

奥義を無効化され、ショックを隠せないさくら。

一方、大神に何かを見つけたように小さく笑った。



「(そういう事か。ならば……………)」

これまで得た情報を基に、素早く敵の特徴と、それに伴う弱点、そしてその弱点を効果的に突く戦法を脳内で構築する大神。そしてその戦法が決まった時、大神は指示を飛ばした。

「カンナ！さくらくん！俺の攻撃に合わせて左右から同時に攻撃してくれ！」

「は、はい！」

「おう！」

二人の返事を確認して、大神は自身も二刀を構えて正面から天照に突進した。

「馬鹿め、血迷ったか！」

何の策もなく正面から挑むのは自殺行為。

天海は大神の行動を嘲るように笑い、掌を向けた。

その時、左右から同時に二体の光武が踊り掛かった。

「おらああああっ！！」

「やあああああっ！！」

「うおおおおっ！！」

三方向からの同時攻撃。

しかし、天照はカンナとさくらの攻撃を掌一つで、大神の二刀を二

つの掌で食い止めてしまった。

「くっ……………！」

「そんな……………！」

「何度やっても同じ事だ。貴様らごときに我は倒せん。」

勝ち誇った様子で笑う天海。

しかし、大神もまた天海に笑って見せた。

「それはどうかな？……………紅蘭！！」

「よっしゃあ、任しとき！」

待ってましたと言わんばかりに、紅蘭が返した。

同時に、天海の顔から余裕が消える。

「ま、まさかこの為に……………！」

「覚悟しいや天海！ チビロボ軍団、発射！！」

大神の狙いはこれだった。

何故天照は四本の掌を持つのか。

それは、妖気を操る部位が掌だったからだ。

反対にそれ以外の部位から妖気を放出する様子がない。

つまり、四本の掌を封じれば、天照は攻撃手段を失ってしまうのだ。大神のこの予想は見事的中し、今までかすり傷一つかなかった天照の機体はチビロボ軍団の攻撃で所々から黒煙を上げていた。

「お、おのれ……………、この我に傷をつけるとは……………！」

憤怒の形相で大神を睨む天海。

しかし、花組の攻撃はこれだけに止まらなかった。

「オラオラ、何よそ見してんだジジイ！」

「なっ！？」

右側からの声に、天海は反応が一瞬遅れる。

カンナにはその一瞬で十分だった。

「喰らいやがれ！ 一百林稗！！」

完全に隙をついた形で、カンナの一撃が炸裂した。  
更にそこへさくらが続く。

「破邪剣聖……………、桜花放心！！」

カンナの一百林稗から体勢を立て直す間も与えない連続攻撃。  
これには流石の天照もたまらない。

「ぬうつ……………！許さん、許さんぞっ！」

「それはごっちの台詞や！今まで脇侍達にぎょうさん悪い事させてからに！」

苦しむ天海に大砲をぶっ放し、紅蘭が言い返す。  
そして、トドメとばかりに大神が飛び込んだ。

「狼虎滅却……………、快刀乱麻！！」

緑色の稲妻が二刀からほとばしり、天照を包み込んだ。

「やったか!？」

今の一撃に確かな手応えを感じ、大神が叫ぶ。

しかし、天海は倒れなかった。

「何っ!？こ、これは……………!」

突如として天照を中心に巨大な魔法陣が出現した。

そして、その中から現れた黒い無数の何かが天海の中に入っていく。刹那、大神は絶句した。

「なっ……………!!」

無理もない。

今の攻撃でかなり弱ったはずの天海の妖気が、先程以上に高まったのである。

その力は、正に化け物と呼ぶに相応しかった。

「す……………素晴らしい……………。力が……………力が漲って来る!」

「う……………嘘だろ、おい……………」

「なんちゅうしぶとさや……………!!」

驚きを通り越して戦慄すら覚える四人。

天海はその様子に満足そうな笑みを浮かべた。

「今度は私の番だ。行くぞ！ウオオオオ……………!!」

合わせられた掌から先程以上の強烈な妖気が集まる。  
あんな一撃をまともに喰らえば、ただでは済まない。

「くっ……………、ここまでなのか……………!？」

大神の脳裏に敗北の二文字が過ぎる。

しかし、その暗い予想を吹き飛ばす高らかな笑い声が木霊した。

「おっっほっほっほ!!勝ち誇るには、少し早過ぎてよ?」

その声と同時に紫色の光武が現れ、天照に薙刀の一撃を加えつつ着地した。

「隊長、間に合ったようですね!」

「お兄ちゃん、怪我してない？」

「僕らが来たからには、もう安心です!!！」

見ると、そこには入り口で戦っていた別動隊の姿があった。

「みんな、無事だったのか！」

「当然ですわ。さあ少尉、参りますわよ！」

すみれの言葉に頷き、大神は改めて二刀を握る手に力を込めた。

「天海、これで戦力は互角だ！全員揃った花組の力、思い知れ！」

「ふん！愛だの、正義だの、そんな生温い感情にうつつをぬかす若造が我を倒せるものか！」

天海は直属の脇侍を召喚し、怒鳴り返した。

「千年早いわ!!！」

「早いかどうか、その身で確かめてみる！帝国華撃団花組、出撃！  
！天海を倒すんだ!!！」

「了解!!！」

別働隊が合流し、元の戦力を取り戻した花組は、一転して攻勢に出た。攻撃は最大の防御という訳ではないが、天海の妖気で苦しめられる前に配下の脇侍を全滅させようと、大神は判断したのである。その指示で最初に飛び込んだのは、花組一の切り込み役であるカナだった。

「オラオラ！次にやられてえのはどいつだ！？」

手当たり次第に脇侍を薙ぎ倒すその姿は、先程までのダメージを微塵にも感じさせない。

底無しとも言える体力で、カナは次の脇侍に殴り掛かった。しかしそんな大胆な戦い方ができるのも、背中を守ってくれる存在があるからだった。

「ちょっとカナさん！あまり無鉄砲に暴れないで下さいまし！」

カナと背中合わせになるように、すみれが脇侍を突き倒しつつ言った。

「何だよ、これ位の動きについて来られねえのか？だらしねえな！」

そう言いつつも攻撃の手を緩めないカナ。すると、すみれも負けじと言い返した。

「おっしやいましたわね、カナさん！この私の真の力、見せて差し上げますわ！」

言っや、すみれも脇侍達のと真ん中に飛び込んだ。

「神崎風塵流、胡蝶の舞!!!」

薙刀から舞い上がった炎に巻かれ、周囲の脇侍達は瞬間に灰と化す。

その様子に、すみれは満足そうに笑い声を上げた。

「おっっほっほっほ！カナナさん、精々足を引つ張らないで下さいましね」

「へっ、お前こそ勝つまでバテるんじゃないぞ？」

脇侍相手に奮戦しているのは、すみれとカナナだけではなかった。

「秀介さん!!」

「合点です!!」

さくらの声に返事を返し、秀介は流星の操縦桿を握った。と同時に、さくらが脇侍を次々と切り伏せて進んで行く。その途中、何体かの脇侍はさくらを後ろから攻撃しようとした。しかし、いずれの脇侍も攻撃を実行に移せなかった。なぜなら、上空から脇侍を狙撃する戦闘機がいたからである。



「脇侍共！さくらさんには指一本触れさせません！！」

「わ〜い、ここまでおいで〜！」

レポートを繰り返して脇侍を挑発するアイリス。

上下左右に絶え間無く移動する標的に、脇侍達はキョロキョロと辺りを見渡す。

それを、遠くから狙う影があった。

「鳴り響け、白夜の鐘……………、スネグーラチカ！」

マリアの放った凍てつく氷の一撃。

それは、一列に並んでいた脇侍達を一度に氷漬けにした。

「……………見事な陽動だったわ、アイリス」

「エヘッ、マリアありがとう！」

マリアの褒め言葉に、いつの間にか隣にいたアイリスが素直に笑った。

アイリスが敵を一カ所に集め、マリアが一撃で仕留める。始めからそういう手筈だったのだ。

「お兄ちゃん、大丈夫かな？」

心配そうに呟くアイリス。

それを見たマリアは元気付けるように言った。

「大丈夫よ。私達がこうして脇侍達を引き離せば、それだけ隊長も戦いやすくなるわ」

「……………うん、そうだね。よし、アイリスもっと頑張る！」

そう言うと、アイリスは再びテレポートでその場から消えた。

「脇侍達は私達が食い止めます。隊長、それまで耐えて下さい……………  
……………」

一言祈るように言うと、マリアは次の標的に狙いを絞った。

「大神はん、今回ばかりは特別や！無理して光武壊しても構わんで  
！」

「……………紅蘭、いいのか？」

いつもの紅蘭らしからぬ言葉に、大神が怪訝な表情を浮かべる。  
しかし紅蘭は、大神の心配を吹き飛ばすように笑って答えた。

「大丈夫や。この子らの願いはウチらと帝都の平和を守る事……。それなら、この戦いで壊れてしまっても光武には本望なんや」

脇侍達を他の隊員に任せた大神は、紅蘭とともに天照と対峙していた。

激戦に続く激戦で光武はかなり傷付いているが、まだ戦うだけの余力は残っている。

それにこの戦いには、帝都の未来が掛かっているのだ。

たとえ光武が犠牲になっても、負ける訳にはいかなかった。

「よし……………、行くぞ紅蘭！」

「了解や！」

大神の声に確かな返事を返し、紅蘭が両腕の大砲を構える。

それに応えるべく大神もまた二刀を構え、目の前の金色の魔装機兵に挑み掛かった。

「ござかしい！ たった二人で何ができる！」

天照の掌が二人に襲い掛かる。

しかし大神と紅蘭は寸前で左右に離れ、攻撃を避けた。

「大神はん！！」

「分かった！」

更に事前に打ち合わせたかの如く、同時に左右から攻撃を仕掛ける。しかし敵もさるもので、四本の掌を器用に動かし、全ての攻撃を防

いでしまった。

「若造！貴様は何故、私の邪魔をする？」

二刀を掴んだ状態のまま、天海が言った。

「お前達が帝都の平和を脅かすからだ！貴様こそ何故帝都を攻撃する！？」

「この日本は、徳川幕府時代こそ栄光の時代。西洋に汚された今の帝都を叩き潰し、かつての栄光を蘇らせる。我はその大儀の下で帝都を浄化するのだ。そんな事も分からぬとは、所詮は若造なのだ」

「ふざけるな！！」

得意そうに喋る天海の主張を遮り、大神は吠えた。

「時代は常に変わり行くもの……。その流れに逆らい過去の栄光に縋る貴様の何処に大儀がある！？寝言を言っちな！！」

猛る狼にも似た怒りの叫び。

徳川を敬愛し、命よりも大儀を重んじるのは古い時代の話だ。

そんな時代遅れの正義など到底正義と呼べるはずはなかった。

その大神の叫びが徳川への侮辱と聞こえたか、天海は怒りを露にした。

「黙れ若造が！今に息の根を止めてくれるわ！」

「……………そいつぁ、どうかな？」

「何っ！？」

天海は信じられないという表情で周囲を見渡した。

周りには自分を守る脇侍は一体もおらず、色違いの八つの機体が天照を取り囲んでいた。

部下を全滅させた花組の隊員達が、合流して来たのだ。

「部下の脇侍も全滅させた。残るは天海！貴様ただ一人だ！！」

「ぬかせ！この程度で我を追い詰めたと思うな！！」

そう叫び返した時、天照を包む妖気が俄かに強まった。

「何……………！？まさか、まだ妖気を蓄えられるのか！？」

跳ね上がった霊力メーターに、大神は驚きの声を上げた。  
今の状態ですら凄まじい強敵なのだ。

これ以上強くなったら手に負えなかった。

「ヒヤハハハハ！！帝国華撃団、ここで果てるがいい！」

不気味な笑いととも天照の妖気が更に高まる。

既に霊力メーターは針が振り切れ、測定不能だ。

「見せてくれよう、奈落の極み………！ 六星剛撃陣！！」

天海の背後に後光が輝いた。

同時に頭上から妖気が槍となって降り注ぐ。

「まずい！みんな、散れっ！！」

大神が素早く指示を出し、花組は八方に散って距離を取った。

それとほぼと同時に天照の周囲に金の槍が雨霰となって地面に突き刺さる。

もしダメージを負った今の状況でまともに喰らえば、間違いなく即死だっただろう。

天海の底無しの妖気に、大神は改めて戦慄を覚えた。

「ほう、避けたか……。だが次で終わりだ！」

そう叫び、天海は再び妖気を集中させる。

しかし、それを阻止せんと疾駆する者がいた。

秀介である。

「させませんっ！！」

霊力弾を連射し、天照の攻撃を妨害する。

それに続いたのは大神だった。

「今だ！狼虎滅却………、縦横無尽！！」

二刀から青い稲妻が放たれ、天照の前で合わさった二つの掌を直撃した。

先程の攻撃で天照が拝むように掌を合わせて妖気を集中させる所を見た大神は、そこを攻撃する事で六星剛撃陣を妨害できると考えたのだ。  
そして大神の予想は的中し、掌を破壊された天照は全身が火花を散らし始めた。

「やったか!？」

しかし、天照は三度復活した。

「なっ……………!？」

それは正に一瞬の出来事だった。

天照の後光が再び光ったかと思うと、後光から無数の金の槍が放たれたのだ。

花組は避ける間もなく、真後ろの壁に光武を串刺しにされてしまった。

これでは反撃はおろか、身動きすら取れない。

「無駄だ……………!我は何度でも蘇る……………!帝都は滅びる運命なのだ……………!」

天海も多少は弱っているようだが、状況は圧倒的にこちらの方が不利だ。

最早これまでか……………。

誰もがそう思ったその時、信じられない出来事が起きた。

「ぐあっ！！な、何事だ……………！？」

どういう訳か、天海が突然苦しみ始めたのだ。  
何が起こったのか分からず、啞然とする花組。  
すると、天海の背後から別の男の声が聞こえて来た。

「……………ご苦労だな、天海」

「蝸！！」

それは、背後から天海を刃で一突きにしている、漆黒の忍者だった。

「き、貴様……………！！」

「こつも上手く状況を作ってくれるとはな、感謝するぞ」

そう言っつて、蝸が刀を更に深く突き刺した。

「ば、馬鹿な……………！！この我が……………！！」

自身の敗北を認められぬまま、天照は大爆発した。

「ちっ……………」

黒煙が立ち上る中、蝸が徐に口を開いた。



「帝国華撃団の諸君、遙々ご苦労だったな」

「貴様……………、何の真似だ!?!」

訝しむように、大神が尋ねた。

蝸はミロクや又丹とともに自分達を攻撃して来た、間違いなく自分達の敵である。

その蝸が、真つ当な理由で天海を始末するなど考えられない事だった。

「今に分かる……………」

まだ自分達の知らない何かを知っているような口ぶり、蝸が答えた。

事実、蝸は知っていた。

花組が考えもしなかったような事実を……………。

「ククク……………、そろそろ舞台のフィナーレと行こうか……………」

そう言つて、蝸は一枚の札を取り出し、地面に叩きつけた。すると札から白い煙が立ち上り、蝸の姿を覆い隠した。

「フオッフオッフオッフオッフオッフ……………!!」

聞き覚えのある笑い声が、祭壇に響いた。

「こ、この笑い声は……………！」

ある予想が脳裏を過ぎり、大神の表情が俄かに凍り付く。そして、煙の向こうに見えた姿に、花組は驚愕した。

「あ、あれは……………上野公園の……………！！！」

さくらの言葉が、全てを物語っていた。

煙の向こうに立っていたのは漆黒の忍ではなく、両腕のハサミと蟬のような顔が特徴的な怪物だった。蝸の正体は、怪獣だったのだ。

「私はバルタン星の宇宙人だ。宇宙忍者と呼ぶ者もいるがな……………」

「宇宙忍者だと!？」

予想もしなかった蝸の正体に、大神は驚きの声を上げた。まさか宇宙人などとは思わなかったのだから、当然である。しかし、花組はこれからバルタン星人によって、更に驚くべき事実を明かされる事になる。

「さて、もう一人サプライズを呼ぶとしよう」

そう言って、バルタン星人はハサミをこちらに向けた。刹那、ハサミから白色の光弾が発射された。

「なっ……………！」

着弾と同時に爆発する光弾。  
花組はその着弾地点を目にして、一瞬時が止まった。  
なぜなら…………。

「秀介さん!!」

反射的にさくらが叫んだ。

白色光弾が着弾したのは、流星のコックピットだったのだ。  
さくらの声に他の隊員達も我に変える。

「貴様、何と言う事を…………!!」

「今に分かる…………」

秀介が流星のコックピットから飛び出したのは、その時だった。

「くっ…………!!」

「秀介さん、無事だったんですね!」

戦闘服が所々焼け焦げているが、幸い命に別状はないようだ。

「さて、ここで素晴らしい特別ゲストを紹介しよう」

そう笑って、バルタン星人はハサミを高々と振り上げた。

すると、祭壇の真上の土が崩れ、上から巨大な影が降り立った。  
金と赤のメタリックなボディに、鋭い眼光を放つ緑色の双眼。

何よりもその全身から放つ凄まじいまでの殺気。

これまでの怪獣と何かが違う……。  
大神は直感でそう感じた。

「御剣 秀介……。この意味が分かるな？」

「……………そういう事ですか……………！」

意味深なバルタン星人の言葉に、悔しさを見せる秀介。  
それが分からないのは、花組だった。

「どついう事だ？秀介……………」

大神の問いに、秀介は答えなかった。

いや、答える事が出来なかった。  
何故なら……………。

「帝国華撃団の諸君。これはショーなのだよ。君達の守護神を抹殺するね……………」

「ウルトラマンを……………！？」

マリアの言葉に、秀介が一瞬肩を震わせた。  
その様子に、バルタン星人は満足そうな笑みを浮かべる。

「そう。君達はそこで、光の巨人が無惨に殺される様をじっくりと  
見てもらう」

「ふざけるな！ウルトラマンもないのに、一体何を……………！！」

「いますよ、光の巨人は」

大神の言葉を遮るように、##NAME1##が言った。

「何……………？」

「秀介さん……………？」

背後の花組全員が、一斉に秀介を見る。

その視線を背中に感じながら、秀介は静かに言った。

「いつかは来ると思っていたんですが……………。まさか、こんなに早く来るなんて……………。思いもありませんでした」

「秀介……………、貴方はまさか……………。」

何かに気づき、マリアの表情が強張る。

「出来る事なら……………、知られたくはなかった……………。特にさくらさん、貴女にだけは……………」

「え……………？」

秀介は一言さくらにそう言つと、目の前に立つ宇宙忍者を鋭い視線で睨みつけた。

「一つ条件があります。……………みんなには手出しをしない事」

「いいだろう」

その言葉に秀介は、静かにブレスレットに手を当てた。

「（あれは……………間違いだっただかも知れませんか……………。）」

心の中で自嘲し、一瞬だけ笑う。

そして、決意の眼差しでブレスレットを高々と掲げ、凜とした声で叫んだ。

「ジャーーーーーック!!!」

自分は今、幻を見ているのだろうか……………。

目の前に広がる光景に、大神を始め花組全員が、そんな感覚に陥ってしまった。

ブレスレットからまばゆい光が放たれた次の瞬間、秀介が立ってい

たはずの場所に、一体の巨人が自分達を守るように立っていた。赤と銀の身体で、これまで何度も自分達を窮地から救ってくれた光の巨人。

「ウルトラマン……………ジャック……………」

誰かの咳きが、全てを物語っていた。

帝国華撃団花組隊員にして、流星のパイロットである御剣 秀介。彼は伝説の光の巨人、ウルトラマンジャックその人だったのだ。

「ククク……………、さあ、血みどろのシヨ―を始めるとしようか」

「僕は負けない……………。みんなは、絶対に守る！」

ハサミを向けて不敵に笑うバルタン星人に、ジャックは毅然として言い放った。

その口調は、紛れもなく秀介のものだった。

「……………何処かで聞いた台詞だな」

懐かしむような口ぶりで、バルタン星人は目を細めた。

が、次の瞬間には配下の怪獣に命令を下した。

「ならばウルトラマンジャック！貴様の意志を見せてみるがいい。行け、ジャックスキラー！！」

「ギイーツ！」

命令を受けたジャックスキラーがジャックに向かって前進して来る。ジャックはその姿を見据えると、構えを取った。

「シュワッ！」

血みどろのシヨーが、今幕を開けた。

抹殺怪人ジャックスキラー。

バルタン星人がジャックを倒す為だけに作り出したこの怪獣の前に、ジャックはかつてない苦戦を強いられていた。

パンチャキック等の体術が効かないばかりか、それを上回るカウンターに、ジャックは追い詰められていた。

「ギーーツ！」

ジャックスキラーの腕の一撃が牙を剥いた。

ジャックはその一撃で、大きく後ろに飛ばされる。

「秀介さん！」

さくらが思わず叫んだ。

「へッ………！！！」



その声に一瞬反応し、ジャックは起き上がった。  
そして、ジャックスキラーに渾身の必殺技をぶつけた。

「ヘアアツ!!」

十字に組んだ腕からスペシウム光線が発射され、ジャックスキラーを一直線に狙い撃った。

……………だが……………。

「え……………!?!」

「あ、有り得へん……………!!」

一瞬勝ったと思った花組は、目の前の光景に絶句した。  
何と、これまで数多の怪獣を仕留めて来たスペシウム光線すら、ジャックスキラーにかすり傷一つつけられなかったのだ。

「それなら……………!!」

ジャックは構えを解くと、直立姿勢でエネルギーを集中させた。  
そして今度は腕をL字に組み、シネラマショットを打ち込んだ。  
しかし、このジャックの切り札を以ってしても、ジャックスキラーに効果的なダメージを与える事は出来なかった。

「成る程……………」

おそらくは自分の技を研究し、自分を倒す為に訓練されたのだろう。しかし、ジャックは負ける訳にはいかなかった。

「へっ……………！」

カラータイマーが赤く点滅を始める中、ジャックは再びシネラマシヨットを放った。

しかし、やはりジャックスキラーには通用しない。

「何度やっても同じ事だ」

バルタン星人の無機質な笑いが響いた。

己の部下がジャックをいたぶっている光景に、随分と満足げに聞こえる。

「まだ……………終わってはいません！！」

ジャックは更にウルトラスラッシュを繰り返すが、結果は同じだ。

「フォッフオッフオッフ……………。いいのかな？そんなにエネルギーを使って……………」

「くっ……………！」

ジャックが苦悶の声を漏らす。

「（まさか……………、あの事を知っているのか！？）」

そう悪い予感が頭を過ぎった時、ジャックスキラーが徐に腕を組んだ。

刹那、信じられない事が起こった。

ジャックスキラーは、十字に組んだ腕からジャックと同じスペシウム光線を、ジャック目掛けて撃つたのだ。

「アアッ!？」

突然の攻撃に対応できず、ジャックは諸にスペシウム光線の直撃を受けて吹き飛ばされた。

「秀介っ!！」

今度はカンナが叫んだ。

すると、その様子を楽しむようにバルタン星人が笑った。

「どうか帝国華撃団の諸君。君達の大事な仲間が目の前でなぶり殺される様は。素晴らしいショーだろう」

「ふざけるな!!今すぐ攻撃を止める!」

もし動けたなら即座に切り掛かっただろう勢いで、大神が叫んだ。自分達は何もできず、目の前で大切な仲間が苦しめられる……。仲間想いの花組にとって、これ程残酷で陰惨なショーはなかった。

「へッ……………」

ジャックスキラーの腕が、ジャックの首筋を深々とえぐった。

人間と違い出血はないが、その一撃でジャックは崩れるように地面に倒れた。

「いや……………いやあっ!やめてえっ!！」

さくらの叫びを嘲笑うかのように、怪人はジャックの背中を踏み付けた。

「こんな事……、絶対に許しませんわ！」

「もうやめて！秀介が死んじやうよ！！」

「畜生！見てる事しか出来ねえのかよ！？」

憤りに身を震わせる者、悲しみを叫びに変える者。

目の前で繰り広げられるシヨ―は、花組を負の感情で包み込むには十分だった。

「フオツフオツフオツ……！やはり奴の弟か。顔までそっくりだ」

バルタン星人が、ジャックの頭を掴んで持ち上げた。

ジャックスキーが背中を踏み付けているため、無理な姿勢で頭だけが上がった状態になる。

「やめて！お願い！！やめてえ！！」

両目から大粒の涙を流し、さくらが必死に叫んだ。

光武が動いたならば、今すぐにでも秀介を助けようとしただろう。

しかし、指一本動かないこの状態では、傷付き倒れる巨人に涙を流す事しか出来なかった。

「光の巨人も見苦しい。あの女に命を削らなければ、こうして醜態を曝す事もなかるうに」

「くっ……やはり、知っていたのか……！！」

「え……………?」

何の会話か分からず、さくらは一旦泣き止む。  
すると、バルタン星人はニヤリと笑った。

「知らぬのか?良かろう、教えてやるぞ。この愚かな巨人の愚行を……………」

それは、さくらがまだ医療ポッドで眠っていた頃に遡る。

秀介は、ブレスレットを掲げて変身すると、自分の身体を光の粒子に変え、さくらを包み込んだ。

ウルトラライフリカバー……………ほかの生命に自身のエネルギーを与える事で治癒力を高める、奇跡とも言うべき技だ。

しかし、さくらの場合は簡単にはいかなかった。

さくらの身体にある破邪の力が、秀介を追い払おうと抵抗したからだ。

これにより、秀介は最早変身出来るかも分からない程にまで、エネルギーを失ってしまったのだ。

これも偏に、さくらを助けたいという秀介の想いだった。

その結果、破邪の力を活性化させてさくらに例の夢を見せたのだから、秀介の行動は、決して無駄でななかった。

「そんな……………秀介さん……………」

さくらは表情を驚きに変えた。

まさか秀介が、自身を危険に曝してまで自分を助けようとしていたとは、思いもしなかったからだ。

「そうか……………！ミロクに帝劇を奇襲させたのもお前だな!?!」

「やっと気づいたか。その飛行機に転移魔術の札を貼らせてもらった」

おそらくは秀介が流星を自動操縦に切り替えた時だろう。

ジャックに変身すれば、流星の中は無になる。

バルタン星人は、そこを巧妙に突いたのだ。

「さて、観客も十分楽しんでくれたようだ……………そろそろ、幕を降ろす事にしようか」

ジャックの頭から手を離すと同時に、ジャックスキラーがトドメを刺そうと腕を十字に組んだ。

「…！やめて！やめてえ！秀介さん…！」

桜色の光武から、さくらの悲痛な叫び声が聞こえる。

「（……………さくらさん……………！）」

その声を耳にしたジャックは、脳内で涙を流すさくらを連想する。そして、何かが音を立ててキレた。

「シュワッ！！」

正にジャックスキラーの腕からスペシウムが放たれようとした時だった。

力尽きているはずのジャックが、ジャックスキラーを跳ね飛ばして立ち上がったのだ。

「何っ！？」

その様子に、花組ならずバルタン星人も表情を一変させた。既にカラータイマーの点滅も激しく、立つ事もままならないジャックが反撃を仕掛けるなど、理論上不可能だったからだ。しかし、ジャックはそのままジャックスキラーに殴り掛かった。

「ギイツ！？」

突然の反撃に対応できず、ジャックスキラーは真後ろの壁に勢い良くたたき付けられた。

更にジャックは先程までのダメージが嘘のように、ジャックスキラーに対して凄まじい猛攻を浴びた。

「馬鹿な！これ程までエネルギーが残っているはずは……………！！」

先程までの余裕を失い、うろたえるバルタン星人。

ジャックは怪人を抱え上げ、バルタン星人目掛けて投げつけた。

「ヘアアツ!!」

「フオツ!?!」

部下の下敷きになるバルタン星人。ジャックスキラーは表情こそ変わらぬが、明らかに怒りを見せていた。

「ギイーツ!!」

仕返しとばかりに腕を十字に組み、スペシウム光線を発射する。

しかし、ジャックはその寸前に突進し、ジャンプで上に飛んでスペシウムを回避した。

「ギイ!?!」

標的を見失い、狼狽するジャックスキラー。

ジャックはその真上から、渾身の流星キックを放った。

「シュワツ!!」

流星キックはジャックスキラーの胸にある核を直撃した。

着地と同時に、ジャックスキラーの全身から火花が走る。

「あそこが弱点……………ですね……………!!」

既にスペシウムを撃つエネルギーは残っていない。精神力だけで戦



っているのが現状だ。  
だが、ようやく掴んだ勝機を逃す訳にはいかなかった。

「今こそ、神秘の力を……………！ウルトラブレスレット！！」

そう叫んだ時だった。

ジャックの左腕から、光輝くスパークソードが出現したのだ。

「ギー……………！！」

執念深くスペシウムを撃とうとするジャックスキラーに再び突進し、  
そして……………

「ヘアアッ！」

すれ違いざまにスパークソードが一閃した。  
両者の動きが数秒間沈黙する。  
その数秒の後、少し離れた地面に何か突き刺さった。

それは、ジャックスキラーの左腕だった。

「へッ！」

背後のジャックスキラーを振り向くジャック。  
そこには、片腕を失って瀕死状態の怪人が、緑色の目を光らせていた。

「今ですっ!!」

ジャックはスパークソードを維持したまま、腕を十字に組んだ。刹那、ジャックの全身が光に包まれる。

「な……………何だと!？」

驚愕に目を見張るバルタン星人。

スペシウム一発にシネラマを二発。

その状況で更にスペシウムなど、撃てる訳がない。

しかし次の瞬間、バルタン星人の理論は完全に覆された。

「シュワアアッ!!」

裂帛の気合いの声とともに、黄金色のスペシウムが一直線にジャックスキラーを狙い撃った。

「ギ、ギ、ギイーツ!!」

断末魔とも取れる叫び声を上げ、ジャックスキラーが光に包まれる。そして、大地を揺るがす轟音とともに、ジャックスキラーは大爆発した。

「……………へッ……………！」

全ては愛のため。

大切なものを守るため……………。  
ウルトラマンジャックは、正しく愛のために戦い、勝利を勝ち取ったのだ。

「馬鹿な……………！こんな事が……………八年前と同じではないか！」

目の前の出来事が信じられず、バルタン星人は冷静さを失った。  
一寸の狂いなく仕組んだはずのウルトラマン抹殺のシナリオが、音を立てて崩れる。

「こうなれば……………、大事な仲間とともに地の底に沈むがいい！」

そう叫び、バルタン星人はテレポートで戦線を離脱する。

それと同時に、光武を拘束していた金色の槍が消え、代わりに祭壇を振動が包んだ。

「こ、今度は何だ!？」

「隊長！上です！」

ジャックの声に、大神は上を見た。

すると、天井の土がガラガラと崩れ始めたのだ。

「……………しまった！総員退避！！」

大神は慌てて叫んだ。

元々この地下アジトは、天海の魔力によって引力を無視した構造になっている。

その根源である天海がいなくなった事で、アジトが引力に従がって崩壊を始めたのだ。

「皆さん、僕を中心に集まって下さい」

「どついう事だ、秀介？」

「今からウルトラテレポーターションで、地上にワープします。足で行くより確実です」

「せやかて、そんな状態でエネルギー残つとるん？」

紅蘭が、最もな意見を口にした。

あれだけジャックスキラーと死闘を繰り広げたばかりである。

本来ならテレポーターションはおろか、満足に動く事も難しいはずである。

そんな状態でこれ以上技を使えるのかは、正直怪しい。

しかし、ジャックは断言した。

「皆さんの霊力を少し分けていただければ、大丈夫です」

「……………時間がない。みんな、秀介の周りに集まるんだ」

秀介の言う通り、テレポーターションを成功させれば、文字通り全

員生還は確実だ。

ここは秀介と自分達の残りの霊力に賭けるべきだと、大神は判断した。

隊員達も同様に頷き、秀介を七機の光武が囲んだ。

「いつちよ頼むで、秀介はん」

「あたい達の霊力、お前に託すぜ！」

「失敗したら、承知致しません事よ」

「秀介、貴方を信じるわ」

「お願いね、秀介！」

「秀介さん……………、あたし達を護って下さい……………」

「俺達の霊力……………、受け取ってくれ！！」

七色の光がジャックを包む。

そして光は次第に輝きを増し、八人を完全に覆った。

外は既に、眩しい朝日が昇っていた。  
自分達の勝ち取った帝都の未来……………。  
それを象徴するかのように。

「……………大神」

ふと、米田が大神に声をかけた。

「はい」

いつになく真面目な声色の米田に緊張しつつ、大神が相槌を打つ。すると、米田は意外な事を口にした。

「お前、何で花組の隊長になれたと思う？」

「霊力があるから……………ですか？」

至極当然な答えを返す大神。

確かに花組の隊長である以上、光武を動かせる事は最低条件だ。しかし、米田の答えは別のものだった。

「それだけじゃねえ。触媒なんだよ、お前は」

「触媒？」

「そうだ。花組は高い能力の反面、強い個性がぶつかるとも多い。その花組を一つにまとめ上げる。それが出来るのが大神、お前だった訳だ」

隊員達を単なる戦力としてしか見ないのではなく、一人一人を尊重し、真に一つにまとめ上げる。

つまり、仲間を愛するという事。

米田の見込んだ通り、大神はその器に十分相応しい人間だった。

思わず言葉を失う大神。  
すると、そこに隊員達がやって来た。

「よう隊長！司令と二人で何話してたんだ？」

「しっかし今回は大変やったな〜！秀介はんがボコられてる時は、もう駄目か思ったで」

「いいじゃない？こうしてみんな無事だったんだし」

「それに秀介さん……………素敵でした……………」

「え……………」

「うふふ、二人ともラブラブだね」

「全く、暑苦しい限りですわ」

「ハハハ、それじゃあいつもの奴、やろうか」

そう言つて、いつものように集まる花組。

今回は風組の三人や、米田とあやめも一緒だ。  
しかし、今回は予想外の事が起きた。

「じゃあ行くぞ？勝利のポーズ……………」

「決めえい！！」

「いいっ！？」

みんなでポーズを決めようとした時、米田がフライングで先にポーズをキメてしまったのだ。

「あ〜ん、アイリスも言うの〜!!」

「ま、たまにはな」

怒るアイリスに米田が悪びれずに返す。

花組は、その様子に声を上げて笑うのだった。



決戦！愛のために（後書き）

《次回予告》

も〜いくつ寝ると〜お正月〜

親しい方に、年賀状はきちんと出しましたか？

秀介さん、早速来てるみたいね？

次回、サクラ大戦！

「拝啓ウルトラマン様」

大正さくらにロマンの嵐！

光の国への、帰還命令……………？

拝啓ウルトラマン様（前書き）

ゲームで言つと、お正月イベント。

## 拝啓ウルトラマン様

天海を倒し、事実上黒之巢会を全滅させて、帝都はようやく平和を取り戻した。

それからパツタリと事件も起こらなくなり、月日は流れて正月を迎えていた。

「「明けましておめでとございます」「

帝劇でも、全員で楽屋に集まって新年を無事に越せた事を祝っていた。

「秀介さん、明けましておめでとございます」

「さくらさん、新年おめでとございます」

「去年は色々とお世話になりました。今年もよろしく願いしますね」

「は……………はい、こちらこそ」

お屠蘇を飲んだためか頬の赤いさくらに、秀介は思わず赤い顔で返事を返した。

「あらさくらさん、珍しく礼儀にかなった挨拶です事ね。感心ですわ」

「ありがとうございます。今年こそ、すみれさんのようなレディになれるよう、頑張ります」

「あゝら、おゝっほっほっほ！貴女随分センスが、およろしくなっ  
たわ」

いつもと違って礼儀正しいさくらに、すみれは上機嫌で笑った。  
その様子は、昔二人がケンカする仲とは微塵にも思わせないものだ  
った。

「ところで少尉、私の姿如何かしら？地味かも知れませんが」

そうは言うものの、そう思うのはおそらくすみれだけだろうと大神  
は思った。

普段の紫をベースに、頭に巨大なりボンをつけて、前に赤い帯を巻  
いている姿は、ドがつく派手さである。

これが地味ならすみれにとっての派手とは何なのか、大神には皆目  
見当がつかなかった。

「はいはい、よう似合つてはるで」

大神と話していた所を邪魔されたからか、若干刺のある言葉で紅蘭  
が言った。

「まあ、褒め言葉にしては刺がありますわね」

「まあまあ、すみれくんも地味な事は全然ないよ」

大神は何とかその場を抑えるようにフォローした。  
さすがに正月でまでケンカは勘弁してほしい。  
すると、そこにアイリスがやって来た。

「お兄ちゃん、明けましておめでとう」

「やあアイリス。おめでとう」

アイリスはまだ子供なので、まだみんなとお屠蘇は飲めないが、代わりに料理をわんさか貰っていた。

「アイリス、今年は11になるよ。もう少ししたら結婚できるよね？」

突拍子もない一言に大神はお屠蘇を吹き出しそうになった。

「ウツ……………！ア、アイリス……………まだもう少しとは言えないよ」

「そお？」

日本の法律上、女性の結婚は満16歳から。

従ってアイリスが結婚可能なのは、今年から数えて5年になる。アイリスには悪いが、5年はもう少しとは言えない。

「アイリス、慌てんでもええって。大人なんてすぐ先やさかい」

いい具合に紅蘭がサポートを入れてくれたおかげで、大神はようやく解放された。

すると、今度はカンナが話し掛けて来た。

「隊長、新年もよろしくな」

「カンナ、こちらこそよろしく」

「へへ、隊長らしくなったな。きっと今年はいい年になるね」

嬉しそうに呟くカンナ。

すると、あやめが口を開いた。

「カンナの言う通り、隊長の貫禄がついてきたわ。大神君、今年も花組をよろしくね」

「は、はい………！」

あやめの言葉に、思わず上擦った声で答える大神。  
すると、紅蘭が眼鏡を光らせてツッコんだ。

「大神はん、アンタ正月からデレデレやんか！」

楽屋は、異口同音の笑い声に包まれた。

「失礼します」

楽屋で新年の挨拶を済ませた後、大神は支配人室へ顔を出した。  
自室でお屠蘇の酔いを覚ましている時に、米田から来るように言われたからである。

「支配人、話とは？」

「おう大神、まずは一杯どうだ？」

「……………申し訳ありませんが、遠慮します」

せつかく酔いを覚ましたのに、またここで飲んで本末転倒である。目上の人からの勧めを断るのは礼儀に反するが、花組の隊長である自分まで平和ボケする訳には行かなかった。すると、米田の口から意外な言葉が出た。

「……………そうだ。それでいい」

「え？」

「治にいて乱を忘れず。平和な時だからこそ、安心しない。それでこそ花組の隊長だ」

その言葉に、大神は米田の誘いが自分を試してのものだったと理解した。

米田もまた、大神が断る事を見越して言ったのだ。

「とは言え、年に一度の正月だからな。今日は仕事はない。自由に正月を満喫してくれ」

「ありがとうございます。では、失礼します」

「あ、大神はん。もう米田はんの話は済んだんかいな？」

支配人室を出ると、そこには紅蘭の姿があつた。

「ああ、今終わったけど……………。どうかしたのかい？」

大神が尋ねると、紅蘭は表情を真剣なものに変えた。

「実は、大神はんに話しておきたい事があるんや」

「俺に？」

「そつや。あれから3ヶ月かけて光武を修理したんやけど、どうも前回の戦いのダメージが強くてな。今までみたいに戦うのは厳しいんや」

3ヶ月前の、今でも記憶に新しい黒之巢会との最終決戦。

帝都の未来をかけたあの戦いで、光武は活動限界ギリギリの状態で戦っていた。

「あの戦いだけは負けられへんかったさかい、仕方ないねんけどな。大神はんにには本当の事伝えよう思うて」

帝都のため仕方ないとは言え、やはり機械の傷付く姿を見るのが辛いのか、紅蘭の表情はやや暗かった。

いたたまれなくなった大神は、紅蘭を何とか元気づけようとした。

「紅蘭……………、何か俺に出来る事はないかな？」

「え……………？」

「その……………せつかくの正月だし、紅蘭は笑顔が似合うから……………」

それは、乙女心にうぶな大神の精一杯のアプローチだった。

おそらく紅蘭が元気になってくれるだろうと思う事を口にする、紅蘭は一瞬驚いたような表情を浮かべ、珍しく頬を赤らめた。



「そ、それなら……、ウチの事、初詣に連れてって？」

「ああ、いいよ。今から行こうか」

大神は即答した。

初詣にしろ何にしろ、紅蘭が笑顔になってくれればそれでいいのだ。すると、知らないとは言えデートの誘いを承諾した大神に、紅蘭は満面の笑みを見せた。

「よっしゃ！ほな、みんなに見つからんごと、そ〜っと出よー！」

大神と紅蘭が初詣に出かけてすぐ、秀介は支配人室に呼ばれた。

「おう秀介。初めての正月はどんな気分だ？」

「はい……。とても賑やかで楽しいんですが、酒というのがどうにも……」

米田の問いに、秀介は躊躇いがちに答えた。

すると、米田はツボにはまったのか大笑いした。

「ハッハッハ！そうか、やっぱりアイツと一緒にか」

「では、兄さんも？」

「ああそうだ。豊の奴も陸軍大尉のくせに飲めなくてな。大分苦勞してたんだぜ？」

知らない兄の一面に、秀介は思わず吹き出した。

まさか冗談も言わないような兄に、そんな面白いエピソードがあるとは思わなかったからである。

「それで秀介。話つてのは、その豊の事なんだ」

「兄の？」

「そうだ。単刀直入に言う」

「秀介、お前にM78星から帰還命令が出された」

「……………え？」

米田の口から出た言葉が信じられず、秀介は一瞬固まった。

「今年賀状と一緒に届いた奴だ。嘘だと思っなら読んでみる」

そう言って米田から渡された一枚のハガキ。秀介は、その頭の文面を声に出して読んだ。

「……………光の国への、帰還命令……………」

ジャック。地球の呼び名では、御剣 秀介。

お前の地球での活躍は耳にしている。

私も兄として、鼻が高いぞ。

しかし、今回の戦いを聞く限り、お前は今これ以上戦うべきではない。

バルタン星人は、私でも完全に倒せなかつた強者だ。

今のお前の敵う相手ではない。

それに、先の戦いでエネルギーをほぼ使い切っている事も知っている。

おそらくもう変身も危うくはずだ。

悪い事は言わない。M78へ戻れ。

今のその身体で無理に戦えば、命を失うのは確実だ。

ゾフィー

「……………失礼します」

そうやって支配人室を出る秀介。

米田は、やれやれとため息をついた。

「俺だつて行かせたくねえよ。せつかくさくらと、上手くいき始め  
たつて時にな……………」

足の力が抜けたように、秀介はどつと扉にもたれかかった。

「嘘だ……………」

力なくつぶやき、握りつぶしたハガキをもう一度読み返す。  
が、違っていたのは字が握りつぶされて読みにくくなったという、  
ただ一点に尽きた。

「こんな時に……………帰るだなんて……………」

光の国への帰還命令。

秀介にとって、それは事実上死刑宣告のようなものだった。  
確かにゾフィーの言う事は的を射ている。

前回の戦いでエネルギーは底をつき、変身はまず不可能だ。しかし、今自分がいなくなってしまうえば、誰がバルタン星人から帝都を、引いては地球を守ると言うのか。

「……………秀介さん」

「は、はい!？」

突然の声に振り向くと、そこにはさくらがいつもと変わらない優しい笑顔を秀介に笑いかけていた。

「随分長いお話でしたね? もう鉢盛片づけちゃいましたよ?」

「そ、そうですか……………。気になさらないください。」

「もう……………、そういう事じゃありません。」

「え?」

「……………寂しかったんですよ、あたし。いつまで待っても来てくれないから……………」

「……………」

その一瞬、あの宣告が脳裏を過ぎった。

冗談ではない。

さくらは……………、互いに想いを明かして間もない彼女は、この僅かな時間の別離にすら心を苦しめているのだ。

このまま本当にこの星を離れる事になればどうなるか、想像に難くない。

「秀介さん……………」

先程と様子の違う秀介に、さくらが怪訝な表情で呼び掛ける。今自分の置かれていた状況を、恐らく彼女は知りもしないのだろう。互いに心を許し合ってから、過ぎた時は決して多いものではない。秀介は、さくらと別れなければならないという運命の皮肉に、身を裂かれる思いをした。そんな彼が今出来る事は、一つだけだった。

「さ、さくらさん……………」

「はい？」

相槌をうつて言葉の先を待つさくら。

秀介は一瞬迷うそぶりを見せたが、意を決したように言葉を紡いだ。

「あの……………せつかくの休みですし、何処かに出掛けませんか？出来れば……………その、ふ、二人だけで……………」

「え……………！！」

その言葉に、さくらは顔をりんごのように赤く染めた。

秀介も口に出すと恥ずかしかったらしく、真っ赤になってそっぽを向いている。

無理もない。

初めて秀介がさくらにデートを申し込んだのだ。

嬉しさと驚きと恥じらいで、二人の顔は真っ赤になった。

秀介に出来る事。

それは、さくらとの思い出を一つでも増やす事だった。

「あ、あの……………秀介さん」

しばらく黙っていた二人だが、やがてさくらが俯いたまま口を開いた。

「それなら……………初詣に行きませんか？」

「初詣？ 正月の行事ですか？」

「はい。一年の初めに、神社で神様のお参りするんです。ここからだと、明治神宮が近いですよ」

神様にお参りするという初めての行事に、イマイチピンと来ないが、他に行く所もないので、秀介はさくらの提案を快諾した。

「分かりました。じゃあ明治神宮に二人で初詣ですね」

「それじゃあたし、晴れ着に着替えて来ますから、部屋の前で待って下さいね」

そう言つて部屋に戻るさくらを見送り、秀介は一人呟いた。

「すみません兄さん……………。僕には……………」

さくらが部屋から出て来たのは、それから30分後の事だった。

「お待たせしました、秀介さん」

「いえ、そんな……………」

そう言いかけ、秀介は声を失った。

そこには、桜色の服と白いシヨールを身に纏ったさくらが、普段とは何処か違う雰囲気です秀介の前に佇んでいた。

「……………素敵です……………」

気がつけば、自然にそんな事を口にしていた。

「そうですか？ この晴れ着……………初めて着るんです」

「いえ、晴れ着じゃなくて……………貴女が……………」

「！！……………秀介さん……………」

自分への褒め言葉に、さくらは素直に頬を赤らめた。

どうやら、外の冷たい空気を心配する必要はなさそうだ。



明治神宮は帝都で一番有名な神社だけあって、沢山の人で賑わっていた。

秀介とさくらは境内でお参りを済ませた後、さくらの提案でおみくじを引く事にした。

「おみくじって、何ですか？」

「箱の中に入ってるくじを一つだけ取るんです。それに、取った人の運勢が書いてあるんです」

丁寧に説明しながら、おみくじを一枚引くさくら。

秀介も、見よう見真似でおみくじを取った。

「あれ？何も書いてないですよ？」

さくらの説明によると、おみくじには吉なり凶なりの文字があるはずだ。

しかし、どういう訳か秀介の引いたおみくじは真っ白で、何も書かれていなかったのだ。

見ると、さくらのおみくじも同様に真っ白だった。

「大丈夫ですよ。ほら、あれを見て下さい」

そう言って、さくらがおみくじの隣の立て札を指差した。立て札には、こう書かれていた。

「……………水につけると、文字が出て来ます……………」

どうやら水につけると、内容が分かるらしい。

二人は近くの池に足を運び、おみくじを池に浸して見た。すると、立て札の通り真っ白だったおみくじに透明な線が浮かび上がり、文字を形作った。

「……………残念、末吉でした。秀介さんはどうでしたか？」

「僕は……………大吉、みたいです」

とりあえず、一番上にある大きな文字を読んでみる秀介。すると、さくらが少し驚いた様子で言った。

「凄いいじゃないですか！大吉だったら今年一年、きっといい事がありますよ」

「……………いい事……………」

本当にそうだろうか。

秀介は口にくそ出さなかったが、おみくじの結果を素直に受け入れられないでいた。

自分は間もなく地球を離れる。

当然、さくらとは会えない。

彼女がいなければ、自分にとっての幸せなどありえない。

秀介には、それが不安で仕方なかった。

その頃、一足先に明治神宮に来ていた大神は、近くの出初式を見ていた。

初詣の醍醐味と言えば、しし舞や餅搗き、おみくじに加えて出初式は欠かせない。

一歩間違えば大怪我は必至の高さの梯子の頂上で華麗に技をキメる姿は、さながら日本のサーカスである。

しかし、その隣に紅蘭の姿はない。

それもそのはず。

紅蘭は今、大神の遙か上で、華麗に技をキメていたからだ。

「どうや大神はん！これが中国四千年、ウチ流の出初式や！」

職人顔負けの動きで道いく人達を驚かせる紅蘭。

打ち上げの時の皿回しといい、超人芸を次々と披露する紅蘭に、大神も喝采を送った。

「いよつ、世界一！！！」

「大神はん……………世界一やなんて、嬉しい事言うてくれるやん」

世界一か、それとも大神が褒めてくれたのが嬉しかったか、紅蘭はキメの姿勢のまま、両手に頬を当てた。

「よっしゃ！こうなったらもつと凄い技ガンガン見せたるで！」

そう言つて次の技に入ろうと構えた時、視界の隅に見覚えのある影が写った。

「ありや？あれは秀介はんにはさくらはん……………？」

その時、大神は紅蘭の身体が前に傾いている事に気づいた。

「マズイ……………！ 紅蘭、危ないぞっ！！」

慌てて叫ぶ大神。

しかし、紅蘭がそれに気づいた時は遅かった。

「へ？ …………… わっ！ わっ！ お、大神はん！！ 助けてえ〜！！」

バランスを崩して慌てる紅蘭。

梯子の高さは80メートルはある。

落ちれば大怪我では済まない。

周囲の歓声が、一転して悲鳴に変わった。

「紅蘭頑張れ！ 今助けに行くぞっ！！」

大神は自分でも信じられないスピードで梯子を昇った。

その速さ、某肉体自慢番組SASKEの最終ステージで梯子を10秒足らずで突破できるスピードである。

もし大神がその番組に出演すれば、完全制覇は确实だっただろう。

何はともあれ、大神は驚異的スピードで梯子を昇り、無事に紅蘭を救出した。

途端に周りから、先程とは比べものにならない大歓声上がる。

「紅蘭…………… 大丈夫だったかい？」

「大神はん…………… 恥ずかしいわ……………。みんな見てるやん。」

紅蘭が顔を真っ赤にして訴えかけた。

現在紅蘭は梯子の頂上で大衆に見守られながら、大神にお姫様抱っこされている状況だ。

すると、大神はそれに気づいているのかいないのか、真顔で答えた。

「紅蘭……………何かあったら、いつでも俺が助けに行くよ。」

「大神はん……………反則やで、こないな時に……………」。

ますます顔を赤くする紅蘭に、大神は優しく笑いかけた。

「秀介さん。この後は、何か予定はありますか？」

おみくじを木に結び、ふとさくらが尋ねた。

「いえ、特に予定はありませんが……………」

「それじゃあもう少し、あたしと二人で過ごしませんか？」

「え……………？」

突然のさくらからの申し出に、秀介は思わず目を見開いた。そこには、真っ赤な頬に手を当ててこちらを見るさくらの姿があった。

「あたし……………今日のこの日を、秀介さんとの思い出の記念日にしたいんです……………」

「さくらさん……………」

自分に寄り掛かるさくらを、#秀介は両腕で包むように抱きしめた。愛おしい……………。

腕の中のさくらを見て、秀介は素直にそう思った。

失いたくない……………。

離れたくない……………。

声にならない心の叫びが、秀介の目から一粒の涙となって流れ落ちる。

「……………秀介さん？どうかしたんですか？」

秀介の頬の雫を指で拭い、さくらが尋ねた。

「……………幸せ過ぎて……………」

「え？」

「今、この瞬間が……………あまりに幸せ過ぎて……………」

「秀介さん……………」

無言のまま、互に見つめ合う二人。

やがて、どちらからともなく距離が狭まっていく。

「わくわくね……………」

「秀介さん……………」

名前を囁き合い、吐息が頬をくすぐる。  
その時だった。

「「どわあああああ！！」「」

「ええっ！？」

「な、何事ですか！？」

突然聞こえた叫び声に驚いて見ると、そこには花組の面々が茂みの  
中から横倒しになっていた。  
如何にも尾けてましたと言わんばかりである。

「みんな、こんな所で何やってるんです！？」

いい雰囲気邪魔されたさくらが般若のごとき形相で七人を睨みつ  
ける。

「い、いや、その……話せば長くなるんだが……」

「へへ、ばれちまったら仕方ねえ。お前達二人を尾けてたのさ」

「おーっほっほっほ！二人だけで楽しもうなど、そうは問屋が下ろしませんわ！」

「わーい、みんなで初詣だ〜！」

「……二人とも、こうなったら諦めてちょうだい」

みんなが思い思いの言い訳を並べる中、マリアがきっぱりと言った。

「マリアさん……隊長……あなたたちまで……」

「済まん、二人とも。俺達もさつき捕まってしまっ……」

「そうや！ウチらも二人で初詣楽しんどったら邪魔されたんや！」

余程悔しかったのか、若干涙目で紅蘭が言った。

どうやら二人で楽しむのはここまでのようだ。

「秀介さん……。この続きは……。また今度、ですね」

「今度……。ですか」

果たしてその時まで自分はここにいられるか……。秀介は、不安とともに力なくため息をついた。



そして、秀介の不安は的中した。

「……………この気配は!!」

それは、これから花組全員で初詣に行こうとした時だった。急にマリアが何かを感じ、鋭い表情とともに立ち止まったのだ。

「どうした、マリア？」

突然のマリアの異変に、大神が尋ねる。すると、続いて秀介が叫んだ。

「隊長！ あの鳥居の上です!!」

「何っ!？」

秀介の声に、全員が鳥居の上を見上げた。そこにいたのは……………、

「……………また会えたな、帝国華撃団の諸君」

鳥居の上に立つて花組を見下ろしていた人物……………。

それは、黒之巢会死天王最後の一人だった。

周りには新たに仲間を募ったのか、初めて見る三人の護衛をつけている。

「我が名は、葵又丹」

「……………黒じゃなかったんですか？」

「黒之巢会め、また現れたな！！」

どこか違う所を気にしている#秀介をスルーして、大神の鋭い声が飛ぶ。

すると、又丹は意外な言葉を返した。

「黒之巢会？……………フツ、馬鹿馬鹿しい」

「何？」

「天海ごときではあの程度が限界さ。所詮は徳川に飼われていた坊主に過ぎん……………」

それは、かつての残党が口にする言葉ではなかった。

本来残党というものは、倒れたかつての総大将の遺志を継ぎ、崇拜するものである。

しかし今の又丹には、それが微塵にも感じられない。

それどころか、天海を完全に下に見ている。

つまり又丹は黒之巢会の残党としてではなく、帝都に牙を剥く新たな脅威として現れたと考えるのが妥当だ。

「だが、この葵又丹はそうはいかん。お前達の守った平和も、つかの間だと教えてやろう」

「そんな事、絶対させないわ!」

「脇侍もねえくせに、偉そうな口叩くんじゃねえ!」

負けじと言い返すさくらとカンナ。

しかし、又丹は余裕の笑みを崩さなかった。

「果たしてその言葉、これを見た後からも叩けるかな?」

そう言つて、又丹は何やら呪文を唱え始めた。

「来たれ、封じ込められし魔の者よ。我、葵又丹の命に従い、帝都を血の海に沈める。来たれ、降魔!」

刹那、鳥居を中心に巨大な魔法陣が現れ、中から異業の怪物が現れた。

「ギシャアアアツ!」

「な、何やの、コイツら!」

それは、脇侍とは比べものにならない殺気を放つ怪物だった。

蝙蝠を想起させる紫色の毒々しい体色の皮膚に翼。

更に鋭く尖った牙と爪。

魔法陣から次々と現れた怪物に、花組は取り囲まれてしまった。

「この殺気……………ただものではなくてよ」

「くっ、こんな時光武があれば……………」

少なくとも生身の状態で手向かえる相手ではない。

しかし大神が悔しげに呟いた時、空から助けが現れた。

「……………何とか、魔法間に合ったようね」

それは、帝国華撃団の有する空の輸送飛行船だった。

「翔鯨丸！」

上空に控える飛行船の姿に、花組は安堵の表情を見せる。

「よっしゃあ！メツタクソにしたるぜ！」

「よし、帝国華撃団花組、出撃！！敵はただの残党じゃない。みんな、気をつけて戦うんだ！」

「了解！！」

大神の指示の下、花組は素早く投下された光武に乗り込んだ。

記念すべき元旦の日に現れた又丹と謎の怪物達。  
そこに立ちほだかる、正義の使者がいた。

「帝国華撃団、参上！！」

かつて帝都を襲った黒之巢会に立ち向かい、これを討ち滅ぼした戦士達。

三ヶ月の時を経て、彼らは再び戦場に現れた。

「光武がある限り、俺達は戦える！又丹、貴様の思い通りにはさせないぞ！！」

仲間の先頭に立ち、大神が叫ぶ。

しかし、又丹はやはり余裕の笑みを崩さなかった。

「威勢だけは立派だな。せっかくだ、私の部下を紹介してやろう。  
黄昏の三騎士、猪鹿蝶だ」

すると、又丹の前に立つ三人の護衛が前に出た。

「我が名は猪！生きていればまた会おう！」

「俺の名は鹿！貴様ら帝国華撃団の力、じっくり見せて貰うぞ！」

「アタシは蝶！死ぬ前にアタシに会えた事、幸運と思いなさい！」  
黄昏の三騎士と呼ばれた三人は、それぞれ花組に名乗りを上げた後、  
転移魔術で消えてしまった。

「どついつつもりだ、又丹！」

「貴様らごとき、私が手を出す間でもない。心配せずとも、こいつ  
らが十分にもてなしてくれるだろう」

大神の声を軽くあしらうと、又丹もまた消えてしまった。  
それと同時に、降魔達が花組の前に現れた。

「この殺気………一瞬でも気を抜けばやられる！みんな、絶対に無  
理をするな！」

「了解！」

戦闘開始から1分とたたない内に、花組は今回の敵に絶対的な力の  
差を感じずにはいられなかった。

降魔。かつて帝都を苦しめ、さくらの父・一馬が命と引き換えに封  
じ込めた魔の存在。

その力は、黒之巢会など歯牙にもかけない程のものだった。

「何だコイツ……………！？あたいより力があるじゃねえか！」

その力は、カンナを軽々と投げ飛ばし、

「嘘……………！刀でも斬れないなんて……………！！！」

その皮膚は、さくらの太刀をも跳ね返し、

「何て速さ……………！追い付けないわ！」

そのスピードは、マリアでも狙えない。

今の自分達に勝ち目はない。

降魔の能力は全てにおいて花組を凌いでいた。

「……………やむを得ないわね」

戦況を翔鯨丸から観察していたあやめは、モニターを前に呟いた。

これまで常に勝ち続けていた花組。

その彼らが、大神さえもが、降魔に全くと言っていい程に歯がたたないのだ。

とてもではないが、これ以上戦うのは無謀だった。

「大神君！翔鯨丸で直接降魔を砲撃するわ！全員を鳥居の手前に避難させて！」

「分かりました！みんな、鳥居の手前まで退却する。絶対に生きて辿り着け！」

「了解……！」

降魔の激しい攻撃に耐えながら、八つの機体は死に物狂いで鳥居に殺到した。

その表情には、強敵を前にしての恐怖がありありと窺い知れた。

「この私が退却など……………アイツら、正しく化け物ですわ……………！」

「刀で斬れない……………。どう戦えばいいの？」

「何て奴らだ……………。あたいでも喧嘩にすらならねえ……………」

「何なんやあの化けモン！光武でも勝ち目あらへん！」

「恐ろしい力……………。これが、降魔なの……………！？」

ボロボロになりながらも、無事に鳥居の手前に到着した。

「あやめさん！退却完了しました！」

「よくやったわ、大神君！照準セット！主砲、発射用意！！」

すかさずあやめは指示を飛ばした。

翔鯨丸の砲撃は、威力が高い反面周囲への被害も甚大で、戦闘支援の場合には一発しか撃てない。

特にこの場合、降魔を一匹でも撃ち漏らせば、花組の敗北は決定的だ。

この一発に全てが掛かっていた。



「撃てえっ！」

翔鯨丸の主砲が火を噴いた。

その爆撃とも言える一撃は、その場にいる全ての降魔を巻き込んだ。まだ死んではないが、口から体液を吐いている辺りから、瀕死の状態と分かる。

「今がチャンスよ。一気に降魔を殲滅してちょうだい！」

防御力の弱った今なら、自分達の攻撃も通用するはず。

大神は二刀を構え直し、命令を出した。

「みんな、今がチャンスだ。一気に降魔を撃破するぞ……！」

「了解……！」

翔鯨丸の砲撃を浴び、降魔は苦しみのうめき声を上げている。今なら勝てる！花組の誰もがそう思った。

だが、降魔の生命力は花組の常識を逸するものだった。

「行くぞ……！」

気合いとともにも二刀を振り下ろす大神。

すると、降魔は瀕死の状態でも大神の攻撃を受け止めてみせた。

「何っ!?!」

「隊長、伏せて下さい!」

背後の声に気づいてしゃがみ込む大神。

すると、大神の真上を凍てつく一撃が飛び、降魔を直撃した。

「ギ……ギギ……!!」

断末魔の呻きとともに倒れ伏す降魔。

それを確認に、大神は背後の部下に礼を述べた。

「ありがとうマリア。助かったよ」

「翔鯨丸の砲撃を受けて互角……。私達とは次元の違う相手ですね」

「ああ。翔鯨丸の砲撃で生きている事自体凄まじい生命力なのに……」

瀕死の状態に追い込んでいるにも関わらず、自分達とまだ互角に戦える力がある。

大神は改めて、降魔の力に戦慄を覚えた。

結局花組は、翔鯨丸の砲撃があつた上でギリギリの状態で降魔の殲滅に成功した。

「何とか……………、終わったみたいだな」

周囲の降魔が全て死んでいる事を確認して、大神が言った。

「光武も流星も無理させ過ぎたさかい、早う戻つて修理したらな……………」

ただでさえ前回のダメージも回復していない状態で、降魔は相手が悪すぎる。

既に動力部分をはじめ、せこらかしこに不具合が生じていた。

次に相對する時までには、光武を完全に修理しなくては……………。

そう考えながら帝劇に戻ろうとした時、突然茂みの奥から別に降魔が出現した。

先程の翔鯨丸の砲撃から、一匹だけ逃れていたのだ。

「ギシャアツ!!」

羽根を広げて飛び上がる降魔。

大神は素早く指示を飛ばした。

「マズイ!紅蘭、マリア、秀介、撃ち落とすんだ!!」

この状態で空から奇襲を受けては手も足も出ない。

大神の指示を受け、三人は一斉に降魔を狙い撃つた。

だが、降魔には弱つた光武の攻撃など虚仮威しでしかなかった。

「ギシャアッ!!」

音速のスピードで飛来した降魔は、始めに流星を叩き落とした。

「なっ……………!?!」

右の翼を寸断され、流星が真下の二つの光武を巻き込んで地面に墜落した。

「秀介さんっ!!」

「さくらっ!危ない!」

思わず飛び出すさくらを止めようとするアイリス。

しかし、降魔は二人をそれぞれ片手で捕まえ、力任せに投げ飛ばした。

「きゃあああっ!!」

「さくらくんっ!くそっ、カンナ、すみれくん!」

「お任せを!!」

「やったるぜ!」

大神の指示で同時に攻撃を仕掛けるカンナとすみれ。だが、降魔はそれより早く襲い掛かって来た。

「くっ……………!!」

「すみれっ！」

最初に切り掛かったすみれを殴り飛ばし、降魔が空高く舞い上がる。そこに、カンナが迎え撃った。

「おらあああっ!!」

脇侍であれば瞬殺だった一撃。

しかし降魔には、僅かに傷を負わせる事しかできなかった。それどころか、カンナも降魔の鉤爪を深々と受け、動けなくなってしまう。

「ぐっ…………た、隊長!今だ!!」

「分かった!カンナ、あとは任せる!!」

カンナが繋いだこのチャンス、逃せば勝機はない。

光武の限界は大神も分かっている。しかし、そのためにこの好機を逃す訳にはいかなかった。

「(紅蘭、済まない…………!!)」

心の中で一言恋人に詫び、大神はありったけの霊力を二刀に集中した。

「狼虎滅却…………!!」

最後の狙いを大神に定めて迫り来る降魔。

大神は蒸気の出力を最大にして飛び上がり二刀を振るった。

「快刀乱麻!!」

カンナの攻撃で生まれた降魔の傷に沿って、緑色の稲妻が走った。

「ギ…………ギギ…………!!」

どうやら今の攻撃が致命傷になったらしく、降魔はようやく動かなくなつた。

「みんな…………、大丈夫か？」

そう尋ねる大神だが、大丈夫でない事は明らかだった。どの光武も傷だらけで、エンジンからは火花が散っている。ここまで光武がダメージを受けたのは初めてだった。

「…………みんな、脱出するんや」

紅蘭が涙をこらえるように言った。その言葉が、全てを意味していた。

「光武は…………、光武はもう…………限界なんや」

「光武が…………壊れてしまったな…………」

動力部分が完全に破損し、鉄屑状態になってしまった光武を見て、大神が力無く言った。  
今までともに戦って来た戦友。

その場の誰もが心を痛めずにはいらなかった。

「本当は限界もとうに超えとったんに……。よう頑張ったで、光武………」

「紅蘭………」

涙をこらえる紅蘭の肩に、優しく大神の手が置かれた。

だがこの後、花組を更なる悲劇が襲う事になる。

それは、花組が翔鯨丸に光武を回収してもらっていた時だった。

「……………風？」

最後尾にいた秀介が、ふと空を見上げた。

先程からいやに強い風が吹き付けてくる。

それもこの辺りだけに。

その時、空から凄まじい速さで黒い影が飛び込んで来た。

「……………！！ あれは！」

その影の正体に、花組は表情を凍り付かせた。

なぜならそれは、ある意味降魔よりタチの悪いものだった。

五角形のような体で、顔のほかに腹にも口を持つ怪獣が、翔鯨丸の

前に現れたからだ。

「ビィー!!!」

鳥のような甲高い鳴き声を上げ、明治神宮の建物腹の口に吸い込み始める怪獣。

秀介は、反射的にブレスレットに目をやった。

だが、それを掲げる寸前、脳裏に兄の忠告が過ぎった。

……………今のその身体で無理に戦えば、命を失うのは確実だ……………

「……………兄さん、忠告は聞けません。僕は……………」

一瞬躊躇う秀介。

だが次の瞬間、迷いを払うように心の中で叫んだ。

「（僕は……………、ウルトラマンなんです!!!）」

「……………秀介っ！ 待てっ!!!」

気づいた米田の声を無視して、秀介はブレスレットを掲げ、叫んだ。



「ジャーーーーーック!!!」

そして……、

「ヘアァッ!」

力を失ったはずの秀介を、ブレスレットは再び光の巨人へと変えた。

「ポキヤーツ!!!」

怪獣がジャックの姿を認め、襲い掛かって来る。  
ジャックは、正面から怪獣に掴み掛かった。

「へッ!」

互いに掴み合い、激しい衝撃波が生まれる。  
その一瞬、怪獣の身体が宙に浮いたのを、ジャックは見逃さなかった。

「今です!」

すかさず怪獣の下半身に右手をやり、怪獣を高々と持ち上げる。

そして、勢い良く投げ飛ばした。  
だが、怪獣は両腕を大きく動かして宙に舞い上がった。

「へッ!?!」

驚くジャック。

すると、怪獣はそのままジャック目掛けて角の生えた頭からミサイルの如く突っ込んで来た。

「アアッ!」

その勢いで跳ね飛ばされるジャック。

怪獣は、ジャックの背中を踏み付けて来た。

「秀介さん!」

ジャックのピンチに、さくらが叫んだ。

その横で、米田も苦虫をかみつぶすような表情を作る。

「あの馬鹿……………」

「司令、何かご存知なんですか?」

いつもと様子の違う米田に、大神が尋ねた。

すると、米田は何も言わず、大神に一枚のハガキを手渡した。

「……………」、「これは!?!」

そのハガキを見るや、大神の表情は一変した。  
もしこれ以上変身すれば、確実に死ぬ。  
その忠告を破り、秀介は戦っているのだ。  
恐らくは死ぬ事を覚悟で。

「じ、冗談じゃねえよ……………！秀介の奴……………」

「秀介……………死んじやうの？」

その事実には、花組の誰もが震えた。  
しかし、もう戦いは始まっている。  
止める事など出来ない。

「……………祈るしかないわ。秀介が生きて勝つ事を……………」

マリアの言う通りだった。

光武は先程の降魔との戦いで大破して、使い物にならない。  
それに使えたとしても、今の自分達では雀の涙程のダメージしか与  
えられないだろう。

「……………秀介さん……………」

震える両手を合わせ、さくらが祈るように恋人の名を呟いた。

「シュワッ！」

ジャックは怪獣の腹に足を食い込ませ、巴投げをかけた。そのまま頭上を越えて倒れ伏す怪獣。

すかさず起き上がり、ジャックは両腕を十字に組んだ。

エネルギーを使い果たしたはずの体。

にも関わらず、ジャックの腕からスペシウムが放たれた。

一直線に殺到する光線に、誰もがジャックの勝利を確信する。

……………だが。

「ポキヤーツ！」

何と、怪獣はジャックのスペシウムをも、腹の口に吸い込んでしまったのだ。

それだけではない。吸い込んだスペシウムを、怪獣は頭の角から発射した。

「アアッ！」

避ける間もなく吹き飛ばすジャック。

刹那、胸のカラータイマーが遂に点滅を始めた。最早時間がない。

ジャックは一か八か、両腕をL字に組んだ。

「よせ秀介！ 今シネラマなんか撃つたら、今度こそ死んじゃうぞ

「!!」

何とか静止しようと米田が叫ぶ。

しかし、ジャックの腕からシネラマが撃たれる事はなかった。

なぜなら、その前にジャックの背後から声が聞こえたからである。

「久方振りだな、ウルトラマンジャック」

その声の正体に、花組のみならずジャックまでもが戦慄を覚えた。  
そこにいたのは、兄も倒せなかった恐るべき宇宙忍者だったからだ。

「私とそのベムスターを相手に、その弱った身体でどこまで戦えるかな？」

言うや、バルタン星人はジャックに襲い掛かった。

「秀介さん！」

さくらの悲痛な叫びが木霊した。

その目の前では、ベムスターに羽交い締めにされたジャックが、バルタン星人のハサミで滅多打ちにされていた。エネルギーが底をついたジャックは、ろくに反撃も出来ない。その内に、カラータイマーの点滅が早いものへと変わっていく。ゾフィーの忠告が、現実が変わろうとしていた。

「アカン……………！ このままやとホンマに秀介はん……………！！」

「畜生！！ 何とかならねえのかよ！！」

三ヶ月前の悪夢の再来に、花組は無力感に苛まれる。すると、彼らの耳にジャックの声が聞こえて来た。

「……………光を……………エネルギーを……………下さい……………」

途切れ途切れの弱り切った声。

それは、秀介が死に瀕している事を明確に示していた。

「……………お願いします……………。僕は……………負ける訳には……………いかな  
い……………！！」

「ほざけ死に損ない！！」

バルタン星人のハサミが首を捕まえ、ジャックは宙吊りになった。最早抵抗する力もない。

それでも、勝機を掴もうともがく。

バルタン星人は、ジャックを勢い良く地面にたたき付けた。

「へッ……………！！」

フラフラの状態で、尚も立ち上がるジャック。  
そして、両腕を再びL字に組んだ。

「ヘアアアアッ！」

ジャックは最後のエネルギーを振り絞り、一縷の望みをかけてシネ  
ラマショットをベムスター目掛けて撃ち込んだ。  
だが、ベムスターはジャックの切り札すら、その腹に吸い込んでし  
まった。

「ポキヤーツ！！！」

そして、またしてもシネラマを角から発射した。

「へッ……………！！！」

ビームは胸のカラータイマーを直撃した。  
更に追い撃ちの如く、バルタン星人の白色光弾が同じ所に浴びせら  
れた。

そして……………

カラータイマーの点滅が止まった。

「……………え……………?」

さくらは、急に時間が止まったような感覚に陥った。

目の前に立つ巨人。

その胸でけたたましく鳴り響いていたはずのカラータイマーが沈黙している。

つまり……………。

「秀介……………さん……………?」

そう呟いた時、ジャックの身体はゆっくりと仰向けに倒れた。

「嘘でしょ……………秀介さん……………」

その倒れた衝撃と轟音に、さくらはそれが現実と分かり、そして……………。



「##NAME1##さああああん!!」

慟哭に変わった。

……僕じゃ、駄目ですか?……

……貴女の笑顔があれば……それだけで、僕はいくらでも強くなれるんです。……

……貴女の事が……、好きなんです。……

……今、この瞬間が……あまりに幸せ過ぎて……。

脳裏に浮かぶいくつもの言葉。  
いくつもの思い出。  
それが、目の前で音を立てて崩れていく。

「フオッフオッフオッフ……!!見るがいい、光の巨人の最期だ!」

勝ち誇ったようにバルタン星人が笑い声を上げる。

だがその時、突然の音が一帯に響き渡った。

「……………果たしてそうかな？」

「何っ!？」

突然その場に響き渡る声。

その声を聞くや、バルタン星人の表情から余裕が消えた。

未知の何かに警戒するようなものではない。

明らかにその正体を知っていて、それが苦手だという時の表情だ。

更にバルタン星人だけでなく、米田やあやめもまた、その声に驚きを隠せずにいた。

「長官!こゝ、この声は……………!」

「間違いない!アイツの声を間違えるものか!」

そして、倒れたジャックを守るように、一つの光が飛来し、米田の予想は現実になった。米田とあやめ、そしてバルタン星人を除く全ての人々は、目の前に現れた声の正体に、驚きのあまり声がでなかった。

バルタン星人とタメを張る巨体。

赤と銀の体色。

そして何より、ジャックを鏡に写したように瓜二つの顔。

「……………豊……………」

米田が懐かしむような表情で言った。

そこにいたのは、かつて対降魔部隊の一員として米田やあやめとともに戦った英雄にして、伝説の光の巨人。

一之瀬 豊……………。

ウルトラマンゾフィーだった。

「ジャック……………、目を開け」

ジャックよりやや低い声で、ゾフィーが言った。

すると、一度は輝きを失ったジャックの双眼に光が戻った。

「……………兄……………さん……………」

「よく耐えた。ここは私に任せろ」

そして、ゾフィーは目の前に立つバルタン星人とベムスターに向き直った。

「八年振りか。バルタン星人、まさかまた地球侵略を企てるとはな」

「ウルトラマンゾフィー。貴様こそ、またしても私の邪魔をするつもりか」

僅かにバルタン星人の殺気が高まる。

が、すぐにそれを収めた。

「……………まあいい。どうせ貴様も、ここには長く留まれない。その

後でゆっくり侵略を進めさせて貰う」

「……………」

「どうせ帝国華撃団もウルトラマンジャックも無力。私の計画は止められまい」

余裕かほったりか。

いずれにせよゾフィーと戦う事は考えないらしく、バルタン星人はベムスターとともにレポートで消え失せてしまった。

「果たして、そうかな？」

先程までバルタン星人のいた空間に向けてそう言つと、ゾフィーは大神達を見た。

「私の弟が大変世話になった。礼を言わせてほしい」

「お前も相変わらずだな豊。お前とそっくりなのは顔だけじゃなかったぜ？」

米田の言葉に僅かに微笑み、ゾフィーは改めて大神達に名乗った。

「私はウルトラマンゾフィー。この太陽系全体の防衛を指揮している」

「貴方が……………一之瀬大尉なのですか？」

恐る恐る尋ねる大神に、ゾフィーは重々しく頷いた。

「如何にも、一之瀬 豊は私のもう一つの名前だ。大神少尉、貴方の」高名も、弟から聞かされている」

「いえ、そんな……。今だって貴方の助けがなければ、自分達はやられていました」

「……やはり、更なる力が必要と見える」

「え……………？」

意味ありげな言葉に首を傾げる大神。

すると、ゾフィーはジャックに向かって言った。

「ジャック……………、私の意図が分かるな？」

「はい……………」

今の一言を察し、ジャックが頷く。

「一之瀬大尉、その……………秀介は……………？」

恐らくは花組全員の最も気にしている事を、大神が尋ねた。

秀介との別れを予期して暗い表情を見せる花組。

ゾフィーは、大神達を安心させるように言った。

「案ずる事はない。僅かな期間の間だけだ。その間に更なる力をジャックに与え、この星を任せようと思う」

「それでは……………！」

「これが今生別れとなる事はない。それに……………」

そこまで言いかけ、ゾフィーはふと、さくらに目を向けた。

「どうやら弟にも、この星に大切なものが出来たらしい」

「え……………」

顔を真つ赤に染めるさくら。

その様子に微笑み、ゾフィーはジャックの真上に手をかざした。すると、空から光の道が現れ、ジャックは光に運ばれて行った。

ウルトラトウインクル……………光の道を生み出し、傷ついた仲間を別の場所に移動させる技だ。

「帝国華撃団の皆さん。どうか弟は任せてほしい。我々は、いつでもあなたたちの味方だ」

そう言ってゾフィーもまた、光の道へ消えて行った。

「秀介……………」

不意に、大神が呟いた。

「待っていてくれ。俺達も……………、君とともに強くなって見せる」

その言葉に一斉に頷く隊員達。

つかの間の平和は、終わりを告げようとしていた。

拝啓ウルトラマン様（後書き）

《次回予告》

大神君、諦めては駄目。

秀介君とともに帝都を守るために、今は特訓あるのみよ。

次回、サクラ大戦！

「光よ、神となれ」

大正さくらにロマンの嵐！

お前が、光を継ぐんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9891x/>

---

桜舞う星

2011年11月4日23時14分発行